水戰を習ひ遠略を勤めて、以て武功を極めんとするに在り。水物の利を求めんとするにあらず。然も菜蔬草實の產、原陸よりも饒なり。故に先に之を埋めたるも、後復た之を開きしなり。且つ百官よく民をして富ましめ、又よく之を教ふれば、民皆相師ゐて同じく舟楫を整へ此池に漁し、效獲あれば之を利とし、婚姻時を以てし、愁人も以て樂む。今釣を垂れ網を投じて漁獵する狀を觀るに、網を前に曳き、長楫を後に鳴らし、魚を驚かして網に入らしめ、牽掣すること再三なり。乃ち靑鯤を釣鉤より取り、鱗を躍らし鬐を揚ぐ。食を造るの人、之を切ること線縷の如く、刀を振ふこと飛ぶが如く、俎中に滿ちて鮮細なり。鯸初めて成るや、賓客立つて之を食はんことを待ち、既に食ふや、食慾全く滿ち、泊然として復た求むる所なし。所謂小人の腹を以て君子の心とならしむ。爾して乃ち策を端し茵を拂ひ、冠を彈き衣を振ひ、(四九九)酆鎬に徘徊し、(五〇〇)渴するが如く飢うるが如く、心(五〇一)翹勤して以て(五〇二)仰止し、敬を加へずして自ら祇む。豈(五〇三)三聖を之れ敢て夢みんや。竊に(五〇四)十亂を之れ希ふあり。(五〇五)靈臺を經始し、之

【四九九】酆鎬。周の都せし地。
【五〇〇】渴云云。渴するが如く飢うるが如しとは賢人を思ふなり。
【五〇一】翹勤。慕ひ求むること。
【五〇二】仰止。仰ぎ尊ぶこと、止は助辭にして意義なし。
【五〇三】三聖。琴操に崇侯文王ヲ紂ニ譖ジテ曰ク、西伯昌ハ聖人ナリ、長子發、中子旦、皆聖ナリ、三聖謀ヲ合セバ將ニ君ニ不利ナラントとあり。
【五〇四】十亂。亂は治なり。十人の治臣。書經に予亂臣十人アリとあり。
【五〇五】靈臺。周の文王の作りし臺也。經始とは建造すること。

を成すこと日あらず。惟れ(五〇六)酆及び鎬、仍つて其室を京にす。庶人子のごとく來り、神之に吉を降し、德を積み祚を延べ、貳なくして其れ一なり。永く此邦を惟ふに、云に誰か之れ識らん。越に略聞すべくして、其極に臻り難し。子は鋤を贏して以て父に借し、秦法に訓つて色に著はす。耕すには畔を讓りて以て(五〇七)間田あり、(五〇八)姬化に沾ひて棘を生ず。(五〇九)蘇張喜んで詐騁せ、(五一〇)虞芮愧ぢて訟息む。此に由りて之を觀れば、士には常俗なくして教には定式あり。上の下を遷すは猶ほ(五一一)釣の(五一二)埴を埏すがごとし。五方雜會し風流涸渫し。儉狁に密邇して(五一三)戎馬郊に生ずと雖も、而も制する者は必ず割く、實に(五一四)操刀に存す。人の升降は政に隨つて隆替す。信に杖れば則ち情を用ひざるなく、欲するなければ則ち之を賞するも竊まず。智理むる能はず、明察する能はずと雖も、此心を信にせば、庶くは夫の戾を免れん。其禮

【五〇六】酆、鎬。周の都なり。
【五〇七】間田。相互に讓りて取らざる田地。
【五〇八】姬化。姬は周の姓。周の德化なり。
【五〇九】蘇張。蘇秦、張儀なり。
【五一〇】虞芮。二國の名、此二國の人、田を爭ひて決せず、文王の裁判を請はんとして周に至り、周の耕す者互に畔を讓るを見て己の爭を恥ぢ、遂に途より歸り、互に爭ひし所の田を讓りて取らず、之を間田となす。
【五一一】釣。陶器を製する轆轤の圓輪。
【五一二】埴。粘土なり。埏は水を和して柔にすること。
【五一三】儉狁。匈奴なり。密邇は接近せること。
【五一四】戎馬。軍馬なり、老子に天下道ナケレバ戎馬郊ニ生ズとあり。
【五一五】操刀。刀を持つこと。漢書に刀ヲ操レバ必ズ割クとあり。替は音テツ、叶韻。

樂の如きは、以て【五二】來哲を俟たん。

【大意】乃ち衣冠を整へて將に還らんとし、酆鎬の間に徘徊す。賢人を思ひて心飢渴の如く、誠意を以て之を崇仰すれば、賢人自ら祗み懼る。余の長安を治むるや、固より周の三聖の如くならんとを夢想せずと雖も、竊に彼の亂臣十人の事績を擧げんことを願ひ、日ならずして成り、酆鎬の都亦其宮室を大にせり。庶民子の如く來りて工役を助け、神亦吉祥を降せり。因つて德を積み祚嗣を延べ、民敢て二心を懷く者なく、ただ心を一にして周を戴けり。今此郡の古風を惟ふに、唯略聞するを得るのみにて、其詳を知るを得ざるも、昔は虞芮の二國、田を爭ひて決せず、文王の裁判を請はんとして周に至り、周民の風を觀て、其訟を息め、其の爭ひし田を以て閒田となせりといふ。周亡びて秦之に代るや、子に贏餘の鋤ありて之を父に貸せば、子、其父に對して之を恩とするの色を著し、蘇秦張儀の輩亦詐術を弄するに至りぬといふ。其地改らずと雖も、周秦治化の差異により、人情の差異を來せること此の如し。此に由りて之を觀れば風俗の善惡は敎化の如何に在り。上の下を化するは猶ほ鈞の粘土を和ぐるが如し。此地今五方の人雜居し、風俗溷亂し、農桑を惰りて商利を好み、勞作を勉めず、匈奴に接近し、戎馬往來すと雖も、よく志を立てて之を治めんと欲せば、

【五二】來哲、將來の賢者。

敢て治め難からざるなり。世の盛衰は全く政の良否に由る。上信を好めば民敢て情を用ひざるはなく、上の人無欲ならば、賞して竊まざるなり。余が知は以て民を治むる能はず、明は以て人を察する能はずと雖も、ただ此心を信にせば庶くは罪戾を免るるを得ん。若し夫れ禮樂を以て民を化するが如きは、余が力の及ぶ所にあらず、將來の賢者を俟たんのみ。

卷の第六

賦　己

遊覽

登樓の賦

(二)王仲宣

茲樓に登りて以て四望し、聊か暇日に以て憂を銷す。(二)斯宇の處る所を覽るに、實に顯敞にして仇すくなし。(三)清漳の通浦を挾み、(四)曲沮の長洲に倚り、(五)墳衍の廣陸に背き、(六)皐隰の沃流に臨み、北は(七)陶牧に彌り西は(八)昭丘に接し、華實野を蔽ひ黍稷疇に盈つ。信に美なりと雖も、吾が土にあらず。曾ち何ぞ以て少留するに足らん。

【一】王仲宣。名は粲、山陽高平の人なり、魏に仕へて侍中となる。漢の獻帝の時、董卓亂をなす、粲、難を荊州に避け劉表に依る。遂に江陵の城樓に登り、因つて歸を懷ひて此賦を作り、其進退危懼の情を述ぶ。

【二】斯宇。此樓なり。

【三】清漳。漳は川の名。

【四】曲沮。沮は川の名。

【五】墳衍。丘陵と平澤の地と。

【六】皐隰。皐隰の地。

【七】陶牧。陶は鄉の名、郊外を牧といふ。荊州記に江陵縣ノ西ニ陶朱公ノ冢アリ、其碑ニ云ク是レ越ノ范蠡ニシテ陶ニ終ルとあり。

【八】昭丘。楚の昭王の墓。

【大意】江陵城樓に登りて四方を望み、以て喪亂の憂を霽さんとす。この樓たる漳沮の二水其傍に在り。山丘を後にし、水流を前にし、北は陶牧に連り、西は昭丘に接し、華實繁茂し穀物豐熟し眞に美地なりと雖も、吾が鄉土にあらず。何ぞ淹留するに足らんや。

紛濁に遭ひて遷り逝き、漫として(九)紀を踰えて以て今に迄る。情(一〇)眷眷として歸らんことを懷ふ。孰か憂思に任ふべき。(一一)軒檻に憑りて以て遙に望み、(一二)北風に向つて襟を開く。平原遠くして目を極むれば、荊山の(一三)高岑に蔽はる。路(一四)逶迤として(一五)脩遒なり。川既に(一六)漾として濟深し。舊鄉の壅隔せるを悲み、涕橫に墜ちて禁せず。昔(一七)尼父の陳に在る、(一八)歸歟の歎音あり。(一九)鍾儀幽にして(二〇)楚奏し、(二一)莊舄顯にして豈(二二)窮達して心を異にせんや。

【九】紀。十二年を一紀といふ。

【一〇】眷眷。慕ふ貌。

【一一】軒檻。欄干なり。

【一二】北風。帝鄉は荊州の北に在り。故に北風といふ。

【一三】高岑。山の小にして高きを岑といふ。

【一四】逶迤。長き貌。

【一五】脩遒。長遠なり。

【一六】漾。長きなり。

【一七】尼父。孔子をいふ。

【一八】歸歟。故鄉に歸りたしとの意。孔子陳國に在りて糧を絶ち、歎じて曰く歸らん歟、歸らん歟と。

【一九】鍾儀。楚の人にして囚に拘せらる、故に幽といふ。

【二〇】楚奏。楚國の歌を歌ふこと。

【二一】莊舄。越の人にして楚に仕へ富貴の身となる。

【二二】越吟。越の歌を歌ふこと。

【二三】窮達。窮は困窮するを、達は立身出世することを指す。莊舄を指す。

(二三)越吟す。人情同じきは土を懷ふに於てす。

【大意】世の離亂に遇ひ、各地に遷轉してより已に十二年、常に眷眷として故鄕に歸らんことを思ひ、憂思に堪へず。今此樓に登り欄干に憑りて故國を望めば、荊山に蔽はれて復た見るべからず。歸路長遠にして川流深大なり。之に對すれば悲涕流下して自ら禁へず。昔孔子陳に在りて歸歟の嘆を發し、鍾儀は囚はれて楚歌をうたひ、莊舄は顯榮にして猶ほ越歌をうたひぬ。蓋し故國を慕ふは人情の同じき所にして、窮達異りと雖も其情は未だ嘗て同じからずんばあらず。日月の逾え邁かんことを惟ひ、河の清まんことを俟てども其れ未だ極らず。冀はくは王道の(二四)一平し(二五)高衢を假りて力を騁せんことを。(二六)匏瓜の徒に懸らんことを懼れ、(二七)井渫の食はれざらんことを畏る。歩して(二八)棲遲して以て(二九)徙倚すれば、白日忽として其れ將に匿れんとし、風(三〇)蕭瑟として竝び興り、天(三一)慘慘として色なく、獸狂顧して以て羣を求め、鳥相鳴いて翼を擧げ、原野(三二)闃として其れ人なく、(三三)征夫行いて未だ息まず。心悽愴として以て感發し、意(三四)忉怛として

【二四】一平。一たび清平になること。
【二五】高衢。大道なり。
【二六】匏瓜。ヒサゴなり。論語に子曰ク吾豈匏瓜ナランヤ、焉ゾ能ク繫リテ食ハザランヤとあり。
【二七】井渫。井をさらへて清らかにすること。易經に井渫ツテ食ハレズとあり、井水を浚ひ清めたるも人の飲む者なきをいふ。
【二八】棲遲。優游すること。
【二九】徙倚。徘徊といふが如し。
【三〇】蕭瑟。風の音の淋しき貌。
【三一】慘慘。暗き貌。
【三二】闃。寂に同じ。
【三三】征夫。行旅の人。王粲自ら謂ふ。
【三四】忉怛。憂勞なり。

(三五)憯惻す。(三六)階除に循つて下り降れば、氣(三七)胷臆に交憤し、夜(三八)參半にして寐ねられず。悵として(三九)盤桓して以て(四〇)反側す。

【大意】歲月逝きて反亂の鎭定せんことを望むも、未だ其期に及ばず。宇內一たび清平に歸し、帝王の高道を借りて、己の才力を騁せ、以て其の輔弼とならんことを冀ひ、また身匏瓜の如く、徒に繫りて食はず（俸祿の給なきに喩ふ）井水浚渫せるも飮む者なき（身を修め潔を全うするも、時君の用ひざるに喩ふ）が如くならんことを懼る。乃ち樓上に優游徘徊すれば、白日將に沒せんとし、風聲竝び興り、慘慘として暝色あり。鳥獸の類、羣を求め翼を擧げて、將に巢塒に歸らんとし、農人家に歸りて原野に人なし。余獨り行路に在りて、未だ息まず、心之が爲に悲傷す。因つて階を下れば、いよいよ憤氣を增して胸中に滿ち、夜半に至るまで寐ねられず。或は起つて徘徊し或は臥して反側するのみ。

【三五】憯惻。悲傷すること。
【三六】階除。樓の階段。
【三七】胷臆。胸なり。
【三八】參半。參は及なり、夜半に及ぶこと。
【三九】盤桓。進み難き貌。
【四〇】反側。ねがへりすること。寐ねて安んぜざるなり。

(一)天台山に遊ぶ賦竝序

(二)孫興公

天台山は、蓋し山嶽の神秀なる者なり。海を涉

【一】天台山。山の名、會稽郡一の東南に在り。

れば則ち(三)方丈蓬萊あり。陸に登れば則ち(四)四明天台あり。皆(五)玄聖の遊化する所、靈仙の窟宅する所なり。夫れ其峻極の狀、嘉祥の美は、山海の壞富を窮め、人神の壯麗を盡せり。(六)五嶽に列せず(七)常典に載するを闕く所以の者は、豈に立つ所冥奥にして、其路(八)幽邈なるを以てにあらずや。或は(九)景を重溟に倒にし、或は峰を千嶺に匿し。始めは(一〇)魑魅の塗を經、卒は無人の境を踐む。世を擧げて能く(一一)登陟するよ罕に、王者も(一二)禋祀するに由なし。故に事(一三)常篇に絕え、名(一四)奇紀に標せり。然れども圖像の興る、豈虛しからんや。かの(一五)世を遺て道を翫び(一六)粒を絕ち(一七)芝を茹ふ者にあらずんば、烏んぞ能く輕擧して之に宅らんや。かの(一八)遠く寄せ冥に搜り、信に篤く神に通ずる者にあらずんば、何ぞ肯て遙に想ひて之を存せんや。余が神を馳せ思を運らし、晝は詠じ宵は興し、俛仰の間、已に再び升れるが若き所以の者なり。方に(一九)纓絡を解き永く茲嶺に託せん。吟想の至に任へず。聊か(二〇)藻を奮ひて以て懷を散ず。

(二一)太虛遼廓にして閡なく、自然の(二二)妙有を運らし、融けては(二三)川瀆となり、結んでは山阜となる。嗟(二四)台嶽の奇挺する所、寔に神明の扶持する所なり。(二五)牛宿に蔭れて以て峰を曜し、(二六)靈越に託して以て基を正し、根を結ぶこと(二七)華岱よりも彌く、直に指すこと(二八)九疑よりも高く、(二九)配天に(三〇)唐典に應じ、(三一)峻極を周詩に齊うす。(三二)邈たる彼の絕域、(三三)幽邃窈窕なり。(三四)近智の者は見るを守るを以て之かず。之く者は路の絕えたるを以て曉るなし。夏蟲の氷を疑ふを晒ひ、(三五)輕翮を整へて矯らんとを思ふ。理は隱るるとして彰れざるはなし。(三六)二奇を啓い

【一】孫興公、名は綽、字は興公、太原の人なり、晉に仕へて永嘉太守たり、意將に印を解きて幽寂に向はんとす、此山の神秀なるを聞き、其狀を圖せしめ遙に其賦を作る。賦成りて友人范榮期に示す、榮期曰く此賦地に擲てば必ず金聲をなさんと。

【二】方丈、蓬萊。海中の仙山。

【三】四明。山の名。

【四】玄聖、仙人なり。

【五】五嶽。泰山を東嶽、華山を西嶽、衡山を南嶽、恆山を北嶽、嵩山を中嶽となす、山の尊貴なる者なり。

【六】常典。經典なり。

【七】幽邈。深遠なり。

【八】重溟。海なり。景は影なり。

【九】魑魅。山神怪物なり。

【一〇】登陟。山に登ること。

【一一】禋祀。山を祭ること。

【一二】常篇。卽ち經典なり。

【一三】奇紀。奇書なり。標は表に同じ。

【一四】世を遺て云云。俗世を棄てて神仙の道を學ぶこと。

【一五】粒を絕つ。穀物を食はざること。

【一六】芝。仙人の食ふ靈草の名。

【一七】遠く寄せ。情を遐遠に寄すること。

【一九】纓絡。世網なり、煩累也。

【二〇】藻。文章なり。

【二一】太虛。天なり。遼廓は廣遠なり。

【二二】妙有、妙は妙理、有は有形なり。

【二三】川瀆。瀆も川なり。

【二四】台嶽。天台山なり。奇挺は怪しく聳え立つこと。

【二五】牛宿。星の名。越の分野なり。

【二六】靈越。越をいふ、靈異の出づる所なり、故に靈といふ。

【二七】華岱。華山と泰山。岱は泰に同じ。

【二八】九疑。山の名。

【二九】配天。配は對なり、堯五嶽を祭りて天に配せり。

【三〇】唐典。書經堯典なり。唐は堯の姓、堯典に五嶽を祭りしこと見ゆ。

【三一】峻極。詩經に嵩高ナルハ惟レ嶽、峻クシテ天ニ極レリとあり。

【三二】邈。遠き貌。

【三三】幽窈。奥深きこと。窈窕は深極の貌。

【三四】近智。小智なり。

【三五】輕翮。神仙は皆鳥に乘りて行く、故に輕翮といふなり。

【三六】二奇。赤城と瀑布となり。赤城は山名、色赤く狀雲霞に似たり。

て以て（三七）兆を示す。赤城霞のごとく起りて以て標を建て、瀑布飛び流れて以て道を界す。靈驗を覩て遂に徂き、忽乎として吾將に行かんとし、（三八）羽人に丹丘に仍り、不死の（三九）福庭を尋ぬ。苟も（四〇）台嶺の攀づべくんば、亦何ぞ（四一）層城を羨まん。（四二）域中の常戀を釋て、超然の高情を暢べん。（四三）毛褐の森森たるを被り、（四四）金策の鈴鈴たるを振ひ、（四五）荒榛の蒙龍を披き、（四六）峭嶸の崢嶸に陟り、（四七）楢溪を濟りて直ちに進み、（四八）五界を落て迅く征く。（四九）穹隆の懸磴に跨り、萬丈の（五〇）絕冥に臨み、（五一）莓苔の滑石を踐み、壁立の（五二）翠屏を搏り、（五三）橡木の長蘿を攬り、（五四）葛藟の飛莖を援き、一たび（五五）垂堂を冒すと雖も、乃ち永く長生を存す。必ず誠を（五六）幽昧に契れば、重險を履むも逾〻平なり。既に克く（五七）九折を躋れば、路（五八）威夷として脩く通り、心目の

【三七】兆。形なり。
【三八】羽人。仙人なり。丹丘は仙人の住む處、晝夜常に明也。
【三九】福庭。幸福多き場所。
【四〇】台嶺。天台山なり。
【四一】層城。崑崙山の上に在り天帝の居なり。
【四二】域中。俗世間なり。
【四三】毛褐。羽衣なり。森森は衣の形容。
【四四】金策。錫杖なり。鈴鈴は策の聲。
【四五】荒榛。深林なり。蒙龍は林の密なる貌。
【四六】峭嶸。高峰なり。崢嶸は山の高き貌。
【四七】楢溪。溪の名。
【四八】五界。五縣の界なり、會稽記に此山モト五縣ノ餘地ト名ヅク、五縣トハ餘姚、鄞、句章、剡、始寧ナリとあり。
【四九】穹隆。長曲の貌。懸磴は石橋なり。
【五〇】絕冥。深澗なり。
【五一】莓苔。コケなり。
【五二】翠屏。綠色の屏風。
【五三】橡木。曲れる木。長蘿は長きつるくさ。
【五四】葛藟。ツタカツラなり。
【五五】垂堂。危險を冒すこと。漢書に千金ノ子ハ坐スルニ堂に垂セズとあり。
【五六】幽昧。神明の道をいふ。
【五七】九折。曲折多き險路をいふ。
【五八】威夷。長き貌。

（五九）寥朗を恣にし、緩歩の從容に任せ、（六〇）萋萋たる纖草を藉き、（六一）落落たる長松に蔭し、（六二）翔鸞の裔裔たるを覩、鳴鳳の（六三）嗈嗈たるを聽き、（六四）靈溪を過ぎて一たび濯ひ、煩想を心胷に疏き、（六五）遺塵を（六六）旋流に蕩し、（六七）五蓋の遊蒙を發し、（六八）羲農の絕軌を追ひ、（六九）二老の（七〇）玄蹤を躡む。

【大意】天道は廣遠にして限界なく、自然の妙理を運らし成形を萬物に賦す。融けては川流となり、結んでは山岳となる。ああ天台山の峻秀なる、實に神明の扶持する所にして、牛宿陰覆して其峰を曜し、其根を越國に託す。其廣さは華岱にまさり、其高さは九疑に過ぎ。堯典に堯五嶽を祭りて天に配すとあるも、此山の神秀亦之に應じ、周詩に嵩高なるは惟れ岳、峻く天に極るとあるも、此山亦之と高さを齊うす。而も遠く人跡を離れ幽邃にして窈窕なるを以て、小智の者は見る所を守りて往かず。たとひ行く者あるも、其路斷絕せるを以て之を能く曉るなし。夫れ夏蟲の寒氷あるを知らざるは、猶ほ小智の高道を知らざるが如し。余窃に之を笑ふ。乃ち飛鳥に乘りて此山に登らんと欲す。志の專至する所、隱

【五九】寥朗。心虛にして目明なるをいふ。
【六〇】萋萋。草の美なる貌。
【六一】落落。松の高き貌。
【六二】翔鸞。飛ぶ鸞。裔裔は飛ぶ貌。
【六三】嗈嗈。和鳴する聲。
【六四】靈溪。溪の名。
【六五】遺塵。塵は六塵なり、色聲、香、味、觸、法をいふ。この六塵六根と接して種種の慾生ず。故に忘れたるも尚ほ殘ある故遺塵といふ。
【六六】旋流。深淵なり。
【六七】五蓋。貪慾、嗔恚、睡眠、調戲、疑悔なり。
【六八】羲農。伏犧と神農なり。
【六九】二老。老子と老萊子。
【七〇】玄蹤。玄は大なり。蹤は迹なり。

れたりと雖も彰れざるはなく、山上に赤城、瀑布の二奇ありて、先づ其形を示せり。赤城は霞の如く起りて標を立て、瀑布は懸流千仞、白布の流れ下るが如し。既に此山の靈驗を見、忽ち仙人に丹丘に遇ひ、進んで不死の福地を尋ねんとす。此山既に攀づるを得ば、何ぞ層城を羨まんや。將に世俗の常情を釋て、吾が超脫せる高情を暢べんと欲す。因つて羽衣を被り錫杖を扶つき、深林を披き高峰に登り、楢溪を渡り五縣の界を過ぎて進み、石橋を渡り深澗に臨み、苔蒸せる滑石を踐み、屏風を立てたるが如き巖壁を把り、葛藟を援きて登る。一たび垂堂の險を冒すと雖も、乃ち永く神仙長生の道を存すべく、誠信を結んで幽昧神明の道を欺かずんば、足此險を履むと雖も而も平道の易きよりも易し。既に九折の坂路を躋れば、路長遠にし心目を恣にし、緩歩に任すべく、自ら寛曠閑樂なるを覺ゆ。細草を敷きて長松の下に憩ひ、想を洗ひ、六塵五蓋を一掃して、伏犧神農の遺迹を追ひ、鸞鳳の飛鳴するを見聞し、靈溪を過ぎて煩俗の陟降信宿して仙都に迄れば、雙闕雲に竦ちて以て路を夾み、瓊臺天に中して懸居し、朱闕林間に玲瓏として、玉堂高隅に陰映し、彤雲斐亹として以て

【七一】陟降。上下すること。信宿は二泊すること。
【七二】仙都。仙人の集り居る處。
【七三】瓊臺。玉樓なり。
【七四】高隅。山隈なり。
【七五】彤雲。彩雲なり。斐亹は色の美しき貌。
【七六】檻。窓の格子、レンジなり。
【七七】皦日。白日なり。綺疏は窓なり。疏は刻穿するなり、刻穿して綺文をなす、之を綺疏といふ。

疏に炯晃たり。(七八)八桂森挺して以て霜を凌ぎ、(七九)五芝秀を含んで晨に敷き、(八〇)惠風芳を(八一)陽林に佇み、(八二)醴泉溜を(八三)陰渠に通かし、(八四)建木景を(八五)千尋に滅し、(八六)琪樹璀璨として珠を垂れ、(八七)王喬鶴を控いて以て天に冲し、(八八)應眞錫を飛ばして以て虛を躡み、神變の(八九)揮霍を騁せ、忽ち有を出でて無に入る。是に於て遊覽既に周く、體靜に心閑なり。(九〇)害馬已に去り、世事都て捐つ。刃を投ずるに皆虛し。牛を目るに全きなし。思を幽巖に凝らし、長川に朗詠す。爾して乃ち(九一)羲和午に亭り、(九二)遊氣高く褰げ、(九三)法鼓琅として以て響を振ひ、衆香馥として以て煙を揚ぐ。肆に(九四)天宗を、覩、爰に(九五)通仙を集め、挹むに玄玉の膏を以てし、漱ぐに(九六)華池の泉を以てし、散ずるに(九七)象外の說を以てし、

【七八】炯晃。明らかなり。
【七九】五芝。青黃赤白黑の靈草。
【八〇】惠風。和風なり。
【八一】陽林。南方の林。
【八二】醴泉。美泉なり。
【八三】陰渠。山北の渠なり。
【八四】建木。木の名。天帝の從りて上下する所なり。
【八五】千尋。八尺を尋といふ。
【八六】琪樹。玉樹なり。璀璨は珠の垂るる貌。
【八七】王喬。仙人の名、周の靈王の太子晉なり。
【八八】應眞。眞道を得たる人。錫は錫杖。
【八九】揮霍。變易する貌。
【九〇】害馬。莊子に黃帝牧馬童子ニ遇ヒ、天下ヲ治メンコトヲ問フ、童曰ク、天下ヲ治ムルハ何ゾ馬ヲ牧スルニ異ランヤ、亦タダ其馬ニ害アル者ヲ去ランノミと。ここは物慾の意に用ふ。
【九一】羲和。日の御者なり。
【九二】遊氣。海氣なり。
【九三】法鼓。鐘なり。琅は擬なり。
【九四】天宗。老君なり。
【九五】通仙。衆仙なり。
【九六】華池。崑崙山上にある池なり。
【九七】象外。象外の說。道教なり。

暢ぶるに（九）無生の篇を以てす。有を遣るの盡きざるを悟り、無を渉るの間あるを覺り、色空を泯して以て跡を合せ、忽ち有に卽いて玄を得、（九）二名の同出を釋て、一無を（一〇〇）三幡に消し、語樂を恣にして以て日を終へ、寂默を不言に等うし、萬象を渾して以て冥觀し（一〇一）兀として體を自然に同うす。

【大意】上下すること再宿にして仙都に至れば、雙樓雲中に竦ちて路を夾み、高臺天半に在りて空に懸れるが如く、朱閣玉堂林間に照映し、彩雲窓間に棚引き、白日綺窓を照し、桂樹高く霜に皺りて枯れず、芝草秀でて榮を吐き、和風芳を積み醴泉北渠に湧き、建木高きこと千尋にして影なく、玉樹橈みて珠を垂れ、神仙錫杖を執り鶴を伴ひて虛空を行き、能く其神變の術を馳せ、有爲を出でて無爲の中に入る。余周く遊覽して體靜かに心閑にして、嗜慾已に去り世事悉く忘れ、道の至妙を得て庖丁牛を解くに目に全牛を見ず、刃を投ずるに皆虛しきが如し（莊子養生主篇に見ゆ）乃ち思を幽巖に凝らし、高詠して長川に臨む。時に日既に天に中し、海氣また收まり、法鼓を擊ち名香を燒き、老君に謁し衆仙を會し、玄玉の膏を酌み、華池の泉に漱ぎ、道釋の說を聞きて惑を釋き、有を脫するの未だ盡きざるを悟り、無に入るの尙ほ間隙あるを知る。因つて色空を滅盡して一となし、忽ち有を遣りて玄道を得、有無の二者を棄てて一無に歸し、既に其道を得て語默自ら齊しく、心に營なくして、自然の道に合體す。

【九】無生の篇。佛道をいふ。
【九九】二名。有と無となり。此の二者同じく心より出づ、故に同出といふ。
【一〇〇】三幡。色、色空、觀なり。
【一〇一】兀。無知の貌。

蕪城の賦

（二）鮑明遠

（二）瀰迤たる（三）平原、南のかた（四）蒼梧、（五）漲海に馳せ、北のかた（六）紫塞、（七）鴈門に走き、極くに漕渠を以てし、（八）軸するに（九）崑岡を以てし、重江複關の（一〇）隩、四會五達の（一一）莊あり。昔（一二）全盛の時に當り、車は（一三）轄を挂け、人は肩に駕り、（一四）廛閈地を撲し、歌吹天に沸き、貨を（一五）鹽田に孳くし、利を（一六）銅山に鑄り、才力雄富にして士馬精妍なり。故に能く秦法より侈り周令に佚ぎ、（一七）崇墉を劃き（一八）濬洫を刳り、世を修うして以て（一九）休命なることを圖る。是

【一】鮑明遠。鮑昭、字は明遠、東海の人なり、宋の孝武帝の時、臨海王子頊荊州を鎭す、鮑昭之に仕へて參軍たり、隨つて廣陵に至る。子頊叛す。昭、廣陵の故城荒蕪せるを見る。廣陵は漢の吳王濞の都せし所にして、濞も亦叛逆して漢の爲に滅さる。今子頊の事濞に同じきを以て、遂に感じて此賦を作り以て諷す。
【二】瀰迤。相連りて漸く平なる貌。
【三】平原。卽ち廣陵なり。
【四】蒼梧。地名。
【五】漲海。海の名。
【六】紫塞。地名。
【七】鴈門。地名。
【八】軸。車なり。
【九】崑岡。原岡といふが如し。
【一〇】隩。要なり。
【一一】莊。大道なり。
【一二】全盛。漢の時代をいふ。
【一三】轄。車軸なり。
【一四】廛。民居なり。閈は里門なり。
【一五】鹽田。吳に鹽田あり、其水を煮て鹽を製す。
【一六】銅山。史記に吳ニ豫章郡ノ銅山ヲ以テ、吳王濞益シテ錢ヲ鑄、海水ヲ煮テ鹽トナスとあり。
【一七】崇墉。高き城。
【一八】濬洫。深き池。
【一九】休命。美命。命は天命な

を以て(二〇)板築雉堞の殷、(二一)井幹烽櫓の勤、(二二)格五嶽よりも高く、(二三)袤三墳よりも廣く、(二四)崒として斷岸の若く、(二五)矗として長雲に似たり。磁石を製して以て衝を禦ぎ、(二六)赬壤を糊して以て文を飛ばし、(二七)基扃の固護を觀るに、將に(二八)萬祀にして一君ならんとす。(二九)三代に出入すること五百餘載、竟に瓜のごとく剖けて豆のごとく分る。

【大意】廣陵の平原たる、南は蒼梧、漲海に及び、北は紫塞、鴈門に達し、舟は漕渠に浮び、車は原岡を行き、南に二江ありて關要をなし、道路遠近に通じて四通五達なり。昔吳王全盛の時、車軸相擊ち、人肩相摩し、民居地に遍く歌吹天に轟き、海を煮て鹽となし、銅を削りて錢を鑄、以て貨財を殖し、人皆勇才壯力にして、士馬盛强なりき。故に奢侈周秦の法令に過ぎ、乃ち高城を築き、深池を鑿ち、以て國家長久の計を立つ。因つて築城構樓を事とし、其制五嶽よりも高く、三墳よりも廣く、磁石を以て門となし以て衝擊を禦ぎ、赤土を粘して文飾となし、門闕の堅牢なること眞に

り。

【二〇】板築。牆を築くこと。雉堞は城牆なり。殷は盛なること。

【二一】井幹。高樓なり。烽櫓は烽火を擧ぐるヤグラ。

【二二】格。量度なり。五嶽は泰山、華山、衡山、恆山、嵩山の五山をいふ。

【二三】袤。廣さなり。三墳は詩經に見ゆる汝墳、淮墳、河墳なり。

【二四】崒。高峻なり。

【二五】矗。直なり。

【二六】赬壤。赤土なり。

【二七】基扃。城闕といふが如し固護は堅牢といふが如し。

【二八】萬祀。萬年なり。

【二九】三代。漢より晉末に至るまで三代、五百餘年なり。

萬歲一君にして動搖なきが如し。然も三代五百餘年の今日に於ては、竟に亡滅して其土地瓜剖豆分せられぬ。

(三〇)澤葵井に依り、荒葛塗に罥り、(三一)壇には(三二)虺蜮を羅ね、階には(三三)麏鼯を鬪はし、(三四)木魅山鬼、野鼠城狐、風に嗥え雨に嘯き、昏に見え晨に趨り、飢鷹吻を厲ぎ、(三五)寒鴟雛を嚇し、(三六)伏虣藏虎、血を乳にし膚を餐ふ。(三七)崩榛路を塞ぎ(三八)崢嶸たる(三九)古馗あり。白楊早く落ち、塞草前に衰へ、(四〇)稜稜たる霜氣、(四一)蔌蔌たる風威、孤蓬自ら振ひ、驚砂坐に飛び、(四二)灌莽杳として際なく、(四三)叢薄紛として其れ相依る。(四四)通池既已に夷ぎ、(四五)峻隅又以て頹る。直に千里の外を視れば、唯黃埃を起すを見る。思を凝らして寂に聽けば、心傷んで已に摧く。若夫れ(四六)藻扃黼帳、歌堂舞閣の基、(四七)琁淵碧樹、(四八)弋林釣渚の館、(四九)吳蔡齊秦の聲、(五〇)魚龍爵馬の玩、皆薰歇き燼滅

【三〇】澤葵。莓苔なり。

【三一】壇。堂なり。

【三二】虺蜮。虺はマムシ。蜮は水中に棲み人を害する蟲の名短狐ともいふ。

【三三】麏鼯。麏は鹿の類の獸、鼯はムササビ。

【三四】木魅。山の怪物。

【三五】寒鴟。こごえたるトビ。

【三六】伏虣。虣は暴に同じ、隱れたる猛獸、藏虎は隱れたる虎。

【三七】崩榛。崩れたる叢木。

【三八】崢嶸。深暗の貌。

【三九】古馗。古き道。

【四〇】稜稜。霜氣嚴冬の貌。

【四一】蔌蔌、風聲勁疾の貌。

【四二】灌莽。草木雜生する處。杳は遙なり。

【四三】叢薄。草木の雜生する處。

【四四】通池。城濠なり。

【四五】峻隅。高城なり。

【四六】藻扃。扃に雕畫を施したるもの。黼帳は彫畫せるトバリ。

【四七】旋淵。玉池なり。碧樹は玉樹なり。

【四八】弋林。鳥を射る林。

【四九】吳蔡。以下皆國の名。聲は歌なり。

【五〇】魚龍爵馬。皆飾となして賞玩する物。

え、光沈み響絶え、東都の妙姫、南國の〔一一〕麗人、〔一二〕蕙心紈質、玉貌〔一三〕絳唇、魂を幽石に埋め、骨を窮塵に委せざるはなし。豈〔一四〕同輩の愉樂、離宮の苦辛を憶はんや。天道如何ぞ恨を呑む者多き。

琴を抽んで〔一五〕操を命じ、燕城の歌を爲る。

【大意】昔日堂構階庭の盛、今竝に荒草の蕪する所となり、蟲獸鬼魅出沒往來し、風雨に嘷嘯して昏曉を論せず。飢鷹寒鴟は觜を厲きて雛を貪り、虎狼は潛匿して人の血肉を覓め、榛莽崩れて路を塞ぎ、古道深暗にして草枯れ、池は埋もれ城は頽れ、千里の間ただ黃塵の起るを見るのみ。誠に傷心の極なり。歌堂舞閣、玉池珠樹、射鳥の處、釣漁の館、歌舞の妓、珍玩奇什の類に至りては、皆芳香已に歇き化して灰燼となり、華光沈んで音響絶え、妙姫佳人、嬌美の心、輕細の質、白貌朱唇、皆已に死し、同車の遊以て樂となし、深宮に閉居し以て苦辛となせる生時を知らざるなり。ああ天道如何ぞ恨を呑んで死する者多からしむる。余乃ち琴を抱いて一曲を奏し、燕城の歌を作る。

歌に曰く、邊風急にして城上寒し。〔一六〕井徑滅びて丘隴〔一七〕殘す。千齡萬代、共に盡きて何をか言はん。

【一五】麗人。美女なり。
【一二】蕙心。蕙は香草の名、心の美なること。紈質の紈は白絹なり、色白くして肌理の細かなること。
【一三】絳唇。赤き唇。
【一四】同輩。同與に同じ。輦車に同乘すること。
【一五】操。曲といふが如し。
【一六】井徑。屋三を井となす。徑は道なり。
【一七】殘。そこなはるること。

ん。

【大意】余今來りて廣陵城邊を徘徊すれば、邊風急にして轉た寒く、行道荒蕪して、丘隴も亦摧殘す。歲既に久しくして、萬物皆舊觀を改めぬ。ああ復た何をか言はん。

宮殿

魯の靈光殿の賦竝序

(二)王文考

魯の靈光殿は、蓋し〔二〕景帝の程姫の子、〔三〕恭王餘の立つる所なり。初め恭王始めて〔四〕下國に都し、好んで宮室を治め、遂に〔五〕魯僖の基兆に因りて營む。漢の中ごろ微にして、〔六〕盜賊の奔突するに遭ひ、〔七〕西京の〔八〕未央、建章の殿より、皆〔九〕隳壞せらる。而も靈光のみ〔一〇〕巋然として獨り存せり。意ふに豈神明の依憑支持して、以て漢室を保てる者にあらずや。然れども其規矩

【一】王文考。王延壽、字は文考、後漢の人王逸の子なり、時に蔡邕また此作あり、十年成らず、延壽の此作を見て遂に隱して出さず、延壽時に年二十、延壽年二十四の時、漢江を過ぎ溺れて死す。
【二】景帝。前漢の天子。
【三】恭王餘。魯の恭王、名は餘。
【四】下國。天子の都を上國といひ諸侯の都を下國といふ。
【五】魯僖。魯僖公。基兆は始跡なり。
【六】盜賊。王莽の簒奪をいふ。
【七】西京。長安なり。
【八】未央、建章。宮殿の名。
【九】隳壞。破壞せらるること。
【一〇】巋然。高大堅固の貌。

制度の上(一)星宿に應せるも、亦永く安かりし所以なり。予(二)南郢より客として、(三)藝を魯に觀、斯を親て眙いて曰く、嗟乎詩人の興、物に感じて作る。故に(四)奚斯の僖を頌する、其(五)路寢を歌ひ、而して功績辭に存し、德音聲に昭かなり。物は賦を以て顯はれ、事は頌を以て宣ぶ。賦にあらず頌にあらずんば、將た何をか述べん。遂に賦を作りて曰く、

粤若古を稽ふるに、(六)帝漢の祖宗、(七)濬哲欽明にして、(八)五代の(九)純熙を殷にし、(一〇)伊唐の(一一)炎精に紹ぎ、(一二)天衢を荷ひて以て元に亨り、宇宙を廓にして京を作り、(一三)皇極を敷きて業を創め、神道に協ひて大に寧し。是に於て百姓昭明にして、(一四)九族敦く序づ。乃ち(一五)孝孫に命じ、魯に侯たらしめ、(一六)介珪を錫ひて以て(一七)瑞と作し、(一八)附庸を宅きて(一九)宇を開く。乃ち靈光の(二〇)秘殿を立て、(二一)紫微に配して(二二)輔となし、(二三)明堂を(二四)少陽に承け、昭列して(二五)奎の分野に顯る。彼の靈光の狀たるを瞻るに、則ち(二六)嵯峨巍嵬、(二七)嵔嵬嶵嵬たり。吁畏るべきかな其の人を駭すや。(二八)迢嶢倜儻、豐麗博敞なり。(二九)洞轇轕として其れ垠なく、邈として世に希にして特り出で、差(三〇)瓌譎にして(三一)鴻紛たり。屹として山のごとく峙ちて以て(三二)紆鬱たり。隆として青雲に(三三)崛屼たり。(三四)鬱坱圠として以て(三五)嶜嵷岠として(三六)崔嵬、(三七)前縉綾として龍鱗のごとく、(三八)汩磈磈として以て(三九)璀璨たり。(四〇)赫煇煇として(四一)坤を燭し、狀(四二)積石の(四三)鏘鏘たるが若く、又(四四)帝室の威神に似たり。崇墉岡のごとく連りて以て嶺のごとく屬き、朱闕巖巖として雙び立ち、高門(四五)閶闔に擬し、(四六)二軌を方べて竝び入る。

【大意】今漢初の昔を考ふるに、漢帝の祖宗皆深智愼明にして、五代大廣の德を盛にし、帝堯火德唐は堯の姓。

【一】星宿。星なり。
【二】南郢。荊州なり。
【三】藝。禮樂なり。魯には周公、孔子の遺風あればなり。
【四】奚斯。人名、魯の公子なり。僖は僖公なり。
【五】路寢。正殿なり。僖公路寢を立つるや、奚斯、清廟奕奕タリの頌を作る。
【六】帝漢。漢の天子。
【七】濬哲。深智なり。欽明は愼明なり。
【八】五代。周、殷、夏、舜、堯なり。
【九】純熙。純は大なり。熙は廣なり。
【一〇】伊唐。伊はコノと訓す。
【一一】炎精。火德なり。漢の高祖は堯の後にして火德を以て王たり。
【一二】天衢。天道といふが如し。
【一三】皇極。大中至正の道也。
【一四】九族。高祖より玄孫までの親族。
【一五】孝孫。恭王を指す。
【一六】介珪。大圭なり、諸侯の天子より賜はる玉なり。
【一七】瑞。瑞玉、諸侯たるシルシなり。
【一八】附庸。大國に附屬せる小國をいふ。
【一九】宇。國といふが如し。

【二〇】秘殿。秘は深なり。
【二一】紫微。天子の宮殿。
【二二】輔。輔翼なり。
【二三】明堂。天子の政事堂なり。
【二四】少陽。東方なり。
【二五】奎。星の名、魯の分野なり。
【二六】嵯峨。以下皆高峻の貌。
【二七】迢嶢。高き貌。倜儻は卓異なり。博敞は廣きこと。
【二八】洞轇轕。廣大の貌。
【二九】瓌譎。奇異なり。
【三〇】鴻紛。鴻は大。紛は多なり。
【三一】紆鬱。曲深の貌。
【三二】嵷屼。高き貌。
【三三】鬱坱圠。際限なき貌。
【三四】嵷嵷。深空の貌。
【三五】崔嵬。參差として齊しからざる貌。
【三六】汩磈磈。高峻の貌。
【三七】璀璨。雜彩の色なり。
【三八】赫煇煇。光明の貌。
【三九】坤。地なり。
【四〇】積石。山の名。
【四一】鏘鏘。華盛の貌。
【四二】帝室。天帝の宮殿。
【四三】閶闔。天の門なり。
【四四】二軌。二車なり。

の運を繼ぎ、天道の大通に賴りて宇宙を開き、京室を作り、大中の道を敷いて大統を創め、神道に合して大に安し。乃ち恭王に命じて魯に君たらしめ、大圭を賜ひて瑞信となし、附庸を置きて國を開かしむ。恭王乃ち靈光殿を建てて、天子の宮殿に配し、以て皇室の輔翼となし、漢の明堂に擬して東方奎宿の分野に昭列す。熟〻此殿の形狀を觀るに、高大にして眞に人を驚かすに足る。高峻卓異、直上して高く靑雲の中に入り、雜綵の色燦爛として地を照らし、帝居の華盛なるが如く、また紫微宮の神靈にして人を驚かすが如く、高墻遠く連りて岡嶺の如く、朱門殿前に竝び立ち、二車相竝んで入るを得。

是に於てか乃ち夫の(五五)太階を歷て以て其堂に造り、俯仰顧眄して東西に(五六)周章す。(五七)彤彩の飾徒に何をか爲さん。(五八)潏潏汩汩、(五九)流離爛漫と して、皓壁(六〇)皜曜して以て月のごとく照り、丹柱(六一)歙絶して電のごとく燭き、霞のごとく駮に雲のごとく蔚に、陰れるが若く陽るが若く、(六二)窈冥窱として以て中に處れば、(六三)陰夏に隱れて以て峥嶸たり。(六四)鴻爗熀として燧煌煌たり。(六五)飂蕭條として淸泠たり。滴瀝を動かして以て響を成し、殷雷應じて其れ驚くが若く、耳(六六)嘈嘈として以て聽を失ひ、目(六七)矇矇として精を喪ひ、(六八)密石と(六九)琅玕とを駢べ、(七〇)玉瑞と璧英とを齊うす。遂に金扉を排いて北に入れば、(七一)宵靖靖として(七二)晻曖たり。(七三)旋室婉娟として以て(七四)窈窕たり。(七五)洞房叫窱として幽邃なり。(七六)西廂踟躕して以て(七七)閑宴、(七八)東序重深にして奧祕なり。(七九)屹鋰暝として以て(八〇)勿罔なり。(八一)屑靡翳として以て(八二)懿濞なり。魂悚悚として其れ驚き、心(八三)猶猶として悸を發す。

【大意】高階を過ぎて殿堂に至り、俯仰顧眄して驚き視れば、光彩爛然として言ふばかりなし。壁の白きは月の輝くが如く、柱の赤きは雲の蔚なるが如く、光色動亂して人目を眩せしめて、淸涼の氣秋の如く、簷に滴瀝を垂れ、繞に小響を成せば、室內之に應じ、其聲雷の驚くが如く、

【五五】太階。高き階段。
【五六】周章。狼狽なり、驚き視ろなり。
【五七】彤彩。赤き光。
【五八】潏潏汩汩。光明の貌。
【五九】流離爛漫。分散の貌。
【六〇】皜曜。白く光ること。
【六一】歙絶。赤く光ること。
【六二】窱漠燐亂。以下光色亂れ動きて目眩惑するをいふ。
【六三】陰夏。北に向ふの屋をいふ。
【六四】靈冥窱、靜嶸。皆幽深の貌。
【六五】鴻爗熀、爗煌。寬明の貌。

【六六】飂蕭條、淸泠。淸涼の貌。
【六七】嘈嘈。かまびすしきこと。
【六八】矇矇。炫燿して目正しからざるなり。
【六九】密石。密理の石。
【七〇】琅玕。玉なり。
【七一】玉瑞、璧英。皆玉なり。
【七二】宵靖靖。小暗き貌。
【七三】晻曖。暗き貌。
【七四】旋室。曲室なり。婉娟は廻曲の貌。
【七五】窈窕。幽深なる貌。
【七六】洞房。通房なり。叫窱は遠き貌。
【七七】西廂。西のヒサシ。踟躕は相連る貌。
【七八】閑宴。閑靜なること。
【七九】東序。東のヒサシ。
【八〇】屹鋰暝。視て明かならざること。
【八一】勿罔。審ならざる貌。
【八二】屑靡翳。暗蔽の貌。
【八三】懿濞。深邃の貌。
【八四】猶猶。懼るる貌。

耳聾し目眩す。金扉を排して北に入れば、藹藹として晝暗く、更に曲室あり、美麗にして幽深。又通房あり、長遠にして陰暗。東西の二廂また重深にして隱密なり。之を視れども明かならず、之を望めども審かならず、神魂之が爲に驚くばかりなり。

是に於て詳に其棟宇を察し、其結構を觀れば、規矩天に應じ、上(八五)觜陬に憲り、(八六)倔佹として雲に起り、(八七)嶔崟離樓たり。(八八)三間四表(八九)八維九隅あり。(九〇)萬楹叢り倚り、(九一)磊砢として相扶け、(九二)浮柱岹嶫として以て星のごとく懸り、(九三)漂嶢峴として(九四)枝柱し、飛梁(九五)偃蹇として以て虹のごとく指し、(九六)揭蘧蘧として騰り湊り、(九七)層櫨礫佹として以て(九八)岌峩し、(九九)曲枅(一〇〇)要紹として環句し、(一〇一)芝栭攢羅して以て(一〇二)戢脅し、(一〇三)枝掌扠抒として斜に據り、傍に(一〇四)夭蟜し

【八五】觜陬。營室星なり。
【八六】倔佹。重累の貌。
【八七】嶔崟。峻しき貌。離樓は衆木相交る貌。
【八八】三間四表。室三間ごとに則ち表あり。
【八九】八維。四方四角なり。中央と八維とを合せ九隅といふ。
【九〇】萬楹。楹は柱なり。
【九一】磊砢。壯大の貌。
【九二】浮柱。梁上の短柱なり。岹嶫は遠きこと。
【九三】漂。輕き貌。嶢峴は危き貌。
【九四】枝柱。支ふること。
【九五】偃蹇。曲れる貌。
【九六】揭。擧るなり。蘧蘧はおほく攢る貌。
【九七】層櫨。かさなれるマスガタ。礫佹は危き貌。
【九八】岌峩。危き貌。
【九九】曲枅。まがれるマスガタ。
【一〇〇】要紹、環句。曲りて相連る貌。
【一〇一】芝栭。梁上の短柱、畫くに芝草の文を以てす。攢羅は聚り列ること。
【一〇二】戢脅。聚る貌。
【一〇三】枝掌。梁上の交木。扠抒は參差の貌。
【一〇四】夭蟜。特出する貌。

て以て横出し、互に(一〇五)黝糾して(一〇六)搏負し、下は(一〇七)岪蔚として以て(一〇八)璀錯し、上は(一〇九)崎嶬として(一一〇)重注し、(一一一)捷獵として鱗のごとく集り、(一一二)支離して分れ赴き、縱横(一一三)駱驛し、各趣く所あり。爾して乃ち(一一四)懸棟結阿、(一一五)天窻綺疎あり。(一一六)圓淵方井には反に荷蕖を植ゑ、秀を發し榮を吐き、(一一七)菡萏披敷し、(一一八)綠房紫的あり。(一一九)窋窕として珠を垂る。(一二〇)雲楶藻梲、龍桷彫鏤し、飛禽走獸、木に因りて姿を生し、奔虎(一二一)攫拏して以て(一二二)梁倚し、(一二三)仡として(一二四)奮豐して鬐を軒げ、虬龍(一二五)騰驤して以て(一二六)蜿蟺たり。(一二七)頷として動くが若くにして(一二八)躨跜たり。朱鳥翼を舒べて以て(一二九)衡に峙ち、(一三〇)騰虵蟉虯して榱を遶り、白鹿(一三一)欂

【一〇五】黝糾。特出する貌。
【一〇六】搏負。負ふこと。
【一〇七】岪蔚。特起する貌。
【一〇八】璀錯。衆盛の貌。
【一〇九】崎嶬。危險の貌。
【一一〇】重注。かさなりつくこと。
【一一一】捷獵。相接する貌。
【一一二】支離。分散なり。
【一一三】駱驛。續きて絶えざる貌。
【一一四】懸棟結阿。屋下更に重梁をなし、相結び屈曲して屋をなすなり。阿は屋の四垂也。
【一一五】天窻綺疎。天窻は高窓なり。疎は刻穿するなり、刻穿して綺文をなす、故に綺疎といふ。
【一一六】圓淵方井。天井に圓き淵を畫くなり。
【一一七】菡萏。蓮花なり。披敷は花を開くこと。
【一一八】綠房紫的。蓮の實なり。的は菂に同じ。
【一一九】窋窕。物の穴中に在る貌。
【一二〇】雲楶。梁上の柱の畫くに雲の模樣を以てせるもの。梲も楶に同じ、畫くに水草の文を以てす、故に藻梲といふ。龍桷は龍を畫きし椽。
【一二一】攫拏。相搏つこと。
【一二二】梁倚。相著くなり。
【一二三】仡。頭を擧ぐること。
【一二四】奮豐。振ひたつこと。
【一二五】騰驤。躍りあがること。
【一二六】蜿蟺。わだかまること。
【一二七】頷。動くこと。
【一二八】躨跜。動く貌。
【一二九】衡。門上の木。
【一三〇】騰虵。躍りあがる蛇。蟉虯は曲る貌。
【一三一】欂櫨。柱頭のマスガタ。

櫨に（一三）孑蜿し、（一三）蟠螭宛轉として楣を承け、狡兎（一三四）柱側に跧伏し。（一三五）猨狖椽を攀ぢて相追ひ、玄熊（一三六）蚰蜒として以て（一三七）斷斷たり。却いて（一三八）負載して（一三九）蹲蜿し、首目を齊うして以て（一四〇）瞪眄し、徒に（一四一）睆睆として（一四二）狒狒たり。

【大意】詳に其結構を觀れば、能く天文星宿に應じ、高く雲外に聳え、樂木錯綜し、萬柱叢り倚り、參差として相扶持し、浮柱高遠にして危く相支持し、飛梁屈曲して虹の如く、短柱攢叢して斜に據り、縱橫駱驛して各〻趣向を凝らせり。又懸棟、結阿、天窓、綺疎あり。天井には畫くに圓淵及び蓮花を以てし、花葉下に向つて垂れ、其實紫綠相交り、珠の下垂するが如し。柱梁には禽獸蟲魚を畫き、虎あり龍あり朱鳥あり白鹿あり狡兎あり玄熊あり。皆首目を駢べて怒り視る。胡人遙に上楹に集り、（一四四）儼雅として跽いて相對し、（一四五）仡㑩猛として以て（一四六）鵰眩し、（一四七）顲顩顟

【一三】孑蜿。首を延ばす貌。
【一三】蟠螭。わだかまれる龍。宛轉は盤屈する貌。
【一三】柱側〻柱は斗栱の上の橫木。跧伏は足を縮めて伏することを。
【一三五】狡狖。猿の類なり。
【一三六】蚰蜒。舌を吐く貌。
【一三七】斷斷。齒の根を現すこと。
【一三八】負載。棟梁を負ふなり。
【一三九】蹲蜿。うづくまること。
【一四〇】瞪眄。視ること。
【一四一】睆睆。橫目に視る貌。
【一四二】狒狒。犬の怒る貌。
【一四三】胡人。外夷なり。
【一四四】儼雅。跪く貌。
【一四五】仡㑩猛。大首なり。
【一四六】鵰眩。隼の如く睨むこと。
【一四七】顲顩顟。大首にして深目の貌。

として（一四八）睒睗し、狀危處に悲愁するが若く、（一四九）憯として（一五〇）頫蹙して悴を含めり。神仙棟間に（一五一）岳岳として以て（一五二）響像たり。鬼神の髣髴たるが若し。天地を圖畫し羣生を品類し、雜物奇怪、山神海靈、其狀を寫し載せ、之を（一五四）丹青に託し、千變萬化し、事各〻形を繆へ、色に隨ひ類に象り、曲に其情を得たり。上は（一五五）開闢遂古の初を紀し、（一五六）五龍翼を比べ、（一五七）人皇九頭あり。（一五八）伏義は鱗身にして（一五九）女媧は蛇軀なり。（一六〇）鴻荒樸略にして厥狀（一六一）睢盱たり。（一六二）煥炳として觀るべきは黃帝唐虞なり。（一六三）軒冕庸を以てし衣裳殊るあり。下は（一六四）三后、（一六五）淫妃、亂主、忠臣、孝子、烈士、貞女に及ぶまで、賢愚成敗載叙せざるはなし。惡は以て世を誡め、善は以て後に示す。

【一四八】睒睗。目を張る貌。
【一四九】憯。懼るること。
【一五〇】頫蹙。憂ふる貌。
【一五一】岳岳。立つ貌。
【一五二】忽曞眇。視て明かならざる貌。
【一五三】響像。依稀といふが如し、ほのぐらきこと。
【一五四】丹青。繪畫なり。
【一五五】開闢。天地の開けし初、遂古は上古なり。
【一五六】五龍。上古五龍あり、兄弟五人、黃伯、黃仲、黃叔、黃季、黃少といふ、九州を分ち治む。
【一五七】人皇。上古の天子。九頭あり。
【一五八】伏義。上古の天子、鱗身にして人首なりといふ。
【一五九】女媧。上古の天子、蛇身にして人首なりといふ。
【一六〇】鴻荒。太古なり、樸略は質朴なること。
【一六一】睢盱。質朴の貌。
【一六二】煥炳。光明なり。
【一六三】軒冕。軒は車、冕は冠。庸は功なり〻功ある者には軒冕を賜ふなり。
【一六四】三后。后は君なり、夏の桀王、殷の紂王、周の幽王なり、共に亂暴の君なり。
【一六五】淫妃。夏の妹喜、殷の妲己、周の褒姒、共に國を衰亡せしめし妃なり。

【大意】木を以て胡人の形を刻みて之を上楹に置く。大首深目にして其視ること鵰の如く、危處に居るを悲愁して嚬蹙する者の如し。又神仙の形を棟間に刻み、玉女の形を窓上に刻み、其形像髣髴として、有るが如く無きが如し。此他天地間の雜物奇怪を圖畫し、其狀各〻異り。然も皆よく其眞狀を盡せり。上は太古の帝王、五龍の翼を比ぶる、人皇の九頭ある、伏犧の鱗身なる、女媧の蛇身なるあり。太古質朴なるを以て、其形を畫くこと亦隨つて質朴なり。其の炳煥として觀るべきものに至りては、黄帝堯舜あり。功に因つて車服を賜ひしを以て衣裳各異れり。下は三后、淫妃より忠孝貞烈の士女に至るまで、悉く之を畫き、その賢愚成敗悉く之を載せざるはなし。惡は以て世を誡め、善は以て後世に示さんが爲なり。是に於てか連閣宮を承け、(一六六)馳道周環し、(一六七)陽榭より外を望めば、高樓(一六八)飛觀あり。(一六九)長塗升降して(一七〇)軒檻曼延し、(一七一)漸臺池に臨んで(一七二)層曲九成あり。屹然として特り立ち、(一七三)的爾として形を殊にし、高く(一七四)華蓋に緣りて、上り征き、(一七五)飛陛揭孽として雲に緣りて上り行き、中坐に景を垂れ、頫して流星を視る。千門相似て萬戸一の如く、巖突洞出し、(一七六)逶迤として(一七七)詰屈し、周行すること數里、仰いで日を見ず。何ぞ宏麗の(一七八)靡靡たる。咨力を用ふること妙勤なり。夫の通神の俊才にあらずんば、誰か能く此勳を(一七九)剋成せん。(一八〇)坤靈の寶勢に據り、(一八一)蒼昊の(一八二)純殷を承け、陰陽の變化を包ね、元氣の(一八三)烟熅を含み、(一八四)玄醴陰溝に騰涌し、甘露宇に被りて下り臻り、(一八五)朱桂南北に(一八六)鬱儵として、(一八七)蘭芝東西に(一八八)阿那たり。祥風(一八九)翕習として以て(一九〇)颯灑たり。芳香を激して常に芬し。神靈その棟宇を扶け、千載を歷て彌〻堅く、永く安寧にして以て祉福あり、長く大漢と與にして久しく存せり。實に至尊の(一九一)御する所、延壽を保ちて子孫に宜し。苟に貴ぶべきこと其れ斯の若し。孰か亦云ひて珍とせざる者あらんや。

【大意】連閣ありて此殿に接し、馳道また之を環れり。高臺に登りて外を望めば、復た高樓飛觀を見る。閣道上下して、欄干遠く續き、漸臺あり池に臨んで九層より成り。飛階極めて高くして、雲に緣りて上り行き、中坐よりして日景を垂れ、俯して流星を見るべし。千門萬戸相似たること一の如く、長遠にして屈

【一六六】馳道。人君の行く所の道なり。
【一六七】陽榭。高臺なり、日に近き故に陽といふ。
【一六八】飛觀。高樓といふに同じ。
【一六九】長塗。閣道なり。
【一七〇】軒檻。欄干なり。曼延は長くして絶えざること。
【一七一】漸臺。星の名、因つて臺の名とす。
【一七二】層曲九成。高く九重より成るなり。
【一七三】的爾。分明なる貌。
【一七四】華蓋。星の名。
【一七五】飛陛。高き階段。揭孽は極めて高き貌。

【一七六】逶迤。長き貌。
【一七七】詰屈。曲る貌。
【一七八】靡靡。細好なり。
【一七九】剋成。作成なり。
【一八〇】坤靈。地なり。
【一八一】蒼昊。天なり。
【一八二】純殷。大中の道なり。
【一八三】烟熅。天地の蒸氣なり。
【一八四】玄醴。醴泉なり。陰溝は嚴北の溝。
【一八五】朱桂。香木の名。
【一八六】鬱儵。茂盛の貌。
【一八七】蘭芝。香草の名。西は音シン、叶韻。
【一八八】阿那。茂盛の貌。
【一八九】翕習。盛なる貌。
【一九〇】颯灑。風の物を吹く聲。
【一九一】御。居ること。

曲し、周行すること數里なるも、天日を見ず。何ぞ其の宏麗にして細好なる。人力を用ふること勤めたりと謂ふべし。鬼神の俊才にあらずんば、誰か能く此工を成さんや。既に地靈の奇勢を受け、上天の大中を承け、陰陽元氣を包含して此殿を成せり。故に醴泉北溝に湧き、甘露宇に降り、朱桂南北に茂り、蘭芝東西に茂り、祥風之を吹いて常に芳香を吐く。神靈の扶助により千年を經るも愈〻堅く、漢祚と共に永く存せり。これ實に天子の居るべき處にして、子孫萬世に傳ふべし。其の貴ぶべきこと此の如し。誰か之を美ならずと謂はんや。

【一九二】亂。賦の末にありて一篇の大意を總括する詞。
【一九三】彤彤。赤き貌。
【一九四】巃巃。穹崇、高大なる貌。
【一九五】厖鴻。大なる貌。
【一九六】崱岑。巉嶪。高き貌。
【一九七】岑嵓。高き貌。嵳巇は參差たる貌。
【一九八】龍嵸。高き貌。
【一九九】連拳。長く連る貌。偃蹇は高き貌。
【二〇〇】嵳薗。峻嶮の貌。蹉跿は曲る貌。
【二〇一】欻欻幽靄。幽邃なる貌。
【二〇二】雲覆。雲の掩ふが如きこと。霆霧は繁雲の貌。
【二〇三】洞。深きこと。
【二〇四】杳冥。暗きこと。
【二〇五】葱翠紫蔚。雜綵色なり。
【二〇六】礧磈。大石なり、環瑋は珍奇なり。
【二〇七】光晷。日光なり。

亂に曰く、（一九二）彤彤たる靈宮、（一九三）巃巃穹崇、紛として（一九四）厖鴻たり。（一九五）崱岑嶫薆、（一九六）崟嵳として（一九七）巃嵸、騈として（一九八）連拳偃蹇、（二〇〇）嵳薗蹉跿、傍ら欹傾す。（二〇一）欻欻幽靄、（二〇二）雲覆霾霧、（二〇三）洞として（二〇四）杳冥なり。（二〇五）葱翠紫蔚、（二〇六）礧磈瓌瑋として（二〇七）光晷を含む。奇を窮め妙を極め、棟宇より已來、未だ之れあらず。神の之を營む、我が漢室に瑞して、永く朽ちず。

【大意】此殿高大、參差として珍奇金玉、日光を含み、妙を盡し奇を極め、始めて宮室ありしより以來、未だ嘗て有らざる所なり。神實に之を營み、我が漢を美し、千歲に傳へて不朽ならしむ。

景福殿の賦

（一）何平叔

大なる哉惟れ魏、世、哲聖あり。（二）武は元基を創め、（三）文は大命を集し、皆天に體して制を作し、時に順つて政を立つ。（四）帝皇に至りて、遂に（五）熙にして累盛なり。遠きは則ち陰陽の自然に襲り、近きは則ち人物の至情に本づき、上は則ち（六）善經を闡き、庶事既に康く、（九）天秩孔だの（七）稽古の（八）弘道を崇び、下は則ち長世明かなり。故に（一〇）載祀二三にして、國富み刑清めり。歲の三月東に（一一）巡狩し、（一二）許昌に至り、山川を（一三）望祠し、時を考へ方を度り、

【一】何平叔。何晏、字は平叔、南陽の人なり、魏の明帝、許昌に殿を作り名づけて景福といふ。既に成り人に命じて之を賦せしむ。何晏遂に此作あり。
【二】武。魏の武帝曹操なり。元基は大なる基礎。
【三】文。魏の文帝、漢の禪を受け天子となり、父曹操を追尊して武皇帝といふ。大命は天命なり、天命を受けて天子となりしこと。
【四】帝皇。魏の明帝を指す、文帝崩じて皇帝の位に卽く。
【五】重熙累盛。熙は明なり、ますます昭明なること。
【六】稽古。古を考ふること。
【七】弘道。大道なり。
【八】善經。善道といふが如し。
【九】天秩。天祿なり、天位といふが如し。
【一〇】載祀。年なり。二三は六年をいふ。
【一一】巡狩。天子の巡行するをいふ。
【一二】許昌。地名。
【一三】望祠。祭ること。

(一四)高年を存問し、民を率ゐて耕桑す。越に六月(一五)既望、(一六)林鍾律を紀し、(一七)大火昏に正しく、桑梓繁蕪し、大雨時に行く。(一八)三事九司(一九)宏儒碩生(二〇)溽暑の伊鬱たるに感じ、而して(二一)性命の平うする所を慮り、惟れ(二二)岷越の靜かならざる、征行の未だ寧からざるを寤るも、乃ち(二三)昌言して曰く、昔在(二四)蕭公より(二五)孫卿に訾ぶまで、皆先識博覽にして、明允篤誠なり。壯ならず麗ならざれば、以て民を一にして威靈を重くするに足らず。飾らず美しからずんば、以て後を訓へて(二六)厥成を示すに足らずと、以爲はざるはなし。故に當時其功利を享け、後世其(二七)英聲に賴る。且つ許昌は乃ち(二八)大運の戻る攸、(二九)圖讖の旌せる所なり。苟に德義其れ斯の如し。夫れ何ぞ宮室を之れ營むなからんと。帝曰く俞る哉と。

【大意】魏は世〻聖君あり。武帝基を開き文帝に至りて始めて天命を受け、皆天意人心に順つて政

【四】高年。老人なり。存問とは慰問すること。
【一五】既望。十六日をいふ。
【一六】林鍾。六月は律林鍾に應す。
【一七】大火。星の名、六月には暮に正南方にあらはる。
【一八】三事。三公なり。九司は九卿なり。
【一九】宏儒碩生。大學者なり。
【二〇】溽暑。溽は濕なり、むしあつきこと。伊鬱は煩熱の貌。
【二一】性命。生命に同じ。
【二二】岷越。蜀及び吳なり。
【二三】昌言。よきことば。
【二四】蕭公。漢の功臣蕭何なり、蕭何未央宮を佐る、高祖其の壯麗を見て甚だ怒る、何曰く天子は四海を以て家となす、壯麗にあらざれば威を重くするなしと。
【二五】孫卿。荀況なり、荀子に曰く宮室臺榭ハ以テ燥濕ヲ避ケ德ヲ養ヒ輕重ヲ分ツと。
【二六】厥成。其の成功なり。
【二七】英聲。英名なり。
【二八】大運。天運なり。
【二九】圖讖。未來記。祥言なり、漢の時許昌に氣あり、當塗にあらはる。塗に當りて高きは魏なり、因つて魏の漢に代るべきを知る。

法を布く。今上皇帝に至りて、其德ますます大なり。陰陽の自然に則り、人物の至情に本づき、古聖賢の大道を崇び、長世の善道を開き、衆事既に安く天位益〻固し。故に君たること六年にして民富み刑省く。三月東に巡狩して許昌に至り、山川を祭り時方を度り、老人を慰勞し民を率ゐて農桑に勤めしむ。六月十六日、大雨時に至る。三公九卿大儒皆相與に煩熱に感じ、身命の害をなさんことを憂ふ。故に吳蜀の未だ平がざるを知れども、猶は奏言して曰く、かの蕭何、荀卿ともに古の明賢なり。然も宮室を壯麗にせざれば、天下を一統し威靈を天下後世に示すに足らざる事を主張せり。當時の君皆其言に聽き宮室を壯麗にせざるはなし。故に能く其功利を受け、子孫また其英名に賴れり。且つ許昌は天運の止る所、圖讖の表せる所なり。宜しく宮室を此地に營むべきなりと。天子乃ち之を可とす。

(三〇)玄輅既に駕し、輕裘斯れ(三一)御し、乃ち有司に命じ、禮儀を是れ具へ、審に日力を量り、詳に費務を度り、(三二)經始の黎民を鳩め、農功の(三三)暇豫を輯め、(三四)東師の獻捷に因り、(三五)海孽の賄賂に就き、景福の祕殿を立て、皇居の制度に備ふ。爾して乃ち(三六)層覆の恥恥たる

【三〇】玄輅。天子の車。禮記に孟冬ノ月天子玄輅ニ乘ルとあり。
【三一】御。著ること。禮記に孟冬ノ月、天子始メテ裘スとあり。
【三二】經始。宮室を造營すること。黎民は衆民なり。
【三三】暇豫。閒暇なり。
【三四】東師。東征の軍。獻捷とは戰利品を獻ずること。
【三五】海孽。吳をいふ。賄賂は資財なり。
【三六】層覆。高屋なり。恥恥は深邃の貌。

を豐にし、高基の(三七)堂堂たるを建て、(三八)疏柱の汨越たるを羅ね、(三九)坻鄂の鏘鏘たるを肅む。(四〇)飛櫚翼のごとく以て(四一)軒翥し、(四二)反宇轗として以て高く驤り、羽毛の(四三)葳蕤たるを流し、(四四)環玭の琳琅たるを垂れ、(四五)參旗九旒、風に從つて飄揚し、(四六)皓皓旰旰、(四七)丹彩煌煌たり。故に其(四八)華表は則ち(四九)鎬鎬鑠鑠、赫奕章灼として、日月の天に麗けるが若く、其(五〇)奧祕は則ち(五一)翳蔽曖昧、髣髴退概として、(五二)幽星の纚連するが若し。既に櫛比して欑集し、又(五三)宏璉して以て(五四)豐敞なり。(五五)兼苞博落して、(五六)一象を常にせず。遠くして之を望めば、朱霞を摛べて天文を耀すが若く、迫くして之を察れば、崇山を仰いで垂雲を載するが若し。嗟(五七)瓌瑋にして以て壯麗なり。(五八)紛彧彧として其れ分ち難し。此れ其大較なり。若し乃ち高甍(五九)崔嵬として、飛宇霓

【三七】堂堂。高敞の貌。
【三八】疏柱。畫柱なり。汨越は光明の貌。
【三九】坻鄂。殿基なり。鏘鏘は高き貌。
【四〇】飛櫚。高きノキ。
【四一】軒翥。高く飛ぶこと。
【四二】反宇。そり返れるノキ。轗は高き貌。
【四三】葳蕤。毛羽の美なる貌。
【四四】環玭。玉の名。琳琅は玉の美なる貌。
【四五】參旗。日月星を畫ける旗。九旒は九旗なり。
【四六】皓皓旰旰。旗の光明なり。
【四七】丹彩煌煌。旗の光明なり。
【四八】華表。屋外を華飾せるをいふ。
【四九】鎬鎬。以下皆光顯昭明の貌。
【五〇】奧祕。殿內深邃の處。
【五一】翳蔽。以下皆幽深にして明ならざる貌。
【五二】幽星。夜の星。纚連は相連ること。
【五三】宏璉。大に連ること。
【五四】豐敞。廣きこと。
【五五】兼苞博落。繞る所廣きなり。
【五六】一象。一の形式。
【五七】瓌瑋。奇にして美なること。
【五八】紛彧彧。文章多き貌。
【五九】崔嵬。高き貌。

を承け、(六〇)緜蠻黮霨として、雲に隨つて融泄し、鳥のごとく企り山のごとく峙ち、翔るが若く滯るが若く、(六一)峨峨嶫嶫として、屆る所を識るなし。(六二)離朱の至精と雖も、猶ほ眩曜して(六三)昭晰する能はざるなり。

【大意】其冬、明帝乃ち主司に命じて禮儀を具へ、日程費目を量り、庶民を使用するに農暇を以てし、吳國を破りて其財を取り、以て景福殿を作り、天子の制度に備へしむ。是に於て高屋を構へ高基を建て、畫柱を立て、飛櫚鳥翼の如く高く張り、反宇上に向つて高く驤り、羽毛珠玉を垂れて其中を飾る。旌旗屋外に飜りて煌煌たり。故に屋外は昭明にして、日月の天に懸るが如く、屋內は幽深にして星斗の夜輝くが如し。殿宇の相連ること櫛齒の如く、廣敞にして琦麗なり。然も各〻其形態を異にす。遠く之を望めば朱霞を舒べ天文を耀かすが如く、近く之を觀れば高山の垂雲を戴くが如し。奇美壯麗一一述べ盡し難し。是れ其大略なり。要するに屋宇高峻にして高く雲霓に接し、爛然として雲に隨つて動き、鳥の飛ばんと欲するが如く、山の峙ちて止まるが如く、人其の至る所を知るなし。離朱の目睛ありと雖も、猶ほ眩惑して明にする能はざるなり。

【六〇】緜蠻。文章ある貌。黮霨は黑き貌。
【六一】峨峨嶫嶫。高き貌。
【六二】離朱。いにしへの明目者の名。
【六三】昭晰。明にすること。

爾して乃ち（六四）南端の豁達たるを開き、（六五）筍虡の輪豳たるを張り、（六六）華鐘杌として其れ高く懸り、（六七）悍獸仡として以て儷び陳り、洪剛の猛毅を體し、聲（六八）訇礮として其れ震ふが若し。爰に（六九）遐狄あり。（七〇）鐐質輪菌たり。高門の側堂に坐し、聖主の威神を彰す。（七一）芸若庭に充ち、槐楓宸に被り、綴るに（七二）萬年を以てし、綷ふるに（七三）紫榛を以てし、或は（七四）嘉名を以て寵を取り、或は美材を以て珍とせらる。實を（七五）商秋に結び、華を青春に敷き、（七六）藹藹萋萋、（七七）馥馥芬芬たり。爾して其結構は則ち（七八）脩梁彩制あり。下は（七九）褰上は奇、（八〇）桁梧複疊して、勢合ひ形離れ、（八一）絶たること（八二）宛虹の如く、赫たること奔螭の如く、南は（八三）陽榮に岠り、北は（八四）幽崖に極る。任重くして道遠く、厥庸孔だ多し。是に於て（八五）髹彤の（八六）繡桷を列ね、（八七）琬琰の

【六四】南端。南の正門。
【六五】筍虡。鐘を懸くる架。輪豳は其形なり。
【六六】華鐘。華飾を加へたる鐘。杌は高き貌。
【六七】悍獸。猛獸なり、其形を鐘架の足に刻むなり。仡は勇壯なる貌。
【六八】訇礮。雷聲なり。
【六九】遐狄。長狄なり、古の長人なり、銀を以て之を鑄る。
【七〇】鐐質。銀の上等を鐐といふ。輪菌は屈曲の貌。
【七一】芸若。香草の名。
【七二】萬年。木の名。名の善きに取る。
【七三】紫榛。木の名。材の善きに取る。
【七四】嘉名。名のよきこと。
【七五】商秋。秋なり。
【七六】藹藹萋萋。盛なる貌。
【七七】馥馥芬芬。香氣の貌。
【七八】脩梁。長きウツバリ。彩制は彩色法なり。
【七九】褰。あがること。
【八〇】桁梧。桁は梁上に施す材、梧は柱なり。
【八一】絶。赤きこと。
【八二】宛虹。宛は屈なり、曲れる虹。
【八三】陽榮。陽は南、榮は重簷。
【八四】幽崖。北邊なり。崖は音ギ、叶韻。
【八五】髹彤。朱塗なり。
【八六】繡桷。美しきタルキ。
【八七】琬琰。玉なり。

（八八）文璫を垂れ、（八九）蝹たること神龍の登降するが若く、灼たること明月の光を流すが若し。爰に（九〇）禁楄あり（九一）勒分翼張し、承くるに（九二）陽馬を以てし、接するに圓方を以てし、（九三）斑間白を賦き、疎密章あり。（九四）飛柳鳥のごとく踊り、（九五）雙轅を是れ荷ひ、險に赴き虛を凌ぎ、（九六）獵捷として相和し、（九七）皎皎たる（九八）白間、（九九）離離たる（一〇〇）列錢あり。晃光内を照し、流景外に烻り、烈たること（一〇一）鉤星の漢に在るが若く、渙たること（一〇二）雲梁の天を承くるが若し。（一〇三）騧徙增錯し、（一〇四）轉縣郛を成し、（一〇五）茄蔤倒に植ゑ、（一〇六）芙蕖を吐被し、繚らすに（一〇七）藻井を以てし、編むに（一〇八）綷疏を以てし、紅葩（一〇九）鞞韘として（一一〇）丹綺離婁たり。（一一一）菡萏赩翕として（一一二）纖縟紛敷し、繁

【八八】文璫。美しき椽頭。
【八九】蝹。龍の貌。
【九〇】禁楄。短椽なり。
【九一】勒分翼張。分布すること。
【九二】陽馬。屋の四角に出で短柱をうくるもの。
【九三】斑間。まだらなる間。
【九四】飛柳。陽馬なり。
【九五】雙轅。柱を受くる木。
【九六】獵捷。相接する貌。
【九七】皎皎。白き貌。
【九八】白間。窓なり。白を以て之を塗る。
【九九】離離。連る貌。
【一〇〇】列錢。金釭、カナグなり。
【一〇一】鉤星。星の名。漢は河漢、アマノガハなり。
【一〇二】雲梁。雲を以て作れる梁。
【一〇三】騧徙增錯。騧は蝸なり、衆木の集合すること蝸牛の徙りて相錯雜するが如きをいふ。
【一〇四】轉縣。木の廻旋して相連ること。郭の城をめぐるが如きをいふ。郛は郭なり。
【一〇五】茄蔤。蓮莖を茄といひ、其本を蘦といふ。
【一〇六】芙蕖。蓮なり。
【一〇七】藻井。水藻を畫きたる天井。
【一〇八】綷疏。五彩を刻鏤の中に繪くをいふ。
【一〇九】鞞韘。花の相次ぐ貌。
【一一〇】丹綺。赤く美しきこと。離婁は色の分布する貌。
【一一一】菡萏。蓮花なり。赩翕は色の美しきこと。
【一一二】纖縟紛敷。彩色の亂れ布く貌。

飾巧麗、勝げて書すべからず。

【大意】　乃ち南門の廣濶なるを開き、猛獸の形を刻みたる鐘虡を設け、ここに大鐘を懸く。其聲殷殷として雷の如し。門側の堂中には銀を以て鑄たる長人を置き、以て帝王の威神に象る。又種種の草木を庭中に植ゑ、或は名の美なるを以て重んぜられ、或は材の美なるを以て珍とせらる。皆春には花を開き秋には實を結び、郁郁萋萋として繁茂す。殿宇の結構を觀れば、長梁に彩色を施し、縱横に重疊し、或は合ひ或は離れ、虹の如く龍の如く、南簷より北簷に達す。所謂任重くして道遠きものにして、其功用甚だ大なりと謂ふべし。柄は塗るに朱を以てし、瑞は飾るに玉を以てし、神龍の登降するが如く、明月の輝くが如し。短椽分布し陽馬之を承け、連接するもの或は圓、或は方、斑白相間り、疎密各、文章あり。窓間は塗るに白を以てし、列錢之を點綴し、日光室中を照して、綵色外に流出し、烈然として光明なること鉤星の銀漢の中に在るが如く、雲梁の天を承くるが如し。衆木を合せて上に天井を作り、その文章參差として或は蝸の徙りて錯雜するが如く、外郭の繞るが如し。中に蓮花を刻み、彩色亂れ布き、其の巧妙なること盡く記載すべからず。

【一三】蘭楯。木蘭のマスガタ。
【一四】簟敷。衆木の集れる貌。
矩設は規矩に順つて設くること。

交結し、(一一七)金楹齊しく列りて　(一一八)玉寫跋を承け、(一一九)青瑣銀鋪、是を　(一二〇)閨闥となす。(一二一)雙枚既に脩く、(一二二)重桴乃ち飾り、(一二三)櫍栭邊を緣り、四極を周流し、侯衞の　(一二四)班、藩服の職あり。(一二五)溫房その東序を承け、(一二六)涼室その西偏に處り、(一二七)建陽を開けば則ち　(一二八)朱炎豔しく、(一二九)金光を啓けば則ち清風臻る。故に冬も淒寒ならず、夏も炎燀なし。(一三〇)鈞調中適にして以て年を永うすべし。(一三一)墉垣磈基其光昭昭たり。周の制は白盛なるも、今や維れ　(一三二)縹なり。(一三三)落帶金釭、此れ焉に二等あり。(一三四)明珠翠羽往往にあり。先王の　(一三五)允塞を欽み。(一三六)重華の無爲を悅び、(一三七)共工に命じて　(一三八)繢を作らしめ、(一三九)五采の彰施を明にし、古昔を圖象して以て箴規に當て、

【一一七】金楹。曲短梁なり。各落は危俎の貌。
【一一八】欒栱。柱上の曲木、兩頭に櫨を受くるもの。夭蟜は高き貌。
【一一九】金楹。金を以て飾りし柱。
【一二〇】玉寫。玉の礎。跋は柱根なり。
【一二一】青瑣。窓なり、青を以て畫きて瑣文をなす。銀鋪は銀の金具なり。
【一二二】閨闥。小門なり。
【一二三】雙枚。屋内の重檐なり。
【一二四】重桴。重棟なり。
【一二五】櫍栭。簷に連る木の瓦を受くるもの。
【一二六】班。位次なり。
【一二七】溫房。殿の名。東序は東のヒサシ。
【一二八】涼室。殿の名。西偏は西のヒサシ。
【一二九】建陽。東門なり。
【一三〇】朱炎。日なり。
【一三一】金光。西門なり。
【一三二】鈞調。氣候の中和なること。
【一三三】墉垣。墻なり。磈は文石なり。
【一三四】縹。淺碧色なり。
【一三五】落帶。壁帶なり。金釭はカナグなり。
【一三六】明珠。明月の珠。翠羽は翡翠の羽。
【一三七】允塞。信實なり。書經に重華濬哲文明、溫恭允塞とあり。
【一三八】重華。舜なり。論語に無爲ニシテ治マル者ハ其レ舜カとあり。
【一三九】共工。工人なり。
【一四〇】繢。繪畫なり。
【一四一】五采。五色なり。彰施は明に五彩を施すなり。

(一四〇)椒房の列、是れ准へ是れ儀る。(一四一)虞姬の容止を觀て、治國の臣を佞つを知り、(一四二)姜后の珮を解くを見て、前世の遵ふ所を寤り、(一四三)鍾離の(一四四)讜言を賢とし、(一四五)楚樊の身を退けるを懿とし、(一四六)班妾の輦を辭せるを嘉し、(一四七)孟母の隣を擇べるを偉とす。故に將に智を廣めんとすれば、必ず先づ多く聞く。多く聞けば多く雜る。多く雜れば眞を眩す。眩はざるは焉にか在る。人を擇ぶに在り。故に將に德を立てんとすれば、必ず先づ仁に近づく。此禮の儳らざらんことを欲す。是を以て行道の先民を盡す。朝に觀夕に覽る。何ぞ(一四八)紳に書せんや。

【大意】蘭楯相重りて皆規矩に中り、短梁危く之を承け、金柱列りて玉礎之を支へ、青瑣銀鋪を以て閶闔の飾とす。重櫨既に長く外に達し、重棟以て彩飾を施し、櫨枅四極を周繞して之を徧くし、諸侯の班秩、五服の以て王職を守るが如し。溫房殿は其東に在り。涼室殿は其西に在り。東門を開けば日光豔はしく、西門を開けば淸風至る。故に冬も溫房に居れば凄寒ならず。夏も涼室に居れば炎氣なし。氣候均適にして以て長年を保つべし。墻は文石を以て基となし、其光昭昭然たり。周は白墻を以て盛となせるも、今や淺碧を以てし、一は飾るに明珠を以てし、一は飾るに翠羽を以てす。帝舜允塞無爲の治を慕ひ、工人に命じて其像を畫かしめ、其他古昔の明君賢哲の像を畫かしめ、以て君王の規箴となし、皇后の室も亦之に准ず。乃ち虞姬の容姿を觀ては、國を治むるに賢臣を要するを知り、姜后の珮を解けるを見ては、前代の遵法する所を寤り、鍾離の直言して君を諫めたるを嘉し之に倣はんとす。夫れ其智を廣めんとすれば、多く古今の事を聞知せざるべからず。多く聞けば混雜して其眞を惑はし易し。惑なからしめんには賢人を擇ぶを要す。故に德を立てんとする者は仁賢の士に近づく。上下の禮違はざらんことを欲せば、上先づ其道を行ひ、民に先だつに在り。今朝夕其圖畫を觀覽して、以て鑑となすに足る。何ぞ紳に書するを要せんや。

若し乃ち(一四九)階除連延として、(一五〇)蕭曼雲征し、

【一四〇】椒房。皇后の室。
【一四一】虞姬。齊の威王の妃なり、威王位に卽いて九年にして國治まらず、姬乃ち王に勸め讒臣を誅し賢臣を用ひしむ、國大に治まる。佞、一本に俟に作る。今之に從ふ。
【一四二】姜后。周の宣王の后なり、宣王嘗ておそく起く、姜后乃ち簪珥を脫し罪を永巷に待ち、王に言はしめて曰く、妾不才にして妾の淫心見はれ、君王をして禮を失ひておそく朝せしむと。宣王是より早起す。
【一四三】鍾離。鍾離春は齊の無鹽邑の女なり、容貌極めて醜なり、宣王に見えて直諫す、宣王因つて之を夫人となす。
【一四四】讜言。直言なり。
【一四五】楚樊。樊姬は楚の莊王の夫人なり、楚の相虞丘子の無能を指摘し虞丘子をして位を退かしむ。
【一四六】班妾。班婕妤なり、漢の成帝班婕妤と輦を同うせんと欲す、婕妤辭して曰く三代の末主、乃ち嬖女あり、今輦を同うせんと欲するは之に近似するなきを得んやと。
【一四七】孟母。孟子の母。
【一四八】紳。大帶なり、紳に書すとは大帶に記し識きて忘れぬやうにすること。

【一四九】階除。階段なり。連延は〻長き貌。

(一五一)檻檻邛に張りて、(一五二)鉤錯矩成し、(一五三)楯は騰蛇に類し、(一五四)楹は瓊英に似、蟠の蟠れるが如く、虬の停れるが如し。(一五五)玄軒交り登り、光藻昭明なり。(一五六)騶虞獻を承け、(一五七)素質仁形なり。天瑞の(一五八)休顯を彰し、遠戎の來庭を照にす。(一五九)陰堂北に承け、(一六〇)方軒九戸あり。(一六一)右个清宴、其宇を西東にし、連ぬるに(一六二)永寧、安昌、臨圃を以てし、遂に(一六三)百子に及ぶ。(一六四)後宮の處る攸なり。之に處るは斯れ何ぞ。(一六五)窈窕たる淑女、思に(一六六)徽音を(一六七)齊み、聿に多祜を求む。其祜伊れ何ぞ。爾の子孫に宜しく、克く明に克く哲に、克く聰に克く敏なり。永く老い難きを錫ひ、(一六八)兆民賴る。南には則ち(一六九)承光の前殿、賦政の宮あり。賢を納れ能を用ひ、道を詢ひ中を求め、宇宙を(一七〇)疆理し、國風を(一七一)甄陶し、雲

【一五〇】蠻曼。高遠なり。
【一五一】檻檻。欄干なり。
【一五二】鉤錯矩成。鉤は曲れるを正す具、矩は方を正す具。錯は治なり、鉤を以て治め矩を以て成すこと。
【一五三】楯。欄横なり。
【一五四】楹。楔なり。瓊英は玉英なり。
【一五五】玄軒。軒は楯下の板なり、黒漆を以て塗る、故に玄といふ。
【一五六】騶虞。仁獣の名、白虎にして黒文なり。獻は軒なり。
【一五七】素質。地の白きこと。
【一五八】休顯。休は美なり。
【一五九】陰堂。北にあり故に陰といふ。
【一六〇】方軒。ならべる窓。
【一六一】右个。西廂なり。清宴は殿の名。
【一六二】永寧。以下皆殿の名。
【一六三】百子。殿の名。
【一六四】後宮。宮女をいふ。
【一六五】窈窕。美しき貌。
【一六六】徽音。徽は美なり、善なり、美譽をいふ。詩經に大姒徽音ヲ嗣グとあり。
【一六七】齊。つつしむこと。
【一六八】兆民。衆民なり。
【一六九】承光。以下宮殿の名。
【一七〇】疆理。境界を定むること。
【一七一】甄陶。土を以て陶器を作る如く、作り成すこと。

行き雨施し、品物咸く融る。其西には則ち(一七二)左城右平、講肄の場あり。(一七三)二六對ひ陳り、殿翼相當り、僻脫して便を承く。蓋し(一七四)戎兵に象り、察解して言に歸る。諸を政刑に譬へ、將に以て令を行はんとす。豈惟情を娯ましむるのみならんや。鎭ずるに崇臺を以てす。是を永始といふ。複閣(一七五)重闈あり。(一七六)猖狂を是れ俟つ。(一七七)京庾の儲、物として有らざるはなく、不虞の戒是に於て取る。

【大意】殿階長く續き、高峻にして雲中に行くが如く、欄干あり大に之を張設し、其結構皆規矩に合ひ、其形は騰蛇の如く、其光は玉英の如く、龍蟠の蟠屈するが如し。騶虞楯板を受け、白質仁形にして、天瑞の徵をあらはし、遠夷の來朝を示せり。陰堂には九戸あり。右个清宴其東西に列し、永寧、安昌、臨圃等の宮之に連り、遂に百子宮に及ぶ。此の宮は宮人の居る處にして、窈窕たる淑女あり。美譽を齊みて以て多福を求む。其子孫聰明敏哲にして、天之に長壽を賜ひ、天下を統御せしむ。衆民其惠を受く。南には承光の前殿、賦政の宮あり。賢能を納用し、大中至正の道を求め、天下を疆理し德化を成し、恩惠の下に及ぶこと雲雨の萬物を沾すが如し。其西には鼗鞠演武の堂あり。二六對陣

【一七二】左城右平。鼗鞠の屋の名。城は階齒なり。殿階九級あり左右に中分し、左には齒あり人之を行き、右は則ち之を平にす。講肄は武を習ふこと。
【一七三】二六。十二人づつ列ぶなり。殿はシンがり。翼は左右に張れる隊。
【一七四】戎兵。軍兵なり。
【一七五】重闈。闈は門なり。
【一七六】猖狂。賊なり。
【一七七】京庾。大倉なり。

して殿と翼と相當り、相避脫して敵人の便を承け、以て其勝を求め、其事もつぱら軍兵の事に象り、勝否を考察して相解きて歸る。此れ實に政刑に譬ふ。ただに戲樂の爲にあらざるなり。高臺あり其の名を永始といふ。重門を設けて盜賊の侵入に備ふ。大倉其中に在り。其の貯蓄する所は、物としてあらざるはなく、不測の事あれば、皆供給をこに仰ぐ。

爾して乃ち【一七八】凌雲の層盤を建て、【一七九】虞淵の靈沼を浚くし、清露【一八〇】瀼瀼として、【一八一】涤水浩浩たり。樹うるに嘉木を以てし、植うるに芳草を以てし、【一八二】悠悠たる玄魚、【一八三】雝雝たる白鳥、沈浮翱翔し、我が【一八四】皇道を樂む。若し乃ち虬龍灌注し、【一八五】溝洫交流し、陸には殿館を設け、水には輕舟を方べ、篁には【一八六】鵾鷺を棲ましめ、瀨には【一八七】鰋鮪を戲れしめ、豐なること淮海に侔しく、富めること山丘より賑み、叢集委積、焉んぞ殫く籌るべけんや。【一八八】咸池の壯觀と雖も、夫れ何ぞ以て比儗するに足らんや。是に於て【一八九】碣するに【一九〇】高昌の崇觀を以てし、表するに【一九一】建城の峻廬

【一七八】凌雲。層盤の名。層盤とは高臺を作り其上に盤を置き以て天上の甘露を受くる也。
【一七九】虞淵。靈沼の名。
【一八〇】瀼瀼。露の濃き貌。
【一八一】涤水。清き水。浩浩は大水の貌。
【一八二】悠悠。魚の浮ぶ貌。
【一八三】雝雝。白き貌。
【一八四】皇道。大道なり、自然の道。
【一八五】溝洫。溝渠なり。
【一八六】鵾鷺。鳥の名。
【一八七】鰋鮪。魚の名。
【一八八】咸池。星の名、五穀を主る。
【一八九】碣。一本揭に作る、今之に從ふ、揭ば特り高き貌。
【一九〇】崇觀。高き宮。高昌は其名。
【一九一】峻廬。高き宮。建城は其名。

を以てし、【一九二】岩嶤として岑のごとく立ち、【一九三】崔嵬として繒のごとく居り、飛閣雲を干し、浮階虛に乘る。遙に【一九四】九野を目、遠く長圖を覽、俯して【一九五】三市を看るに、孰かあり誰かなからん。農人の【一九六】耘耔を觀、俗化の誠僞を察し、難を亮にし、惟れ年を饗くるの【一九七】豐寡なる、無逸の歎く所を思ふ。物の衆に感じて思深く、因つて高きに居て危きを慮り、【一九八】天德の易からざるを惟ひ、世俗の知り難きを懼る。器械の【一九九】良窳を觀、【二〇〇】貴賤の在る所を瞻て、政刑の【二〇一】夷陂を悟る。亦風を省み教を助くる所以なり。豈惟【二〇二】盤樂して侈靡を崇ぶのみならんや。

【大意】又凌雲臺を建て、層盤を以て甘露の瀼瀼たるを取り、また虞淵の沼を穿ち、涤水常に湛へて浩浩たり。其側には嘉木芳草を植う。魚鳥浮沈翱翔して各天性を自得し、我が大道を樂む。又虬龍の形を刻み、水を吐き注いで以て溝を成し、宮中を交流せしむ。陸には殿館あり、水には輕舟を竝べ、魚鳥萬物の豐富なること淮海に齊しく、盡く數ふべからず。咸池の豐と雖も、何ぞ此に匹敵するを得んや。又高昌、建城の二

【一九二】岩嶤。危高の貌。
【一九三】崔嵬。危高の貌。
【一九四】九野。八方及び中央の野原。
【一九五】三市。朝晝夕の市。
【一九六】耘耔。耘はクサギル、耔はツチカフ。
【一九七】豐寡。多少なり。書經無逸篇に昔殷王中宗、國ヲ享クル事七十有五年、高宗ノ國ヲ享クル事五十有九年、コレヨリ厥後立テル王ハ生レテ則チ逸シ、稼穡ノ艱難ヲ知ラズ、或ハ五六年、或ハ四三年ノミとあり。
【一九八】天德。君位をいふ。
【一九九】良窳。良否なり。
【二〇〇】貴賤。物の價の高下也。
【二〇一】夷陂。夷は平、陂は險。
【二〇二】盤樂。盤も樂なり。

觀あり。高峻にして山の如く、雲を犯し空に聳ゆ。此觀に登りて、九野を望み三市を眺むれば、貨物の豐富なること、物として之れなきはなし。農夫の勞作するを望みては、稼穡の艱苦を知り、年を享くるの多少は、無逸の歎ずる所の如くなるを寤り、市中の物資多きを見ては、惻然として自ら戒め、安きに居て危きを忘れず。君たるの易からざるを知り、人を知るの難きを懼る。器用の良否を觀、風俗の信僞を察し、時物の貴賤を見ては、政刑の善惡を見て之を正す。かくの如く其の見る所皆以て風敎の助となすを得。豈徒に游樂して奢侈を尙ぶのみならんや。

屯方署を列すること三十有二、星居宿陳し、綺錯鱗比す。辛壬癸甲之が名秩をなし、房室齊均にして堂庭一の如く、此を出でて彼に入り、反らんと欲して術を忘る。惟れ工匠の多端なる、固に萬變にして窮らず、物難きとして知らざるはなく、乃ち造化と隆を比べ、天地に警うし以て基を開き、列宿に竝んで制を作し、制細なるとして景に協はざるはなく、作微なるとして水泉に違はざるはなし。故に其の增構すること積めるが如く、木を植うること林の如く、區連り域絕え、葉のごとく比び枝のごとく分れ、離れ背き別れ趣き、縱橫蹤延して、各注く攸あり。公輸も其の規矩を駢田として脊附き、荒て、匠石も其の斲る所を知らず。既に巧を規摹に窮む、何ぞ彩章の未だ殫さざらん。爾して乃ち文るに朱綠を以てし、飾るに碧丹を以てし、黝ずるに銀黃を以てし、爍るに琅玕を以てし、光明熠燿として、文彩璘班たり。淸風萃りて響を成し、朝日曜いて鮮を增し、崑崙の靈宮と雖も、將た何を以てか旃より侈らん。

【大意】屯營三十二所あり。星の陳るが如く、鱗の比ぶに似たり。甲乙を以て名次となし、房室門墻皆一の如し。故に此を出て彼に入り、舊所に歸らんとするも、迷ひて其道を忘る。匠人の奇巧、萬變して窮らず。物難きとして之を成さざるはなく、實に造化と其巧を比す。天地星宿にり或は絕え、向背各異れるも、駢田として相附著し、縱橫に蹤延するも、各合ふ所あり。公輸匠則りて構造し、其の構造一一規景水泉に合はざるはなし。院墻或は連石の如き良工も、規矩を投じて其妙に驚くばかりなり。既に規摹の妙を窮む、亦何ぞ彩飾を盡さざらんや。或は飾るに朱綠を以てし、或は飾るに丹碧を以てし、金銀を黝じ、美玉を鏤め、光彩爛然

【二三】屯方。屯營なり。署は役所。
【二四】星居宿陳。星の如くならぶ。
【二五】綺錯。アヤギヌの如く入り交ること。鱗比は鱗の如くならぶこと。
【二六】辛壬癸甲。甲乙丙丁といふが如し。
【二七】名秩。名位なり。
【二八】房室。屋室なり。
【二九】多端。技巧の多きこと。
【三〇】列宿。列星なり。
【三一】規景。日景をはかりて方位を定むること。
【三二】水泉。水準なり、地面の平をはかるもの。違ハザルは一本に違フアルに作る。從ふべし。

【二三】駢田。多きこと。
【二四】公輸。昔の名工の名。
【二五】匠石。昔の名工の名。
【二六】銀黃。黃は黃金なり。
【二七】琅玕。美玉なり。
【二八】熠燿。火光なり。
【二九】璘班。文彩の貌。
【三〇】崑崙。山の名、此山に仙人の宮あり。

として目を奪ひ、風來れば聲を成し、日照せば光を增す。崑崙山上の仙宮と雖も、何を以て之に過ぎんや。

規矩既に天地に應じ、擧措又四時に順ふ。是を以て六合元に亨り、(三一)九有雍熙にして、家は(三二)克讓の風を懷き、人は(三三)康哉の詩を詠じ、(三四)優遊して以て自得せざるはなし。故に(三五)淡泊にして思ふ所なし。(三六)列辟を歷て功を論ずるに、今日の至治なし。彼の吳蜀の湮滅せんこと、固に足を翹げて之を待つべし。然れども聖上猶ほ孜孜として忒ふことなく、天下の自ら悟る所以を求め、忠正の士を招き、公直の路を開き、周公の(三七)昔戒を想ひ、(三八)咎繇の典謨を慕ひ、無用の官を除き、(三九)生事の故を省き、(三〇)流遁の繁禮を絶ち、人情を(三一)太素に反す。故に能く(三二)岐陽の鳴鳳を翔らしめ、(三三)虞氏の白環を納れ、蒼龍陂塘に覿え、(三四)龜書河源に出で、(三五)醴泉池圃に涌き、(三六)靈芝丘園に生ず。神靈の(三七)睨祐を摠べ、(三八)華夏の至歡を集め、方に三皇を四にして、五帝を六にす。曾ち何ぞ周夏の言ふに足らん。

【大意】法度既に天地に應じ、施政よく時宜に合ふ。是を以て天下大に治まり、九州和平にして、家家克讓の風あり、人人康哉の詩を誦し、優遊自得し、淡泊にして憂なし。されば古聖王を擧げ、來りて功德を論ずるも、今日の至治ある者なし。我が魏の德既に斯の如し。吳蜀の滅亡せんこと期して待つべし。然も我が明帝、孜孜として勤苦し、差失あるなく、忠正公直の人を求め、以て自ら心に開悟せんとし、周公の戒を想ひ、各繇の謨を慕ひ、無用の官を廢し、事端を開くべき謀圖を除き、積習の繁禮を絶ち、人情を素樸ならしむ。故に鳳凰岐山に鳴き、西王母白環を獻じ、蒼龍池塘に現はれ、河圖河源に出で、醴泉涌き靈芝生ずるの瑞あり。神靈の惠福を總べ集め、中夏に在りて以て至歡をなし、德を三皇五帝に齊くす。かの周の文王、夏の禹王の如きは固より比すべくもあらざるなり。

【三一】九有。九州なり。雍熙は和平なり。
【三二】克讓。よく謙讓なること。
【三三】康哉。書經咎繇の歌に曰く、元首明ナルカナ、股肱良キカナ、庶事康キカナと。
【三四】優遊。自ら安止すること。
【三五】淡泊。無爲なること。
【三六】列辟。辟は君なり。歷代の天子。
【三七】昔戒。書經の無逸篇を指す。
【三八】咎繇。皐陶に同じ、堯の賢臣なり。典謨は謀圖なり。書經に皐陶謨の篇あり。
【三九】生事。事端を惹起すること。故は謀なり。
【三〇】流遁。因循といふが如し。故は素。素樸なり。
【三一】太素。岐陽。岐山の南。國語に周ノ興ルヤ、鸑鷟岐山ニ鳴クとあり。
【三二】虞氏。舜なり。世本に舜ノ時、西王母白環及ビ琱弋獻ズとあり。
【三三】龜書。卽ち河圖なり。
【三四】醴泉。瑞泉なり。

江海

海の賦

(一)木玄虛

【一】木玄虛。木華、字は玄虛、晉の廣川の人なり。

昔在(一)帝嬀、唐に(二)臣たるの代、(四)天綱浡潏として(五)凋をなし瘵をなし、洪濤(六)瀾汗として萬里際なく、長波(七)潞滙として(八)八裔に(九)迆延す。是に於てか禹や乃ち臨崖の阜陸を鏟り、(一〇)陂潢を決して相浚ぎ、(一一)龍門の(一二)岝嶺たるを啓き、陵巒を壅りて(一三)嶄鑿し、羣山既に略し、百川(一四)潛渫し、(一五)泱漭澹泞、騰傾して勢に赴く。江河既に導き、萬穴倶に流る。五嶽を(一六)掎拔し、九州を竭涸し、(一七)瀝滴滲淫、(一八)薈蔚たる雲霧あり。(一九)涓流泱瀼として、來注せざるはなし。於廓なる靈海、長く(二〇)委輸をなす。其の廣となる、其の怪となる、宜なり其の大となるや。

【大意】昔舜の堯に臣たりし時、洪水横流して八方に溢れ、天下の大害をなせり。禹乃ち水崖の地を鏟り、積水を海に流通せしめ、百川皆安理して通流し、騰湧傾注して下勢に赴き、五嶽拔き出せるが如く、九州皆浸水を免れ、滴瀝たる小水と雖も、皆來りて海に注がざるはなく、大

【一】帝嬀。舜をいふ。唐は堯の姓。
【三】臣。李善本巨に作る。
【四】天綱。水の廣大、天の綱紀を爲すをいふ、洪水をいふ。浡潏は急流の貌。
【五】凋、瘵。傷害をなすこと。
【六】瀾汗。大なる貌。
【七】潞滙。相重なる貌。
【八】八裔。八方といふが如し。
【九】迆延。相連るをいふ。
【一〇】陂潢。陂は蓄水なり。潢は雨潦なり。
【一一】龍門。山の名。
【一二】岝嶺。高き貌。
【一三】嶄鑿。掘ること。嶄は鏨に同じ。
【一四】潛渫。浚ひて深くすること。
【一五】泱漭。廣大なり。澹泞は澄深なり。
【一六】掎拔。拔き出すこと。
【一七】瀝滴滲淫。小水の貌。
【一八】薈蔚雲霧。津潤の氣也。
【一九】涓流。小流なり。泱瀼は流るる貌。
【二〇】委輸。流れ入ること。

海是に於て衆水來注の中心となる。其の廣大にして靈怪なる亦宜なり。爾して其の狀たるや、則乃ち(二一)浟渀瀲灩として、天を浮べて岸なく、(二二)沖瀜沆瀁、(二三)渺瀰湠漫として、波連山の如く、乍ち合ひ乍ち散じ、百川を(二四)噓噏し、(二五)淮漢を洗滌し、(二六)廣舄に襄陵し、(二七)漻蕩浩汗たり。若し乃ち(二八)大明轡を(二九)金樞の穴に攄り、(三〇)翔陽扶桑の津に(三一)逸駭すれば、(三二)彯沙礐石、島濱に(三三)蕩飀す。是に於て鼓怒し、溢浪揚浮し、更〻相觸搏し、沫を飛ばし濤を起し、狀天輪の(三四)膠戾して激轉するが如く、又地軸の挺拔して爭廻するに似たり。(三五)岑嶺飛騰して反覆し、五岳鼓舞して相磓ち、(三六)澗濆淪として(三七)滀漯し、(三八)鬱沏迭として(三九)隆頽し、(四〇)盤盪激して窟を成し(四一)澌澌傑と

【二一】浟渀瀲灩。流行して相連る貌。
【二二】沖瀜沆瀁。深廣の貌。
【二三】渺瀰湠漫。廣遠の貌。
【二四】噓噏。吐納といふが如し。潮起れば百川逆流し之を吐くが如く、潮落つれば之を吸ひ納るるが如し。
【二五】淮漢。川の名。淮水と漢水。
【二六】廣舄。舄は海岸の地をいふ。襄陵は越えのぼること。
【二七】漻蕩浩汗。廣大の貌。
【二八】大明。月なり。月に御者あり、故に轡を攄るといふ。
【二九】金樞。西方の月の沒する穴なり。
【三〇】翔陽。日なり。扶桑は日の出づる處。
【三一】逸駭。出づること疾きなり。
【三二】彯沙。飛ぶ砂なり。礐は石の聲なり。
【三三】蕩飀。飛びあがること。
【三四】膠戾。環旋の貌。
【三五】岑嶺。山なり。
【三六】澗濆淪。相糾亂する貌。
【三七】滀漯。聚ること。
【三八】鬱沏迭。盛に疾き貌。
【三九】隆頽。高くなり低くなること。
【四〇】盤盪激。渦卷くこと。
【四一】澌澌傑。高き波の立つこと。

して魁をなし、(四三)潤泊栢として(四四)迤颺し、(四五)磊砢匌として相豗ち、驚浪雷のごとく奔り、駭水迸り集り、開合解會して(四六)瀺灂濕濕たり。(四七)葩華踧踖、(四八)渨滯潏滀たり。若し乃ち(四九)霾曀潛れ銷え、振ふなく竦くなく、輕塵飛ばず、纖蘿動かざるも、猶ほ尙ほ(五〇)呀呷として、餘波獨り湧き、(五一)澎濞灪礦、(五二)礨磊として(五三)山壟のごとし。爾して其の(五四)枝岐潭淪、渤蕩して(五五)汜を成し、蠻に乖き夷を隔て、萬里に廻亙す。

【大意】其狀たるや流行瀲灩し、天と相接して際涯を見ず。洪波大濤連山の如く、忽ち合ひ忽ち散じ、百川を呑吐し、淮漢を吐納し、潮水陸に襄りて渺漫たり。若夫れ月の將に沒せんとする時日の初めて出でんとする時に於ては、風最も急疾にして、潮水を激動し、水波疾く涌き、蕩沙飛石島濱に相衝擊し、溢浪飛揚して空中に浮湧し、波濤相連りて輪環の旋りて絶えざるが如く、地軸の地を脫出して廻轉するが如く、五嶽の鼓舞して相觸激するが如く、起伏し特立し重疊し、開くが如くにして復た合し、散するが如くにして復た會す。昏氣消盡して疾風怒を息め、塵蘿動かざるに至るも、尙ほ餘波を揚げて動搖し、其高きこと山丘の如し。而して小浦水溢れて汜を成し、遠く萬里の蠻夷に及ぶ。

【四二】潤泊栢。小波の起ること。
【四三】迤颺。斜に起ること。
【四四】磊砢匌。大波の重疊すること。
【四五】瀺灂濕濕。開合する貌。
【四六】葩華。分散の貌。踧踖は蹙縮なり。
【四七】渨滯。沸く貌。潏滀は沸く聲なり。
【四八】霾曀。風吹きて土をふらすを霾といひ、陰りて風吹くを曀といふ。
【四九】呀呷。波の相呑吐する貌。
【五〇】澎濞。水の聲なり。灪礦は高峻の貌。
【五一】礨磊。平かならざる貌。
【五二】山壟。小丘なり。
【五三】枝岐。小浦なり。潭淪は溢れ流るること。渤蕩は湧き立つこと。
【五四】汜。水の分流すること。

若し乃ち(五五)偏荒速に告げ、王命急に宣すれば、(五六)駿を飛ばし楫を鼓し、海に汎び山を凌ぐ。是に於て勁風を候ち(五七)百尺を掲げ、(五八)長綃を維け(五九)帆席を挂け、濤を望んで遠く決れ、(六〇)悶然として鳥のごとく逝き、(六一)鵝たること驚鳧の侶を失へるが如く、(六二)倏たること六龍の擧く所の如し。一越(六三)三千、終朝ならずして屆る所に濟る。若し其れ(六四)穢を負ひ深に臨み、誓を虛うし祈を慠てば、則ち(六五)海童路を邀り、(六六)馬銜蹊に當るあり。(六七)天吳乍ち見えて(六八)髣髴たり。(六九)蜩像暫ち曉れて(七〇)閃屍たり。(七一)遘迕し、(七二)眇睒冶夷たり。帆を決り橦を摧き、(七三)戕風惡を起せば、(七四)廓如として靈變し、(七五)惚怳として幽冥なり。(七六)氣天霄に似て、(七七)霾翳として雲のごとく

【五五】偏荒。遠き邊地。
【五六】駿。駿馬なり。
【五七】百尺。帆檣をいふ。
【五八】長綃。長き帆綱。
【五九】帆席。帆なり、或は席を用ふ、故に帆席といふ。
【六〇】悶然。鳥の飛ぶ貌。
【六一】鵝。疾き貌。
【六二】倏。疾き貌。
【六三】三千。三千里なり。
【六四】穢。罪なり。
【六五】海童。海中の怪物。
【六六】馬銜。海中の怪物。其狀馬首一角にして龍形なりと。
【六七】天吳。海神なり。
【六八】髣髴。分明ならざる貌。
【六九】蜩像。海神なり。
【七〇】閃屍。疾く見ゆる貌。
【七一】遘迕。遇ひ犯すこと。
【七二】眇睒。視る貌。冶夷は妖媚の貌。
【七三】戕風。暴風なり。
【七四】廓如。急に開く貌。
【七五】惚怳。忽ちの間。
【七六】氣。海神の吐く所の氣。
【七七】霾翳。雲氣の暗き貌。

とく布き、(七八)靃昱たる絶電、百色(七九)妖露し、(八〇)呵嗽掩鬱(八一)矆睒度なく、飛澇相磢り激勢相沏り、崩雲のごとく屑雨のごとく、(八二)浤浤汨汨たり。(八三)跣踔湛灤、(八四)沸潰渝溢し、(八五)濯汧濩渭として雲を蕩し日を沃ふ。是に於て舟人漁子南に徂き東に極り、或は(八六)黿鼉の穴に(八七)屑沒し、或は(八八)岑嶽の峯に(八九)挂罥し、或は(九〇)裸人の國に(九一)掣掣洩洩し、或は(九二)黑齒の邦に(九三)汎汎悠悠し、或は乃ち萍のごとく流れて浮轉し、或は(九四)歸風に因りて以て自ら反る。徒に怪を觀るの駭多きを識り、乃ち歷る所の近遠を悟らず。

【大意】遠方の國、急ありて來り告げ、將に君命を宣せんとすれば、輕棹を鼓動し舟を海上に泛べ、駿馬を驅りて山を踰えざるべからず。此時に於て乃ち長風を伺ひ、百尺の檣を擧げ、綃を結び帆を張り、波濤を破りて去ること、飛鳥の友を失つて相求むるが如く、六龍の日車を牽いて走るが如く、三千里を一飛し、終朝ならずして期する處に達すべし。若し身に罪戾を負ひ祈誓を破るが如き者あらば、神怪道を要して、將に

【七八】靃昱。疾き貌。
【七九】妖露。妖をなして現はること。
【八〇】呵嗽掩鬱。光色を呑吐すること疾き貌。
【八一】矆睒。視ること。
【八二】浤浤汨汨。波浪の聲。
【八三】跣踔湛灤。波の進退して騰躍する貌。
【八四】沸潰渝溢。亂れ溢るること。
【八五】濯汧濩渭。衆波の聲。
【八六】黿鼉。大龜と大鼈。
【八七】屑沒。屑は碎なり。
【八八】岑嶽。山なり、山に小石多きを嶽といふ。
【八九】掛罥。掛ること。
【九〇】裸人。海外の國名。
【九一】掣掣洩洩。風に任する貌。
【九二】黑齒。海外の國名。
【九三】汎汎悠悠。流に隨ふ貌。
【九四】歸風。回風なり。

之を害せんとす。暴風一たび怒を發すれば、天地忽ち變じて幽暗なり。海神吐く所の氣天雲の如く、或は電光絶えて百色忽ち見ゆるが如く、人目を眩惑して節度なく、波浪飛灑して雲の崩るるが如く、雨の散ずるが如く、潰溢して雲を蕩し日を洗ふ。舟人乃ち東西に漂蕩し、或は龜鼈の穴に沒し、或は山上に吹き揚げられ、或は裸人黑齒の異國に漂泊せらる。幸にして死を免るる者は或は水萍の流に隨ふが如く、廻風に因つて自ら歸る。然も徒に神怪の多きに驚愕し、魂氣散失して、歷る所の遠近を知らず。

爾して其大量なるや、則ち南のかた(九五)朱崖を澰し、北のかた(九六)天墟に灑ぎ、東のかた(九七)析木に演び、西のかた(九八)青徐に薄り、經途(九九)瀴溟萬萬有餘なり。雲霓を吐き龍魚を含み、(一〇〇)鯤鱗を隱し(一〇一)靈居を潛す。豈徒(一〇二)太顛の寶貝と隨侯の明珠とを積むのみならんや。將た世の收むる所の者常に聞き、未だ名あらざる者無きが若し。且つ(一〇三)希世の聞く所、惡んぞ其名を審にせん。故に其色を(一〇四)仿像し、其形を(一〇五)靉靆すべし。

【大意】而して其の大なるや、南は炎州に及び、北は北陸に及び、東は析木に及び、西は青徐に及

【九五】朱崖。炎州なり。
【九六】天墟。北陸なり。
【九七】析木。天津海をいふ。
【九八】青徐。二州の名。
【九九】瀴溟。濶き貌。
【一〇〇】鯤鱗。大魚の名。
【一〇一】靈居。衆仙の居る處。蓬萊、方丈、瀛洲の如きをいふ。
【一〇二】太顛。人名。琴操に、紂文王ヲ羑里ニ徙シ、日ヲ擇ンデ之ヲ殺サント欲ス、是ニ於テ太顛、散宜生、南宮适ノ屬、水中ノ大貝ヲ得テ以テ紂ニ獻ズとあり。
【一〇三】希世。世に稀なること。
【一〇四】仿像。審にせざること。
【一〇五】靉靆。審にせざること。

び、其濶きこと億萬里なり。其間雲霓を吐き、龍魚を呑み、仙山を藏す。ただに太顚の寶貝と隨侯の珠とを藏するのみならず。世の收用する所の者は、常に其名を聞き、其の或は未だ名あらざる者は本より無きが如し。希世の聞く所の寶、何ぞ能く其名を詳にせんや。

爾して其水府の內、極深の庭には、則ち崇島巨鼇あり。(一〇六)峌峴孤亭にして、洪波を擘き(一〇七)太清を指し、磐石を竭き、(一〇八)百靈を栖ましめ、(一〇九)凱風を颺げて南に逝き、(一一〇)廣莫至りて北に征く。其垠には則ち(一一一)天琛水怪、鮫人の室あり。(一一二)瑕石詭暉あり、鱗甲(一一三)異質あり。若し乃ち雲錦文を(一一四)沙汭の際に散じ、(一一五)綾羅光を(一一六)螺蚌の節に被り、繁采華を揚げ、萬色鮮を隱し、陽冰冶えず、陰火潛み然え、(一一七)熺炭重ねて燔え、(一一八)九泉を吹烱し、朱熾綠煙、(一一九)瞜眇蟬蜎たり。魚には則ち(一二〇)橫海の鯨、(一二一)突杌として孤り遊び、巖嶽を戛り高濤に偃し、鱗甲を茹ひ(一二二)龍舟を呑み、波を噏へば則ち洪連(一二三)踧蹜たり、澇を

【一〇六】峌峴孤亭。高き貌。
【一〇七】太清。天なり。
【一〇八】百靈。衆仙なり。
【一〇九】凱風。南風なり。
【一一〇】廣莫。北風なり。
【一一一】天琛。自然の寶なり。水怪は奇石なり。鮫人は人魚なり。
【一一二】瑕石。怪石なり。詭暉は奇妙なる光。
【一一三】異質。異體なり。
【一一四】沙汭。水濱の地。
【一一五】綾羅。アヤギヌなり。
【一一六】螺蚌。蛤なり。
【一一七】熺炭。熾なる炭。
【一一八】九泉。地に九重あり、故に地下を九泉といふ。
【一一九】瞜眇蟬蜎。煙の飛騰する貌。
【一二〇】橫海。海を塞ぐこと。
【一二一】突杌。高き貌。
【一二二】龍舟。大舟なり。
【一二三】踧蹜。聚る貌。

吹けば則ち百川倒に流る。或は乃ち(一二四)窮波に(一二五)蹭嶝し、陸に(一二六)鹽田に死すれば、巨鱗雲を挿み、(一二七)鬐鬣天を刺し、顱骨嶽を成し、流膏淵をなす。若し乃ち(一二八)巖坻の隈、沙石の嶔には、(一二九)毛翼鷇を產み、卵を剖いて禽を成し、鳧雛(一三〇)離褷として、鶴子淋滲たり。羣がり飛び侶がり浴し、廣きに戲れ深きに浮び、(一三一)翔霧連軒として、(一三二)洩洩淫淫たり。翻動して雷を成し(一三三)擾翰して林をなし、更〻相叫嘯し、(一三四)詭色殊音あり。

【大意】其の極深の處には、蓬萊、方丈、瀛洲の如き巨島あり。大鼈之を負ひて浮び、大浪を裂いて出で、高く天を衝き、上に磐石を戴き神仙を住ましむ。大鼈力極めて勇壯、常に此山を負ひ、風に逆ひて行く。故に南風起れば南に行き、北風至れば北に向ふ。其岸涯には奇石珍寶鮫人の類あり。或は奇光を放ち、或は奇狀を呈し、文彩を散ずること雲錦の如く、螺蚌曲節の文、綾羅の如し、其光氷の如く火の如し。然も陽處に在れども消えず、陰處に在るも能く燃ゆ。魚には鯨あり、海中に在り。突兀として高く聳え、或は巖石を刮り、或は波間に潛み、魚龍を食ひ大舟を呑み、波を吸へば則ち

【一二四】窮波。淺波なり。
【一二五】蹭嶝。勢を失ふ貌。
【一二六】鹽田。海邊なり。
【一二七】鬐鬣。ヒレなり。
【一二八】巖坻。坻は岸なり。
【一二九】毛翼。鳥類なり。
【一三〇】離褷、淋滲。毛羽の初めて生ずる貌。
【一三一】翔霧。霧一本に鶩に作る、今之に從ふ。鶩は飛ぶこと。連軒は飛ぶ貌。
【一三二】洩洩淫淫。飛翔の貌。
【一三三】擾翰。亂れ飛ぶこと。
【一三四】詭色。奇異なる色。殊音は奇異なる聲。

洪波進まず。浪を吹けば則ら百川逆流す。其の一たび岸上に死するや、大鱗天に挿み、鬐鬣天を刺し、頭骨山を成し、流るる脂淵を成す。沙岸の下には鳥類雛を產み、卵を剖きて禽を成し、鳧雛鶴子或は廣處に戲れ、或は深處に浮び、飛翔の聲雷の如く、羽翼亂れて林を成し、各奇色異聲あり。

若し乃ち(三四)三光既に淸く、天地(三五)融朗なれば、(三六)陽侯に汎ばず。(三七)蹻に乘りて絕り往き、(三八)安期を蓬萊に覿み、(三九)喬山の帝像を見る。羣仙(四〇)縹眇として玉を淸涯に餐ひ、(四一)阜鄕の(四二)留舄を履み、羽翮の(四三)參纚たるを被り、天沼に翔り、窮溟に戲れ、有形を無欲に甄し、永く悠悠として以て長生す。且つ其の器たるや、乾の奥を包ね、坤の區を括る。惟れ神是に宅り、亦祇是に廬る。何の奇か有らざらん、何の怪か儲へざらん。茫茫たる積流、形を含んで內虛し。曠なるかな(四四)坎德。卑うして以て自ら居り、往を弘め來を納れ、以て宗し以て都し、品物類生し、何か有り何か無からん。

【大意】日月光を增し、天地通明なれば、風波に汎ばず、龍氣に乘りて絕り行き、仙人を蓬萊山に見、復た喬山に往きて黃帝の像を見る。羣仙玉漿を淸水の畔に食ひ、安期の遺履を穿ち、羽衣を

【三五】三光。日月星なり。
【三六】融朗。通明なり。
【三七】陽侯。波神なり。
【三八】蹻。龍氣なり。
【三九】安期。仙人の名。
【四〇】喬山。黃帝の陵なり。
【四一】縹眇。遠く視る貌。
【四二】阜鄕。安期生は阜鄕の人なり。列仙傳に安期生秦ノ始皇ト與ニ語ル、始皇金數千萬チ賜フ、阜鄕ニ於テ皆置キ去ル、書チ留メ赤烏一量チ以テ報トナスとあり。
【四三】留舄。後に殘ししクツ。
【四四】參纚。羽の垂るる貌。
【四五】坎德。坎は水なり。

被り、大海の中に戲れ飛び、形體ありて情慾なく、悠悠として長生し、その器宇廣大にして、能く天地の深要を包括す。神祇また此に居り、一物として儲へざるはなし。ああ此の大海小流を積んで大を成し、百物を含み納れて內虛しく、常に謙虛にして低きに居り、潮起れば則ち出で、潮退けば又能く細流を迎へ、百川の朝宗を受けて、百物の都聚を成し、物として之れなきはなし。

(二)江の賦

(三)郭景純

沓(二)五才の竝び用ふる、寔に水德の靈長なり。惟れ(四)岷山の江を導く、初め源を(五)濫觴に發し、聿に(六)洛沫に經始し、萬川を(七)巴梁に攄ね、(八)巫峽を衝いて以て迅く激ぎ、江津を躋りて漲を起し、(九)泓量を極めて海のごとく運り、狀天に滔りて以て(一〇)淼茫たり。(一一)漢泗を揔括し(一二)淮湘を兼包し、(一三)沅澧を幷呑し(一四)沮漳を汲引し、源(一五)崌崍に二分し、流(一六)潯陽に九派し、

【一】江。長江、其下流を楊子江といふ。
【二】郭景純。郭璞、字は景純、晉の河東の人。
【三】五才。才は材なり、金木水火土なり。
【四】岷山。山の名、蜀にあり。
【五】濫觴。杯を浮ぶること。
【六】洛沫。川の名、雒水と沫水。經始は始め經過すること。
【七】巴梁。巴は郡名、梁は州名。
【八】巫峽。山の名。
【九】泓量。泓は深なり。
【一〇】淼茫。濶き貌。
【一一】漢泗。二川の名。
【一二】淮湘。二川の名。
【一三】沅澧。二川の名。
【一四】沮漳。二川の名。
【一五】崌崍。二山の名。
【一六】潯陽。縣名。九派は分れて九となること。

洪濤を(一七)赤岸に鼓し、餘波を(一八)柴桑に淪め、羣流を網絡し、(一九)涓滸を(二〇)商搉し、(二一)神委を(二二)江都に表し、流宗を混じて東に會し、(二三)五湖に注いで以て(二四)漫滂たり、(二五)三江に灌いで(二六)溯沛たり。(二七)六州の域に(二八)滴汗し、(二九)炎景の外に(三〇)經營し、限を(三一)華裔に作して、天地の(三二)嶮介を壯にする所以なり。萬里を呼吸し、靈潮を吐納し、自然に往復し、或は夕にし或は朝にし、逸勢を激して以て前驅し、乃ち鼓怒して濤を作し、(三三)峨嵋は(三四)泉陽の揭たり、(三五)玉壘は(三六)東別の標たり。(三七)衡霍磊落として以て鎭を連ね、(三八)巫廬鬼崒として嶠を比べ、靈を協へ氣を通じ、(三九)濱薄して相陶し、流風蒸雷、虹を騰げ霄を揚げ、(四〇)信陽より出でて長く邁き、(四一)大壑と(四二)沃焦とに淙る。

【大意】　あゝ金木水火土の五材、その用廣しと雖も、水の德、物を利すること最も廣大なり。抑〻長江は源を岷山に發し、其始は僅に杯を浮ぶるに過ぎざる小流なり。然も遂に洛沫を經、巴梁を過ぎ、萬川を總括し、巫峽に至りて疾激し、江津に至りて波浪を起し、廣大なること海の如く、渺渺として天に滔る。更に漢水泗水を幷せ、淮水湘水を納れ、沅水澧水を呑み、沮水漳水を受けて益〻大なり。崌崍山下に於て源二分し、潯陽に至りて九分し、赤岸に洪濤を揚げ、餘波柴桑縣に至りて五湖に注ぎ、三江に入流を幷せ、江都に至りて其神委を示し、東流して再び、其流中國と蠻夷とを限り、天地の險界を成し、潮汐をなし羣流を納れ、須臾にして萬里を往復し、朝夕に進退し、鼓擊して波濤を作す。峨嵋、玉壘の二山、その源流を表し、衡霍二山相連りて鎭をなし、巫廬二山その末に峙ち、神靈の變化を合せ、山川の氣を通じ、以て萬物を陶冶し、鬱蒸の氣雷聲の如く、虹霓を起し薄雲を作し、信陽縣を出でて長く往き、終に大壑と沃焦とに集る。若し乃ち(四三)巴東の峽、(四四)夏后疏鑿し、絕岸萬丈、壁立して赭のごとく駮なり。(四五)虎牙巉く豎ちて以て(四六)屹崒たり。(四七)荊門闕のごとく竦ちて(四八)磐礴たり。(四九)圓淵九廻して以て(五〇)懸騰し、(五一)溢流雷咆し

【一七】赤岸。山の名。
【一八】柴桑。縣名。
【一九】涓滸。小流なり。
【二〇】商搉。すべ納るること。
【二一】神委。委は流の聚る所なり。
【二二】江都。縣名。
【二三】五湖。太湖なり、其水分れて五となる、故に五湖といふ。
【二四】漫滂。寬き貌。
【二五】三江。浙江、吳松浦、陽江なり。
【二六】溯沛。流るゝ聲。
【二七】六州。益、梁、荊、江、揚、徐なり。
【二八】滴汗。長く流るゝ貌。
【二九】炎景。南方の地をいふ。
【三〇】經營。經歷といふが如し。
【三一】華裔。華は中國、裔は蠻夷なり。
【三二】嶮介。介は界なり。
【三三】峨嵋。蜀にある山の名。
【三四】泉陽。江の別名なり。揭は標なり。
【三五】玉壘。蜀にある山の名。
【三六】東別。江の別名。
【三七】衡霍。二山の名。磊落は高大なる貌。
【三八】巫廬。二山の名。鬼崒は高大の貌。
【三九】濱薄。氣亂るゝ貌。
【四〇】信陽。縣名。
【四一】大壑。渤海の東にある無底の谷なり、江水ここに集る。
【四二】沃焦。山名、東海の南三萬里に在り。

【四三】巴東。巴は州の名、其東に三峽あり。
【四四】夏后。禹をいふ。
【四五】虎牙。山の名。
【四六】屹崒。高峻の貌。
【四七】荊門。山の名。
【四八】磐礴。廣大の貌。
【四九】圓淵。圓く渦く淵。
【五〇】懸騰。湧き立つこと。
【五一】溢流。溢は水聲なり。雷咆は雷の如く吼ゆること。

て電激し、駭浪暴に灑ぎ、驚波飛び薄り、(五二)迅澓澆を增し、湧湍疊り躍り、巖に砯りて鼓作し、(五三)溯清漀瀞、(五四)漲澨灊淑潰濩泧漷、(五五)潏湟淴泱、瀌潣瀾淪、(五六)漩澴滎瀯、渨澑濆瀑、(五七)溲減濜溳として、龍鱗の結絡するがごとく、碧沙(五八)瀢滙として往來し、巨石(五九)硉矹として以て(六〇)前却し、(六一)潛演の(六二)汨淈する所、奔溜の(六三)磢錯する所、(六四)厓隒之が爲に(六五)嵃を泐き、(六六)碕嶺之が爲に(六七)嵒崿し、幽澗積岨、(六八)礐硞礐確たり。若し乃ち(六九)曾潭の府、靈湖の淵、(七〇)澄澹汪洸、瀇滉囦泫、(七一)泓汯澗潦、涒鄰圖潾、(七二)混瀚灝渙、映を流し焆を揚げ、(七三)溟漭渺沔、汗汗沺沺たり。之を察るに象なく、之を尋ぬるに邊なし。氣(七四)滃浡として以て霧のごとく杳く、時に(七五)鬱律として其れ煙の如く、(七六)胚渾の未

【五二】迅澓。廻流なり。澆は洄波なり。
【五三】溯清漀瀞。大波相激する聲。
【五四】漲澨。以下皆水の相擊つ聲。
【五五】潏湟。以下皆水流漂疾の貌。
【五六】漩澴。以下皆波浪回旋の貌。
【五七】溲減。以下皆參差として相次ぐ貌。
【五八】瀢滙。水に漂ひて沙の動く貌。
【五九】硉矹。石の轉動する貌。
【六〇】前却。進退に同じ。
【六一】潛演。水脈の地中を行くもの
【六二】汨淈。沸き出づる貌。
【六三】磢錯。磨錯なり。
【六四】厓隒。岸なり。
【六五】嵃。峻險なり。泐は石の解散すること。
【六六】碕嶺。石山なり。
【六七】嵒崿。石涯連續すること。
【六八】礐硞。水石相擊つ聲。
【六九】曾潭。曾は層に同じ、重なり。深淵をいふ。
【七〇】澄澹。以下廣深の貌。
【七一】泓汯。以下水勢回旋の貌。
【七二】混瀚。以下水清深澄澈の貌。
【七三】溟漭。以下廣大にして際なき貌。
【七四】滃浡。霧の出づる貌。
【七五】鬱律。煙の上る貌。
【七六】胚渾。混沌なり。

だ凝らざるに類し(七七)太極の天を構ふるに象たり。長波(七八)浹渫として、峻湍(七九)崔嵬たり。盤渦谷のごとく轉じ、凌濤山のごとく頽れ、(八〇)陽侯(八一)砐硪として以て岸のごとく起り、洪瀾(八二)涴演として雲のごとく廻り、(八三)沄淪溘瀼として乍ち浥り乍ち堆く、豃なること地の裂くるが如く、豁なること天の開くが若く、曲厓に觸れて以て縈繞し、崩浪を駭して相礧ち、(八四)厜窟を鼓して以て(八五)漰渤たり、乃ち(八六)湓湧して隈を駕ぐ。

【大意】昔禹、巴東の三峽を鑿ちて江流を通じ、絕岸高きこと萬丈、其色雲霞の斑なるが如く、虎牙、荊門の二山、岸を夾んで相對し、江水其間を流れ岸石に激して圓を成し、其聲雷の如く其勢電の如く、急波重り起り、波浪回旋し、碧沙之に隨つて往來し、大石之が爲に轉動し、奔流迅急にして岸石を磨錯し、石崖之が爲に銷磨するに至る。或は水流清深にして澄澈、日に映じて光を放ち、之を視れども象を見ず。時に或は雲霧を釀し陰暗にして黑煙の如く、混渾の未だ凝結せざるが如く、太極の天地を構成せんとするに似たり。時に或は盤旋して長波を作し、谷の轉るが如く、山の頽るるが如く、乍ち高く乍ち低く、浪起つて中に深穴を生じ、廣濶なること天地の開裂せるが如く、澎沛として相擊ち、穴窟を鼓して

【七七】太極。天地生成の元氣。
【七八】浹渫。波の連る貌。
【七九】崔嵬。高き貌。
【八〇】陽侯。波をいふ。
【八一】砐硪。搖動する貌。
【八二】涴演。廻曲の貌。
【八三】沄淪云云。回旋の貌。
【八四】厜窟。窟なり。
【八五】漰渤。水の聲。
【八六】湓湧。分湧なり。

聲を成し、分湧して山隈に登る。

魚は則ち(八七)江豚海狶、叔鮪王鱣、鰨鰊鱳魨、鯪鰩鯩鰱あり。或は(八八)鹿觡象鼻、或は虎狀龍顏、鱗甲(八九)鏙錯し、(九〇)煥爛たる錦斑あり。鬐を揚げ尾を掉し、浪を噴き唌を飛ばし、流を排して(九一)呼哈し、波に隨つて遊延し、或は采を爆して以て淵を晃らし、或は鰓を巖間に嚇く。(九二)介鯨濤に乘りて以て出入し、(九三)鯪鮆時に順つて往還す。爾して其水物の(九四)怪錯は、則ち(九五)潛鵠、魚牛、虎蛟、鉤虵、蜦、螵、鱟、蝞、鱝、鼈、鼉鼊、玉珧、海月、土肉、石華、三蝬、蚽江、鸚螺、蜁蝸あり(九六)璅蛣蟹を腹にし、(九七)水母蝦を目にす。(九八)紫蚢渠の如く、(九九)洪蚶車を專にす。(一〇〇)瓊蚌晞曜して以て珠を瑩き、(一〇一)石蛣節に應じて葩を揚げ、(一〇二)踞蠩森衰として以て翹を垂れ、(一〇三)玄

【八七】江豚。以下皆魚の名。
【八八】鹿觡。鹿の角。
【八九】鏙錯。まじはる貌。
【九〇】煥爛。照り輝く貌。
【九一】呼哈。魚の口を動かすこと。
【九二】介鯨。介は大なり。
【九三】鯪鮆。魚の名。鯪は南海に出づ、頭中に石あり、一名は石首。鮆は狹薄にして長し、一名は刀魚、常に三月八月を以て出づ、故に時に順ふといふ。
【九四】怪錯。奇怪雜錯なり。
【九五】潛鵠。以下皆水物の名。
【九六】璅蛣。長さ寸餘、大なるは長さ二三寸、腹中に蟹あり。
【九七】水母。東海に之を蛇といふ、此物耳目なし、故に人を避くるを知らず、常に蝦あれば之に隨ふ、蝦人を見れば則ち驚く、此物亦隨つて沒す。
【九八】紫蚢は紫色の大貝。渠は車渠、亦貝の名。
【九九】洪蚶は蛤に似て大なるもの。專は滿なり。
【一〇〇】瓊蚌。中より玉を出す貝。
【一〇一】石蛣。春花を生じ、冬死す。
【一〇二】踞蠩は蟲の名。森衰は垂るる貌。
【一〇三】玄蠣は黑カキ。磈磥磈硊は平ならざる貌。

蠣磈磥として碨硊し、或は潮波に(一〇四)泛瀲たり、或は泥沙に(一〇五)混淪たり。

【大意】魚類また種種あり。其形或は鹿角の如く、或は象鼻の如く、或は虎形をなし、或は龍顏をなし、鱗甲雜錯して文彩錦繡の如く、鬐を揚げ尾を掉し、波に隨つて浮遊し、或は背を淵中に曝し、或は鰓を巖間に開く。水物の奇怪なるもの亦少からず。紫貝の大さ車渠の如きあり。洪蚶の大さ車に滿つるあり。瓊蚌は光を水中に曜かし、石蛣は時節に應じて華を著け、蜛蠩は翹を垂れ、蠣は磊砢たり。或は波に漂ひ或は泥に沒す。

若し乃ち龍鯉の一角なるあり、奇鶬の九頭なるあり、鼈の三足なるあり、龜の六眸なるあり。(一〇六)赬蟞肺のごとく躍りて璣を吐き、(一〇七)文魮磬のごとく鳴きて以て璆を孕み、(一〇八)螣螟翼を拂つて耀を掣き、(一〇九)神蜧蝹蜦として以て沈み遊び、(一一〇)騂馬波に騰りて以て(一一一)噓蹀し、水兕雷のごとく(一一二)陽侯に咆ゆ。淵客室を巖底に築き、(一一三)鮫人館を懸流に構へ、雹のごとく布ける(一一四)餘糧あり、星のごとく離れ

【一〇四】泛瀲。浮ぶこと。
【一〇五】混淪。輪轉する貌。
【一〇六】赬蟞。魚の名。
【一〇七】文魮。魚の名。
【一〇八】螣螟。蛇の類にして翼あり。
【一〇九】神蜧は蛇の類なり。蝹蜦は行く貌。
【一一〇】騂馬。水獸の名。
【一一一】噓は水を噴くこと。蹀は行くこと。
【一一二】陽侯は波なり。淵客は水獸なり。
【一一三】鮫人。魚の類なり、ニンギヨ。
【一一四】餘糧。草の名、本草經に禹餘糧ハ東海ノ池澤ニ生ズとあり。
【一一五】沙鏡。雲母に似たる鑛物。

る（一一五）沙鏡あり、（一一六）青綸競ひ糾れ、（一一七）縟組爭ひ映じ、（一一八）紫菜熒曄として以て叢被し、綠苔（一一九）研上に（一二〇）鬖髟たり。（一二一）石帆蒙龍として以て嶼を蓋ひ、（一二二）薍實時に出でて漂泳す。其下には則ち金礦（一二三）丹礫、（一二四）雲精爛銀、（一二五）玏瑯壜瑰、（一二六）水碧潛瑁あり。（一二七）鳴石陽渚に列り、（一二八）浮磬陰濱に肆り、或は彩を輕漣に煩し、或は曜を涯鄰に焆し、（一二九）林潏はざるはなく、岸津はざるはなし。其羽族は則ち（一三〇）晨鵠、天雞、鵁、鶄、鷗、鴅あり。（一三一）陽鳥爰に翔り、于くに（一三二）玄月を以てす。千類萬聲自ら相喧聒し、翮を濯ひて風に疏め、翅を鼓して（一三三）翻翿し、揮弄して珠を灑ぎ、拊拂して沫を瀑し、集れば霞の布くが若く、散ずれば雲の豁なるが如く、（一三四）積羽に

【一一五】青綸。草の名。
【一一六】縟組。草の名。
【一一七】紫菜は菜の名、熒曄は光明の貌。
【一一九】研上。滑石の上。
【一二〇】鬖髟。髪の亂るること。
【一二一】石帆は草の名。蒙龍は茂密の貌。
【一二二】薍實。水草なり。孔子家語に楚ノ昭王江ヲ渡ル中流ニ物アリ大キサ斗ノ如ク圓クシテ赤シ、直ニ王ノ舟ニ觸ル、王大ニ怪ミ使ヲ魯ニ遣シテ孔子ニ問ハシム、孔子曰ク此レ薍實ナリ、剖イテ食フベシ、吉祥ナリとあり。
【一二三】丹礫。丹砂なり。
【一二四】雲精は雲母なり。爛銀は銀の精光ありて爛の如きもの。
【一二五】玏瑯壜瑰。共に水玉の名。
【一二六】水碧、潛瑁。共に水玉の名。
【一二七】鳴石。石の玉に似て之を撞けば聲七八里に聞ゆるもの。
【一二八】浮磬。石の磬となすべきもの。
【一二九】林云云。荀子に玉山ニ在レバ木潤ヒ、淵珠ヲ生ズレバ崖枯レズとあり。
【一三〇】晨鵠は鳥の名。天雞は一名鶏雞。以下皆鳥の名。
【一三一】陽鳥。雁の類の鳥。
【一三二】玄月。九月をいふ。
【一三三】翻翿。飛走の貌。
【一三四】積羽。地名。
【一三五】產氂。產は子を生むこと。氂は羽毛を落すこと。

（一三五）產氂し、（一三六）勃碣に往來す。

【大意】或は龍鯉の一角なるもの、或は奇鶤の九頭なるもの、或は鼈にして三足なるもの、龜にして六眼なるもの、皆ここに產し、其他蟲魚の奇異なるもの、亦極めて多し、又餘糧、沙鏡、靑綸、縟組等の草あり。滑石の上に亂生して光を放ち、石帆、薍實等の草、亦時に出でて漂流す。其下には金石珠玉の珍奇なるものあり。光を輕漣に流し、岸畔に曜く。隨つて林岸皆潤はざるはなし。鳥には晨鵠、天雞等あり。九月鴻雁亦飛翔し、其他千種萬類各其聲を異にして鳴き、毛羽を灑ひて風に修理し、水を揮つて珠を成し、波を拂つて沫を成し、集る時は霞光の布けるが如く、散ずる時は雲氣の開けるが如く、積羽、勃碣の間に往來す。

（一三七）縟組。草の名。
（一三八）紫菜は菜の名、熒曄は光明の貌。
（一三九）研上。滑石の上。
（一四〇）鬖髟。髪の亂るること。
（一四一）石帆は草の名。蒙龍は茂密の貌。
（一四二）薍實。水草なり。孔子家語に楚ノ昭王江ヲ渡ル中流ニ物アリ大キサ斗ノ如ク圓クシテ赤シ、直ニ王ノ舟ニ觸ル、王大ニ怪ミ使ヲ魯ニ遣シテ孔子ニ問ハシム、孔子曰ク此レ薍實ナリ、剖イテ食フベシ、吉祥ナリとあり。
（一四三）丹礫。丹砂なり。
（一四四）雲精は雲母なり。爛銀は銀の精光ありて爛の如きもの。
（一四五）玏瑯壜瑰。共に水玉の名。
（一四六）水碧、潛瑁。共に水玉の名。
（一四七）鳴石。石の玉に似て之を撞けば聲七八里に聞ゆるもの。
（一四八）浮磬。石の磬となすべきもの。
（一四九）林云云。荀子に玉山ニ在レバ木潤ヒ、淵珠ヲ生ズレバ崖枯レズとあり。
（一五〇）晨鵠は鳥の名。天雞は一名鶏雞。以下皆鳥の名。
（一五一）陽鳥。雁の類の鳥。
（一五二）玄月。九月をいふ。
（一五三）翻翿。飛走の貌。
（一五四）積羽。地名。
（一五五）產氂。產は子を生むこと。氂は羽毛を落すこと。

【一三五】勃碣。地名。
【一三六】憐杞淨渓に峰に羅り、桃枝篔簹實に繁りて叢あり。
【一三七】櫰橦。二木の名。
【一三八】桃枝、篔簹。皆竹の類。
【一三九】葭蒲。共に水邊に生ずる草の名。
【一四〇】櫻。綠色を雜ふること。
【一四一】蘭紅。蘭は澤蘭、紅は蓼の舌なり。
【一四二】嵺旄。白き花。
【一四三】紫茸。紫の花。
【一四四】潭隩。淵隈なり。
【一四五】芳蘺。香草の名。
【一四六】隱蔚は茂る貌。水松は藥草の名。

（一三八）櫰杞淨渓に（一三九）楓薄し、（一四〇）枒橦嶺に森として峰に羅り、（一四一）桃枝篔簹實に繁りて叢あり。（一四二）葭蒲雲のごとく蔓り、（一四三）櫻するに（一四四）蘭紅を以てし、（一四五）嵺旄を揚げ（一四六）紫茸を擢んで、（一四七）潭隩を蔭ひ長江を被ふ。繁蔚たる（一四八）芳蘺、（一四九）隱蔚たる水松あ

り。〔一四九〕涯灌芋菜として〔一五〇〕潛薈葱龍たり。〔一五一〕鯪鯉垠隰に〔一五二〕跨躇し、〔一五三〕獮獺〔一五四〕窳窒に〔一五五〕睒瞚し、〔一五六〕迅蜼虛に臨んで以て巧を騁せ、〔一五七〕孤玃危に登りて〔一五八〕雍容し、〔一五九〕夔蚿夕陽に〔一六〇〕翱蹏し、〔一六一〕鴛鷞翮を山東に弄す。〔一六二〕岐に因つて渚を成し、湖に觸れて渠を開き、壑に漱いで浦を生し、區別れて湖を作し、之に蹬すに〔一六三〕瀠瀁を以てし、之を渠すに〔一六四〕尾閭を以てし、之を標するに〔一六五〕翠翳を以てし、之に泛ぶるに〔一六六〕遊菰を以てし、〔一六七〕匪葭の〔一六八〕芒種を播きて、自然の〔一六九〕嘉蔬を挺し、〔一七〇〕鱗被せる菱荷、〔一七一〕櫰布せる水蕨あり、莖を翹げ藥を濮し、穎を濯ひ裏を散じ、風に隨つて〔一七二〕猗萎たり、波と〔一七三〕潭洿たり、光を流し映を潛め、景霞火よりも炎なり。其旁には則ち〔一七四〕雲夢、雷池、彭蠡、青草、具區、洮滆、

【一四九】涯灌は厓側の叢なり。芋蕖は青盛の貌。
【一五〇】潛薈は水中の茂盛なり。葱龍は茂る貌。
【一五一】鯪鯉はともに魚の名、足あり。垠隰は岸なり。
【一五二】跨躇。行く貌。
【一五三】廓空は岸側の穴。睒瞚は驚き視る貌。
【一五四】迅蜼。迅は疾なり、蜼は猿の一種。
【一五五】孤玃。孤は單なり、玃も猿の一種。
【一五六】雍容。從容に同じ。
【一五七】夔蚿。牛の類。
【一五八】翱蹏。跳りあがること。
【一五九】鴛鷞。鳳の類。
【一六〇】山東。朝陽なり。
【一六一】岐。山岸の曲處なり。
【一六二】瀠瀁。水の暴溢すること。
【一六三】尾閭。海水の漏るる處。
【一六四】翠翳。草叢なり。
【一六五】遊菰。遊は浮ぶこと、菰は草の名。
【一六六】匪葭。人の植ゑたるにあらざるをいふ。
【一六七】芒種。稻麥なり。
【一六八】嘉蔬。稻なり。
【一六九】鱗被は鱗の如く多きなり。菱はヒシ。荷は蓮なり。
【一七〇】櫰布は聚り敷くこと。蕨は草の實をいふ。
【一七一】猗萎。鳳に隨ふ貌。
【一七二】潭洿。波を逐うて動く貌。
【一七三】雲夢。以下皆湖澤の名。

珠、滻、丹、漼あり。極望數百、〔一七四〕沆瀁晶瑩たり。爰に包山の洞庭、巴陵の地道あり、〔一七五〕潛逵傍通して〔一七六〕幽岫窈窕たり。〔一七七〕金精玉英其裏に璣り、瑤珠怪石其表に琲り、驪虯其址に樛り、〔一七八〕梢雲其巓に冠す。〔一七九〕海童の巡遊する所、〔一八〇〕琴高の靈嬌する所、〔一八一〕冰夷浪に倚りて以て傲睨し、〔一八二〕江妃嘯を含んで〔一八三〕瞬眇し、凌波を撫して〔一八四〕鳧躍し、翠霞を吸ひて〔一八五〕天矯たり。

【大意】　憐杞栝楩等の樹、叢生して岸に羅列し、美竹葭蒲蘭紅と相映じ、衆草の花葉、深水の曲、長江の岸を被ひ、鯪鯉等の奇魚岸上を行き、獮獺は危險に登りて從容たり。獺穴中に驚視し、雌は空に臨んで跳躍し、獺は危險に登りて從容たり。夔蚿は夕陽の間に躍り、鴛鷞は朝陽を受けて飛ぶ。曲に因りて渚を成し、澗に觸れて溝を成し、壑に注いで浦を成し、分流して湖を成し、之に增すに暴溢を以てし、之を漏すに尾閭を以てす。草菰其上に茂生し、美稻自然に秀で、莖を揚げ藥を浸し、穗を濯ひ實を散じ、風に隨ひ波に映じて、霞の色よりも炎盛なり。雲夢、雷池等の大湖、この江と相旁通し、其大さ數百里なり。巴陵の地道また包山の洞庭湖底より潛通し、幽岫深邃にして奇狀を呈し、金精

【一七四】沆瀁晶瑩。深廣の貌。
【一七五】潛逵。地下の道。
【一七六】幽岫は岫は山の穴あるもの。窈窕は深邃なり。
【一七七】金精は黃金の青。玉英は玉の英華の色あるもの。
【一七八】梢雲。瑞雲なり。
【一七九】海童。仙人なり。
【一八〇】琴高は仙人の名。靈嬌は靈を以て飛ぶなり。
【一八一】冰夷。水神なり。
【一八二】江妃。水神なり。
【一八三】瞬眇。遠く視る貌。
【一八四】鳧躍。カモメの如く躍る。
【一八五】天矯。自得の貌。

玉英其内に生じ、瑤珠怪石其外に生じ、驪龍其麓に蟠り、瑞雲其巓に出で、神仙其間に去來す。

若し乃ち宇宙澄寂にして、(一八六)八風翔かざれば、舟子是に於て棹を搦り、渉人是に於て榜を檥し、(一八七)飛雲を漂し(一八八)艅艎を運し、(一八九)舳艫相屬りて萬里檣を連ね、(一九〇)泝洄して流に沿ひ、或は漁し或は商し、(一九一)交益に赴き(一九二)幽浪に投じ、南極を竭し(一九三)東荒を窮む。爾して乃ち(一九四)雰祲を清旭に翛、(一九五)五兩の動靜を覘ふ。長風(一九六)飈として以て增扇ぎ、(一九七)廣莫飈として氣整ひ、徐なれども飈からず、疾なれども猛しからず。帆を鼓して迅く越え、漲を趙え洄を截り、波を凌ぎ柂を縱ち、電のごとく往いて杳溟なり。(一九八)霨たると晨霞の孤り往くが如く、眇にして雲翼の嶺を絕るが若く、數百に倏忽として、(一九九)俄頃に千里なり。(二〇〇)飛廉も以て其蹤を睎るなく、(二〇一)渠黃も其景

【一八六】八風。淮南子に天ニ八風アリ、條風、明庶風、清明風景風、涼風、閶闔風、不周風廣莫風ナリとあり。
【一八七】飛雲。吳の樓船の名。
【一八八】艅艎。吳の舟の名。
【一八九】舳艫。舟尾を舳といひ、舟頭を艫といふ。
【一九〇】泝洄。流を溯ること。
【一九一】交益。二州の名。
【一九二】幽浪。幽は幽州、浪は樂浪郡。
【一九三】東荒。東邊といふが如し。
【一九四】雰祲。天候氣象なり。禮記の鄭註に祲ハ陰陽ノ氣相浸漸シテ以テ災ヲ成スナリとあり。
【一九五】五兩。風を候ふ具、カザミ。
【一九六】飈。大風の貌。
【一九七】廣莫は風の名。八風の一なり。飈は急風の貌。
【一九八】霨。急に行く貌。
【一九九】俄頃。暫時なり。
【二〇〇】飛廉。風の神。
【二〇一】渠黃。駿馬の名。

を企つる能はず。是に於て(二〇二)蘆人漁子、江山に(二〇三)擯落し、衣は則ち(二〇四)羽褐、食は惟れ(二〇五)蔬鱻。澱に(二〇六)洊して涔となし、(二〇七)漾を夾んで(二〇八)筌を羅ね、(二〇九)筒灑鋒を連ね、(二一〇)罾罶船を比べ、或は輪を(二一一)懸碕に揮げ、或は瀨に中りて橫に旋り、忽ち夕を忘れて宵歸り、(二一二)採菱を詠じて以て舷を叩き、自足を(二一三)一嘔に傲り、風波を尋ねて以て年を窮む。爾して乃ち之を域るに盤巖を以てし、之を豁にするに洞壑を以てし、之を疏つに(二一四)淹汜を以てし、之を鼓するに朝夕を以てし、川流の(二一五)歸湊する所、雲霧の(二一六)蒸液する所、珍怪の(二一七)化產する所、(二一八)傀奇の窟宅する所、(二一九)隱淪の列眞を納れ、異人を(二二〇)精魄に挺んで、(二二一)靈潤を千里に播き、(二二二)岱宗の

【二〇二】蘆人。蘆を採る人。
【二〇三】擯落。一本に擯を濱に作る、今之に從ふ。落は庵室の類なり、江濱に庵室を作ること。
【二〇四】羽褐。毛羽を以て作りし衣。
【二〇五】蔬鱻。野菜及び魚。
【二〇六】洊は柴を以て水を壅ぐこと。涔は柴を積みて魚を養ふ處。フシヅケ。
【二〇七】漾。小水の大水に入る處、合流の處なり。
【二〇八】筌。魚を捕ふる器。竹を以て之を作る。
【二〇九】筒灑は釣の名。鋒は鉤なり。
【二一〇】罾罶。網の名。
【二一一】懸碕。碕は曲岸なり。
【二一二】採菱。菱を採る歌。
【二一三】一嘔。一謳に同じ。
【二一四】淹汜。江水の分流する處。
【二一五】歸湊。湊は聚ること。
【二一六】蒸液。蒸潤なり。
【二一七】化產。變化生產なり。
【二一八】傀奇。奇異の物。
【二一九】隱淪。桓子新論に天下ノ神人五、一ニ曰ク神仙、二ニ曰ク隱淪、三ニ曰ク使鬼物、四ニ曰ク先知、五ニ曰ク鑄凝とあり。列眞。列仙なり。
【二二〇】精魄。江山の靈氣なり。
【二二一】靈潤。うるほひ。
【二二二】岱宗。泰山なり。公羊傳に石ニ觸レテ出デ、膚寸ニシテ合シ、朝ヲ崇ヘズシテ徧ク天下ニ雨フラス者ハ唯泰山ノ雲ノミとあり。

石に觸るるに越ゆ。その(三三)譎變儵悅に及んでは、(三四)符祥一にあらず、動應方なく、事に感じて出で、天地を經紀し、人術を錯綜し、妙なること之を言に盡すべからず、事之を筆に窮むべからず。

【大意】天氣晴朗にして風波起らざれば、舟子棹を執りて舟船を泛べ、舳艫相連りて萬里に達し、江流を上下して、或は魚を漁し或は物を商ひ、遠く交益幽浪の地に至り、更に南極東邊を窮む。其の舟を發するや先づ朝に天候を伺ひ、五兩の動靜を察し、風向の宜しきを得るを見、然る後波を凌ぎ栧を縱にして遠く征き、朝霞の飛ぶが如く雲氣の嶺を絕るが如く、頃刻にして數百千里を走る。その速なること疾風も及ぶ能はず、駿馬も競ひ難し。蘆人漁夫また江山の側に屋を構へ、羽毛の短褐を著、野菜鮮魚を食とし、柴を聚めて洌となし、會流に筌を列ね、或は豻岸の上に坐し、或は水波の中を行き、利を貪りて歸るを忘れ、夜に及んで始めて還り、嘯傲して自ら樂み、以て年を窮む。而して此江たる、大山を以て限界となし、洞壑を經て海に入り、潮汐朝暮に去來して其浪を鼓し、川流皆之に歸漿し、潤液蒸して雲霧を成し、珠玉珍怪の物ここに化生し、神仙ここに遊び、秀靈の氣異人を生み、潤を千里に播くこと泰山の雲石に觸れて雨を降らすに過ぐ。その神速變化するに及んでは、災祥を下すこと一樣ならず。一一述べ盡し難し。

【三三】譎變は變化すること。儵悅は神速なること。
【三四】符祥。災祥なり。

若し乃ち(三五)岷精曜を(三六)東井に垂れ、(三七)陽侯形を大波に(三八)遯れ、(三九)奇相道を得て神を宅き、乃ち(四〇)靈爽を(四一)湘娥に協せ、黃龍の舟を負へるに駭き、(四二)伯禹の仰ぎ嗟けるを識り、(四三)荊飛の蛟を擒にし、終に氣を(四四)太阿に成せるを壯とし、(四五)要離の(四六)慶を圖り、中流に在りて戈を推せるを悍とし、(四七)靈均の石を任き漁父の(四八)櫂歌を歎ぜしを悲み、(四九)周穆の師を濟し(五〇)八駿を龍罷に驅りしを想ひ、交甫の珮を喪へるに感じ、神使の羅に嬰れるを慭み、(五一)大塊の形を流ける、萬を混じて一科に盡し、虧けざるを保ちて永く固く、元氣を靈和に稟くるを煥す。(五二)川瀆を考へて妙觀するに、實に江河より著なるはなし。

【大意】今其奇異の事を略記せんか。岷山の精上りて東井星となり、陽侯波間に死して波神となり、倘レ尾チ曳イテ逃ルとあり。
【三五】岷精。岷山の精。
【三六】東井。星の名。河圖括地象に岷山ノ精上リテ井絡トナルとあり。
【三七】陽侯。淮南子の註に陽國侯水ニ溺死シ、其神ヨク大波チナスとあり。
【三八】遯形。死すること。
【三九】奇相。人名なり。
【四〇】靈爽。精神なり。
【四一】湘娥。堯の二女湘水に溺死し神となる。
【四二】伯禹。夏の禹王なり。呂氏春秋に禹江チ濟ルトキ黃龍舟チ負フ、禹仰イデ天チ視テ嘆ジテ曰ク、吾命チ天ニ受ケ力チ竭シテ以テ民チ養フ、余何ゾ龍チ憂ヘンヤト、龍耳チ
【三三】荊飛。荊は楚なり、國名、飛は飲飛なり、人名。
【四四】大阿。寶劒の名。
【四五】要離。人名。
【四六】慶。慶忌なり、人名。
【四七】靈均。屈原なり。石を懷いて自ら汨羅に投じて死す。
【四八】櫂歌。ふなうた。楚辭に漁父枻チ鼓シテ歌ツテ曰ク、滄浪ノ水、清マバ以テ吾が纓チ濯フベシ云云とあり。
【四九】周穆。周の穆王。
【五〇】八駿は八匹の駿馬。龍罷は大龜なり。
【五一】大塊。天地の元氣。
【五二】川瀆。川流なり。

奇相道を得、其精爽を合せて湘娥と倶に神となりし等の事あり。禹王の江を濟りし時、黄龍其舟を負ひ、羣臣皆駭く。禹獨り天を仰いで嘆せし事あり。楚の欽飛太阿の劍を得、楚王に從つて江を渡りし時、江神之を奪はんとし、風波大に起り、兩蛟舟を挾む。欽飛劍を以て蛟を斬り風乃ち止む。其事壯なりと謂ふべし。要離慶忌と倶に江を涉りし時、劍を拔いて以て慶忌を刺し、捽して之を江に投ず。其事亦勇となすに足る。屈原誠忠にして、君の放逐に遇ひ、石を抱いて自ら江に投じ、漁夫の櫂歌を嘆ず、其事誠に悲むべし。周の穆王軍を起し、東の方九江に至り、黿鼉を叱して梁となし、以て八駿を驅りし事あり。鄭の交甫、漢皐臺下に遵ひ二女に遇ひ、其珮を請ふ。二女之を與ふ。交甫受けて之を懷にし、超然として去ること十歩、循つて之を探れば卽ち亡し。回顧すれば二女も亦卽ち亡し。其事實に傷むべし。神使網に罹る。亦悲むに足る。かの大塊の萬物を作るや、萬物を混じて盡く一科に歸せしめ、（春秋元命苞に水は五行の始、元氣の津液なりと見ゆ）道を保ち、淡然として永く虧けず、元氣をして和合せしむ。其事亦美するに足る。天下川流の妙を觀ずるに江河より著るる者なし。ああ靈なるかな。

卷の第七

賦庚

物色

風の賦

宋玉

楚の襄王㈠蘭臺の宮に遊ぶ。宋玉、㈡景差侍す。風颯然として至るあり。王乃ち襟を披いて之に當りて曰く、快なるかな此風、㈢寡人の㈣庶人と共にする所のものかと。宋玉對へて曰く、此れ獨り大王の風のみ。庶人安んぞ得て之を共にせんと。王曰く、夫ればすして加ふ。今子は獨り以て寡人の風となす。豈說あるかと。宋玉對へて曰く、臣師に聞く㈤枳句は巢を來し、空穴は風を來すと。其の託する所の者然り。則ち風と氣と殊なりと。王曰く、夫れ風は始め安より生ずるかと。宋玉對へて曰く、夫れ風は地より生じ、㈥青蘋の末より起り、

【一】宋玉。楚の大夫なり。屈原の弟子なり。
【二】蘭臺。宮の名。
【三】景差。楚の大夫たり。
【四】寡人。德の少なき人の意、王侯の謙稱。
【五】庶人。庶は衆なり。平民をいふ。
【六】枳句。枳は木の名、句は曲なり。

谿谷に(八)侵淫し、(九)土囊の口に盛怒し、太山の阿を緣り、松柏の下に舞ひ、(一〇)飄忽溯滂として激飄(一一)熛怒し、(一二)砉砉として雷のごとく聲り、(一三)廻穴錯迕し、石を蹶し木を伐ち、林莽を捎殺す。其の將に衰へんとするに至りては、(一四)被麗披離して、孔を衝き、(一五)揵を動かし、(一六)眴渙粲爛として離散轉移す。故に其清涼なる雄風は、則ち飄擧升降して、高城を(一七)乘凌し、深宮に入り、華葉に邸れて氣を振ひ、(一八)桂椒の間に徘徊し、激水の上に翱翔し、將に芙蓉の(一九)精を擊たんとし、(二〇)蕙草を獵て(二一)秦衡に離き、(二二)新夷を槩ひ(二三)黃楊に被り、廻穴として陵を衝し、蕭條たる衆芳あり。然る後中庭に(二四)倘佯し、北のかた玉堂に上り、羅帷を蹕り(二五)洞房を經、廼ち大王の風たるを得るなり。故に其風人に中るときは、狀直に(二六)憯悽愀慄として清涼歇を增す。清清泠泠として病を愈し醒を析き、耳目を發明し體を寧くし人に便するは、此れ所謂大王の(二七)雄風なりと。

【七】青蘋。萍の大なるもの。
【八】侵淫。漸く進むなり。
【九】土囊。谷口なり。
【一〇】飄忽は神速なり。溯滂は風の物をうつ聲。
【一一】熛怒。熛は火の飛ぶなり、怒るも熛の聲の如きなり。
【一二】砉砉。風の聲。
【一三】廻穴は風の定まらざる貌。錯迕は交錯なり。
【一四】被麗披離。輕く擧る貌。
【一五】揵。門のカンヌキ。
【一六】眴煥粲爛。鮮明の貌。
【一七】乘凌。登ること。
【一八】桂椒。香木の名。
【一九】精。菁に同じ、華なり。
【二〇】蕙草。香草の名。
【二一】秦衡。ともに香草の名。
【二二】新夷。留夷に同じ、香草の名。
【二三】黃楊。カハヤナギの花。
【二四】倘佯。徘徊といふが如し。
【二五】洞房。深屋なり。
【二六】憯悽愀慄。寒き貌。
【二七】雄風。雄駿の風なり。

【大意】楚の襄王、宋玉景差を從へて蘭臺宮に遊ぶ。時に風颯然として至る。王襟を披きて風に當りて曰く、涼風極めて快なり。庶人と雖も寡人と共に此快を享くるを得るかと。宋玉對へて曰く、否否此れ獨り大王の雄風のみ。庶人は共に此快を享くる能はざるなりと。王怪みて問うて曰く、風は天地普暢の氣にして、貴賤上下の差別あるなし。今庶人の寡人と共にするを得ざるは何故ぞと。宋玉對へて曰く、臣聞く曲枳には巢鳥多く、門戸の穴には風多しと。各其附託する所然るなり。されば氣は貴賤を別たずと雖も、風は貴賤の別なき能はざるなりと。王因つて問ふ、風は始め何處より生ずるかと。宋玉對へて曰く、風は先づ地より生じ、蘋末に起り、溪壑に漸進して谷口に盛怒し、太山松柏の下に舞ひ、物に激して雷の如く吼え、交錯して木石を擊ち林木を枯す。其の將に微ならんとするや、輕擧して穴を衝き門を動かし、塵埃を揚げずして四方に轉移す。乃ち高城深宮に入り、香木芳草の間に徘徊し、上衝して陵を超え、蕭蕭然として衆芳の氣を散じ、中庭に入りて羅帷を蹕り、房室に入りて大王の雄風となる。故に其風庶人に中れば（素問に若し汗出でて虛に逢へば風人に中るとあり）忽ちにして惡寒を感じ歎を增さしむ。目を爽快にし身體を便寧ならしむるは、獨り大王の雄風のみと。

王曰く、善いかな事を論ずるや。夫れ庶人の風、豈聞くべきかと。宋玉對へて曰く、夫れ庶人の風は

(二八)塕然として窮巷の間より起り、堁を堀き塵を揚げ、(二九)勃鬱煩寃して、孔を衝き門を襲ひ、(三〇)沙堁を動かし、(三一)死灰を吹き、(三二)溷濁を駭かし、(三三)腐餘を揚げ、邪に薄に、(三四)甕牖に入り、室廬に至る。故に其風人に中れば、狀直に(三五)憯惏鬱邑して、溫を毆り濕を致し、中心(三六)慘怛し、病を生じ熱を造し、脣に中れば胗となり、目に得れば瞶となり、(三七)咯齰嗽獲して、死生を卒へず。此れ所謂庶人の(三八)雌風なりと。

【大意】襄王曰く、汝の事を論ずること誠に善し。然らば問はん。庶人の風は如何ん。宋玉對へて曰く、庶人の風は忽然として窮巷より起り、昏濁にして塵を揚げ、亂起して穴を衝き、門に入り、沙を卷き灰を吹き、腐臭を揚げて甕牖茅屋に入る。故に人其風に中れば、人をして惡亂して憂へしめ、熱病を起さしめ、脣に中れば胗となり、目に中れば瞶となり、死せるにもあらず生けるにもあらず、その害言ふに勝ふべからず。此れ所謂庶人の雌風なりと。

【一八】塕然。風の起る貌。
【一九】勃鬱煩寃。風の廻旋する貌。
【二〇】沙堁。沙塵なり。
【二一】死灰。火の消えし灰。
【二二】溷濁。不潔なり。
【二三】腐餘。腐臭の餘なり。
【二四】甕牖。破瓶を塗り込めて作りしマド。
【二五】憯溷は惡亂なり。鬱邑は憂ふること。
【二六】慘怛。憂勞なり。
【二七】咯齰嗽獲。風に中りて口の動く貌。
【二八】雌風。卑惡の風なり。

(二)秋興の賦並序

潘安仁

晉の(一)十有四年、余春秋三十有二、始めて二毛を見る。(二)太尉の掾を以て(四)虎賁中郎將を兼ね、散騎の省に寓直す。高閣雲に連りて、(五)陽景曜すこと罕なり。(六)蟬鬼を珥みて(七)紈綺を襲るの士、此に遊處す。僕は野人なり。(八)偃息すること茅屋茂林の下に過ぎず。談話すること農夫田父の客に過ぎず。官を攝し(九)乏きを承け、猥に朝列に厠り、夙に興き晏く寢ね、(一〇)底寧に遑あらず。譬へば猶ほ池魚籠鳥の江湖山藪の思あるがごとし。是に於て翰を染め紙を操り、慨然として賦す。時に秋なり。故に秋興を以て篇に命く。其辭に曰く、

(一一)四運忽として其れ(一二)代序し、萬物紛として以て(一三)廻薄す。(一四)花蒔の時育を覽て、盛衰の託する

【一】秋興。秋にあたりて感興を起せること。
【二】十有四年。晉の武帝の咸寧四年なり。春秋。年齡なり。
【三】二毛。白髮なり。
【三】太尉。官名、時に賈充太尉たり。掾は屬官なり。
【四】虎賁中郎將。官名なり。
【五】陽景。日なり。
【六】蟬鬼。冕は冠なり、金を以て作れる蟬を飾とす。故に蟬冕といふ。
【七】紈綺。貴人の服なり。
【八】偃息。休息といふが如し。
【九】乏き云云。人物の缺乏を補ふこと。仕官する謙辭。
【一〇】底寧。底は致す、寧は安なり。安樂にしてゐること。
【一一】四運。四時なり。
【一二】代序。節序を代ふると。
【一三】廻薄。薄は迫なり。
【一四】花蒔。花なり。

所を察す。冬は索きて春は敷くに感じ、夏は茂りて秋は落つるを嗟く。(一五)末士の(一六)榮悴と雖も、伊れ人情の美惡なり。善いかな(一七)宋玉の言に曰く、悲しいかな秋の氣たるや、(一八)蕭瑟として草木搖落して變衰し、(一九)憭慄として(二〇)遠行に在り、山に登り水に臨み、將に歸らんとするを送るが若しと。夫れ歸るを送れば(二一)羈旅の(二二)慕徒の戀を懷き、遠行すれば逝くを歎き、山に登りては遠きを懷ひて近きを悼む。彼の(二三)四感の心を疚しむる、(二四)一塗に遭ひて忍び難し。嗟秋日の哀むべき、諒に愁へて盡きざるなし。野に歸燕あり、隅に翔集あり。(二五)游氛朝に興り、槁葉夕に殞つ。是に於て乃ち(二六)輕箑を屏け(二七)纖絺を釋ぎ、(二八)莞蒻を藉き袷衣を御す。庭樹(二九)槭として以て(三〇)灑落し、勁風(三一)戾として帷を吹き、蟬(三二)嘒嘒として以て寒く吟じ、雁(三三)飄飄として南に飛び、天(三四)晃朗として以て彌高く、日(三五)悠揚として浸く微なり。何ぞ微陽の(三六)短晷なる、涼夜の方に永きを覺ゆ。月(三七)朣朧として以て光を含み、露淒清として以て冷を凝らし、熠燿(三八)階闥に粲り、蟋蟀(三九)軒屏に鳴き、(四〇)離鴻の晨吟を聽き、(四一)流火の餘景を望み、宵(四二)耿介として寐ねられず獨り(四三)華省に展轉し、時歲の遒り盡くるを悟り、慨として首を俛れて自ら省る。(四四)斑鬢髟れて以て弁を承け、素髮颯として以て領に垂る。(四五)鞏僊の(四六)逸軌を仰ぎ、(四七)雲漢を攀ぢて以て遊騁し、(四八)春臺の(四九)熙熙たるに登り、(五〇)金貂の(五一)炯炯たるを珥む。苟に(五二)趣舍の途を殊にせる、庸詎ぞ其の(五三)躁靜を識らん。

【大意】四時更代して萬物遞に相遷迫す。花草の開落を見て盛衰の理を察すべし。冬は枯れて春は芽ぐみ、夏は茂りて秋は落つ。草木の榮枯、誠に小事なりと雖も、人情亦此に隨つて憂樂の別なき能はず。宋玉嘗て九辯を作りて曰く、秋の氣たる誠に悲し。蕭蕭として草木凋衰し、人情亦隨つ

【一五】末士。士は一本に事に作る。小事なり。
【一六】榮悴。盛衰榮枯なり。
【一七】宋玉。楚の大夫。その作れる所の九辯、楚辭に見ゆ。
【一八】蕭瑟。秋の聲なり。さびしきこと。
【一九】憭慄。傷み念ふ貌。
【二〇】遠行。遠方の行路。
【二一】慕徒。徒は侶なり。友を慕ふこと。
【二二】羈旅。行旅なり。
【二三】四感。四つの憂、遠行、登山、臨水、送歸をいふ。
【二四】一塗。一途に同じ。
【二五】游氛。秋氣なり。
【二六】輕箑。輕き扇。
【二七】纖絺。細き葛布の衣。
【二八】莞蒻。蒲にて編みし席。
【二九】御。著ること。
【三〇】槭。葉の落つる貌。
【三一】灑落。さらさら落ること。
【三二】戾。勁疾の貌。
【三三】嘒嘒。蟬の聲なり。
【三四】晃朗。明なる貌。
【三五】悠揚。日の入る貌。

【三六】短晷。日の短きこと。
【三七】朣朧。月初めて出づる貌。
【三八】階闥。階段及び小門。
【三九】軒屏。軒及び墻。
【四〇】離鴻は北に歸る雁。晨吟は朝鳴くこと。
【四一】流火。流は下なり、火は星の名。秋は火星西に下る。故に餘景といふ。
【四二】耿介。心の安からざる貌。
【四三】華省は官廳なり。展轉は眠られずして、幾度も臥がへりすること。
【四四】斑鬢。鬢の毛の白黒相雜れるをいふ。
【四五】鞏僊。多くのすぐれたる人。序の蟬冕綺紱の人を指す。
【四六】逸軌。高迹なり。高き位ないふ。
【四七】雲漢。高位に喩ふ。
【四八】春臺。はれやかなる臺、高位に喩ふ。
【四九】熙熙。心ののびのびする こと。
【五〇】金貂。金蟬貂尾の冠。高官の人の冠なり。
【五一】炯炯。光る貌。
【五二】趣舍。遇不遇といふが如し。
【五三】躁靜。動靜といふが如し。

て悲傷し、恰も他鄕に在りて山に登り水に臨み、將に歸らんとする人を送別するが如き感ありと。夫れ歸らんとする人を送る時は戀慕の心なき能はず、他鄕に在れば懷鄕の情なき能はず、水に臨めば歲月流水の如しの嘆なき能はず、山に登れば遠きを懷ひ近きを悼むの感なき能はず。此の四愁の心を痛ましむる、その一に遭ふも尙ほ心に忍び難し。況んや此の四に遭ふをや。ああ秋は實に愁嘆の極なりと謂ふべきなり。野を望まんか、歸燕の相携へて去るあり。澤に臨まんか、翔隼の相擊つあり。冷氣朝に起りて枯葉夕に落つ。乃ち扇を棄て絺を脫ぎ、蒲席を敷きて袷衣を著る。庭樹凋落し勁風幔を吹き、蟬鳴き雁歸り、天高く陽氣衰へ、日短くして夜長く、月は光を含んで暗く、露は寒を凝らして淸く、螢火飛び蟋蟀鳴き、晨には歸雁の啼くを聽き、夕には火星の餘光を望み、徹宵寐ねられずして官署に展轉す。歲月の移り易きを悟り、慨然として俯して思へば、鬢髮白に化して領に垂る。翻つて高貴の人を見れば、恰も雲漢を攀ぢ春臺に登るが如く、揚揚自得して金貂の冠を戴けり。然れども人に遇不遇の變あり。復た何ぞ其動靜を論ぜんや。

〔五四〕至人の〔五五〕休風を聞き、〔五六〕天地を一指に齊うす。〔五七〕彼れ安きを知りて危きを忘れ、固に生を出でて死に入り、行いて趾を跡を容るるに投じ、踐まざるに殆くして底るを獲。足を側つるを闕りて以て泉に及ばば、猴猨と雖

【五四】至人。至德の人。
【五五】休風。美風といふが如し。
【五六】天地云云。莊子齊物論に天地モ一指ナリ。萬物モ一馬ナリとあり。

も履まじ。龜骨を〔五八〕宗祧に祀られ、身を綠水に反さんことを思ふ。且く衽を斂めて以て歸り來り、忽ち〔五九〕紱を投じて以て高く厲り、〔六〇〕東皐の沃壤に耕し、〔六一〕黍稷の餘稅を輸し、泉は湍を石間に涌かし、菊は芳を〔六二〕崖澨に揚ぐ。秋水の〔六三〕涓涓たるに澡ぎ、〔六四〕游鯈の〔六五〕瀲瀲たるを玩び、山川の阿に〔六六〕逍遙して、人間の世に〔六七〕放曠し、優なるかな游なるかな、聊か以て歲を卒へん。

【大意】余嘗て至人の美風を聞き、天地を視ること一指に齊し。彼の得意の人の如きは、榮利を以て安しとなし、其危きを忘る。所謂生地を棄てて死地に入り、足を一跡の地に投じ、進み踐まずして纔に安全の地を保てるが如し。若し足を側つるの地を留め、足外の地を掘りて泉に及ばば、猿の捷と雖も豈よく履まんや。危いかな。(顏氏家訓に、人足の履む所數寸に過ぎず。然れども咫尺の途必ず崖岸に顚蹷し、拱抱の梁毎に川谷に沈溺するは何ぞや。其傍に餘地なきが爲なりとあり)。龜其骨を宗廟に祀らる。貴は則ち貴なり。然も再び綠水に歸らんと欲するも復た得べからざるなり。(莊子秋水篇參照、貴者患に遇ひ、再び貧賤に歸らんとするも能はざるに喩ふ) 余因つて衣綬を斂め、榮利を棄てて自ら厲

【五七】彼れ。得意の人を指す。
【五八】宗祧。宗廟なり。
【五九】紱。印綬なり。
【六〇】東皐。水田を皐といふ。東は春なり。
【六一】黍稷。キビなり。
【六二】崖澨。水崖なり。
【六三】涓涓。水の流るる貌。
【六四】游鯈。小魚なり。
【六五】瀲瀲。游行する貌。
【六六】逍遙。散逸の貌。
【六七】放曠。拘束なき貌。

み沃壤の地に耕し、餘を存して租稅に供し、石間の清泉を掬び、崖畔の芳菊を摘み、秋水に噪ぎ游魚を玩び、山川の間に逍遙して、世間の煩累を受けず、優游自適して以て其天年を終へんと欲す。

雪の賦

(一)謝惠連

歳將に暮れんとし、時既に昏なり。寒風積り、愁雲繁し。(二)梁王悅ばずして(三)兎園に游び、乃ち旨酒を置き、賓友に命じ、(四)鄒生を召し、(五)枚叟を延く。(六)相如末に至り、客の右に居る。俄にして微霰零ち密雪下る。王乃ち(七)北風を衞詩に歌ひ、(八)南山を周雅に詠じ、(九)簡を(一〇)司馬大夫に授けて曰く、子の秘思を抽き、子の姸辭を騁せ、色を侔うし稱を揣り、(一一)寡人の爲に之を賦せよと。相如是に於て席を避けて起ち、(一二)逡巡して揖して曰く、臣聞く(一三)雪宮は東國に建ち、(一四)雪山は西域に峙ち、(一五)岐昌は詠を(一六)來思に發し、(一七)姬滿は歌を(一八)黃竹に申ね、(一九)曹風は麻衣を以て色を比べ、(二〇)楚謠は幽蘭を以て曲を儷べ、尺に盈つれば則ち瑞を豐年に呈し、丈に袤れば則ち沴を陰德に表す。雪の時義遠きかな。請ふ其始を言はん。

【大意】歳暮の夕、寒風吹いて陰雲深し。梁王懌ばずして兎園に遊び、酒肴を備へ、賓友を曾し、鄒陽、枚乘等の文士を召集す。司馬相如後れて至り、亦賓客の右に坐す。少焉にして密雪降る。王因つて衞風北風の章、小雅南山の章を歌ひ、紙牘を司馬相如に與へて曰く、乞ふ汝が深秘の思を發し、姸麗の辭を聯ね、雪と其色を侔うし、其の稱ふ所を量りて、此雪を賦せよと。相如乃ち起つて揖して曰く、臣聞く雪宮は東國に在り、雪山は西域に在り。文王は今我來思、雨雪霏霏と歌ひ、穆王は黃竹歌三章を作り、曹風は白雪を以て麻衣に比し、楚謠は白雪を以て幽蘭に配し、尺に盈つれば豐年の瑞となり、丈に過ぐれば、陽傷陰盛の災を成すと。雪の意義亦深遠なり。今更に其始を言はん。

【一】謝惠連。宋の陳郡陽夏の人、年十歳にして能く文を屬す、族兄靈運深く之を賞す、年二十七にして卒す。

【二】梁王。梁の孝王は漢の文帝の子なり。但し今假に設けて言ふなり。

【三】兎園。梁の孝王の園の名。

【四】鄒生。鄒陽なり。

【五】枚叟。枚乘なり。

【六】相如。司馬相如なり。

【七】北風。詩經の衞風に北風其レ涼ク、雨雪其レ滂タリとあり。

【八】南山。詩經小雅南山に上天雲ヲ同ウシ、雨雪雰雰タリとあり。

【九】簡。竹札なり。

【一〇】司馬大夫。司馬相如なり。

【一一】寡人。德の少き人の意、王侯の謙稱。

【一二】逡巡。退却なり。

【一三】雪宮。齊に在る宮の名、齊は山東省なり、故に東國といふ。

【一四】雪山。西域に在る山の名。

【一五】岐昌。岐は周の居りし地名、昌は周の文王の名。

【一六】來思。思は助辭にして意義なし。詩經に昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏とあり。

【一七】姬滿。姬は周の姓、滿は周の穆王の名。

【一八】黃竹。穆王黃臺の丘に遊ぶ、大に寒くして北風雪をふらす、王詩三章を作りて以て人を哀む。

【一九】曹風。詩經の曹風に蜉蝣ノ掘閱、麻衣雪ノ如シとあり。

【二〇】楚謠。楚の宋玉の諷賦に臣嘗テ行イテ主人ニ至ル、獨リ一女アリ、臣ヲ蘭房ノ中ニ置ク、臣琴ヲ授ケテ之ヲ鼓セシム、幽蘭白雪ノ曲ヲナスとあり。

若し乃ち(三)玄律弱りて(三)嚴氣升り、(三)焦溪涸れて(三)湯谷凝り、(三)火井滅えて溫泉氷り、(三)沸潭涌くことなく炎風興らず、(三七)北戸扉を墐り(三八)裸壤繒を垂る。是に於て河海雲を生じ、(三九)朔漠沙を飛ばし、氛を連ね(三〇)霧を累ね、日を掩ひ霞を韜み、霰(三一)淅瀝として先づ集り、雪(三二)紛糅して遂に多し。其の狀たるや、散漫交錯して(三三)氛氳蕭索、謦謦浮浮、瀌瀌奕奕たり。(三四)聯翩として(三五)飛灑し、徘徊して(三六)委積し、始は甍に緣りて棟を冒し、終は籠を開いて隙に入り、初は(三七)墀廡に(三八)便娟として、末には(三九)帷席に縈盈し、既に方に因りて(四〇)珪をなし、亦圓に遇ひて(四一)璧をなす。隰を眄れば則ち(四二)萬頃縞を同うし、山を瞻れば則ち千巖俱に白し。是に於て臺は璧を重ねたるが如く、逵は璐を連ねたるに似たり。庭には(四三)瑤階を列ね、林には(四四)瓊樹を挺んで、皓鶴も鮮を奪はれ、(四五)白鷳も素きを失ひ、(四六)紈袖も

【三】玄律窮る。十二月をいふ。
【三】嚴氣。寒氣なり。
【三】焦溪。溪の名。
【三】湯谷。冬も夏も溫かなる川。
【三】火井。蜀に在り、井中常に火を出す。
【三】沸潭。沸騰せる潭。
【三七】北戸。北に向へる戸。
【三八】裸壤。裸人國なり。
【三九】朔漠。北方沙漠の地。
【三〇】霧。靄なり。
【三一】淅瀝。細に下る貌。
【三二】紛糅。相雜ること。
【三三】氛氳。皆盛に飛ぶ貌。
【三四】聯翩。雪の飛散する貌。
【三五】飛灑。ふり注ぐこと。
【三六】委積。つもること。
【三七】墀廡。堂下の周屋なり、ヒサシ。
【三八】便娟。雪の輕く廻る貌。
【三九】帷席。帷はトバリなり。
【四〇】珪。四角なる玉。
【四一】璧。圓き玉。
【四二】萬頃。一頃は田百畝の面積なり。縞は白きこと。
【四三】瑤階。玉の階段。
【四四】瓊樹。玉樹なり。
【四五】白鷳。鳥の名。
【四六】紈袖。白絹の袖。

冶しきに慙ぢ、(四七)玉顏も嫮きを掩ふ。若し乃ち(四八)積素未だ虧けず、白日朝に鮮かなれば、爛たる(四九)燭龍の燿を銜み、(五〇)崑山を照すが若し。爾して其の滴を流し氷を垂れ、霤に緣り隅に承くれば、粲たること(五一)馮夷の蚌を剖き、明珠を列ぬるが若し。夫の(五二)繽紛繁驚の貌、(五三)皓汗皦潔の儀、廻散積(ハ)勢、飛聚凝曜の奇に至りては、固に(五四)展轉して窮りなし、嗟得て備に知り難し。

【大意】若夫れ嚴冬寒氣上升し、焦溪涸れ湯谷氷り、火井消え溫泉氷り、沸潭湧かず炎風起らず、北戸に泥を塗りて寒風を防ぎ、裸人國人も衣を纏ふの時に至れば、河海雲を起し沙漠沙を飛ばし、氛靄を連積して霞日を掩ひ、微霰先づ至り飛雪紛紛として降る。その狀たる甍棟に堆積し、壁穴を經過し、廡廂に舞ひ帷幔を廻り、方形に遇ひては方珪となり、圓物に遇ひては圓璧となり、或は高臺を掩ひ大路を覆ひて、天地一白、階樹盡く瓊玉の如く、白鶴、白鷳、紈素、玉顏も一たび此に對すれば皆顏色を失ふ。積雪未だ消えず、白日鮮明なる時は、其の光爛然として燭龍の崑山を照すが如く、融解して氷柱を垂るるや、粲然として水神の蚌を剖きて明珠を列ぬるが如し。その飛揚潔白堆積聚散の狀に至りては、變化萬狀にして一一知り盡し難し。

【四七】玉顏。美人の顏。
【四八】積素。積れる白雪。
【四九】燭龍。崑山の神なり。
【五〇】崑山。仙山の名。
【五一】馮夷。水神なり。
【五二】繽紛繁驚。雪の烈しくふる貌。
【五三】皓汗皦潔。潔白なる貌。
【五四】展轉。變轉なり。

若し乃ち娯玩の已むなきを申ぶれば、夜幽靜にして懷多く、風楹を觸つて響を轉じ、月幌に承けて暉を通ず。〔三三〕湘吳の醇酎を酌み、〔三四〕狐貉の〔三五〕兼衣を御し、〔三六〕庭鵾の雙び舞ふに對し、雲雁の孤り飛ぶを瞻、〔三七〕〔園中の萱草を折り、階上の芳薇を摘み〕、霜雪の交り積れるを踐み、〔三八〕枝葉の相違へるを憐み、遙思を千里に馳せ、手を接へて同じく歸らんことを願ふと。鄒陽之を聞き〔三九〕瀟然として心服し、妍唱を懷ふあり。敬んで末曲に接がんとす。是に於て乃ち作つて積雪の歌を賦す。歌に曰く、佳人を携へて重幄を披き、綺衾を援いて芳縟に坐し、〔四〇〕薰鑪を燎いて明燭を炳し、〔四一〕桂酒を酌んで〔四二〕清曲を揚ぐと。又續いで白雪の歌を爲る。歌に曰く、曲既に揚り酒既に陳り、〔四三〕朱顏酡として自ら親まんことを思ふ。帷を低れて以て枕を昵づけんことを願ひ、珮を解いて紳を褫かんことを念ふ。年歲の暮れ易きを怨み、後會の因なきを傷む。君寧く階上の白雪を見るか、豈耀を陽春に鮮にせんやと。歌卒る。王乃ち〔四四〕尋繹吟翫し、撫覽扼腕し、顧みて〔四五〕枚叔に謂ふ、起つて〔四六〕亂を爲れと。亂に曰く、白羽白しと雖も質以て輕し。白玉白しと雖も空しく貞を守る。未だ若かず茲雪の時に因つて興滅するに。玄陰凝りて其潔を昧うせず。太陽曜いて其節を固うせず。節豈我が名ならんや。潔豈我が貞ならんや。雲に憑りて升降し、風に從つて飄零し、物に値ひて像を賦し、地に任せて形を班つ。〔四七〕素は遇ふに因りて立ち、汗は染むるに隨つて成る。心を〔四八〕皓然に縱にし、何をか慮り何をか營まんや。

【大意】雪夜の娯樂を述べんか、夜靜にして感懷多く、風は楹を擊つて響を轉じ、月は窓簾を照して光を通ずる時、美酒を酌み重裘を襲ね、鵾雞の雙び飛ぶを見、鴻雁の獨り飛ぶを見、霜雪積りて枝葉を壓するを見ては覺えず故鄉の兄弟を慕ひ、思を千里に馳せ、手を携へて俱に歸らんことを思ふと。鄒陽之を聞き大に心服し、之に唱和せんことを思ひ、乃ち起つて積雪の歌を作る。其歌に曰く、美人を携へて帷幔を披き、入りて衾縟に坐し、香を焚き燭を明にし、美酒を酌み美歌を奏せんと。又續いで白雪の歌を作る。其歌に曰く、美歌既に起り、酒既に陳り、醉顏赧くして美人と相親み、帷を垂れ枕を近づけ、帶を解いて臥せんことを思ふ。因つて歲月の過ぎ易く、再會の期し難きを怨む。君見よ階上の白雪、よく其光を陽春に保たんやと。歌終る。王口吟再四にして

【五五】湘吳。吳の湘川の水を以て釀せる酒。
【五六】狐貉。皮裘なり。
【五七】兼衣。重ねて著ること。御は著ること。
【五八】庭鵾。鵾は雞の大なるもの。
【五九】園中云云。李善本にこの二句なし、萱草芳薇は雪中の物にあらず、削るべきに似たり。
【六〇】枝葉。兄弟に喩ふるなり、時に惠連彭城王に仕へ其家親に離る。
【六一】瀟然。煩悶の貌。
【六二】薰鑪。香爐なり。
【六三】桂酒。桂を以て酒中に投じ香を取るなり。
【六四】清曲。妙音なり。
【六五】朱顏。醉ひて赤き顏。酡は赤色の面に著はるること。
【六六】尋繹。つづくること。

【六七】枚叔。枚乘なり。
【六八】亂。賦の終に置きて一篇の大意を總ぶる辭。
【六九】素。白きこと。
【七〇】皓然。一本浩然に作る。是なるに似たり。

更に枚乘に命じて亂を作らしむ。亂に曰く、白羽は白しと雖も其質輕く、白玉は白しと雖も固く其節を守る。共に此の白雪の時に隨つて或は消え或は生ずるに如かざるなり。あゝ此の白雪たる、玄陰凝るも其潔を味ます能はず、太陽曜けば其節を固執せずして退き去る。節と潔とを固執せずして、風雲に隨つて去來し、物に遇ひ地に任じて、各其形を賦し、其色白きも之を汚せば又染まる。心を自然に任せて、思慮經營することなしと。

月の賦

(二)陳王初め(三)應劉を喪ひ、端憂して暇多し。綠苔閣に生じ芳塵榭に凝り、(四)悄焉として懷を疚め、中夜に怡びず。乃ち(五)蘭路を清め桂苑を肅め、吹を寒山に騰げ(六)蓋を秋坂に弭め、濬壑に臨んで遙なるを怨み、崇岫に登りて遠きを傷む。時に(七)斜漢左に界ひ、(八)北陸南に躔り、白露空に曖く、(九)素月天に流る。(一〇)齊章に沈吟し、

【一】謝希逸。謝莊、字は希逸、宋の陳郡陽夏の人、仕へて光祿大夫に至り、泰初二年卒す、時に年三十六。

【二】陳王。魏の曹植なり。假に陳王を設けて端を起すなり。

【三】應劉。應瑒、劉楨なり、魏の文士なり。

【四】悄焉。憂ふる貌。

【五】蘭路。蘭の生ずる道。

【六】蓋。車の幌。

【七】斜漢。斜なるアマノガハ。

【八】北陸。虛宿の別名。星の名なり。

【九】素月。白き月。

【一〇】齊章。詩經齊風に東方ノ月、彼ノ姝タル子、我ガ闥ニ在りとあり。

(二)謝希逸

(一一)陳篇に(一二)殷勤なり。毫を抽き牘を進めて、以て(一三)仲宣に命ず。仲宣跪いて稱して曰く、臣は東鄙の(一四)幽介にして、(一五)丘樊より長り、道に昧く學に憒く、孤り明恩を奉ず。臣聞く(一六)沈潛既に義あり(一七)高明既に經あり。日は陽を以て德あり月は陰を以て靈あり。(一八)扶光を以て東沼に擅にし、(一九)若英を(二〇)西冥に嗣ぎ、(二一)玄兎を帝臺に引き、(二二)素娥を(二三)后庭に集め、(二四)朏朒闕を警め、(二五)朏魄沖を示し、(二六)辰に順ひて(二七)通燭し、星に從つて(二八)澤風あり。華を(二九)台室に增し、彩を軒宮に揚ぐ。照を委れて(三〇)吳業昌え、精を淪めて(三一)漢道融る。

【大意】應場、劉楨の二子死す。陳王曹植其才を惜み、端然として憂へ、復た娛遊せず。

【一】陳篇。詩經陳風に月出デテ皎タリ佼人僚タリとあり。

【二】殷勤。深く思ふこと。

【三】仲宣。王粲、字は仲宣、魏の文士なり。

【四】幽介。幽賤孤介の人。

【五】丘樊。樊は籬なり。

【六】沈潛。地をいふ。

【七】高明。天をいふ。

【八】扶光。扶桑の光。扶桑は東方日出の處に在る木、

【九】東沼。日の出づる處、暘谷なり。

【一〇】若英。若木の花　若木は日の入る處にあり。

【一一】西冥。日の入る處、昧谷なり。

【一二】玄兎。月なり。月中に兎ありと。

【一三】帝臺。帝王の臺。

【一四】素娥。月なり。娥は嫦娥とて羿の妻なり、不死の藥を竊んで月中に奔る。

【一五】后庭。后妃の庭なり。

【一六】朏朒。朔にして月東方に見ゆるを朏といひ、晦にして西方に見ゆるを朒といふ。闕は德を失ふこと。

【一七】朏魄。ミカヅキ。月の光を生ずること。沖は謙なり。

【一八】辰。十二辰なり、月の宿る處。

【一九】通燭。照すこと。

【二〇】澤風。雨風なり。書經に月ノ星ニ從フ時ハ以テ風フキ以テ雨フルとあり。

【二一】台室。王公の位なり。

【二二】吳業。吳の孫堅の夫人、月の懷ると夢みて策を生み、吳業盛なり。

【二三】漢道。漢の李夫人。月懷に入ると夢みて元帝を生み、漢室を中興す。

階庭の間綠　苔生じ芳塵凝り、憂愁して中夜に至る。因つて憂を霽さんと欲し、苑中の山坂を清め、車に駕して出遊し、深壑に臨み高山に登る。時方に秋なり。天漢西に斜にして北陸星南に躔り、白露空に滿ちて月光天に流る。陳王乃ち齊風陳風の詩篇を吟じ、筆紙を授け王粲に命じて月を賦せしむ。王粲跪いて奏して曰く、臣は東邊の鄙人にして、道に暗く學に昧く、虛しく明王の高恩を受く。聊か賦を奏して高恩に報いん。臣聞く天地各其道あり。日は陽を以て德となし、月は陰を以て德となす。月東方に出でては日の明に代り、西方に出でては日の曜を嗣ぎ、帝王の臺、后妃の庭を照し、朔晦には人君の闕德あるを警め、朏魄は人君謙沖の德あるを示し、辰に順つて天下を照し、星に從つて風雨を起し、華彩を宮庭に揚げ、其光を垂れては吳漢の王業を盛らしむ。

若し夫れ氣地表に霧れ、雲天末に斂まり、【三】洞庭始めて波たち木葉微く脫ち、菊は芳を【三】山椒に散じ、雁は哀を江瀨に流せば、清質の悠悠たるを升げ、澄暉の藹藹たるを降し、【三】列宿縡を掩ひ【三】長河映を韜み、【三】柔祇雪のごとく凝り【三】圓靈水鏡のごとく縞く、【四】周除冰のごとく淨し。君王乃ち晨歡を厭ひて宵宴を樂み、妙舞を收めて【四】清縣を弛き、【四】燭房を去りて月殿に卽き、芳酒登りて鳴琴薦む。若し乃ち涼夜自ら凄く、【四】風篁韻を成し、【四】親懿從ふなく【四】羈孤遞に進み【四】皐禽の夕に聞ゆるを聆き、【四】朔管の秋引を聽く。是に於て【四】紘桐響を練び、音容和を選び、【五】房露に徘徊し【五】陽阿に惆悵し、聲林【五】籟を虛うし、【五】淪池波を滅し、情【五】紆軫して其れ何にか託かん、【五】皓月に憑つて長く歌ふ。歌に曰く、【五】美人邁いて【七】音塵闕え、千里を隔てて明月を共にす。風に臨んで歎くと將た烏んか歌まん、川路長くして越ゆべからずと。歌響未だ終らざるに、餘景畢に就き、滿堂容を變へ、廻遑して失べるが如し。又歌を稱して曰く、月既に沒し露晞かんと欲す。歲方に晏れて與に歸るなし。【五八】佳期以て還るべし。【五九】微霜人衣を霑すと。陳王曰く善しと。乃ち執事に命じ、【六〇】壽を獻じ壁を羞む。敬んで玉音を佩び、之を復

【三】洞庭。湖の名、楚辭に洞庭波タチテ木葉下ルとあり。
【三】山椒。山頂なり。
【三】列宿。列星なり。縡は采飾なり。
【三】長河。アマノガハなり。
【三】柔祇。地なり。
【三】圓靈。天なり。
【三】連觀。觀は樓臺なり。
【四】周除。まはりの庭。

【四】清縣。縣は懸なり。樂器を懸くること。
【四】燭房。燈火のある室。
【四】風篁。風叢竹を拂ふこと。
【四】親懿。親戚兄弟なり。
【四】羈孤。旅客孤子なり。
【四】皐禽。鶴なり。
【四】朔管。羌笛なり、北胡の笛。
【四】秋引。悲き聲。
【五】紘桐。琴なり。
【五】房露。古曲の名ならんといふ。
【五】陽阿。歌曲の名。
【五】籟。響なり。
【五】淪池。論は綸なり、文章なり。
【五】紆軫。紆は曲、軫は痛なり。
【五】皓月。明月なり。
【五】美人。君子に喩ふ。
【五】音塵。音信といふが如し。
【五】佳期。君子に喩ふ。
【五】微霜。譖人に喩ふ。
【六〇】壽。金品を人に贈るを壽といふ。

して歎ふなし。

【大意】若し夫れ氣收まり天晴れ、菊散り雁啼くの時に至れば、月色益〻冴えてその光悠悠藹藹たり。列星天河も皆其光を潛め、地は凝雪の如く天は水鏡の如く、觀宇庭除亦淨潔なり。君王乃ち晝日の賞を厭ひ、夜宴を樂み、妙舞を棄て鐘鼓を廢し、燭火の室を去りて月華の殿に往き、琴酒を進めて清景を賞す。時しも夜凉水の如く、風叢竹を拂ひて韻を成し、親戚兄弟の相從ふなく、羈客孤人更進見し、皐鶴胡笳の哀聲を聽く。乃ち琴音を擇び、和音を選ぶも、此曲知音と同じく聞かざるを恨む。風止んで林籟靜まり、池水の波紋また消ゆるに至れば、情痛んで依託する所なく、ただ明月に向つて長歌するのみ。其歌に曰く、君子行き去りて音信絶え、千里を隔絶して同じく此月を觀る。風に臨んで嘆息して止まず。一たび君子を見んことを思へども、行路長遠にして越ゆべからずと。歌未だ畢らざるに、月影已に沒し、人皆容を變じ、惘然として自失す。又歌を奏して曰く、月既に沒し露晞かんと欲す。歲晩れて未だ歸する所を知らず。君子宜しく退いて歸るべし。恐らくは讒人の害に遇はんことをと。陳王曰く善しと。乃ち執事に命じて、璧を王粲に賜はしむ。粲反復之を佩びて厭ふことなし。

鳥獸

鵬鳥の賦竝序

(二)賈誼

誼長沙王の傅たること三年、鵬鳥あり飛んで誼の舍に入り、坐隅に止まる。鵬は鴞に似、不祥の鳥なり。誼既に謫を以て(二)長沙に居る。長沙は(三)卑濕なり。誼自ら傷悼して以爲らく、壽長きを得じと。乃ち賦を爲りて以て自ら廣うす。其辭に曰く、

(四)單閼の歲、四月(五)孟夏、庚子日斜なり。鵬余が舍に來り萃る。私に其故を怪み、書を發いて之を占ふ。(六)讖に其度を言ふ。曰く野鳥室に入れば、主人將に去らんとすと。鵬に請ひ問ふ。余去つて何にか之かん。吉か我に告げよ、凶ならば其災を言へ。(九)淹速の度、余に其期を語れと。鵬迺ち歎息し、首を擧げ翼を奮ふ。口言ふ能はず。請ふ對ふるに(一〇)臆を以てせん。曰く萬物變化

【一】賈誼。漢の洛陽の人、漢の文帝召して博士となす、絳灌等の讒に遇ひ、長沙王の傅に貶せらる、時に鵩鳥室に入り其承塵に巢ふ。俗に云く此鳥人家に入れば主人當に死すべしと。誼因つて此賦を作り死生を齊うして自ら寬うす。

【二】長沙。地名、今の湖南省の地。

【三】卑濕。地低くして濕ふ。

【四】單閼。卯の歲をいふ。漢の文帝の六年なり。

【五】孟夏。夏の初。庚子はカノエネの日。

【六】閑暇。驚恐せざる貌。

【七】異物。鵩を指す。

【八】讖。未來記なり。

【九】淹速。遲速なり。

【一〇】臆。心中の考。

して固に休息するなし。(一)斡流して遷り或は推して還る。形氣轉續して變化(二)蠙の而し。(三)汹穆として窮りなし。胡ぞ勝て言ふべけんや。禍は福の倚る所、福は禍の伏する所なり。憂喜門に聚り吉凶域を同うす。彼の吳の彊大なるも、(四)夫差以て敗れ、越の(五)會稽に棲めるも、(六)句踐世に霸たり。(七)斯の遊遂に成り、卒に五刑を被り、(八)傅說胥靡にして、乃ち武丁に相たり。夫れ禍と福とは、何ぞ糾へる纆に異らん。(九)命は說くべからず。孰か其極を知らん。水激すれば則ち悍に、矢激すれば則ち遠し。萬物(一〇)回薄し、振盪して相轉る。雲蒸し雨降り、糾錯して相紛る。(一一)大鈞物を播き、(一二)埃圠として垠なし。天は預め慮るべからず。遲速(一三)命あり。焉んぞ其時を識らん。

【大意】丁卯四月庚子の日、日將に暮れんとする頃、鵩鳥余が家に來り、座側に止まりて去らず。少しも驚恐の色なし。余心に其故を怪み、未來記を發いて之を占へるに、曰く鵩鳥室に入るは主人遠去の兆なりと。余因つて鵩に問ふ。余去つて何處に往くや。吉事あらば余に語れ。凶事あらば其災を

【一】斡流。轉流なり。
【二】蠙。蟬のぬけがら。
【三】汹穆。分別すべからざる貌。
【四】夫差。吳王の名、越と戰つて敗れぬ。
【五】會稽。山の名。
【六】句踐。越王の名。
【七】斯。李斯なり。
【八】傅說。殷王武丁の賢臣。胥靡は刑人なり。
【九】命。生命なり。
【一〇】回薄。めぐり迫ること。
【一一】大鈞。造化なり。
【一二】埃圠。際限なき貌。
【一三】命。運命なり。

告げよ。遲速の期亦以て余に語るべしと。鵩乃ち歎息し首を擧げ翼を奮ふ。其狀我れ口言ふ能はず、請ふ答ふるに臆中の事を以てせんと言ふものの如し。因つて曰く、萬物變化し遷轉反覆して定まるなし。形氣の相推讓すること蟬の殼を蛻するが如し。紛雜窮りなし。何ぞ勝げて言ふべけんや。禍は福に因りて生じ、福は禍に因つて生じ、憂凶あれば喜吉あり。皆相倚り相隨ふなり。故に吳王夫差の强大なるも終に敗北し、越王句踐敗れて會稽の恥を蒙りしも、終に一世に霸たり。李斯は秦に客遊して身相位に登りしも、終に趙高の讒に遇ひて五刑を蒙りて死し、傅說は刑人となりて傅巖に築きしも、終に武丁に仕へて相位に登れり。要するに禍と福とは糾へる索の如く、表裏を相成すものなり。人命の如きは始あれば終あり、終あれば又始あり。誰か其の窮極する所を知らんや。水の流れ矢の飛ぶ各常度あり。然も物の激する所となれば、或は悍く或は遠し。人も亦然り。禍に激せられて福に至り、福に激せられて禍に至る。相遷轉して常なきなり。恰も地氣上りて雲となり、天氣降りて雨となるが如く、造化の萬物を生ずる、紛雜して垠なきが如し。天道は深遠にして豫め慮測すべからず。遲速命あり。何ぞ能く其時を知らんや。且夫れ天地は(一四)鑪たり、造化は工たり、陰陽は炭たり、萬物は銅たり。合散消息すること、安んぞ常則あらん。千變萬化して、未だ始より極あら

【一四】鑪。火牀、金を鑄冶する處。

ず。忽然として人となるも、何ぞ㊀控摶するに足らん。化して異物となるも、又何ぞ患ふるに足らん。小智は自ら私し、彼を賤み我を貴ぶ。㊁達人は大觀す、物として可ならざるはなし。貪夫は財に徇ひ、烈士は名に徇ひ、㊂夸者は權に死し㊃品庶は生を每る。㊄怵迫の徒、或は西東に趨る。大人は曲らず、意變齊同す。愚士は俗に繫がれ、窘むこと㊅囚拘の若し。㊆至人は物を遺れ、獨り道と俱にす。衆人は惑惑として、好惡㊇億に積る。眞人は㊈恬漠として、獨り道と息ふ。智を釋て形を遺れ、超然として自ら喪ひ、㊉寥廓忽荒として、道と翱翔す。流に乘りては則ち逝き、㊊坻を得ては則ち止まり、軀を縱にし命に委し、私に己に與せず。其の生くるや浮べるが若く、其の死するや休ふが若し。㊋澹乎として繫がざるの舟の若し。生の故を以て自ら寶とせず、㊌泛乎として繫がざるの舟の若し。死の故を以て空を養つて浮ぶ。德人は累なく、命を知りて憂へず。㊍細故蒂芥、何ぞ以て疑ふに足らんやと。

【大意】且つ天地は火鑪たり、造化は冶工たり、陰陽は炭たり、萬物は銅たり。聚散離合すること、定則あるなし。忽然として人となるも、引持して自ら惜むに足らず。化して異物となるも、亦敢て患ふるに足らず。小智の人は己を愛して萬物を賤めども、達人は大觀す、故に萬物を視ること己に異らず。貪夫は財を求めて身を滅し、烈士は名を求めて命を棄て、夸者は權勢の爲に死し、衆人は生命を貪り、貧賤に驅られて東西奔走すれども、大人は曲げて其身に私せず、意と變化と齊同す。至人は自然と共に往來し、形體を忘れ天命に任せ、生を以て悅ばず、死を以て悲まず。些細の事故に遇ひて疑惑することなしと。

【一】㊀控摶。控は引なり、摶は持なり。
【二】㊁達人。事理に通達せる人。
【三】㊂夸者。權勢を貪り世に矜らんとする人。
【四】㊃品庶。凡人なり。
【五】㊄怵迫。貧賤に迫られて恐るる者。
【六】㊅囚拘。囚人なり。
【七】㊆至人。至德の人。
【八】㊇億。臆なり、心中なり。
【九】㊈恬漠。安靜なる貌。
【十】㊉寥廓忽荒。空しくして著くことなき貌。
【十一】㊊坻。水中の小洲。
【十二】㊋澹乎。無慾なる貌。
【十三】㊌泛乎。漂ふ貌。
【十四】㊍細故は小事なり。蒂芥は刺鯁なり。

鸚鵡の賦竝序

禰正平

時に黃祖の太子射、賓客大會す。鸚鵡を獻ずる者あり。酒を衡の前に擧げて曰く、㊀禰處士、今日用て賓を娛ましむるなし。竊に以るに此鳥遠きよりして至り、明惠聰善にして、㊁羽族の貴ぶべきものなり。願くは先生之が賦を爲り、㊂四座をして咸共に榮觀せしめば、亦可ならず

【一】㊀禰正平。名は衡、字は正平、後漢の平原の人なり、少より才辯ありて氣傲を尙ぶ、曹操召して鼓吏となす、其狂傲を怒れども才名あるを以て之を殺すを欲せず、劉表に與ふ、表又侮慢を以て容るる能はず、江夏太守黃祖に與ふ、祖の長子射、章陵太守たり、尤も衡に善し、射大に賓客を會す、人鸚鵡を獻ずる者あり、射衡に請ひて之を賦せしむ、衡後黃祖の殺す所となる、時に年二十六。

【二】㊁禰處士。禰衡を指す。仕へざる士を處士といふ。

【三】㊂羽族。鳥類なり。

【四】㊃四座。座中の客。

やと。衡因つて賦を爲る。筆は停綴せず、文は點を加へず。其辭に曰く、

惟れ西域の靈鳥、自然の奇姿を挺んで、(五)金精の妙質を體し、(六)火德の明輝を含み、性辯惠にして能く言ひ、才聰明にして以て(七)機を識る。故に其れ高峻に嬉遊し、幽深に(八)栖跱し、飛んでは妄に集らず、翔りては必ず林を擇ぶ。紺趾丹背、綠衣翠衿、(九)采采たる麗容、(一〇)咬咬たる好音あり。族を羽毛に同うすと雖も、固に智を殊にして心を異にし、(一一)鸞皇に配して美を等うす、焉んぞ德を衆禽に比べん。是に於て芳聲の遠く暢ぶるを羨み、(一二)靈表の嘉すべきを偉とし、(一三)虞人に(一四)隴坻に命じ、(一五)伯益に(一六)流沙に詔し、(一七)崑崙を跨えて(一八)弋を播し、雲霓に冠して羅を張る、(一九)綱維備に設くと雖も、終に(二〇)一目の加ふる所なり。且つ其れ(二一)容止閑暇にして、植を守り安に停り、之に逼れども懼れず、之を撫づれども驚かず、寧く順從して以て生を喪はず。故に全きを獻ずる者は賞を受け、肌を傷る者は刑せらる。爾して乃ち窮に歸し命に委し、羣を離れ侶を喪ふ。閉づるに(二二)彫籠を以てし、其翅羽を翦る。萬里に流飄し、(二三)重阻に(二四)崎嶇し、(二五)岷を踰え(二六)障を越え、載ち寒暑に罹ふ。女は家を辭して人に適き、臣は身を出して主に事ふ。彼の賢哲の患に逢ふも、猶ほ(二八)棲遲して以て(二九)羈旅す。矧んや禽鳥の微物なる、能く(三〇)馴擾して以て安處す。西路を眷みて長く懷ひ、故鄉を望んで(三一)延佇す。陋體の(三二)腥臊を忖る。亦何ぞ(三三)鼎俎に勞せんや。

【五】金精。西方を金となす、この鳥西域に産す。故に金精の妙質といふ。
【六】火德。南方を火となす、背赤き者あり、故に火德といふ。
【七】機。事の機微なり。
【八】栖跱。跱は立なり。
【九】采采。美しき貌。
【一〇】咬咬。鳥の聲なり。
【一一】鸞皇。鸞鳥と鳳凰、神鳥なり。
【一二】靈表。儀容なり。
【一三】虞人。山澤を掌る官。
【一四】隴坻。天水郡にある大坂の名。
【一五】伯益。人名、舜に仕へて虞となる。
【一六】流沙。地名、西域に在り。
【一七】崑崙。山の名、西域にあり。
【一八】弋。いぐるみ、絲を矢に結びて飛鳥を射るなり。
【一九】綱維。網なり。
【二〇】一目。文字に鳥アリ將ニ來ラントス、羅ヲ張ッテ之ヲ待ツモ、鳥ヲ得ル者ハ羅ノ一目ナリとあり。
【二一】容止は擧動なり。閑暇は驚恐せざる貌。

【大意】鸚鵡は西域の靈鳥にして、自然の妙姿を有し、金精を體し、火德を含み、性辯慧にして能く言ひ、才聰明にして機微を識る。故に高峻の處に遊び、幽深の地に栖み、其の飛ぶや必ず木を擇ぶ。其足は紺色、其嘴は赤色、其羽毛は綠色にして、胸前は翠色なり。而して其聲頗る好し。固より衆禽と其撰を異にす。王侯因つて其音聲を美し、其儀容を嘉し、山澤の官に命じて之を隴坻、流沙に求めしむ。乃ち崑崙雲霓の高きを越えて羅を張る。その驚かず、寧く順從して以て生を喪はず。故に全きを獻ずる者は賞を受け、肌を傷る者は刑せらる。爾して乃ち窮に歸し命に委し、羣を離れ侶を喪ふ。閉づるに彫籠を以てし、其翅羽を翦る。萬里に流飄し、重阻に崎嶇し、岷を踰え障を越え、載ち寒暑に罹ふ。女は家を辭して人に適き、臣は身を出して主に事ふ。彼の賢哲の患に逢ふも、猶ほ棲遲して以て羈旅す。矧んや禽鳥の微物なる、能く馴擾して以て安處す。西路を眷みて長く懷ひ、故鄉を望んで延佇す。陋體の腥臊を忖る。亦何ぞ鼎俎に勞せんや。

【一】違忤。人に逆ふこと。
【二】彫籠。彫飾を加へたる籠。
【三】重阻。險阻の地。
【四】崎嶇。山坂を上下すること。
【五】岷。山の名。
【六】障。山の名。
【七】棲遲。ゆつたりと遊ぶこと。
【八】羈旅。行旅なり。
【九】馴擾。人になるること。
【一〇】延佇。久しくたたずむこと。
【一一】腥臊。なまぐさきこと。
【一二】鼎俎。犧牲として神前に供ふること。

羅廣しと雖も、鳥の中る所は其一目に過ぎず。此鳥や擧止靜肅にして節を守りて安停し、人に逆つて其生を喪ふが如き事なし。故に全きを得て之を獻ずる者は賞せられ、鳥の肌肉を傷くる者は刑せらる。此鳥亦性命を人に委し、影籠の中に入れられ、其翅翼を切られ、崎嶇として岷障諸山を越え、寒暑を犯して將來さる。女は人に嫁し臣は君に事へ、禍患に逢へば尙ほ棲遲して羈旅す。況んや鳥の微なる、能く人に馴れて安居す。時に故郷を慕ひて顧望することあれども、自ら身の陋にして腥く、鼎俎の器に堪へざるを以て、生命の安全なるべきを知る。

嗟〔三四〕祿命の衰薄なる、奚ぞ時の〔三五〕險巇に遭へる。豈言語の以て亂を階せるか、將不密にして以て危きを致せるか。母子の永く隔るを痛み、〔三七〕伉儷の生きながら離るるを哀む。餘年の惜むに足るにあらず、衆雛の知なきを慜む。蠻夷の下國に背き、君子の光儀に侍し、名實の副はざらんことを懼れ、才能の奇なきを恥づ。〔三八〕西都の沃壤を羨み、苦樂の宜きを異にするを識り、〔三九〕代越の悠思を懷く、故に言ふ毎に〔四〇〕斯を稱す。若し乃ち〔四一〕少昊辰を司り、〔四二〕蓐收

〔三四〕祿命。天命なり。
〔三五〕險巇。險難なり。
〔三六〕言語。周易に孔子曰ク亂ノ生ズル所ハ則チ言語以テ階チナスナリ、君密ナラザレバ臣チ失フ、臣密ナラザレバ身チ失フとあり。
〔三七〕伉儷。夫婦なり。
〔三八〕西都。長安なり。
〔三九〕代越。代は北方の地、越は南方の地なり、古詩に代馬ハ北風ニ依リ、越鳥ハ南枝ニ巢クフとあり、鳥や馬の故郷を慕ふを言ふ。
〔四〇〕斯。長安の樂みなり。
〔四一〕少昊。西方の帝。
〔四二〕蓐收。秋を司る神。

轡を整へ、嚴霜初めて降りて、凉風〔四三〕蕭瑟たれば、長吟遠慕し、哀鳴して類に感じ、音聲悽として以て激揚し、容貌慘として以て〔四四〕顦顇す。之を聞く者は悲傷し、之を見る者は涙を隕し、放臣は之が爲に屢歎き、棄妻は之が爲に〔四五〕獻欷す。平生の遊處を感ずるに、〔四六〕壎篪の相須つが若し。何ぞ今日の兩ながら絕え、〔四七〕胡越の區を異にするが若くなる。〔四八〕櫺檻に順つて以て俯仰し、〔四九〕戶牖を闚つて以て〔五〇〕踟躕し、〔五一〕崑山の高嶽を想ひ、〔五二〕鄧林の〔五三〕扶疏を思ひ、〔五四〕六翮の〔五五〕殘毀を顧るに、奮迅すと雖も其れ焉にか如かん。心に歸らんことを懷へども果さず、徒に毒を〔五六〕一隅に怨み、苟も心を事ふる所に竭す、敢て惠に背いて初を忘れんや。輕鄙の微命を託し、陋賤の薄軀を委ね、死を守りて以て德に報いんことを期し、辭を盡して以て愚を效さんことを甘んじ、隆恩を既往に恃み、彌久うして渝らざらんことを庶ふ。豈言語の此禍を階せるか。抑事を爲すの密ならずして、

【大意】　ああ運拙くして斯の艱苦に遭ふ。

〔四三〕蕭瑟。秋の聲の淋しき貌。悉は音シ、叶韻
〔四四〕顦顇。痞せ衰ふる貌。
〔四五〕獻欷。泣くこと。
〔四六〕壎篪。樂器の名。壎は土にて作り、篪は竹にて作る。壎唱へて篪和するが如く相親しきをいふ。
〔四七〕胡越。胡は北方の地、越は南方の地、隔絕せるをいふ。
〔四八〕櫺檻。鳥籠なり。
〔四九〕戶牖。鳥籠の窓。
〔五〇〕踟躕。將に飛ばんとする貌。悉は音シ、叶韻
〔五一〕崑山。崑崙山なり。
〔五二〕鄧林。山海經に夸父日ト競走ス、渇死シテ其杖チ棄ツ化シテ鄧林トナルとあり。
〔五三〕扶疏。木の茂ること。
〔五四〕六翮。羽翼なり。
〔五五〕殘毀。傷つけるをいふ。
〔五六〕一隅。一方なり。

此に至れるか。母子の永訣を痛み、夫婦の生別を悲む。已の餘命は惜むに足らざれども、衆雛の無知なるを悲む。蠻夷の國を去りて、今君子の側に侍するも、才能の奇なく名の實に副はざらんことを懼れ、常に西都の樂を思ひ、故郷を慕ひて已まず。言ふ毎に長安の樂を言ふ　若し夫れ秋風一たび動くや、益長呼哀鳴して、昔日羣遊の樂を憶ひ、其聲激切して容貌憔悴し、放臣棄妻一たび之を見聞すれば、皆同情の涙を濺ぐ。昔日雌雄の遊居を思ふに、恰も壎篪の相和するが如し。何ぞ今日相隔絶すること、胡越の域を異にするが如くなる。乃ち籠隙を窺ひて飛び去り、崑山鄧林に至りて遊ばんと欲するも、羽翼損傷して徒に一隅に怨痛するのみ。ただ命に託し身を委ね、死を守りて恩に報い、言辭を發して愚忠を盡し、從來の厚恩を恃んで、其の久しく渝らざらんことを庶ふのみ。

(二)鷤鶋の賦並序

張茂先

鷤鶋は小鳥なり。蒿萊の間に生れ、蕃籬の下に長じ、體陋しくして、人の用をなさず。形微に處ること卑しければ、物之を害するなし。族類を繁滋し、(五)乘居匹遊し、翩翩然として以て自得する

【一】鷤鶋。鳥の名、みそさざい。
【二】張茂先。張華、字は茂先、晉の范陽の人。
【三】尋常。八尺を尋といひ、一丈六尺を常といふ。
【四】生生。生を養ふこと。
【五】乘居は並び居ること。匹

遊ぼ並び遊ぶこと。
【六】赤霄。高き空。
【七】絶垠。遠き處。
【八】翰擧。飛びあがること。
【九】背、距。くちばし、けづめ。
【一〇】貢。みつぎもの。書經の禹貢にソノ貢ハ厥革羽毛とあり。
【一一】翩翩。小飛の貌。
【一二】玄黃。玄は黑なり。
【一三】俎味。俎は肉を盛る器。
【一四】鷹鷂。たか、はやぶさ。
【一五】罿罻。網なり。
【一六】翳薈蒙龍。草木の密なる貌。
【一七】飄颻。高く飛ぶこと。
【一八】翕習。急疾なる貌。
【一九】荊棘。いばら。
【二〇】蓽闌。香草の名。

あり。彼の鸛鶴鵠鴻、孔雀翡翠、或は(六)赤霄の際を陵ぎ、或は(七)絶垠の外に託し、(八)翰擧以て天に沖するに足り、(九)背距以て自ら衞るに足る。然れども皆矰を負ひ繳に纓り、羽毛は(一〇)貢に入る。何となれば人に用あればなり。夫れ言は淺くして以て深きを託すべきあり。類は微にして以て大に喩ふべきあり。故に之を賦すと云爾。』

何ぞ造化の多端なる、羣形を萬類に播く。惟れ鷤鶋の陋體を育ひ、(一一)玄黃の以て自ら貴くするなし。毛は器用に施さず、肉は　俎味に登らず。(一二)鷹鷂過ぎて猶ほ翼を俄く、尙ほ何ぞ(一三)罿罻を懼れん。(一四)翳薈蒙龍たれば、是れ焉に遊集し、飛んで(一五)飄颻颺せず、翔りて(一六)翕習せず。其居容れ易く、其求給し易し。栖むも滯る所なく、遊ぶも盤む所なし。粒に過ぎず。翼を動かして逸し、足を投じて安く、命に委ね理に順ひ、物に與せ患ふるなし。伊れ茲禽の無知にして、何ぞ身を處するの智に似たる。寶を懷いて以て害を賈はず、表を飾りて以て累を招か

ず。靜にして約を守りて矜らず、動いて因循して以て簡易なり。自然に任せて以て資となし、世僞を(二一)誘慕するなし。(二二)鵰鶡その觜距を介にし、鵠鷺雲際に軼し、鶤雞幽險に竄れ、(二三)孔翠遐裔に生ず。彼の(二四)晨鳧と歸雁と、又翼を矯げて增く逝く。咸美羽にして豐肌なり、故に罪なくして皆斃る。徒に蘆を銜んで以て繳を避くるも、終に此世に戮せらる、蒼鷹は(二五)鷙にして緤を受け、鸚鵡は(二六)惠にして籠に入り、猛志を屈して以て養に服き、塊り(二七)九重に(二八)幽縶せられ、音聲を變じて以て旨に順ひ、翮を摧いて(二九)庸をなさんことを思ふ。(三〇)鍾岱の林野を戀ひ、(三一)隴坻の高松を慕ふ。幸を今日に蒙ると雖も、未だ(三二)疇昔の從容たるに若かず。海鳥(三三)鷄鶋、風を避けて至り、(三四)條枝の巨雀、嶺を踰えて自ら致す。萬里に(三五)提挈し、(三六)飄颻として逼畏す。夫れ唯體大なれば物を妨げ、形(三七)瓌なれば瑋とするに足るのみ。陰陽陶蒸して、萬品一區、巨細(三八)舛錯し

【二一】誘慕。嗜欲といふが如し。
【二二】鵰鶡。くまだか、やまどり。
【二三】孔翠は孔雀及び翡翠。遐裔は遠き邊地なり。
【二四】晨鳧。鳥の名。
【二五】鷙。猛なり。
【二六】惠。慧なり。
【二七】九重。宮禁なり。
【二八】幽縶。縛らるること。
【二九】庸。用なり。
【三〇】鍾岱。二山の名、鷹の產する處。
【三一】隴坻。地名、鸚鵡の產地。
【三二】疇昔。前日なり。
【三三】鷄鶋。海鳥の名。國語に爰居魯ノ東門ノ外ニ止ル、展禽曰ク、海ソレ災アランカ、夫レ廣川ノ鳥獸ハ常ニ知リテ其災ヲ避クト、是歲海ニ大風多シとあり。
【三四】條枝。外國の名。
【三五】提挈。助け合ふこと。
【三六】飄颻。風の高く吹く貌。
【三七】瓌瑋。美しきこと。
【三八】舛錯。齊しからざること。

て、種繁く類殊なり。(三九)鷦螟は蚊睫に巢ひ、(四〇)大鵬は天隅に彌る。將以て上に方ぶれば足らず、下に比ぶれば餘あり。天壤を普くして以て遐に觀るに、吾又安んぞ其の小大の如ふ所を知らん。

【大意】造化、萬物を作りて、各其形を賦與せり。鷦鷯は小鳥なれども、亦陰陽の氣を受けて生る。然れども體陋にして、高飛すること能はず、毛羽の美もまた自ら貴ぶに足るなし。毛は器物を飾るに足らず、肉は俎上に盛るに足らず。鷹鸇も其小なるを以て翼を傾けて過ぐ。何ぞ網羅を懼るるの要あらんや。飛ぶことは高からず疾からず。林に巢ふも一枝にて足り、食ふ所は數粒に過ぎず。荊棘をも陋とせず、香草をも榮とせず、命に任せ道に順ふ。故に物の爲に害せられず。寶を懷いて身の禍を買はず、毛彩を以て自ら飾らず。故に其累を招くことなし。鵰鶡は觜距の大なるを以て人に取られ、鵠鷺鶤雞、孔翠晨鳧の諸鳥は、皆人の害を患へて、幽險遠裔の處に匿る。皆、羽毛美にして肌肉豐なるを以てなり。歸雁は蘆を銜んで繳を避くれども、終に人の獲る所となり、蒼鷹は猛なるが爲に身を縛せられ（鷹狩の用として）鸚鵡は慧なるが爲に籠に入れられ、或は猛志を屈して、宮禁に養はれ、或は音聲を好くして人意に適せんとす。今日、寵幸を受くと雖も、前日林野に從容せるの快なりしに如かず。鷄鶋は風を避けて至り、飄颻として畏れ、條支國の巨雀は、嶺を越えて至り、萬里に提挈す。體大な

【三九】鷦螟。微蟲の名。
【四〇】大鵬。大鳥の名

れば物を妨げ、形美なれば唯珍とするに足るのみ。陰陽の、萬物を陶冶するや、大小齊からず、種類も亦繁し。鷦螟は蚊の睫に巢ひ、大鵬は其翼天の一隅に亙る。鷦鷯の小なる、之を大鵬に比すれば足らざれども、之を鷦螟に比すれば餘あり。天地を徧くして遠觀するに、大小好惡竟に其の從ふ所を知らざるなり。

(二)赭白馬の賦竝序

(三)驥は力を稱せず、馬は(四)龍を以て名づく。豈以て國に(五)光を騰げ圖を吐き、德に嚮い聖に瑞するの符あればなり。是を以て語其靈を崇び、世其至れるを榮とす。我が(六)高祖の宋を造むるや、(七)五方職に率ひ(八)四隩入貢し、秘寶(九)玉府に盈ち、(一〇)文駟華廐に列る。乃ち(一一)乘輿の赭白あり、特に逸異の姿を稟け、妙に帝心に簡れ、用て(一二)聖皁を錫ふ。(一三)服御志に順ひ、馳驟度に合ふ。(一四)齒歷衰へたりと雖も、藝の美式はず。養を襲けて年を兼ね、(一五)恩隱周渥なりしも、歲老い氣殫きて、(一六)內棧に斃る。少くして其力を盡し、上仁を惻ましむるあり。乃ち(一七)陪侍に詔し、(一八)中旨を奉述せしむ。(一九)末臣庸蔽なるも、敢て同じく賦を獻ず。

其辭に曰く、

維れ宋の(二〇)二十有二載、(二一)盛烈重葉に光り、武義粵に其れ(二二)泰階の平升るべく、(二三)興王の軌接すべし。國美を舊史に訪ひ、(二四)肅陳し、文敎迄く已に優洽なり。(二五)方載を往牒に考ふるに、昔帝

【一】赭白馬。つきげの馬。葦毛の少しく赤ばみたるもの、宋の文帝中郎將たりし時、父武帝之に赭白馬を賜ふ。文帝位に卽きて後、其馬死す。帝羣臣に命じて之を賦せしむ。

【二】顏延年。顏延之、字は延年。宋の琅琊の人。

【三】驥。駿馬なり。論語に驥ハ其力ヲ稱セズシテ其德ヲ稱スとあり。

【四】龍。周禮に凡ソ馬八尺已上ヲ龍トナスとあり。

【五】遘迅。壯疾なり。

【六】駟。馬の名。

【七】光を騰げ。尙書中候に曰く、帝堯政ニ卽イテ七十載、壇ヲ河洛ニ修ム、仲月辛日禮ハル、日カタムクニ至リ榮光河ヨリ出デ、龍馬甲ヲ銜ミ赤文綠色、壇ニ臨ンデ甲圖ヲ吐クと。

【八】高祖。宋の武帝劉裕なり。

【九】五方。中國及び四方の夷。

【一〇】四隩。四方といふが如し。

【一一】玉府。玉を掌る役所。

【一一】乘輿の赭白。文駟は美しき馬。華厩は美しきウマヤ。

【一二】乘輿。天子なり。

【一三】聖皁。皁は櫪なり、馬の食をいるる桶。

【一四】服御。乘駕なり。

【一五】齒歷。年齡なり。

【一六】恩隱。隱は私なり。恩寵なり。

【一七】內棧。棧は廐の床なり。

【一八】陪侍。侍臣なり。

【一九】中旨。天子の意。

【二〇】末臣。顏延年自ら謙して謂ふ。

【二一】二十有二載。載は年なり宋晉の讓を受けて天子となりてより二十二年、卽ち宋の文帝の十七年なり。

【二二】盛烈。盛なる王業。重葉は代代なり。武帝立ちて文帝之を嗣ぐ、故に重葉といふ。

【二三】肅陳。肅然として陳列す。

【二四】泰階。三台星なり、三台平なれば風雨時あり天下平なり。

【二五】興王。國運を興隆すべき王。

【二六】方載。方は常、載は則、常法といふが如し。

【二七】往牒。昔の記錄。

【二八】帝軒。黃帝なり、上古の天子。淮南子に黃帝天下ヲ治ム、是ニ於テ飛黃阜ニ服スとあり。

軒位に陟り、(三〇)飛黄皁に服し、(三一)后唐籙に膺り、(三二)赤文日を候ひ、漢道亭りて(三三)天驥才を呈し、魏德懋にして(三四)澤馬質を效す。伊れ(三五)逸倫の妙足、前代よりして間出で、榮光を(三六)瑞典に竝べ、(三七)郊歌を(三八)司律に登ぐ。(三九)警蹕を扶護する所以なり。是を用て(四〇)精曜叶ひ從ひ、靈物咸く秩づ。(四一)明命の初基に曁び、(四二)九區を罄して(四三)率順し、險を肆て以て(四四)朔を稟くるあり、或は遠きを踰えて賮を納るるあり。(四五)王會の阜昌なるを聞き、(四六)函夏の充牣せるを知る。(四七)六服を總べて以て(四八)賢を收め、(四九)七戎を掩ひて駿を得たり。蓋し風に乘るの(五〇)淑類、實に景に先だつの(五一)洪胤なり。故に能く(五二)象輿に代驂し、(五三)鉤陳に(五四)歷配し、齒算延長して、聲價隆振す。信に(五五)聖祖の(五六)蕃錫なり。(五七)皇情を留めて駿進す。

【三〇】飛黄。名馬の名、背に角あり、千年の壽を保つといふ。
【三一】后唐。后は皇なり、堯をいふ。籙に膺るとは未來記に應じて天子となること。
【三二】赤文。赤き紋ある馬。日を候ふとは序の脚註にある日傾くに至れるをいふ。
【三三】天驥。天馬なり。漢の武帝の時天馬出づ。因つて天馬歌を作る。
【三四】澤馬。魏の文帝の黄初中上黨に於て澤馬を得たり。
【三五】逸倫は絶倫に同じ。妙足は駿馬なり。
【三六】瑞典。堯の時龍馬の圖を吐きしこと。
【三七】郊歌。郊廟の祭の時にうたふ歌。
【三八】司律。樂律を掌る役所。
【三九】警蹕。天子の出入する時道を清め人ばらひすること。
【四〇】精曜。天星なり。
【四一】明命。天命を受けて天子となること。
【四二】九區。九州、支那全土をいふ。
【四三】率順。相率ゐて服從すること。
【四四】朔。正朔なり。宋の政令をいふ。
【四五】王會。王者の諸侯を會することを。
【四六】函夏。諸夏なり。中國といふに同じ。
【四七】六服。王畿の外の地、侯、甸、男、采、衞、蠻の六服をいふ。
【四八】賢。善馬なり。
【四九】七戎。外夷なり。

【大意】我が宋始めて帝位に卽きてより二十二年、武帝文帝の二代を歷て、功業益輝き、文敎武儀悉く張り、太平の軌途を繼ぐに足る。今國家の遺美遺法を舊籍に尋ぬるに、黄帝位に卽きて飛黄出で、堯帝位に卽きて赤文現はれ、漢室の德天下に通じて天驥出で、魏帝の德盛にして澤馬現はる。斯の如く絶倫の駿馬往往にして出で、光榮を堯の時、龍馬の圖を吐きしに比べ、歌詞を作りて之を郊廟の祭に供せり。是れ皆天子の威光を崇くし、警蹕の衞となすべきなり。是を以て天星の祥瑞從つて現はれ、神靈の異物亦盡く出づ。我が高祖初めて天命を受くるに及び、天下盡く之に服し、險を越え遠きを涉りて、其政令を奉じ、貢物を納る。以て王業の盛大なるを知るべし。乃ち駿馬を蠻夷に求め、其類美大にして神速なり。或は乘輿に駕し、或は儀衞に當り、年齒長くして聲價益揚る。高祖嘗て之を文帝に賜ふ。文帝因つて特に情を留めて之を馳す。

【五〇】淑類。よき種類。
【五一】洪胤。よき胤。
【五二】象輿。天子の車。
【五三】鉤陳。天子の衞なり。
【五四】歷配。武帝文帝二代に及ぶ、故に歷配といふ。
【五五】聖祖。宋の高祖、卽ち武帝。
【五六】蕃錫。たまもの。
【五七】皇情。皇は文帝を指す。

徒に其の筋を附け骨を樹て、梢を垂れ髪を植て、體峰生し、殊相逸發し、(六〇)超攄夫の塵轍を絶ち、(六一)驅騖滅沒より迅く、偉を(六二)塞門に簡び、狀を(六三)絳闕に獻じ、旦には(六四)幽燕に刷ひ、晝には(六五)荊越に秣ふ。敬を(六六)不易の典に敎へ、人を(六七)必書の擧に訓へ、惟れ(六八)帝惟れ祖、爰に(六九)游し爰に豫し、(七〇)轜軒を飛ばして以て道を戒め、(七一)轂騎を環らして路を淸め、(七二)五營を勒して部を按せしめ、(七三)八鑾を聲して以て步を節し、(七四)金組を具へ服け、(七五)丹旐を兼ね飾り、(七六)寶鉸星のごとく纓ひて、(七七)鏤章霞のごとく布き、進んでは(七八)遮迾に迫り、却いては(七九)輦轂に屬き、欸ち聳擢して以て鴻のごとく驚き、時に(八〇)濩略として龍のごとく翥り、雄姿を弭して以て奉引し、柔心を婉にして御を待つ。露滋く雙瞳鏡を夾み、(八一)兩權月に協へるを觀るに、異

【五八】雙瞳。兩目なり。兩目中央の旋毛を鏡といふ。
【五九】兩權。兩方の頰骨。
【六〇】超攄。疾く走ること。
【六一】驅騖。疾く走ること。
【六二】塞門。北方の馬を產する處。
【六三】絳闕。天子の門なり。
【六四】幽燕。北方の州の名。
【六五】荊越。南方の地の名。
【六六】不易。國語に魏文公曰ク王ソレ農ノ易カラザルヲ監ミヨとあり。
【六七】必書。左傳に君ノ擧必ズ書スとあり。國君の行ふ事をいふ。
【六八】帝は文帝を指す。祖は高祖を指す。
【六九】游、豫。天子の巡幸をいふ。
【七〇】轜軒。輕き車。
【七一】轂騎。弓騎なり。
【七二】五營。天子の宿衞なり。
【七三】八鑾。馬の鈴。
【七四】金組。金甲及び紐甲。
【七五】丹旐。丹青といふが如し。
【七六】寶鉸。裝飾なり。
【七七】鏤章。刻鏤の文采。
【七八】遮迾。護衞兵なり。
【七九】輦轂。天子の車。
【八〇】濩略。奔驚の貌。

月肅に、霜戾りて秋登るに至りては、王于に(八二)興言し、(八三)威稜を(八四)闡肆し、(八五)廣望に臨み、(八六)百層に坐し、武藝を料り、(八七)驍騰を品す。(八八)流藻周く施し、(八九)和鈴重ねて設く。影を睨んで高く鳴き、將に超えんとして中ごろ折まり、分れて(九〇)逈場に馳せ、角ひて(九一)永埒に壯にし、輩に別れ羣を越え、(九二)絢練として夐絶し、(九三)趫夫の敏手を捷くし、(九四)華鼓の繁節を促にす。(九五)玄蹄を經て雹のごとく散じ、(九六)素支を歷て冰のごとく裂け、(九七)膺門沫赭く、(九八)汗溝血を走らし、(九九)蹏迹唐を廻り、(一〇〇)畜怒未だ洩きず、乾心降りて微く怡び、都人仰いで朋り悅ぶ。

【大意】其骨骼鬣髮を觀れば、兩目鏡を夾み、兩顴月の如く、筋骨逞しくして、奔る時は飛塵も及ぶ能はず、影の沒するが如し。初め之を塞門（馬の產地）に擇び、遂に天子に獻ぜんとせし時、旦に幽燕の地に刷ひて、晝には荊越の遠き

【八一】興言。言は助辭。
【八二】威稜。天子の威光なり。
【八三】闡肆。肆一に肆に作る、今之に從ふ。開きほしいままにすること。
【八四】廣望。臺の名。
【八五】百層。臺の名。
【八六】曉騰。良馬なり。
【八七】流藻。周流する畫文也。
【八八】和鈴。スズなり。
【八九】逈場。遠き馬場。
【九〇】永埒。長き埒。
【九一】絢練は疾き貌。夐絶は絶遠なり。
【九二】趫夫。敏捷なる人。
【九三】華鼓は美しき鼓。繁節は急調なり。
【九四】玄蹄。射帖の名、人をして地に伏し帖を持せしめ、馬を奔らして之を射る、其帖を射帖といふ。
【九五】素支。射帖の名。
【九六】膺門。馬の胸。
【九七】汗溝。馬足の內面、胸腹と相連る處。大宛國の馬は血を汗す。
【九八】蹏迹。馬の走りあがく跡。
【九九】畜怒。積れる元氣。
【一〇〇】乾心。天子の心。

に達せり。其の疾きこと、推して知るべし。民に農事の易んずべからざるを教へ、天子の擧動に馴れしめんが爲に、高祖及び文帝常に此馬に乘りて巡遊し、道を戒め路を清め、部伍を按ずれば、則ち八鈴を鳴らして以て行歩を節す。金組丹青を以て飾り、其裝具星霞の文の如く、進んでは前驅に迫り、退いては輦車に就き、奔騰すること鴻の驚き龍の飛ぶが如く、雄姿を長路に奉引し、其心を婉順にして、以て天子の駕御を待つ。若夫れ秋風肅殺の時に至るや、天子武技を練りて威稜を縱にせんとし、廣望百層の臺に登り、武藝の士を簡び、驍騰の馬を品評す。畫文の幔幕を周匝し、鈴を其上に設け、馬を牽いて場に登すや、或は影を視て高く嘶き、或は將に奔らんとして中ごろ止まり、忽ち羣輩を超えて疾走し、爲に趫捷の夫をして速に華鼓を擊たしめざるべからず。（騎射には鼓を擊つて馬歩を節するを常とす。）射帖に中りて之を破ること氷雹の裂くるが如く、汗出で沫流れて胸間を爲に赤く、周道を疾走するも、威力未だ衰へず。天子之を觀て悦び、都人また相悦ぶ。

妍變の態既に畢り、〔一〇一〕凌遽の氣方に屬く。〔一〇二〕鑣轡の牽制に跼し、〔一〇三〕通都の圈束を隘しとし、〔一〇四〕西極を眷みて首を驤げ、〔一〇五〕朔雲を望んで足を蹀み、將に〔一〇六〕紫薵をして〔一〇七〕衡を駢べ、

【一〇一】凌遽。勇急なり。
【一〇二】鑣轡。くつわ、たづな。
【一〇三】通都は國都なり。圈束は拘束といふが如し。
【一〇四】西極。天馬の出づる處。
【一〇五】朔雲。朔方雲中の二郡、亦馬の産地なり。
【一〇六】紫薵。綠蚪、纖鑣、秀騏皆駿馬の名。
【一〇七】衡。車の横木。

綠蚪をして轂を衝り、纖鑣をして趾を接へ、秀騏をして齊しく轡き、〔一〇八〕王母を崑崙墟に覲、〔一〇九〕帝臺を宣嶽に要し、中州の轍迹を跨え、神行の〔一一〇〕軌躅を窮めしめんとす。然れども〔一一一〕遊畋を盤んで、前王に鏡るを作し、人上に肆にして、悔を〔一一二〕義方に取る。天子乃ち駕を輟めて慮を廻らし、徒を息め裝を解き、〔一一三〕武穆に鑒み〔一一四〕文光に憲り、民隱を振ひ國章を脩め、〔一一五〕出豕の御を敗るを戒め、〔一一六〕飛鳥の衡に跱つを惕る。故に常に忽にする所を〔一一七〕祇愼し、未だ防がざる所を敬備す。輿は〔一一八〕重輪の安きあり、馬は〔一一九〕泛駕の佚なし。處くに〔一二〇〕濯龍の奥を以てし、委ふるに〔一二一〕紅粟の秩を以てす。養に服きて仁を知り、老に從ひて卒るを得。〔一二二〕弊帷を加へ〔一二三〕仆質を收む。〔一二四〕天情周く皇恩畢る。

【一〇八】王母。西王母なり、崑崙山に居る仙女。
【一〇九】帝臺は神人の名、宣嶽は山の名。
【一一〇】軌躅。轍迹に同じ。
【一一一】遊畋。遊獵なり。
【一一二】義方。道義なり。
【一一三】武穆。漢の武帝、周の穆王。武帝は大宛の馬を好み使者道に相望み、穆王は八駿を驅りて天下を遊幸せり。
【一一四】文光。漢の文帝、後漢の光武帝。文帝の時千里の馬を獻ぜし者あり。文帝之を還せり。民隱。民の疾苦。
【一一五】出豕。韓非子に王子期趙簡子ノ御トナリ、始メ發スルヤ轟溝中ニ伏ス王子期轡策ヲ齊ウシテ進ムヤ轟溝中ヨリ突出シ、馬驚キ駕ヲ敗ルとあり。
【一一六】飛鳥。穆王狩せし時、黒鳥あり飛んで衡に立つ、御者之を斃し以て馬を鞭つ、佚して止むること能はず、乘を顚かしめ帝の左股を傷つく。
【一一七】祇愼。つつしむこと。
【一一八】重輪。重轂なり。
【一一九】泛駕。駕を覆すこと。
【一二〇】濯龍は内廐の名。奥は内なり。
【一二一】紅粟。漢の文帝の時國大に富み、太倉の粟紅腐して食ふべからず。
【一二二】弊帷。破れたるトバリ。禮記に孔子曰ク弊帷棄テザルハ馬ヲ埋ムル爲ナリとあり。
【一二三】仆質。馬の死屍なり。
【一二四】天情。天子の愛情。

【大意】　變態既に畢り、勇急の氣益以て連續し、銜轡の牽掣に蹉跼し、國都の狹隘を嫌ひ、西極朔雲を望んで恣に奔馳せんことを冀ふ。天子乃ち此馬をして紫燕、絲虬、纖驪、秀騏等の駿馬と竝び馳せしめ、西王母を崑崙山に訪ひ、帝臺神を宣山に訪ひ、車轍を中國に徧くし、更に進んで神人の軌跡を窮めんと欲す。然れども敢て其希望を肆にせず。遊獵に耽り國を喪したる前王に鑑み、人の上たるの威を肆にして、悔を道義に取るをなさず。乃ち遊を止め慮を廻らし、周穆漢武を以て鑒戒となし、文帝光武を憲法となし、民の隱痛を救ひ、國の禮儀を修め、豕突烏立して、馬を驚かしたるを懼れ、出入を愼み警戒を嚴にし、重轂の安輿に駕し、駕を覆すの佚なからしむ。此馬を內廐に置き、太倉の粟を食はしめ、老いて終に死するや、弊帷を以て屍を包み以て之を埋む。皇恩是に於てか畢る。

(二五)亂に曰く、惟れ德天を動し神物儀る。時に於て(二六)駔駿階街に充つ。靈を(二七)月駟に稟け、雲螭を祖とす。雄志(二八)倜儻にして精(二九)權奇なり。既に剛且つ淑にして(三〇)鞿羈に服し、足を(三一)中黃に效して、驅馳に徇ふ。願くは惠養を終へて(三二)本枝に蔭せんことを。竟に朝露に先だちて長く委離す。

【二五】亂。賦の末にありて一篇の大意を總ぶる詞。
【二六】駔駿。駿馬。街は音キ。
【二七】月駟。春秋考異記に地月精ヲ出シテ馬トナスとあり。
【二八】倜儻。卓異なり。
【二九】權奇。善く行く貌。
【三〇】鞿羈。くつわ、おもつら。
【三一】中黃。中營なり。
【三二】本枝。子孫といふが如し。

【大意】　亂に曰く、聖德天を動かす。故に神物その容儀を呈し、駿馬階街に充てり。此馬や月精を稟け、雲螭の胤を受く。隨つて雄志卓絕にして善く走り、氣質勇壯にして善く韁控に服し、天子の營に至りて、驅馳に供し、惠養を終へて子孫に及ばんと願へり。然も竟に朝露に先だちて死す。誠に悲むべきなり。

舞鶴の賦

鮑明遠

(一)幽經を散いて以て物を驗へ、(二)胎化の仙禽を偉とす。(三)蓬壺を指して翰を翻し、(四)崐閬を望んで音を揚げ、日域を帀りて以て廻り騖せ、天步を窮めて高く尋ね、神區を踐むこと其れ既に遠く、(七)靈祀を積むこと方に多く、(八)精は丹を含んで星のごとく曜き、頂は紫を凝らして烟のごとく華し。(九)員吭の纖婉たるを引き、脩趾の(一〇)洪姿なるを頓し、霜毛を疊んで影を弄び、玉羽を振つて霞に臨み、朝には(一一)芝田に戲れ、夕には(一二)瑤池に飮

【一】幽經。神仙の書、ここは相鶴經を指す。
【二】胎化仙禽。鶴をいふ。
【三】藻質。文藻ある形體。
【四】清迥。清遠なり。
【五】蓬壺。仙山の名。
【六】崐閬。仙山の名。
【七】靈祀。祀は年なり、年壽をいふ。
【八】精。目なり。
【九】員吭は圓き頸。纖婉は細く曲ること。
【一〇】洪姿。大きくして美なること。
【一一】芝田。芝は靈草の名。十洲記に鍾山ハ北海ノ中ニアリ地仙ノ家數千萬、田ヲ耕シ芝草ヲ植カ之あり。

み、江海を厭ひて澤に遊び、(一三)雲維に掩はれて羈され、(一四)帝鄉の岑寂なるを去り、(一五)人寰の喧卑なるに歸し、歲(一六)崢嶸として暮るるを愁へ、心惆悵して離るるを哀む。

【大意】我れ仙經を繙きて、此の仙禽白鶴を偉とす。此鳥や輕浮放曠なる文質を有し、清遠明白なる心を抱き、常に仙山に在つて飛翔鳴吟の區域を踐歷すること遠く、年壽を積むこと既に多く、目は赤くして星の如く、頂は紫を凝らして華の如く、細曲の頸を引き、美大の足を頓し、霜白の毛を疊み玉色の羽を振ひ、朝には芝田に戲れ、夕には瑤池に飮む。一旦江海を厭ひて山澤に遊ぶや、網に罹りて人の羈束する所となり、遂に仙境を離れて俗界に歸し、年歲の暮るるを悲み、身の離羣を哀む。

是に於て窮陰殺節、(一七)急景凋年、涼沙野に振ひ、(一八)箕風天を動し、(一九)嚴嚴たる苦霧、皎皎たる悲泉、冰は長河を塞ぎ、雪は羣山に滿つ。既にして(二〇)氛昏夜歇み、景物澄廓なり。星翻り漢廻り、曉月將に落ちんとするとき、寒雞の(二一)早晨に感じ、霜雁の漠を違るを憐み、驚風の(二二)蕭條たるに臨み、

【一】瑤池。神女西王母の居る處の池。
【二】雲維。維は網なり、網高くして雲に及ぶなり。
【三】帝鄉。天帝の鄉、神仙の居る處。岑寂は高靜なり。
【四】人寰。俗界なり。
【五】崢嶸。零悴の貌。
【六】急景。日の短きこと。
【七】箕風。箕は星の名、風をつかさどる。
【八】嚴嚴。慘烈の貌。
【九】氛昏。氛昏は陰氣なり。
【一〇】早晨。朝早く時をつくること。
【一一】蕭條。風の靡の淋しき貌。

(二三)流光の照灼に對し、淸響を(二四)丹墀に唳かしめ、飛容を(二五)金閣に舞はす。始めには(二六)連軒として以て鳳のごとく跱ひ、終には(二七)宛轉として龍のごとく躍り、(二八)踶跼徘徊し振迅(二九)騰擢し、身を驚して蓬のごとく集り、翅を矯げて雪のごとく飛び、(三〇)綱を離れて別れ赴き、緒に合ひて相依り、將に興たんとして中ごろ止まり、往くが若くにして歸り、(三一)颯沓しては矜顧し、(三二)遷延しては遲暮し、(三三)逸翮塵を後にし、(三四)翱翔路に先だち、(三五)會を指して規のごとく翔り、(三六)岐に臨んで矩のごとく步み、態(三七)遺妍あり、貌停趣なく、(三八)機に奔り節に逗り、(三九)睞を角ひ形を分ち、長く揚り緩く騖せ、翼を竝べ聲を連ね、輕迹凌亂し、浮影交橫し、衆變繁姿、參差として(四〇)洿密なり。烟のごとく交り霧のごとく凝り、毛質なきが若く、風のごとく去り雨のごとく還り、談り悉すべからず。既に魂を散じて目を盪し、迷ひて其の之く所を知らず。忽ち星のごとく離れて雲のごとく罷め、神容を整へて自ら持し、(四一)天居の崇絕を仰

【二三】流光。月光なり。
【二四】丹墀。天子の階庭なり、丹を以て地に漆す、故に云ふ。
【二五】金閣。金を以て飾れる樓閣。
【二六】連軒。舞ふ貌。
【二七】宛轉。舞ふ貌。
【二八】踶跼。はねまはること。
【二九】騰擢。飛騰摧折なり。
【三〇】綱・緒。舞の行列をいふ。
【三一】颯沓は羣飛の貌。矜顧は自ら憐んで顧ること。
【三二】遷延は徐に退くこと。遲暮は身の老ゆることを悲むこと。
【三三】逸翮。疾き翼。
【三四】翱翔。飛ぶこと。
【三五】會。舞の節なり。
【三六】岐。舞の節なり。
【三七】遺妍。餘ろ美しさ。
【三八】機、節。舞の機節なり。
【三九】睞。斜視なり。
【四〇】洿密。洿は重ること。
【四一】天居は鶴の舊居。崇絕は高遠なり。
【四二】燕姬。歌舞を善くする女。

ぎ、更に惆悵して以て思を驚す。是時に當りて(四二)燕姫色沮み、(四三)巴童心恥ぢ、(四四)巾拂兩ながら停り、(四五)丸劍雙び止む。(四六)邯鄲と雖も其れ敢て倫せんや。豈(四七)陽阿の能く擬するならんや。衞國に入りて(四八)軒に乘り、(四九)吳都を出でて市を傾け、馴養を千齡に守り、長悲を萬里に結ぶ。

【大意】陰氣肅殺、歲晩の時に及ぶや、寒威沙を揚げ寒風天を動し、寒霧萬物を枯らし、氷雪山河に滿つ。陰氣夜歇きて、清景澄澈、星翻り漢廻りて、月將に落ちんとするや、寒雞の早に鳴くを聽き、鴻雁の沙漠を去りて溫地に就かんとするを憐み、此鳥乃ち悲風に臨み月光に對して、清聲を階庭の中に擧げ、金閣の間に舞ふ。其狀鳳龍の翩躚として跳るが如く、蓬の飄るが如く雪の飛ぶが如く、或は行列を離れて別れ進み、或は行列に合ひて相依り、將に進まんとして中止し、往くが如くにして歸り、進んでは影を顧みて自ら悲み、退いては身の衰老を痛み、路塵に先だちて急進し、翔步皆規矩に中り、姿態變轉して妍美餘あり。進退ともに機節

【四三】巴童。歌舞を善くする童。
【四四】巾拂。巾及び拂子、舞人の持つ所の物。
【四五】丸劍。彈丸及び劍、手に持ちて弄する物。
【四六】邯鄲。地名、此地に歌を善くする者あり。
【四七】陽阿。歌曲の名。
【四八】軒。大夫の車なり。左傳に衞ノ懿公鶴ヲ好ミ、鶴ニシテ軒ニ乘ル者アリとあり。
【四九】吳都。吳越春秋に吳王闔閭少女アリ、王共ニ蒸魚ヲ食フ、王、半ヲ嘗ム、女怨ンデ曰ク、王魚ヲ食ヒ我ヲ辱ム、久シク生クルニ忍ビズト乃チ自殺ス、闔閭之ヲ痛ミ閶門ノ外ニ葬リ池ヲ鑿チ土ヲ積ミ山石ヲ以テ槨トナシ、金鼎玉盃銀樽珠襦ノ寶以テ女ヲ送ル、乃チ白鶴ヲ吳市ニ舞ハシメ、萬人隨テ觀ルとあり。

に合ひ、競ひて斜視し、分れて一邊に退き、雲霧と其色を同うし、風雨の去來するが如し。觀る者魂奪はれ目迷ひて、從ふ所を知らず。忽ち分散して舞を輟め、容儀を整へ、天居の高遠なるを仰ぎ、更に情思を痛ましむ。此時に當りては、燕姫巴童と雖も顏色を失ひ、心に恥ぢ、其巾拂丸劍を投じて、亦當に感嘆すべし。邯鄲陽阿の歌曲と雖も、共に比するに足らざるなり。而して此鳥衞國に入りては軒車に乘り、吳都を出でては滿城の人をして聚り觀しむ。かくて千年の馴養を受け、常に萬里の異境に滯留するを悲む。

志上

幽通の賦

班孟堅

(一)高頊の(二)玄冑を系ぎ、(三)中葉の(四)炳靈を氏とし、(五)颽風に飄りて(六)蟬蛻し、(七)朔野に雄として以

【一】高頊。高は高陽氏、頊は顓頊、古代の帝なり。
【二】玄冑。冑は家系なり、玄は黑にして水の色なり、高陽氏は水德の王なり、故に玄冑といふ。
【三】中葉。中世なり、班氏は楚の令尹子文の後なり、子文の初めて生れし時、澤中に棄つ、虎之を乳す、楚人因つて虎班といふ。中葉とは令尹子文を指すなり。
【四】炳靈。炳は明なり。虎に乳せられしことを謂ふ。
【五】颽風。南風なり。
【六】蟬蛻。蟬の如く殼を脫すること。
【七】朔野。北方の野。

て聲を颺ぐ。(八)皇十紀にして　(九)鴻漸し、上京に　(一〇)羽儀あり。(一一)巨天に滔りて夏を泯し、考愍に遘ひて以て　(一二)行謠ひ、終に己を保ちて則を貽し、上仁の廬する所に里り、(一三)前烈の純淑を懿し、窮と達と其れ必ず濟す。咨　(一四)孤蒙の眇眇たる、將に　(一五)圮絕して階なからんとす。豈余が身の殉むに足らんや。世業の懷ふべきを違む。靖に潛處して以て永く思ひ、日月を經て彌遠し。(一六)黨人と敢て拾するにあらず、庶はくは斯言の玷けざらんことを。魂　(一七)煢煢として神と交り、精誠宵寐に發す。夢に山に登りて迥に眺め、(一八)幽人の髣髴たるを覿る。(一九)葛藟を攬りて余に授け、峻谷を眷みて曰く、墜つることなかれと。(二〇)昕昕寤めて仰思すれば、心　(二一)矇矇として猶ほ未だ察ならず。(二二)黃神邈として質すなく、(二三)遺讖に儀りて以て　(二四)臆對す。曰く高きに乘りて神に遵ふ。道遐に通じて迷はず。葛　(二五)櫟木に緜緜たり。

【八】皇は漢皇なり。十紀は十世なり。
【九】鴻漸。鴻の陸に進むが如く進むこと。
【一〇】羽儀。儀表といふが如し。
【一一】亘。王莽、字は巨君。
【一二】行謠。憂思するをいふ。
【一三】前烈は先祖なり。純淑は純善なり。
【一四】孤蒙は孤兒童蒙なり。眇眇は鄙陋なる貌。
【一五】圮絕。毀絕なり。
【一六】黨人。鄉人なり、賤人をいふ。
【一七】煢煢。孤獨の貌。
【一八】幽人は神人なり。髣髴は分明ならざる貌。
【一九】葛藟。蔓草なり。
【二〇】昕昕。明旦なり。
【二一】矇矇。暗き貌。
【二二】黃神。黃帝なり。占夢書を作る。邈は遠なり。
【二三】遺讖。遺書、卽ち占夢書を謂ふ。
【二四】臆對。己の考を以て答ふること。
【二五】櫟木は高木なり。緜緜は葛の木にからみつく貌。

(二六)南風を詠じて以て絞きをなす。蓋し　(二七)惴惴として深きに臨む、乃ち　(二八)二雅の祗む所なり。既に爾に訊ぐるに吉象を以てし、又之に申ぬるに　(二九)炯戒を以てす。盍ぞ　(三〇)孟晉して以て羣に迫ばざる。辰　(三一)儵忽として其れ再せずと。靈訓を承けて其れ　(三二)虛徐し、佇ちて　(三三)盤桓して且く俟つ。

【大意】余は顓頊高陽氏の裔にして、楚の令尹(官名)子文の後なり。余が祖懿、南風に隨つて北土に徙り、蟬蛻して雄傑となり、大に聲名を博す。漢の十世成帝の時に至り、班況始めて進仕し、京師に羽翼を張る。(班況の女婕妤となり、父子竝に長安に居る)王莽滔天の虐をなし、中夏を泯滅するに及び、我が祖亦此難に遇ひ、憂思して亂を救ふの　志を立て、能く自ら己を保ち、又我に法則を遺し、我が爲に仁者の里を擇んで廬舍を定めぬ。ああ我れ我が祖先の純淑文德あり、身窮厄に處るも、亦時を濟ふの　志あり。身榮達に在れば、必ず經國の義あるを嘉す。余の暗昧なる將に祖先の跡を毀絕し、階路の以て自ら成すなからんとするを嗟く。我が身は祖先の業を營むに足らずと雖も、世業の毀絕を恨まざるを得ず。此れ誠に憂思すべ

【二六】南風。詩經の周南なり。詩に南に樛木アリ、葛藟之ニ纍フ、樂只ノ君子、福履之ヲ綏ンズとあり。
【二七】惴惴。懼るる貌。
【二八】二雅。詩經の大雅小雅。大雅に人亦言ヘルアリ、進退維レ谷マルとあり、小雅に惴惴タル小心、谷ニ臨ムが如シとあり。
【二九】炯戒。明戒なり。
【三〇】孟晉。孟は勉なり、晉は進なり。
【三一】儵忽。忽ちに過ぎ去ること。
【三二】虛徐。狐疑なり。
【三三】盤桓。徘徊なり。

きなり　因つて濬居長思し、祖先の業を繼がんと欲すること久し。敢て鄕人と更進み自ら己の善に矜らずと雖も、先祖の道を汙さざらんとを冀ふ。魂魄忽ち飛んで祖先の神靈と交り、我が精誠を夜夢の中に喚發せり。余夢に山に登りて遠望するや、神人（祖先の神靈）の髣髴として來るを見る。神我に蔓草を授け、深谷を顧みて我に謂つて曰く、よく此を執りて墜落すること勿れと。明朝夢寤め、仰いで夢中の事を思ふに、矇矇として其吉凶を知らず。黃帝は邈遠にして、質問するに由なし。因つて其遺文（占夢經）を閱し、我が臆を以て解答す。曰く汝高きに登りて神に遇ふは、道術將に通じて迷惑せざらんとするの象なり。蔓草の樛木に纏ふは、周南に詠ずる所にして、安逸の象なり。深谷に臨んで敬愼すべきは、二雅の戒むる所なり。神既に汝に告ぐるに吉象を以てし、又之に申ぬるに明戒を以てす。宜しく勉め進んで、羣と共に仕進すべきなり。好機再び到らず、倏忽として過ぎ去らんとすと。余乃ち神靈の訓戒を受けて狐疑し、佇立徘徊して敢て進まず。紛たり　【三四】屯邅と蹇連と。何ぞ艱多くして知寡き。惟れ天地の窮なき、生民の晦く在るを鮮しとす。紛たり　【三五】屯邅と蹇連と。何ぞ艱多くして知寡き。上聖は迕れて後に拔く。豈　【三六】羣黎の御むる所ならんや。昔　【三七】衞叔の昆を御ふる、昆寇を爲して予を

【三四】屯邅、蹇連。皆艱難の貌。
【三五】羣黎。衆民也、凡人也。
【三六】衞叔。衞の成公楚に會盟す。成公の弟衞叔國を守る。人叔を公に譖する者あり曰く將に自立せんとすと。成公國に歸る。衞叔方に沐す、髮を握りて之を迎ふ。成公之を疑ひ前驅をして射て之を殺さしむ。

喪す。【三七】管弧を彎いて讎を斃さんと欲し、讎后と作りて己を成す。變化故にして相詭ふ。孰か其終始を預すと云んや。【三八】雍は怨を造して先づ賞せられ、【三九】丁は惠に緜つて戮せらる。【四〇】栗は弔を吉なる迪より取り、【四一】王は慶を蹙ふる所より膺く。【四二】叛として【四三】廻穴することと其れ茲の若し、【四四】北叟のみ頗る其の【四五】倚伏を識る。【四六】單は裏を治めて外凋れ、【四七】張は

【三七】管。管仲なり。管仲嘗て齊の桓公を讎とし之を射て鉤に中つ。桓公後立ちて君となり管仲を以て相となす。
【三八】雍。雍齒なり。雍齒嘗て高祖と怨あり。高祖天下を定むるに至り先づ之を封す。
【三九】丁。丁公なり、嘗て項羽の爲に高祖を逐ふ。高祖謂うて曰く兩賢豈相阨せんやと。丁公兵を引いて還る。天下既に定り丁公高祖に謁見す。高祖丁公を以て不忠となし遂に之を斬る。
【四〇】栗。漢の景帝の栗皇后をいふ。皇后始め寵愛せられ、遂に驕淫無禮なり。後怨恚して死す。
【四一】王。漢の宣帝の王皇后をいふ。皇后始め嫉妒たり。またま許皇后薨ず。宣帝太子の早く母を失ひしを以て乃ち後宮の子なき者を選んで之を養はしむ。因つて立ちて皇后となる。皇后初め子なきを憂ふ、是に於て子なきが爲に幸慶を得たり。
【四二】叛。紛亂すること。
【四三】廻穴。廻は邪、穴は僻なり、禍福の相反すること。
【四四】北叟。塞上の翁なり。翁の馬亡げて胡に入る。人之を弔す。翁曰く焉ぞ禍に非ざるを知らんやと。後其馬駿馬を伴ひて歸る。人之を賀す。翁曰く焉ぞ禍に非ざるを知らんやと。後其子馬に乘りて墮ち髀を折る。人之を弔す。翁曰く焉ぞ福に非ざるを知らんやと。後胡兵大に出づ、丁壯の者戰死す。唯子跛を以ての故に父子相保んずるを得たり。
【四五】倚伏。騶冠子に禍ハ福ノ倚ル所、福ハ禍ノ伏スル所とあり。
【四六】單。莊子に魯ニ單豹ナル者アリ、巖居シテ水飲ス、行年七十ニシテ猶嬰兒ノ色アリ、不幸ニシテ餓虎ニ遇ヒ殺シテ食ハルとあり。
【四七】張。莊子に張毅ナル者アリ。高門懸薄趨詣セザルハナシ、行年四十ニシテ內熱ノ病アリ以テ死スとあり。

襮を脩めて内逼る。聿れ(四八)中龢にして庶幾ふことをなすも、(四九)顔と冉と又得ず。(五〇)溺は路を招いて以て己に從はしめ、孔氏をだも猶ほ未だ可ならずと謂へり。(五一)慆慆たるに安んじて葩らず、卒に身を世禍に隕す。聖門に遊べども救ふなし、(五二)醢を覆すと雖も其れ何の補あらん。固に(五三)行行たれば其れ必ず凶なり、(五四)盜亂を免るるは道に頼るが爲なり。形氣は根柢より發し、(五五)柯葉彙して(五六)零茂す。恐らくは(五七)魍魎の景を責むる、羌未だ其の云を得ざるのみ。(五八)黎高辛に淳耀あり、(五九)芈南汜に彊大なり。(六〇)嬴威を(六一)百儀

【四八】中龢。中和なり。

【四九】顔、冉。顔は顔回、冉は冉伯牛。共に孔子の弟子なり。

【五〇】溺、路。溺は桀溺なり。路は子路、孔子の弟子なり。論語に長沮桀溺耦シテ耕ス、孔子之ヲ過ギ、子路ヲシテ津ヲ問ハシム、桀溺曰ク孔丘ノ徒カト、對ヘテ曰ク然リト、曰ク滔滔タル者天下皆是レナリ誰カ以テ之ヲ易ヘン、且其ノ人ヲ避クルノ士ニ從ハンヨリハ豈ニ世ヲ避クルノ士ニ從フニ若カンヤとあり。

【五一】慆慆。亂るる貌。

【五二】醢を覆す。孔子、子路の衞人の爲に醢にせられし事を聞き、皆醢を覆し棄てしむ、蓋し食ふに忍びざるなり、事禮記に見ゆ。

【五三】行行。剛彊の貌。論語に子路行行如タリとあり。

【五四】盜亂。論語に君子勇アリテ義ナケレバ亂ヲナシ、小人勇アリテ義ナケレバ盜ヲナスとあり。

【五五】柯葉。枝葉なり。

【五六】零茂。零落し茂盛すること。

【五七】魍魎。莊子に罔兩景ニ問ヒテ曰ク、曩ニ子行ク今子止マル、曩ニ子坐シ今子起ツ、何ゾ其ノ特操ナキヤト、景曰ク吾待ツアリテ然ル者ナリトとあり。

【五八】黎は重黎なり。高辛は太古の帝の名。

【五九】芈は楚の姓なり。南汜は南涯といふが如し。楚は南方の國なり。故にかく云ふ。

【六〇】嬴。秦の姓なり。

【六一】百儀。秦の先祖なる伯益堯舜の時虞官となりて鳥獸を主り、盡く其儀を得たり。

に取り、(六二)姜三趾に虐にして(六三)仁を殲し、(六四)王位を三五に合す。(六五)戎女烈にして(六六)孝を喪ひ、(六七)伯龍虎に徂歸る。(六八)發師を還して以て(七〇)命を成し、(七一)重醉ひ行きて自ら(七二)耦ふ。(七三)震鱗夏庭に漦し、(七四)三正を匝りて(七五)姬を滅す。(七六)巽羽宣宮に化し、(七七)五辟を彌へて災(七八)本支あり。既に仁にして其の信然を得、(六九)天路を仰ぐも軌を同うす。(七〇)東鄰難に遇ひて出奔し十九年を經て歸國す、往く時辰星に應じ歸る時參星に應ず。故に祥瑞を得て諸侯に霸たり。

【六二】姜。齊の姓なり。三趾は三禮なり、天地人の禮をいふ齊の祖先伯夷虞舜に仕へて三禮を司る。

【六三】本支。子孫といふが如し。

【六四】天路。天道といふが如し。

【六五】東鄰。殷の紂王をいふ。

【六六】仁。仁賢の臣。

【六七】王。周の武王を指す。三五とは天心地義人事及び五行の正運なり。

【六八】戎女。驪姬なり、晉の獻公の夫人となる。太子申生を讒して自殺せしむ。

【六九】孝。孝子、太子申生を指す。

【七〇】伯。晉の文公を指す。龍虎とは辰星を龍となし、參星を虎となす。晉の文公驪姬の

【七一】發。周の武王、名は發。武王兵を觀して盟津に至る。諸侯皆曰く紂伐つべしと。武王曰く汝未だ天命を知らず未だ可ならざるなりと。乃ち師を還す。

【七二】命。天命なり。天命を受けて天子となること。

【七三】重。晉の文公、名は重耳。重耳出奔して齊に至る。齊の桓公之に妻す。重耳之に安んず。齊姜子犯と重耳を醉はしめて齊を去らしむ。

【七四】耦ふ。天時に會ひて霸業を成したること。

【七五】震鱗。龍なり。漦は沫なり。夏の衰へし時、二龍あり庭に止まる、龍去つて漦あり、因つて之を藏す。周の厲王之を發く。漦庭に流れ化して黿となる、以て童女に觸る。既に笄して一女を生む。之を棄つ。人あり之を收めて褒に奔る。褒人罪あり、收めし所の子を入る。之を褒姒といふ。周の幽王之を愛して申后を廢す。后の父怒りて幽王を攻め殺す。

【七六】三正。夏殷周をいふ。

【七七】姬。周の姓なり。

【七八】巽羽。易の巽卦を雞となす。漢の宣帝の時雌雞化して雄となる。

【七九】五辟。五代の君。

を成す。道(八〇)脩長にして世短し。(八一)夐冥默にして周らず。(八二)物に胥仍りて(八三)鬼諏し、乃ち宙を窮め
て幽に達す。(八四)嬀姜を孺筮に巣らしめ、(八五)旦祀を契龜に算ふ。(八六)宣曹下夢に興敗し、魯衛(八七)銘謠に名諡あり。(八八)妣呱くを聆いて石を劾し、(八九)許理を相て條に鞠く。道は混成して自然なり、術は原を同うして流を分つ。神は心に先だちて命を定め、命は行に隨つて以て消息す。(九〇)斡流して遷りて其れ濟らず、故に(九一)遭罹して贏縮す。(九二)三欒一體に同じ、移易すと雖も忒はず。(九三)洞參差として其れ紛錯す。斯れ(九四)衆兆の惑ふ所なり。(九五)周賈盪として(九六)貢憤し、死生と禍福とを齊うし、(九七)爽言を抗げて以て情を矯め、信に犧を畏れて臍を忌む。

【大意】夫れ天地は悠久にして窮極なきも、人生は極めて短く、世に在ること幾何もなし。然も世路艱多くして人智少きを以て、禍に遇ふこと頻頻たり。ただ上聖の人は一旦艱難に遇ふも、能く之を脱却し得るのみ。是れ凡人の預め防止し得る所にあらず。射て之を斃さん成公讒を信じて衞叔を殺し、管仲は齊の桓公を讎とし、と欲せしに、桓公立ちて君となるに及び、怨を置いて管仲を相とせり。禍福の相反すること斯の如し。誰か能く預め其終始吉凶を知らんや。雍歯は舊高祖と怨ありしに、高祖の天下を定むるに及び、雍歯を封じて什方侯となす。丁公は項羽の爲に高祖を逐ひしが、其窮を憐んで兵を引いて還る。高祖の帝位に卽くや、其主に不忠なりとて丁公を斬りぬ。栗皇后初め子なきを憂ふ、後子なきが爲に皇后(是れ慶なり)となる。禍福の紛亂反覆すること此の如し。其倚伏を知れるは唯塞上の翁のみ。單豹は體内を養ひて病を防ぎしに、體外の虎來りて之を食ひ、張毅は專ら其外を防ぎしに、病體内に起りて爲に死し、

【八〇】脩長。長遠なること。
【八一】夐は遠き貌。冥默は玄深なり。
【八二】物。事なり、卜筮をいふ。
【八三】鬼諏。鬼神に問ひはかること。
【八四】嬀。陳の姓、姜は齊の姓なり、孺は小なり。陳の公子完少なりし時人をして筮せしめしに其子孫の世に至り姜姓の國の君となるべしといふ。
【八五】旦。周公旦なり。祀は年なり。左傳に王孫滿曰ク、周ハ世ヲトスルコト三十、年ヲトスルコト七百、天ノ命ズル所ナリトとあり。
【八六】宣曹。宣は周の宣王、夢により國家の中興を前知す。曹は國名、曹人夢により國家の滅亡を前知す。
【八七】銘謠。莊子に衞ノ靈公沙丘ニ葬ラントセトス、吉ナリ、之ヲ堀ルコト數仞ニシテ石槨ヲ得タリ、銘アリ曰ク不馮其子、靈公奪而理之トとあり。左傳に童謠アリ稠父喪勞盈を害せり。宋父以驕ト、稠父は魯の昭公宋父は定公なり。
【八八】妣。叔向の母なり。石は叔向の子伯石なり。劾は罪を擧ぐること。
【八九】許。許負なり、人名。條は條侯周亞夫なり。鞠は告ぐること。
【九〇】斡流。轉遷なり。
【九一】遭罹。或は禍に遭ひ或は禍に遇ふこと。贏縮は盛衰といふが如し。
【九二】三欒。晉の大夫欒書、書の子黶、黶の子盈、書は賢にして黶を覆ひ、黶は虐にして盈を害せり。
【九三】洞參差。洞は幽なり、參差は齊しからざる貌。
【九四】衆兆。衆人なり。

【九五】周賈。周は莊周、莊子の著者。賈は賈誼。盪は放盪なり。
【九六】貢憤。貢は潰、憤は亂なり。
【九七】爽言。理にたがへる言。

顏回、冉伯牛の二子は中和を履みて聖賢たらんことを庶幾ひしも、回は早く死し伯牛は惡疾に罹り、共に其死を得ず。桀溺は子路を招き、己に從つて隱れしめんとし、孔子に隨從することなかれと言ふ。然も子路は衞に仕へて其亂を避くる能はず、終に殺されて醢にせらる。孔子の門に學べるも、聖道を以て禍を救ふ能はず。孔子子路の醢にせられしを聞き、己が家の醢を覆し棄てしめたるも、今更及ぶなきなり。子路は行行として剛強なり。故に此の凶禍に遇へり。ただ盜亂を爲すを免れたるは、幸に孔子の道を聞きしを以てなり。顧ふに草木の生氣は根本より發し、枝葉の零落し茂盛するも、亦根本の如何に由る。(人の吉凶禍福も亦運命に由るに喩ふ。)人或は顏冉子路の災に逢ひ、害を蹈めるを見て、或は其身を疑ひ、或は其師を非とすれども、是れ亦魍魎が景の特操なきを責め、景の行止は待つ所ありて然るを知らざるに同じ。甚だ謂なし。重黎(楚の祖先)高辛氏に仕へて淳和耀明の德あり。故に楚南方の强國となるを得。秦の祖伯益堯舜に仕へて虞官となり、鳥獸を典りて盡く其義を得。秦是に由りて興る。齊の祖伯夷堯舜に仕へて天地人の三禮を典り、齊亦是に由りて興る。人道既に然り。仰いで天道を視るも又法軌を同うす。紂は暴虐にして仁賢の臣を殺し、武王は天心地義人事五行、正運に合ふ。驪姬は酷烈にして孝子申生を殺し、文公は出入ともに星宿の祥に應ず。武王は兵を觀して盟津に至り、還りて乃ち天命を受けて天子となり、文公は醉に

まぎれて齊を去り、後よく天時に會ひて君侯となる。夏の衰へし時二龍ありて、漦を庭に流す。夏殷周を經て厲王の時に至り、化して褒姒となる。幽王褒姒を寵して申后を廢す。申后の父怒りて幽王を攻殺す。漢の宣帝の時、雌雞化して雄となる。皇后王氏時に始めて太子の妃たり。五君を經て平帝の時に至り、終に王莽の簒奪あり。ああ天道は長遠にして、人生は短速なり。當時冥暗にして徵應の至る所を知らず。ただ聖人は卜筮に因りて鬼神に謀り、古今を極めて幽微に通ずるを得べし。陳の公子完卜筮に因りて姜(齊國)を保つべきを知り、周公旦龜卜に因つて周の年數を知り、宣王と曹人とは夢に因りて國家の興敗を知り、魯の定公、衞の靈公は銘謠に因りて其名と謚とを知り、叔向の子石伯を生むや、其母石伯の啼聲を聞き、之を劾して、我が家を滅す者は必ず此子ならんと豫言し、許負は條侯周亞夫の相を視て、縱理の口に入るに餓死の相なりと豫言せしに、亞夫は後果して獄に下り、食はずして死せり。夫れ人の骨肉四肢聲音五臟は混成して一體をなす。術學其得失を論し、其貧賤を考へ、其富貴を觀るに至りては、各一概を取る。故に或は其音聲を聽き、或は其骨體を見、或は其色理を占ひ、或は其威儀を視、水の源を同うして流を分つが如し。之を要するに神先づ運命を定めて徵兆前に在り。然れども運命も亦人事に隨つて消長し、轉遷變化して齊からず。故に福に遭ひ禍に遇ひて、或は榮え或は衰ふ。晉の大夫欒書、欒黶、欒盈父子一體たり　賢愚異りと

雖も滅亡の道は竟に違はず。天道の幽微にして紛亂錯綜すること此の如し。斯れ衆人の惑ふ所なり。かの莊周、賈誼の如きは善惡を潰亂し、遂に放盪の辭をなし、死生と禍福とを同一視せり。（莊子曰く、生は徭役たり、死は休息たりと。賈誼曰く、忽然として人となるも、何ぞ控摶するに足らんや。化して異物となるも、又何ぞ患ふるに足らんやと。）故に事理に差へるの言をなして其情を矯枉し、犧牲となるを畏れ鵩鳥の來るを忌めり。（莊子に曰く、楚の威王莊子を聘す。莊子其使に應へて曰く、子は犧牛を見しか、衣するに文繡を以てし食はしむるに芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及び、孤犢たらんと欲すと雖も得べけんやと。賈誼は鵩鳥賦を作りて鵩を忌む。鵩鳥賦は卷の七に見ゆ。）

貴ぶ所は聖人の【九八】至論なり。天性に順つて【九九】誼を斷ず。物欲するあれども居らず。亦惡むあれども避けず。【一〇〇】孔約を守りて貳せず、乃ち德を輶んじて累なし。【一〇一】三仁は一致に殊なり、【一〇二】夷惠は舛ひて聲を齊うす。【一〇三】木は偃息して以て魏に蕃たり、【一〇四】申は重繭して以て【一〇五】荊を

【九八】至論。正論といふが如し。六經を指す。
【九九】誼。義に同じ。
【一〇〇】孔約。孔は甚、約は簡なり。
【一〇一】三仁。殷の微子、箕子、比干をいふ。
【一〇二】夷惠。伯夷と柳下惠。
【一〇三】木。段干木、魏の賢人なり。偃息は心ゆたかに休息すること。
【一〇四】申。申包胥。重繭して七日七夜にして秦に至り、援兵を借りて吳を伐ち、以て楚國を存せり。重繭とは足にマメの出來ること。

存す。【一〇五】紀は躬を焚いて以て上を衞り、【一〇六】皓は志を頤ひて傾かず。侯れ草木の區に別るるも、苟も能く實れば其れ必ず榮ゆ。世を歿へて朽ちざらんことを要するは、乃ち【一〇八】先民の程とする所なり。天網の【一〇九】紘覆するを觀るに、實に謀を棄けて相訓ふ。先聖の大猷を謨るに、亦德に隣づいて信を助く。【一一〇】虞韶美にして鳳を【一一一】儀し、【一一二】孔味を千載に忘る。【一一三】素文信ありて麟を底し、漢【一一四】祚を異代に賓す。精、靈に通じて物を感せしめ、神、氣を動して微に入る。【一一五】養は流睇して猿號き、【一一六】李は虎發して石開く。精誠にあらずんば其れ焉んぞ通ぜん、苟も實なくんば其れ孰れか信ぜん。【一一七】末技を操るも猶ほ必ず然り。矧んや躬を道眞に恥ましむるを【一一八】孔昊に登りて上下し、【一一九】羣龍の經とする所を緯とす。朝に【一二〇】貞觀して夕に化するも、猶ほ

【一〇五】紀。紀信なり。項羽高祖を滎陽に圍む。紀信高祖の車に乘り、詐つて高祖と稱し出でて羽に降る。羽怒つて之を焚く。高祖此に因りて遁るるを得たり。
【一〇六】皓。商山の四皓なり。秦の亂を避けて商山に隱れ、復た出でず。
【一〇八】先民。古聖人なり。
【一〇九】紘覆。大に掩ふこと。
【一一〇】虞韶。舜の音樂の名。孔子之を稱して善盡し美盡せりとなす。
【一一一】儀。來儀なり。書經に簫韶九成シテ鳳凰來儀スとあり。
【一一二】孔は孔子なり。千載は千年の後なり。
【一一三】素文。孔子の著せる春秋をいふ。孔子の素王として禮を論斷せる書なればなり。
【一一四】祚。孔子の子孫をいふ。
【一一五】養。養由基として射を善くせし人の名。流睇は斜視することゝ。
【一一六】李。漢の李廣なり。
【一一七】末技。小技といふが如し。射術を指す。
【一一八】孔昊。孔は孔子、昊は大昊伏犧氏、上古の帝なり。
【一一九】羣龍。羣聖人をいふ。
【一二〇】貞觀は正觀なり。化は死なり。

己を誼れて形を遺る。〔三一〕彭に胤ぎて〔三二〕老と偕にせんとせば、〔三三〕來哲に訴へて情を通せよ。

【大意】ただ當に聖人の至論を貴び、天性に順ひ義を以て之を斷ずべし。苟くも生きんことを貪りて、名を失ふべからず。孔子は富と貴とは是れ人の惡む所なり、貧と賤とは是れ人の欲する所なり、其道を以てせずして之を得れば居らざるなり、其道を以てせずして之を得ればへり、聖人の守る所は甚だ簡約にして二端なし。故に德を行ふこと易くして、然も累害なし。三仁の行ふ所各趣を異にすれども、其の仁に至れるは一なり。伯夷と柳下惠とは性向各異れども其賢たるは相同じ。段干木は安逸して魏を安んじ、申包胥は刻苦して楚を存し、紀信は身を焚いて高祖を衞り、四皓は志を養つて出仕せず。道各異りと雖も、苟も仁義の道あれば必ず榮名あり。君子は世を歿へて名の稱せられざるを疾むとは乃ち先聖孔子の法式なり。天網の人を覆ふを觀るに、必ず誠實なる者を助け、先聖の大道を觀るに亦德あり信ある者を助く。舜の韶樂は鳳凰をして來儀せしめ、千載の後孔子之を聞いて肉味を忘れ、孔子春秋を作りて麒麟を致し、漢其子孫を尊封す。人よく其精誠を致せば、則ち神靈に通じ物を感じ、氣を動して微に入る。養由基弓を調して斜睨すれば、猿樹を抱いて號き、李廣草中の石を見、以て虎となして之を射しに、石に中り

【二三】彭。彭祖、七百年の壽を保てる人。
【二三】老。老萊子。長壽者の名。
【二三】來哲。後來の賢者なり。

て矢を沒せり。是れ皆精誠の然らしむる所なり。射術の小技と雖も、猶ほ此の如し。況んや道を樂む者に於てをや。伏犧より下孔子に至るまで、天道を經緯すること備れり。朝に道を觀ずれば、夕に死すとも猶ほ己を忘れ形骸を忘るべし。若し彭祖、老萊子の如き長壽を保たんと欲せば、當に後賢に訴へて之と情を通ずべし。然れども己の慕ふ所にあらざるなり。

〔二四〕亂に曰く、天造草昧、性命を立つ。心を復し道を弘むるは、惟れ聖賢なり。〔二五〕渾元物を運らし、流れて處らず。身を保ち名を遺すは、民の〔二六〕表なり。生を舍て〔二七〕誼を取るは、亦道の用なり。憂傷して物に天するは、忝これより痛ましきはなし。〔二八〕皓爾たる〔二九〕太素、曷ぞ色を渝へん。尚はくは其幾に越て、神域に淪らん。

【大意】亂に曰く、天の始めて萬物を造るや、皆其性命を立つ。心を復し道を弘むるは、唯聖賢之を能くするのみ。元氣周行して終始已むことなく、水の流れて停らざるが如し。よく其身を保ち令名を後に遺す者は、亦人の師表たるに足る。生を舍てて義を取るも、亦道の運用なり。徒に憂傷して物の爲に天死するは、恥辱是より大なるはなし。天の白き何ぞ其色を變ずることあらんや。人よく太素に同じく變易せざれば、蓋し神明の域

【二四】亂。賦の末にありて一篇の大意を總ぶる詞。
【二五】渾元。天地の大元氣なり。
【二六】表。師表なり。
【二七】誼。義に同じ。
【二八】皓爾。白き貌。
【二九】太素。素は質なり、天質なり。

に遊ぶに庶幾し。

卷の第八

賦　辛

志下

(一)思玄の賦

張平子

先哲の(二)玄訓を仰ぎ、彌高しと雖も違はず。(三)仁里にあらずんば其れ焉んぞ宅らん、義跡にあらずんば其れ焉んぞ追はん。潛に(四)服膺して以て永く靖ひ、日月を緜ねて衰へず。伊れ中情の(五)信脩なる、古人の貞節を慕ふ。余が身を竦てて(六)止に順ひ、(七)繩墨に遵つて跌はず。志(八)摶摶として以て(九)懸に應じ、誠に心固くして其れ結べるが如し。性行を旌して以て佩を製し、

思玄の賦

【一】思玄。玄遠の德を思ふなり。張衡、字は平子、後漢の和帝の時侍中たり、諸常侍皆直を惡み正を醜みて衡を危うす、故に是賦を作りて以て時俗を非る。

【二】玄訓。玄遠なる教訓。

【三】仁里。仁者の居る處、論語に里ハ仁ヲ美トナスとあり。

【四】服膺。心に留めて忘れぬこと。

【五】信脩。脩は善なり。

【六】止。禮なり。

【七】繩墨。仁義の法則をいふ。

【八】摶摶。垂るる貌。

【九】懸。戰國策に楚王曰ク、寡人ノ心搖搖然トシテ懸旌ノ如シとあり。

(一)夜光と瓊枝とを佩び、(二)幽蘭の秋華を繡け、又之を綴るに(三)江蘺を以てす。(三)襞積を美くして以て(四)酷烈なり。允に(五)塵邈にして虧き難し。既に姱麗にして雙鮮きも、是時の珍とする攸にあらず。余が榮を奮へども見るものなく、余が香を播けども聞ぐものなし。幽獨にして此の(六)側陋を守る、敢て怠遑して勤を舎てんや。(七)二八の虞に遐へるを幸とし、(八)傅說の殷に生れしを嘉し、(九)前良の遺風を尚び、辰に後れて及ぶなきを恫む。何ぞ孤行の(一〇)煢煢たる、(一一)孑として羣せずして(一二)介立す。(一三)鸞鶱の特り栖むに感じ、(一四)淑人の合ふこと希なるを悲む。彼の合ふことなきも、其れ何ぞ傷まんや。衆僞の眞を冒ふを患ふ。(一五)旦は讒を羣弟に獲、金縢を啓いて後に信せらる。(一六)蒸民の僻多きを覽て、辟を立て以て身を危くせんことを畏る、曾ち(一七)煩毒して以て迷惑す、嗟孰か以て爲に言ふべき。私に(一八)湛憂して深く懷ひ、思(一九)繽紛として理まらず。願はくは力を竭して以て義を守り、貧窮すと雖も改めず、(二〇)彫虎を執へて象を試み、(二一)焦原に跕んで跟止まらんことを。庶はくは斯に信を奉じて以て周旋せんことを。既に死して後已まんことを要す。

【大意】余先哲の遺訓を慕ひ、その道高遠なりと雖も敢て違ふなく、仁里義跡にあらずんば、追ひて之に居るなし。常に遺訓を服膺し歳月を累ねて倦まず。禮義の法則に遵ひて敢て差跌せず。古人を慕ふの志搏搏然として懸旌の如く、此心の堅固なること結縛せるが如し。乃ち我が性行を明にせんが爲に、珠寶の佩を作り香草を繫け、衣縫美にして芳香高く、然れども是れ時俗の珍重する所にあらず。余が華香を奮敷すれども、人の見聞するなし。因つて獨

【一〇】夜光、瓊枝。皆珠なり。
【一一】幽蘭。香草なり。
【一二】江蘺。香草なり。
【一三】襞積。衣縫なり。
【一四】酷烈。香氣の高きこと。
【一五】塵邈。久遠なり。
【一六】側陋。卑賤の地位。
【一七】二八。八元八凱十六人の賢人をいふ。虞は舜なり。
【一八】傅說。殷の高宗の賢相なり。
【一九】前良。昔の賢人。
【二〇】煢煢。獨行の貌。
【二一】孑。獨なり。
【二二】介立。孤立なり。
【二三】鸞鶱。鳥の名、君子に喩ふ。
【二四】淑人。善人君子なり。
【二五】旦。周公旦なり、武王の弟にして成王の叔父なり、成王を輔けて政を聽く。武王殷を滅すの二年、病に罹りて危篤なり、周公身を以て王命に代らんとし、願文を作りて金縢の匱中に納め置きたり。周公の弟管叔蔡叔の二人、周公の勢盛なるを妬み成王に譖す。成王周公を疑ふ。後金縢の願文を見、始めて周公の異志なきを信ず。
【二六】蒸民。衆民なり。
【二七】煩毒。憂愁なり。

【一八】湛憂。深く憂ふること。
【一九】繽紛。亂るる貌。
【二〇】彫虎。獸の名、尸子に中黄伯曰ク、余左ニ太行ノ獶ヲ執ヘテ右ニ彫虎ヲ搏ス。タダ象ハ未ダ吾ガ心ト試ミズ、有力者ハ則チ又牛トナリ象トナリ鬬ヒ以テ自ラ試ミント欲スルナリ願フ。今二三子以テ義トナス將タ惡ンゾ之ヲ試ミントスル夫レ貧窮ハ太行ノ獶ナリ。疏賤ハ義ノ彫虎ナリ。而シテ吾曰ク之ニ遇ハバ亦以テ試ムルニ足ルトとあり。李善曰ク彫虎ハ以テ貧ニ喩ヘ象ヲ試ムルハ以テ力ヲ竭スニ喩フと。
【二一】焦原。尸子に莒國ニ石焦原アリ、廣サ五十歩、百仞ノ谿ニ臨ム、勇ヲ以テ莒子ニ見ユル者アリ、獨リ却行シテ踵ヲ齊ウス、世ニ稱セラルル所以ナリ。ソレ義ノ焦原タルヤ亦高シ、賢者ノ義ニ於ケル必ズ且ツ踵ヲ齊ウス。此レ一時ヲ服スル所以ナリとあり。李善曰ク焦原ハ以テ義ニ喩フと。

り退いて幽居す。敢て事を怠り勤を舍るにあらず。八元八凱の虞舜に遇ひしを慶び、傅說の高宗の世に生れて相となりしを喜び、我れ獨り時に後れて及ぶなきを痛むのみ。乃ち鸞鷖の獨棲を悲み、君子の遇合し難きを痛む。不遇は傷むに足らずとするも、羣小人の誣罔に至りては誠に患ふべきなり。昔周公旦は羣弟の讟に遇ひしも、成王金縢の書を啓き、始めて周公の異志なきを信ぜり。余衆人の邪行多きを見、獨り異を立てて其身を危くせんことを畏る。則ち深憂迷惑し心繽紛として理まらず。願くは力を竭して義を守り、貧窮すと雖も改めず、信義を守りて周旋し、死して後已まんと欲す。

俗遷渝して事化し、規矩の圓方を泯し、(三二)蕭艾を重笥に寶とし、(三三)蕙芷を香しからずと謂ひ、(三四)西施を斥けて(三五)御せず、(三六)騕褭を縶して以て箱に服け、(三七)頗僻を行ひて志を獲、法度に循つて殃に離ふ。惟れ天地の窮りなき、何ぞ遭遇の常なき。操を抑へて苟も容れられず、河に臨んで航なきに譬ふ。巧笑して以て媚を干めんと欲すれども、余が心の嘗ふ所にあらず。溫恭の(三八)黻衣を襲ね、禮義の繡裳を被り、貞亮を辮んで以て鞶となし、伎藝を雜へて以て珩となし、(三九)綵藻を昭すに(四〇)琱琭

【三二】蕭艾。臭草なり、邪佞に喩ふ。重笥は箱なり。
【三三】蕙芷。香草なり、忠賢に喩ふ。
【三四】西施。越の美女の名。
【三五】御。寵幸すること。
【三六】騕褭。古の駿馬なり。
【三七】頗僻。邪佞なり。
【三八】黻衣。斧の形のぬひを施したる禮衣。
【三九】綵藻。文章なり。
【四〇】琱琭。玉に似たる石。

を以てし、(四一)璜聲遠くして彌長し。淹しく(四二)棲遲して以て欲を恣にせんとすれば、(四三)曜靈忽として其れ西に藏る。(四四)己知を恃んで予を華せんとすれば(四五)鶗鴂鳴いて芳しからず。一年の(四六)三秀を冀へども、白露の霜となるに遒る。時(四七)亹亹として代序す。疇か與に(四八)比伉すべき。(四九)姤嫮の竝び難きを咨き、(五〇)韓に依りて以て流亡せんことを想ふ。恐らくは(五一)漸冉として成ることなからんことを。留らば則ち蔽はれて彰れじ。

【大意】然も時俗變遷し規矩を廢して用ひず。臭草を珍重して香草を香しからずといひ、(邪佞を尊んで忠賢を棄つるに喩ふ。)美女を斥けて寵せず、駿馬を駕して空しく勞せしむ、(賢才の人用ひられず、或は下位に在るに喩ふ。)されば邪僻の行ある者志を得、法度に遵ふ者却つて殃に遇ふ。それ天地の無窮なる、何ぞ此の常道なきの世に遭遇せる。自ら操行を抑へて苟も世に容れられんことを求めず。恰も河に臨んで舟の渡るべきなきが如し。巧笑して媚を世に干むるは、余が心の欲する所にあらず。溫恭禮義貞亮伎藝の美を以て其德を摠集し、以て冠帶を飾り、冠帶の上綵

【四一】璜聲。珮玉の聲。
【四二】棲遲。ゆつたりと遊ぶこと。
【四三】曜靈。日なり。
【四四】己知。漢書注に己知ハ猶ホ知己ノ如シとあり。
【四五】鶗鴂。鳥の名、モズ。此鳥秋分を以て鳴く。故に此鳥鳴けば草木凋傷す。
【四六】三秀。芝草なり。一年に三回花を開く。
【四七】亹亹。進む貌。
【四八】比伉。匹偶なり。
【四九】姤嫮。姤は惡なり。嫮は好なり。
【五〇】韓。韓衆なり、道を得て登仙したる人。
【五一】漸冉。時の進む貌。

藻玉有を施して既に明に、珮玉の聲甚だ長遠なり。余既に此の美服を著、游息して自ら恣にせんとすれば、歲月徒に冉冉として進み、知己を恃んで共に榮えんとすれば、忽ち讒邪に遇ひて進むを得ず。恰も靈芝の一年に三たび秀茂するも、却つて霜露に迫りて茂盛するを得ざるが如し。歲漸く進んで四序代謝し正道行はれず。誰か我と偶をなすべき。好惡の勢竝び居るを得ず。韓衆（仙人の名）に依りて共に流亡遠遊せんと欲するも、仙道恐らくは成し難かるべし。然も安閑として此に留まらば、讒邪の蔽ふ所となりて、所期を明かにする能はざらん。實に進退維れ谷まれり。

心猶豫して狐疑し、(五三)岐趾に卽いて情を臚ぶ。(五四)文君我が爲に(五五)蓍を端し、(五六)飛遯して以て名を保つに利し、(五七)梁山を歷て以て周流し、(五八)二女を崇嶽に感じ、或は(五九)迅風に翼して以て聲を揚げ、(六〇)氷折して營まず。(六一)天蓋し高けれども澤となる。誰か路の不平を云はん。(六二)動として自ら彊めて息まず。(六三)玉階の巉峥たるを踏む。篋氏の長短を懼れ、東龜を鑽りて以て(六四)禎に觀ふ。(六五)九皐の介鳥に遇ひ、素意の(六六)不呈を怨む。塵外に遊んで天を瞥、(六七)冥翳に據りて哀鳴す。(六八)鵂鶹貪婪を競へども、我れ脩潔して以て榮を益す。子(六九)玄鳥に故あり、母氏に歸して後に寧し。占既に吉にして悔なく、元辰を簡んで裝を俶ひ、旦に余清源に沐し、余が髮を(七〇)朝陽に晞かし、飛泉の(七一)瀝液に漱ぎ、(七二)石菌の流英を咀ひ、翾鳥のごとく擧りて魚のごとく躍り、將に往いて(七三)八荒に走かんとす。(七四)少皞の窮野を過ぎ、(七五)三丘に(七六)句芒を問ふ。何ぞ道眞の淳粹なる。穢累を去りて影輕なり。(七七)蓬萊に登りて(七八)容與す。(七九)鼇扑つと雖も傾かず。瀛洲に留りて芝を採り、聊且以て長生し、歸雲に憑りて遐く逝き、夕に余扶桑に宿り、(八〇)青岑の玉醴を飮み、(八一)沆瀣を餐ひて以て

【五二】岐趾。岐山の下、卽ち周の文王の居りし處。
【五三】文君。周の文王なり。
【五四】蓍。占易に用ふる具、其數五十本あり、古は蓍草の莖にて作る、後世の篠竹なり。
【五五】飛遯は世をのがるること。遯は艮下乾上の卦。
【五六】梁山。艮を山となす。
【五七】迅風。遯の卦の二爻より四爻までを巽となす。巽は風なり。
【五八】二女。巽は長女、兌は少女、故に二女といふ。崇は高なり。嶽は五嶽なり。遯の上九變して成となる。成は感なり。
【五九】氷折。遯の三爻より五爻までを乾となす、乾を氷となす、故に氷折といふ。
【六〇】天蓋云云。乾を天となし、兌を澤となす。
【六一】動。勉なり。

【六二】玉階は天子の階なり。巉峥は高き貌。
【六三】禎。祥なり。
【六四】九皐。詩經に鶴九皐ニ鳴クとあり。介鳥は大鳥なり、鶴をいふ。
【六五】不呈。不明といふが如し。
【六六】冥翳。天空なり。
【六七】鵂鶹。くまだか、小人に喩ふ。
【六八】玄鳥。鶴をいふ。老子に玄ノ又玄、衆妙ノ門とあり。
【六九】母氏。道をいふ。老子に天下始アリ、以テ天下ノ母トナル、既ニ其母ヲ得レバ又其子ヲ知ルとあり。元辰。良時なり。
【七〇】朝陽。山東をいふ。
【七一】瀝液。津潤なり。
【七二】石菌は石芝なり。流英は流華なり。
【七三】八荒。四海の外なり。
【七四】少皞。太古の帝、金天氏。窮野は其都なり。
【七五】三丘。蓬萊、方丈、瀛洲三神山なり。
【七六】句芒。東方の神。
【七七】容與。休息なり。
【七八】鼇。蓬萊山を負ふ大龜。
【七九】青岑は山の名、玉醴は玉泉なり。
【八〇】沆瀣。露氣なり。

粮となし、昔夢を(一)木禾に發し、(二)崑崙の高岡に穀す。

【大意】心疑ひて決せず。故に文王に就いて情を陳べ、其說を聽いて疑を決せんと欲す。文王乃ち我が爲に著を端して筮し、世を棄てて遯逃し、以て其名を保つに利しとなす。因つて衆山を歷て周遊し、迅風に乘じて聲を揚ぐ。或は二女を高嶽に感じ、或は氷折れて經營すべからず。天高けれども尙ほ澤となる。世路險なりと雖も誰か復た其道通せずと言はんや。勉めて自ら去らんと欲す。然も尙ほ玉階を戀ひて去る能はず。尙ほ忠賢を進めんことを思ふ。乃ち猶ほ筮に長短定まらざる所あらんことを懼れ、更に龜甲を鑽りて之を卜し、以て其祥を觀るに、九皐大鳥（鶴なり）の卦に遇ひ、素意の申呈するを得ざるを怨む。鶴塵外に遊び冥翳の中に哀鳴すれば、鵂鶹（小人に喩ふ）競ひ進んで以て貪婪す。己實に此鳥に類するあり。惟道に歸して後安きを得ん。占既に吉なり。乃ち元辰を選んで旅裝を整へ、先づ髮を淸源に沐ひて之を山東に乾かし、飛泉の靈液に漱ぎ、石芝の流華を食ひ、八荒に周遊せんとし、少皞の舊都を過ぎ三神山に句芒神を問ふ。道淳粹にして穢累なし。蓬萊に登りて逍遙す。巨鼇此山を負うて扑擊すれども傾倒せず。瀛洲に留りて芝草を採り、之を服して以て長生を取り、歸雲に乘りて遠く逝き、夕に扶桑に宿り、靑岑山の玉泉を飮み、露氣を

【八一】木禾。淮南子に崑崙ノ上ニ木禾アリ、其穗長サ五尋とあり。

【八二】崑崙。仙山の名。穀ば生ずること。

吸ひて粮となす。嘗て木禾の崑崙山上に生ずるを夢みしが、今親しく往いて之を見たり。朝に吾(三)暘谷に行き、(四)伯禹に(五)稽山に從ひ、(六)羣臣の玉を執るを嘉し、(七)防風の言を食むを疾む。(八)長沙を指して以て邪に徑し、(九)重華を南鄰に存し、(一〇)二妃の未だ從はず、(一一)翩縯として彼の(一二)湘濱に處るを哀む。流目して夫の(一三)衡阿を眺め、(一四)有黎の(一五)圮墳を覩、火正の懷るなく、山坡に託するに孤魂を以てするを痛む。愁鬱鬱として以て遠きを慕ひ、(一六)卬州を越えて遊遨し、躋日(一七)昆吾に中するとき、炎火の陶する所に憩ふ。(一八)芒熛を揚げて天を絳くし、水(一九)泫沄として濤を涌かし、溫風(一〇〇)翕として其れ熱を增し、(一〇一)慼として鬱悒して其れ聊

【八三】暘谷。日の出づる處。

【八四】伯禹。夏の禹王なり。

【八五】稽山。會稽山なり。

【八六】羣臣云云。左傳に禹諸侯ヲ塗山ニ合ス、玉帛ヲ執ルモノ萬國とあり。

【八七】防風。汪芒氏の君の名。國語に吳越ヲ伐チ會稽ヲ墮リ骨節ヲ獲、車ヲ專ニス、吳ノ使來リテ之ヲ仲尼ニ問フ、曰ク丘之ヲ聞ク、昔禹羣臣ヲ會稽山ニ致ス、防風後レテ至ル禹乃チ殺シテ之ヲ戮ス、其骨節車ヲ專ニス、此ヲ大トナストとあり。

【八八】長沙。地名。山海經に南方ニ蒼梧ノ川アリ、其中九疑山ハ舜ノ葬ル所、長沙ノ界中ニ在リとあり。

【八九】重華は舜なり。南鄰は南方なり。存は問なり。

【九〇】二妃。堯の女にして舜の妻たりし娥皇女英をいふ。

【九一】翩縯。美なる貌。

【九二】湘濱。湘水のほとり。

【九三】衡阿。衡山の隈。

【九四】有黎。高辛氏の火正たりし祝融をいふ。楚の靈王の世に衡山崩れて祝融の墓壞る。

【九五】圮墳。壞れたる墓。

【九六】卬州。正南の州の名。四海圖に交廣ノ南ニ卬州アリ、其處極メテ熱シとあり。

【九七】昆吾。淮南子に日暘谷ニ出デテ昆吾に至ル、是ヲ正中トイフとあり。

【九八】芒熛はほのほ。芒は光芒。

【九九】泫沄。沸く貌。

【一〇〇】翕。熱き貌。

【一〇一】慼は憂思なり。鬱悒は煩寃なり。

んじ難し。顧り羈旅して友なし。余安んぞ能く茲に留まらん。〔一〇一〕金天を顧みて歎息し、吾往いて西に嬉まんと欲す。祝融を前にして麾を擧げしめ、〔一〇二〕朱鳥を纚ねて以て旗を承けしむ。〔一〇三〕建木に廣都に臚り、〔一〇四〕若華を撫ひて躊躇し、〔一〇五〕軒轅に西海に超ぎ、〔一〇六〕汪氏の龍魚に跨る。此國の千歳なるを聞くも、曾て焉んぞ以て余を娯ましむるに足らん。〔一〇七〕九土の殊風を思ひ、〔一〇八〕蓂收に從つて遂に徂く。〔一〇九〕欻として神のごとく化して蟬のごとく蛻け、精粹を朋として徒と爲し、〔一一〇〕白門を蹶んで東に馳せ、云に台中野に行き、〔一一一〕弱水の潺湲たるを亂り、〔一一二〕華陰の湍渚に逗り、〔一一三〕馮夷を號んで津を清めしめ、龍舟に櫂さして以て予を濟さしむ。〔一一四〕帝軒の未だ歸らざるに會ひ、悵として徜徉して〔一一五〕延佇し、河林の〔一一六〕蓁蓁たるに怛ひ、〔一一七〕關雎の女を戒むるを偉とす。〔一一八〕黄靈詹りて命を訪ふ。天道を樛めて其れ焉にか如

【一〇一】金天。西方少昊の主る所。
【一〇二】朱鳥。南方の星なり。
【一〇三】建木。木は木の名。廣都は地名。
【一〇四】若華。樹の名。
【一〇五】軒轅。國の名。
【一〇六】汪氏。國の名。
【一〇七】九土。九州の土。
【一〇八】蓂收。西方の神の名。欻。忽然なり。
【一〇九】白門。淮南子に八極西南ノ方ヲ偏駒ノ山トイフ、白門トイフとあり。
【一一〇】弱水。川の名、山海經に昆侖ノ丘、其下弱水ノ川アリテ之ヲ環ルとあり。潺湲は水の流るる貌。
【一一一】華陰。華山の北。
【一一二】馮夷。河の神。
【一一三】帝軒。黄帝なり。黄帝西海の橋山に葬る、神未だ東歸せざるなり。
【一一四】延佇。久しく立ちとまること。
【一一五】蓁蓁。茂盛の貌。
【一一六】關雎。詩經の篇の名。
【一一七】黄靈。黄帝なり。

かんと。

【大意】朝に暘谷に行き、會稽山に禹王に從ひ、羣臣の玉帛を執るを嘉し、防風の僞言を疾み、更に長沙を指して斜に往き、南方に帝舜を問ひ、二妃の舜に從ふ能はずして江湘の間に死し、神となりて此地に在るを哀み、衡山の阿を眺めて、祝融の墓壞れ其魂獨り山坡に寄託するを痛み、遂に南方卬州を越えて遠遊す。日の昆吾に中する時、炎火の搖蕩する所に憩ふ。火氣光芒天を焦して赤く、水沸騰して濤を揚げ、炎風熾熱し、煩寃して安んずべからず。余獨遊して友なし。焉んぞ此地に留まるを得んや。乃ち西方を顧望し往いて嬉遊せんとし、祝融をして前驅せしめ、朱鳥を聯ねて旗を承けしめ、廣都に至りて建木の下に息ひ、若華の枝を拾ひて徘徊し、更に西行して軒轅國を過ぎ、汪氏國の龍魚に跨る。此國の人皆千歳の壽を保つと雖も、以て余を娯ましむるに足らず。九州の美風を思ひ、乃ち西方よりして中野に往かんとす。忽然として神の化するが如く、又蟬の皮殻を脱するが如く、精粹を以て朋友徒侶となし、白門山を蹶んで東に馳せ、弱水を亂り、華山の北に留まり、馮夷を呼んで津を清めしめ、龍舟に棹して余を中野に濟さしむ。然も黄帝西海の橋山に死して、其神未だ東歸せず、因つて悵然として之を思ひ、河林の中に息ひ關雎の詩の女を戒むるを美す。適黄帝至る。乃ち就いて吉凶の命を問ふ。余天道を求めて何にか往くべきと。

曰く、近く信じて遠く疑ふは、(一一〇)六籍も闕いて書せず。神遼は味うして其れ覆かにし難し。疇か克く謨かにして諸に從はんや。(一一一)牛哀病んで虎と成り、昆に逢ふと雖も其れ必ず噬み、(一一二)べつれいたふ鼈令殪れて尸亡し、蜀の禪を取りて世を引くす。死生錯りて其れ齊しからず、(一一三)司命と雖も其れ晰かならず。(一一四)竇號いて代路に行きしも、後祚を膺けて(一一五)繁廡し、(一一六)王侈を漢庭に肆にせしも、卒に恤を銜んで緒を絶ち、(一一七)尉尤眉にして郎潛し、(一一八)三葉に逮んで(一一九)武に遘ひ、(一二〇)董弱冠にして(一二一)衮を司り、(一二二)王隧を設くれども處らず。夫れ吉凶の相仍る、恆に反側して所なし。(一二三)穆天に屆りて以て牛を悅びしも、豎叔を亂りて主を幽し、(一二四)文祛を斷たれて伯を忌みしも、(一二五)閹賊を謁げて后を寧んず。(一二六)通人だも好惡に闇し。豈昏惑して能く剖たんや。(一二七)贏識を摘りて(一二八)胡を戒め、諸を外に備へて以て諸王に賜ふ。簪姬亦與つて行中に在り。家清河に在り。趙に往き家に近からんことを願ひ、其主遣官者に請ふ。必ず趙籍の伍中に置けと。官者之を忘れ、誤つて代籍の伍中に置く。行くに當りて簪姬涕泣して其官者を怨み往くを欲せず。相強めて乃ち肯て行く。代に至るや代王獨り簪姬を寵し、景帝を生む。後立ちて皇后となる。

【一一〇】六籍。六經なり。

【一一一】牛哀。淮南子に牛哀病ンデ七日ニシテ化シテ虎トナル其兄戸ヲ啓イテ入ル、哀搏シテ之ヲ殺シ、自ラ虎タルヲ知ラズとあり。

【一一二】鼈令。荊人なり。鼈令死す。其尸を江に棄つ。流に逆ひて上り蜀都に至りて生く。蜀の望帝と相見る。望帝以て相となし、德の令に及ばざるを以て、乃ち國を委して令に授けて去る。

【一一三】司命。神の名。鬼錄を總ぶる者なり。

【一一四】竇。漢の文帝の皇后、景帝の母なり。呂太后宮人を出して以て諸王に賜ふ。簪姬亦與つて行中に在り。家清河に在り。趙に往き家に近からんことを願ひ、其主遣官者に請ふ。必ず趙籍の伍中に置けと。官者之を忘れ、誤つて代籍の伍中に置く。行くに當りて簪姬涕泣して其官者を怨み往くを欲せず。相強めて乃ち肯て行く。代に至るや代王獨り簪姬を寵し、景帝を生む。後立ちて皇后となる。

【一一五】繁廡。茂盛なり。

【一一六】王。漢の平王の皇后王氏、王莽の女なり。莽の天子となるに及び、后常に疾と稱して朝せず。莽の誅せらるるに及び、自ら火中に投じて死す。

【一一七】尉は官名なり。尉眉は青き眉なり。漢武故事に額駟文帝ノ時郎トナル、武帝輦ヲテ郎署ヲ過ギ、駟ノ尉眉白髮ナルヲ見、問ウテ曰ク叟何ノ時カ郎トナル、何ゾ其ノ老イタルヤト、答ヘテ曰ク臣ハ文帝ノ時郎トナル、文帝ハ文ヲ好ンデ臣ハ武ヲ好ム、景帝ニ至リ帝ハ美ヲ好ミ臣ガ貌醜シ、陛下少キヲ好ンデ臣已ニ老イタリ、是ヲ以テ三世不遇ナリ、故ニ郎署ニ老ユト、武帝其言ニ感ジ擢デテ會稽都尉ニ拜スとあり。

【一一八】三葉。文帝景帝武帝三世なり。

【一一九】武。武帝なり。

【一二〇】董。董賢年二十二にして三公となる。哀帝崩じ賢自殺す。家惶恐して夜之を葬る。王莽其の詐死なるを疑ふ。有司奏す、賢家墓を造り王制に異らずと。賢既に疲れ、裸にして其尸を診す。因つて獄中に埋む。

【一二一】衮。三公の服なり。

【一二二】王隧。地を掘りて路を通ずるを隧といふ、王の葬禮なり。

【一二三】穆云云。左傳に叔孫穆子、名ハ豹、魯ノ大夫ナリ、罪アリテ走リ齊ニ向フ、庚宗ニ及ンデ婦人ニ遇フ、之ニ通ジテ子アリ、齊ニ在リテ夢ム、天己ヲ壓シテ勝タズ、顧ミテ人ヲ見ルニ黑クシテ上僂、深目ニシテ豺喙ナリ、之ヲ號シテ牛トイフ、余ヲ助ケテ乃チ之ニ勝チヌト、後穆子還ル、庚宗ノ婦人雉ヲ獻ズ、穆子之ニ問ヒテ曰ク汝子アルカト、曰ク余ガ子已ニ能ク雉ヲ捧ゲテ我ニ從フト、之ヲ見レバ則チ夢ミシ所ナリ、未ダ其名ヲ問ハズ、之ヲ號シテ牛トイフ、竪トナラシム、牛其室ヲ亂シテ之ヲ有セント欲ス、叔孫疾ム、牛詐リテ外人ニ謂ウテ曰ク、夫子疾病ナリ、人ヲ見ルヲ欲セズト、饋ヲ介ニ寘イテ退カシム、牛進メズ、叔孫食ハズシテ死セリとあり。

【一二四】文云云。國語に晉ノ獻公、寺人勃鞮ヲシテ文公ヲ蒲城ニ伐タシム、文公垣ヲ踰ユ勃鞮其袪ヲ斬ル、後文公ノ國ニ入ルニ及ビ勃鞮見エンコトヲ求メ、呂甥郤芮ノ陰謀ヲ告グとあり。

【一二五】伯。勃鞮、字は伯楚なり。

【一二六】閹。宦官即ち寺人なり。勃鞮を指す。

【一二七】通人。叔孫穆子、晉の文公を指して言ふ。

【一二八】贏は秦の姓なり。識は圖錄、即ち未來記なり。

【一二九】胡。北方のエビス。

て内に發す。或は（一四〇）賄を輦して車を違くれども、孕行くゝ産して對をなす。（一四一）慎竈顯かに以て天を言ひ、水火を占して妄に誶ぐ。（一四二）梁叟夫の黎丘を患へ、厥子に丁りて刃を剚す。親しく睹る所にして識らず。矧や幽冥の信ずべけんや。（一四三）緜蠻して以て己を淖き、百憂を思ひて以て自ら疹むなかれ。

【大意】黄帝曰く、天道は知るべからず。近くして之を信じ、遠くして之を疑ふ。六經も闕きて記述せず。もとより暗昧にして審かにし難し。誰か能く明にして之に從はんやと。因つて思ふに牛哀は疾んで虎に化し、其兄を殺し、鼈令は死して流亡し、蜀帝の禪を受けて世を長くす。死生

【一四〇】賄云云。賄は財なり、輦は運ぶなり。事は人名なり。昔周擊トイフ者アリ、家甚ダ貧シ、夫婦夜田ス、天帝見テ之ヲ矜ミ、司命ニ問ヒテ曰ク、此レ富マスベキカト、司命曰ク命貧ニ當レドモ、張車子ノ財アリ、以テ之ニ假スベシト、卽チ借シテ之ニ與フ、期シテ曰ク、車子生ルレバ急ニ之ヲ還セト、田者稍富ミ、貨ヲ致スコト且ニ萬ナラントス、司命ノ言ヲ忌ミ夫婦其賄ヲ輦シテ以テ逃レ、行旅者ト同宿ス、夫妻ノ車下ニ寄リテ宿スルニ逢フ、夜子ヲ生ム、名ヲ夫ニ問フ、夫曰ク車間ニ生レ車子ト名ヅクト、コレヨリ向フ所利ヲ失ヒ、遂ニ更ニ貧困ナリ、事搜神記に見ゆ。

【一四一】慎竈。慎は魯の大夫梓慎、竈は鄭の大夫裨竈。左傳昭公二十四年、二十八年に見ゆ。

【一四二】梁叟。呂氏春秋に梁國ノ北地ヲ黎丘ト名ヅク、奇鬼アリ、ヨク人ノ子姪昆弟ノ狀ニ效フ。邑ノ老人市ニユキ醉ヒテ歸ル者アリ、鬼其子ノ狀ニ效ヒ、扶ケテ道ニ之ヲ苦ム、老人歸リ酒醒メテ其子ニ謂ツテ曰ク、吾汝ガ父タリ、我醉フ汝道ニテ我ヲ苦ムルハ何ゾヤト、其子曰ク此事ナシト、老人曰クアア是レ必ズ彼ノ奇鬼ナラント、明日復タ市ニ飲ミ、遇ヒテ之ヲ刺サントス欲ス、明日市ニ往キテ醉フ、其眞子其父ノ歸ルヲ能ハザランコトヲ恐レ、遂ニ之ヲ迎フ、老人其眞子ヲ望ミ劒ヲ拔イテ之ヲ刺スとあり。

【一四三】緜蠻。繫著なり。

の舛錯かくの如し。司命神と雖も之を明にする能はず。竇后は泣いて代に行きしも、後祚に遇ひて榮華を極め、王后は侈を漢廷に窮めしも、其父王莽と死を共にし、顏駟は斉眉にして賤郎たりしも、三世を歷て武帝に遇ひ、遂に都尉に擢んでられ、董賢は弱冠にして三公となり、王者の葬禮に擬せしも、却つて獄中に葬らるるに至る。此の數者吉凶相因り、反側して定まる所なし。叔孫穆子夢に天に壓せられて牛を悦び、牛を以て豎となす。後豎牛叔孫の室を亂りて、其主を餓死せしむ。晉の文公袖を斷たれしを以て寺人勃鞮を疾む。後其忠言によりて陰謀を知る。それ通人と雖も好惡に惑ふ。況んや凡人をや。秦の始皇、盧生が圖籙（未來記）に秦を亡す者は胡ならんとあるを信じ、將軍蒙恬をして外に向つて胡を擊たしむ。始皇の崩ずるや、李斯趙高始皇の詔を受くと詐り、胡亥を立てて太子となし、其禍内より發す。周擊財を運んで車子を避けしも、孕婦子を生んで車子と答ふ。梓愼裨竈の二人、水火の災あるを豫言せしも、其事皆妄なり。梁叟黎丘の奇鬼を疾みて之を殺さんとし、却つて我が子を殺せり。此の數者皆幽冥の事なり。豈定信すべけんや。世事に繫著し憂思して自ら疹むべきにあらざるなり。彼の（一四四）天監の孔だ明なる、用て忱を棄けて仁を祐く。（一四五）湯體を蠲くして以て禱祈し、庖褫を蒙

【一四四】天監。天の監視。

【一四五】湯云云。殷の湯王の時、大に旱すること七年なり。湯乃ち桑林に祈り自ら以て犧となす。大雨乃ち至る。彭禮。大なる幸。

り て以て民を拯ふ。(二四)景三慮して以て國を營み、(二四)熒惑他辰に次る。(二四)魏顆亮に以て　(二四)治に從ひ、(二四)鬼　(二五)回に亢して以て秦を斃す。(二五)咎繇邁いて德を種き、德を樹てて　(二五)英六に懋なり。(二五)桑末に夫の　(二五)根生を寄せ、卉既に凋んで已に育す。有言うて酬いざるはなし。又何に往くとして復らざらん。盍ぞ迹を遠ざけて以て聲を飛ばさざる。孰か時の蓄ふべしと謂ふ。仰いで首を矯げて以て遙に望めば、魂　(二五)愴惘として

【四六】景云云。呂氏春秋に宋ノ景公疾アリ、司馬子韋曰ク、熒惑(星名)心(星名)ヲ守ル、心ハ宋ノ分野ナリ、君之ニ當ル、若シ之ヲ祭ラバ相ニ移スベシト、公曰ク相ハ寡人ノ股肱ナリ、心腹ノ疾ヲ除キテ股肱ニ移シテ可ナランヤト、曰ク民ニ移スベシト。公曰ク民ハ國ナナス所以ナリ、民ナケレバ何ヲ以テ國ヲナサント、曰ク歲ニ移スベシト、公曰ク歲ハ民ヲ養フ所以ナリ、歲ミノラズンバ何ヲ以テカ民ヲ畜ハント、子韋曰ク君善言ヲ言ヘリ、熒惑必ズ三舍ヲ退カン、年ヲ延ブルコト二十一年ナラントとあり。

【四七】熒惑は火星なり。辰は星の位なり。

【四八】魏顆。左傳に初メ魏武子嬖妾アリ、武子疾アリ、顆ニ命ジテ曰ク、必ズ是妾ヲ嫁セヨト、疾甚シキ時則チ曰ク、必ズ殉セシメヨト、卒スルニ及ビ顆之ヲ嫁ス、輔氏ノ役ニ及ビ顆老人ノ草ヲ結ンデ以テ杜回ニ抗スルヲ見ル、回顆イテ顚ル、故ニ之ヲ獲タリ、夜夢ム、曰ク余ハ乃ガ嫁スル所ノ婦人ノ父ナリ、爾先人ノ治命ヲ用フ、余是ヲ以テ報ユルナリトとあり。

【四九】治。治命、正しき命令。

【五〇】回は秦の力士杜回。亢は抗なり。

【五一】咎繇。皐陶に同じ。

【五二】英六。地名。

【五三】桑末。木の名。

【五四】根生。寄生なり。

【五五】愴惘。惆悵なり。

【五六】皚皚。氷の厚き貌。

清泉沍りて流れず。寒風凄として其れ永く至り、(二五七)穹岫を拂つて　(二五八)騷騷たり。(二五九)玄武殼中に縮り、(二六〇)騰蛇蜿りて自ら糾ひ、魚は鱗を矜てて凌に弁り、鳥は木に登りて條を失ふ。(二六一)太陰の屏室に坐し、慨として歎を含んで愁を增し、(二六二)高陽の寓を相るを怨み、顓頊の　(二六三)幽に宅るを倘しとし、織路に　(二六四)四裔に庸するも、斯と彼と其れ何ぞ瘳らん。寒門の絕垠を望み、余が縶を　(二六五)不周に縱にす。

【大意】天の監視は甚だ明かなり。以て誠信仁德の人を祐く。湯王は身を潔くして天に禱りしかば、大福を蒙りて民を濟ひ、宋の景公は三慮して國を治めしかば、熒惑星も爲に其位を換へ、魏顆は誠信にして父の治命に從ひしかば、靈鬼來りて之を助け、遂に强秦を折くを得、皐陶務めて其德を布きしかば、禹其後を英六に封じ、桑末既に凋むも寄生の尙ほ茂るが如く、衆國已に滅ぶるも、英六獨り存せり。所謂積德の後必ず餘慶あるものにして、言うて酬いられざるはなく、往いて復らざるはなし。ああ吉凶定まらず、ただ道德に在るのみ。何ぞ遠遊して英聲を飛ばさざらん。時は逝き易くして蓄へ止むべからず。吾が意決せり。因つて首を擧げて遙に望めば、心惆悵して儔侶なきを悲む。乃ち

【五七】穹岫。山峯なり。

【五八】騷騷。風の聲。

【五九】玄武。北方の神獸。

【六〇】騰蛇。北方の獸なり。

【六一】太陰は北方なり。屏室は蔽室なり。

【六二】高陽は帝顓頊なり。寓は居なり。

【六三】幽。北方の地。

【六四】四裔は四方の遠地。庸は勞なり。

【六五】寒門は北極の門なり。絕垠は絕遠の地。

【六六】不周。山の名。

中國の隘陋を悲み、將に北に度りて徧く域中に遊ばんとす。北地寒冽、積氷堅く凍りて流れず。寒風山峰を拂つて騷騷たり。玄武騰蛇も甲殼の中に縮り、魚は鱗を立て鳥は木に集りて寒に苦む。余も亦此に坐して歔欷を增し、顓頊の此の小陋の地に居るを怨む。余四遠の地に往來すること織るが如く頗る勞す。然も皆留まるに足らず。此地と相愈るなし。是に於てか寒門を望んで轡を不周山に縱にす。

〔一六七〕迅猋潚として其れ我を媵り、騖せて翩飄として禁ぜず。〔一六八〕谽嘲の洞穴を越え、通川の〔一六九〕碄碄たるに漂ひ、〔一七〇〕重陰を經て寂寞たり、〔一七一〕墳羊の深潛を慾む〔一七二〕荒忽を地底に追ひ、無形を軼ぎて上り浮び、〔一七三〕石密の闇野を出で、蹊の由る所を識らず。〔一七四〕燭龍を速きて炬を執らしめ、鍾山に過りて中ごろ休ひ、〔一七五〕瑤谿の赤岸を瞰、〔一七六〕祖江の劉されしを弔ひ、〔一七七〕王母を銀臺に聘し、〔一七八〕玉芝を羞めて以て飢を療す。〔一七九〕戴勝憖として其れ既に

【一六七】迅猋。疾風なり。潚は疾き貌。
【一六八】谽嘲。空大の貌。
【一六九】碄碄。深廣の貌。
【一七〇】重陰。地下なり。
【一七一】墳羊。土精の怪なり。國語に季桓子井ヲ穿チ、玉缶ノ如キモノヲ獲タリ、中ニ羊馬アリ、之ヲ仲尼ニ問ハシム、曰ク土ノ怪ヲ墳羊トイフ云云トとあり。
【一七二】荒忽。幽昧の貌。
【一七三】石密。山海經に密山是レ玄玉ヲ生ズ、黃帝密山ノ玉策ヲ取リテ之ヲ鍾山ノ陰ニ投ズとあり。此の石密疑ふらくは密山ならん。
【一七四】燭龍。鍾山の神なり。
【一七五】瑤谿。[illegible]岸ともいふ。
【一七六】祖江。人名、山海經ニ欽[illegible]祖江ヲ崑崙ノ陽ニ殺ス、帝乃チ鍾山ノ東ニ戮スとあり。
【一七七】王母。西王母なり、仙女の名。銀臺は西王母の居る所。
【一七八】玉芝。白芝ともいふ。靈草なり。
【一七九】戴勝。西王母を謂ふ。憖は笑ふ貌。

歡び、又余が行の遲きを誚る。〔一八〇〕太華の玉女を載せ、〔一八一〕洛浦の虙妃を召す。咸姣麗にして以て〔一八二〕蠱媚なるに、〔一八三〕嫮眼にして娥眉なるを增し、〔一八四〕訬婧の纖腰を舒べ、雜錯の〔一八五〕袿徽を揚げ、朱脣を離いて微笑し、顏〔一八六〕的礫として以て光を遺し、〔一八七〕環琨と〔一八八〕琛縭とを獻じ、厥好を申ぶるに〔一八九〕玄黃を以てす。色豔しくして賂美なりと雖も、志〔一九〇〕浩蕩として嘉せず。〔一九一〕雙材納れられざるを悲み、竝に詩を詠じて淸歌す。歌に曰く、天地〔一九二〕烟熅、百卉葩を含み、鳴鶴頸を交へ、〔一九三〕鵾鳩相和す。〔一九四〕處子春を懷ひ、精魂回り移る。如何ぞ〔一九五〕淑明にして、我を忘るること實に多きと。

【大意】風我を送りて其の行くこと輕疾なり。空大の穴を越え、廣深の淵に浮び、地下幽靜の界を經て土精を其の潛處に念ひ、荒忽無形を出でて上り行き、密山の野を過ぎて路の由るべきに迷ひ、山神を招いて炬を執らしめ、鍾山を過ぎて休息し、瑤岸を瞰て祖江の殺されしを弔ひ、崑崙山に至りて西王母を銀臺の中に聘し、白芝を進めて其饑を療すれば、西王母大に歡びて余が來るの遲きを誚る。因つて更に太華の神女と洛浦

【一八〇】太華は山の名。玉女は神女なり。
【一八一】洛浦は洛水の濱。虙妃は神女の名。
【一八二】蠱媚。美しき貌。
【一八三】嫮眼。好き目つき。
【一八四】訬婧。細腰の貌。
【一八五】袿徽。婦人の服なり。
【一八六】的礫。明なる貌。
【一八七】環琨。玉佩なり。
【一八八】琛縭。玉にて飾れる帶。
【一八九】玄黃。黑又は黃色の帛。
【一九〇】浩蕩。ほしいままなる貌。
【一九一】雙材。玉女及び虙妃をいふ。
【一九二】烟熅。氣の和ぐ貌。
【一九三】鵾鳩。鳥の名、みさご。
【一九四】處子。處女なり。
【一九五】淑明。淑は善なり。

の慮妃とを召取る。皆好麗にして艶美、細腰柳の如く雜錯の衣を纏ひ、朱唇を啓いて微笑し、玉顏光輝あり。余に贈るに玉珮と玉帶とを以てし、更に情好を表するに玄黃の帛を以てす。(前文の二女を崇岳に感ずとは是れなり。二女艶麗にして贈物美好なりと雖も、我が志浩蕩としては敢て嘉しとせず。二女乃ち身の納れられざるを悲みて歌を詠ず。其歌に云く、天地烟煴として百草花を著け、鳴鶴は雌雄頸を交へ、鴛鴦は雌雄相和して鳴く。此陽春に際し吾豈思ふ所なきを得んや。精魂爲に轉動す。足下は善良淑明の人なり。何ぞ我を棄てて顧みざると。將に答賦せんとして暇あらず、爰に駕を整へて亟に行き、崑崙の巍巍たるを瞻、(一九七)縈河の洋洋たるに臨み、靈龜を伏せて以て坻を負はしめ、螭龍の(一九八)飛梁を亙し、(一九九)閶風の層城に登り、(二〇〇)不死を構へて牀となし、(二〇一)瑤藥を屑いて以て糗となし、白水を斟んで以て漿となして夢を占はしむ。乃ち貞吉の(二〇三)元符なり。(二〇四)令德を正中に滋くし、(二〇五)嘉秀を含んで以て敷をなす。既に(二〇六)穎を垂れて本を顧み、亦思を故居に要す。和靜に安んじて

【一九六】●●崑崙は山の名。●●巍巍は高き貌。史記禹本紀に河ハ崑崙ヨリ出ヅとあり。

【一九七】●縈河。河の曲れるをいふ。●洋洋は流るる貌。

【一九八】●飛梁。浮橋なり。

【一九九】●閶風。崑崙山の名。

【二〇〇】●不死。崑崙山に不死樹あり。

【二〇一】●瑤藥。玉英なり。

【二〇二】●巫咸。古の神巫なり。●拜は使なり。

【二〇三】●元符。よきしるし。

【二〇四】●令德。美德なり。

【二〇五】●嘉秀は善美なり。●敷は布きひろまること。

【二〇六】●穎。穂なり。

時に隨ふは、姑く(二〇七)純懿の廬る所なり。(二〇八)庶僚を戒むるに(二〇九)夙會を以てすれば、僉職に供して竝び迓ふ。(二一〇)豐隆は軯として其れ(二一一)震霆し、(二一二)列缺は曄として其れ夜を照し、(二一三)雲師は黮として以て交集し、凍雨は(二一四)沛として其れ途に灑ぐ。(二一五)琱輿を轙して(二一六)菎を樹て、(二一七)應龍を擾して以て輅に服く。百神(二一八)森として其れ備に從ひ、屯騎羅りて星のごとく布く。余が袂を振ひて車に就けば、脩劍(二一九)揭として以て(二二〇)低昂し、冠(二二一)晻晻として其れ蓋に映じ、佩(二二二)綸繩として以て(二二三)煇煌し、僕夫儼として其れ策を正し、(二二四)八乘騰りて(二二五)超驤し、(二二六)氛旄溶として以て(二二七)天旋し、(二二八)蜺旌飄として以て飛颺す。(二二九)軨軹を撫して還睨れば、心(二三〇)勺爍として其れ湯の若し。(二三一)上都の(二三二)赫戲たるを羨

【二〇七】●純懿。純美なり。

【二〇八】庶僚。衆神なり、後の豐隆、列缺等をいふ。

【二〇九】●夙會。早く集ること。

【二一〇】●豐隆は雷神なり。●軯は聲なり。

【二一一】●震霆。霹靂なり。

【二一二】●列缺。電光なり。●曄は光る貌。

【二一三】●雲師は雲の神。●黮は陰る貌。

【二一四】●沛。雨の降り注ぐ貌。

【二一五】●琱輿は玉にて飾りし輿。

【二一六】●菎。車蓋の金華なり。蔡邕獨斷に乘輿車ハ皆羽蓋金華爪ナリとあり。

【二一七】●應龍。羽ある龍。

【二一八】●森。衆き貌。

【二一九】●揭。動く貌。

【二二〇】●低昂。あがつたり、さがつたりすること。

【二二一】●晻晻。高き貌。

【二二二】●綸繩。盛飾の貌。

【二二三】●煇煌。光る貌。

【二二四】●八乘。八馬を以て車に駕するなり。

【二二五】●超驤。躍りあがること。

【二二六】●氛旄は氛氣を以て旗となすなり。●溶は盛なる貌。

【二二七】●天旋。天の回旋するが如きなり。

【二二八】●蜺旌。虹の旗。

【二二九】●軨軹。車牆の間の橫木。

【二三〇】●勺爍。熱き貌。

【二三一】●上都。天帝の居なり。

【二三二】●赫戲。盛なる貌。

む。何ぞ故に迷ひて忘れざる。(三三)青珊を左にして以て(三四)芝を犍て、(三五)素威を右にして以て鉦を司らしめ、(三六)長離を前にして羽を拂はしめ、後(三七)水衡を玄冥に委ね、(三八)箕伯に屬して以て風を函み、(三九)洪泥を澄して清を(一四〇)離離たるを曳き　(一四一)玉鸞の鏗鏗たるを鳴らし、清霄なさしめ、雲旗の(一四二)蠖蠖に浮んで上征く。(一四三)紛翼翼として以て徐に戻り、を涉りて升遐り、(一四四)猋回回として其れ靈を揚ぐ。

【大意】二女の歌に答へんとするに暇あらず、乃ち駕を整へて速に行き、崑崙山を仰ぎ河曲に臨み、靈龜をして洲を負はしめ、螭龍をして橋を作らしめ、闐風の巓に登り、不死樹を構へて牀となし、玉英を碎いて糧となし、白水を酌んで漿となし、巫咸をして木禾の夢を占はしむるに、貞吉の善符を得たり。曰く、木禾の夢、當に美德を發して正中の道をなし、善美を含んで世に敷くに宜し。禾は穗を垂れて根に向ふ。君子も亦故居を忘るべからず。宜しく和靜を以て自ら安んじ、時俗に順ふべし。是れ純美の居る所なりと。乃ち衆神を戒めて早く集らしむるに、皆よく其職

【一三三】青珊。青龍なり。
【一三四】芝。小蓋なり。
【一三五】素威。白虎なり。禮記に君行クバ青龍ヲ左ニシ白虎ヲ右ニスとあり。
【一三六】長離。朱鳥なり。禮記に朱鳥ヲ前ニシテ玄武ヲ後ニスとあり。
【一三七】水衡。山澤を掌る官。玄冥は北方の神。
【一三八】箕伯。風の神。
【一三九】洪泥。混濁なり。
【一四〇】離離。飛ぶ貌。
【一四一】玉鸞はクツワの鈴。鏗鏗は聲なり。
【一四二】蠖蠖。遊氣なり。
【一四三】紛は盛なる貌。翼翼は行く貌。
【一四四】猋は火華なり。回回は光る貌。

に供して我を迎へ、雷神は聲を震ひ電光は夜を照し、雲神は雲を聚あ、雨神は途に灑ぐ。因つて玉輿を裝ひて金華蓋を立て、龍を馴して車に駕すれば、衆神の扈從すること列星の如し。余是に於て袂を振ひ劍を動かし、高冠を戴き玉佩を帶びて車に乘れば、僕御鞭を正して八馬飛躍し、氛氣の塵、虹霓の旌、飛揚旋轉す。軼に憑りて舊鄉を回視すれば、余が心熱して湯の如し。(以下天路の通ずべきを言ふ。前文の天蓋し高くして澤となる四句の意に應ず。外に天を瞥るの象あり)已に上都の盛榮を慕ひて天上の遊を思ふ。何ぞ故舊に迷ひて忘れざる。乃ち左に青龍をして芝蓋を竪てしめ、右に白虎をして鉦鼓を主らしめ、朱鳥を前にして羽毛を拂はしめ、玄冥に命ずるに水衡の職を以てし、風師をして其風を懷き、混濁の氣を澄まして清冷ならしめ、雲旗を曳き玉鸞を鳴らして天上に上り行き、火華の盛なるが如く其神靈を揚ぐ。

(一四五)帝閽を叫んで扉を闢かしめ、(一四六)天皇に瓊宮に覿え、(一四七)廣樂の九奏を聆く、展に(一四八)洩洩として以て(一四九)彭彭たり。治亂を(一五〇)律均に考へ、意に始を建てて終を思ふ。惟れ(一五一)般逸の歎くなき、樂往

【一四五】帝閽。天帝の門番。
【一四六】天皇は天帝なり。瓊宮は天帝の宮なり。
【一四七】廣樂。樂の名。樂は九奏を以て一成となす。
【一四八】洩洩。和樂の貌。
【一四九】彭彭。和樂の貌。
【一五〇】律均。音律を調ふる器。琴道に琴ハ七絲・是ヲ以テ萬物ニ通ジテ治亂ヲ考フとあり。
【一五一】般逸。逸樂なり。

いて哀來らんことを懼る。(二五二)素女絃を撫して餘音あり。(二五三)太容吟じて曰く念へやと。既に(二五四)溢を防いで志を靖にし、我が暇に迨んで以て(二五五)翱翔す。(二五六)紫宮の肅肅たるを出で(二五七)太微の閶閶たるに集り、(二五八)王良に命じて(二五九)策駟を掌らしめ、(二六〇)高閣の將將たるを踰え、(二六一)罔車の幕幕たるを建て、(二六二)青林の芒芒たるに獵り、(二六三)威弧の拔剌たるを彎き、(二六四)幡冢の封狼を射、(二六五)壁壘を北落に觀、(二六六)河鼓の磅硠たるを伐ち、(二六七)天潢の汎汎たるに乘り、(二六八)雲漢の湯湯たるに浮び、(二六九)招搖攝提に倚りて以て低回劉流し、(二七〇)二紀五緯の(二七一)綢繆遞皇たるを察る。(二七二)偃蹇夭矯、(二七三)娩として(二七四)連卷たり。(二七五)雜沓叢

【二五二】素女。神女なり。史記に黃帝素女ヲシテ五十絃ノ瑟ヲ鼓セシムとあり。
【二五三】太容。黃帝の時の樂師也。
【二五四】溢。逸樂に耽ること。
【二五五】翱翔。浮遊なり。
【二五六】紫宮。星の名、天帝此に居る。
【二五七】太微は星の名。閶閶は高き貌。
【二五八】王良。古の善御者なり、上りて星となり天馬を司る。
【二五九】策駟。駟は天駟星なり。
【二六〇】高閣は星の名。將將は高き貌。
【二六一】罔車は畢星なり。幕幕は盛なる貌。
【二六二】青林は天苑星なり。芒芒は廣大なる貌。
【二六三】威弧は星の名。拔剌は弓を彎く貌。
【二六四】幡冢。山の名。此山の上を封狼星となす。
【二六五】壁壘。營壁星と中壘星。北落も星の名。
【二六六】河鼓は星の名。磅硠は鼓の聲なり。
【二六七】天潢は天津なり。汎汎は浮ぶ貌。
【二六八】雲漢、天河、あまのがは。湯湯は流るる貌。
【二六九】招搖、攝提。皆星の名。低回劉流は環繞すること。
【二七〇】二紀は日月なり。五緯は五星なり。
【二七一】綢繆は連續なり。遞皇は行く貌。
【二七二】偃蹇は驕傲の貌。夭嬌は自ら恣なる貌。
【二七三】娩。跳るなり。音バン。
【二七四】連卷。長曲の貌。
【二七五】雜沓叢頴。衆多の貌。

頴、颯として以て(二七六)方驤たり。(二七七)鹹汨鬱淚、沛として以て(二七八)罔象たり。(二七九)爛漫麗靡、(二八〇)藐として迭遞たり。驚雷の(二八一)砉礰たるを凌ぎ、狂電の(二八二)淫裔たるを弄び、(二八三)虹鴻を宕冥に蹈え、(二八四)倒景を貫いて高く厲る。

【大意】既に天帝の宮に至り、守門者を呼んで門扉を開かしめ、乃ち天帝に見え、天樂の和樂なるを聽き、治亂の聲を考へ心に始終を思ふ。夫れ逸樂に耽りて厭くことなければ、樂盡きて哀至るを恐る。素女絃を鼓して餘聲未だ絕えざるに、太容嘆じて我をして恥樂を防ぎて其志を安んじ、我が閑暇に及んで浮遊せんとし、紫微宮を出でて太微宮に入り、王良をして馬を御せしめ、高閣の高崇なるに登り、罔車を建てて青林に獵し、威弧を彎いて封狼を射、壁壘を北落に見、河鼓を伐ち、天津を渡りて天河に浮び、招搖攝提の二星に倚りて日月五星の運行するを觀るに、乍ち合し乍ち離れ、或は疾く或は遲く、分散過越して逸樂に恥りて厭くことなければ、樂盡きて哀至るを恐る。素女絃を鼓して餘聲未だ絕えざるに、太容嘆じて我をして恥樂を防ぎて其志を安んじ、我が閑暇に及んで浮遊せんとし、紫微宮を出でて太微宮に入り、王良をして馬を御せしめ、高閣の高崇なるに登り、罔車を建てて青林に獵し、威弧を彎いて封狼を射、壁壘を北落に見、河鼓を伐ち、天津を渡りて天河に浮び、招搖攝提の二星に倚りて日月五星の運行するを觀るに、乍ち合し乍ち離れ、或は疾く或は遲く、分散過越す。我既に星辰を遊涉し更に雷を凌ぎ電を弄し、(二八五)廓盪盪として其れ涯なし。乃ち今天外を窺ふ。(二八六)頫眠し、舊鄉の(二八七)暗藹た

【二七六】方驤。忽ち離るる貌。
【二七七】鹹汨鬱淚。疾速の貌。
【二七八】罔象。ほのかなる貌。
【二七九】爛漫麗靡。分散の貌。
【二八〇】藐。遠き貌。
【二八一】迭遞。過突なり。
【二八二】砉礰。雷聲なり。
【二八三】淫裔。電光の貌。
【二八四】虹鴻は天の高氣なり。宕冥は窈冥なり。
【二八五】倒景。日下に在り、其光上を照すなり。
【二八六】廓盪盪。ほがらかなる貌。
【二八七】開陽。北斗の第六星の名。
【二八八】頫眠。俯視なり
【二八九】暗藹。小暗き貌。

るに臨み、離居の心を勞するを悲み、情(二九〇)悁悁として歸らんことを思ひ、魂眷眷として屢顧み、馬輈に倚りて徘徊す。遊娛して以て媮樂すと雖も、豈愁慕して懷ふべけんや。(二九一)閶闔を出でて天途を降り、(二九二)焱忽に乘りて(二九三)虛無に馳す。雲(二九四)菲菲として余が輪を繞り、風(二九五)眇眇として余が旟を震ひ、繽として(二九六)連翩し紛として(二九七)暗曖たり、(二九八)儵眩眃として(二九九)常閭に反る。疇昔の(三〇〇)逸豫を收め、淫放の(三〇一)遐心を卷き、初服の(三〇二)娑娑たるを脩め、余が佩の(三〇三)參參たるを長うす。文章(三〇四)奐として以て(三〇五)粲爛たり、美(三〇六)紛紜として以て風に從ふ。(三〇七)六藝の珍駕に御し、道德の平林に遊び、典籍を結んで罟となし、儒墨を敺りて禽となし、陰陽の變化を玩び、雅頌の(三〇八)徽音を詠じ、(三〇九)曾氏の歸耕を嘉し、(三一〇)歷阪の嶔崟たるを慕ふ。夙夜に恭んで貳せず、終始の服する所を固くし、夕まで(三一一)惕若し

【二九〇】悁悁。憂ふる貌。
【二九一】閶闔。天門なり。
【二九二】焱忽。風なり。
【二九三】虛無。空なり。
【二九四】菲菲。雲の貌。
【二九五】眇眇。風の貌。
【二九六】連翩。飜る貌。
【二九七】暗曖。暗き貌。
【二九八】儵眩眃。疾き貌。
【二九九】常閭。舊居なり。
【三〇〇】逸豫。遊樂なり。
【三〇一】遐心。遠志なり。
【三〇二】娑娑。盛なる貌。
【三〇三】參參。盛なる貌。
【三〇四】奐。光りかがやくこと。
【三〇五】粲爛。光明の貌。
【三〇六】紛紜。相雜る貌。
【三〇七】六藝。禮樂射御書數なり。
【三〇八】徽音。よき音樂。
【三〇九】曾氏。琴操に、曾子孔子ニ事フルコト十有餘年、晨ニ覺メ眷然トシテ二親年衰ヘ養ノ備ハラザルヲ念ヒ、是ニ於テ琴ヲ援イテ之ヲ鼓シテ曰ク、歔欷シテ歸耕ス云云トとあり。
【三一〇】歷阪。歷山なり、舜の耕しし地。嶔崟は高き貌。
【三一一】惕若。懼るる貌。易經に君子ハタマデ惕若スレバ厲ケレドモ咎ナシとあり。

厲みて以て譽を省み、余が身の未だ勅はざるを懼る。苟も中情にして端直ならば、吾を知るなしとも恧ぢず。默して無爲にして以て志を凝らし、仁義と與に逍遙せん。(三一二)戶を出でずして天下を知る。何ぞ必しも遠きを歷て以て(三一三)劬勞せん。

【大意】既に天外に至り、開陽星に據りて俯視すれば、舊鄉暗然として纔に見ゆ。乃ち己の離居して心を勞するを悲み、一たび舊鄉に歸らんことを思ひ、馬も亦徘徊顧望して進まず。ああ我れ遠遊娛樂すと雖も、今敢て之を懷はず、却つて舊鄉を愁慕するの情に堪へず。乃ち天門を去り空に從つて下れば、雲は我が車を繞り、風は我が旗を震ひ、忽ちにして舊鄉に歸著す。因つて從來の放心を收め、我が初時の服佩を脩め、專ら道德の修養を期す。經籍を結んで網となし、儒墨の道を驅りて禽獸となし、之を獲得せんことを冀ひ、陰陽變化の理を玩び、雅頌の美音を詠じ、曾參の泰山に耕し、虞舜の歷山に耕せるに倣ひ、夙夜二心なく始終の服行する所を固くし、夕まで戒愼して己の譽を省み、我が身の未だ整はざるを懼る。苟も我が中情にして端正ならば、人我を知るなしと雖も恥づるに足らず。如かず志を固くして仁義を行はんには。戶を出でざるも天下知るべし。何ぞ勞苦して遠遊するを須ひんや。(是れ上文の母氏に歸して後寧しの意なり)

【三一二】戶云云。老子に戶ヲ出デズシテ天下ヲ知ルとあり。
【三一三】劬勞。苦勞に同じ。

(三四)系に曰く、天長く地遠く〳〵して歳留まらず。(三五)河の清まんことを俟ちて秖に憂を懐く。願くは遠く渡りて以て自ら娯むを得んと、上下常なく(三六)六區を窮め、超踰騰躍して世俗を絶ち、飄颻として神のごとく擧りて所欲を逞しうするも、天は階るべからず仙夫稀なり。(三七)栢舟悄悄として(三八)飛ばざるを吝む。(三九)松喬高く跱ちて孰か能く離かん。精を結びて遠遊すれば心をして携れしむ。志を廻らし(三〇)竭來して(三一)玄謀に從ふ。我が求むる所を獲ば夫れ何をか思はん。

【大意】系に曰く、天地は長久にして人は老い易し。明時は容易に來らず。之を望むは黄河の清まんことを待つが如し。ただ我をして愁を懐かしむるのみ。因つて六合に周遊せんことを思ひ、世俗を棄てて仙道を修めんとせるも、天には升るべからず、登仙する者亦稀なり。我が身は恰も栢舟の悄悄たるが如く、翼を奮つて去る能はざるを恨むのみ。赤松子、王子喬の輩、高く物外に立てるも、往いて之に就くべからず。精神を結束し、之に從つて仙遊せんとすれば、我が心をして乖離せしむ。因つて我が志を廻らして歸り來り、玄聖の道を行はんと期す。我が所期を全うするを得ば、我復た何ぞ思慮せんや。

【三四】系。繋なり、重ねて賦の意を繋くるなり。
【三五】河。黄河なり。黄河は千年に一たび清む、以て明時に喩ふ。
【三六】六區。上下四方なり。
【三七】栢舟。詩經邶風の篇名。悄悄は憂ふる貌。序に仁ニシテ不遇ナルヲ言フとあり。
【三八】飛ばず。飛ぶ能はざるなり。栢舟の詩に靜ニ言ニ之ヲ思ヒテ、奮飛スル能ハズとあり。
【三九】松喬。赤松子、王子喬、共に仙人の名。
【三〇】竭來。去つて來るなり。
【三一】玄謀。聖人の道。

(二)歸田の賦

張平子

都邑に遊んで以て永久なるも、(二)明略の以て時を佐くるなく、徒に(三)川に臨んで魚を羨み、(四)河の清まんことを俟てども未だ期あらず。(五)蔡子の慷慨に感じ、唐生に從つて以て疑を決す。諒に天道の微昧なる、漁父を追ひて以て嬉を同うし、(六)埃塵を超えて以て遐く逝き、世事と長く辭す。是に於て仲春(七)令月、時和し氣清み、(八)原隰鬱茂し、百草(九)滋榮し、(一〇)王雎翼を鼓し、(一一)倉庚ツテ相セシム、擧熟視シテ曰ク、先生ハ偈鼻戴肩尪頤麼頬ナリ、吾聞ク聖人ハ相セズト殆ド先生カト、澤擧ノ戯ルヲ知リ乃チ曰ク、富貴ハ吾ガ自ラ取ル所ナリ、吾ガ知ラザル所ノモノハ壽ナリ、願クハ之ヲ聞カント、擧曰ク先生ノ壽ハ今ヨリ以往四十三歳ナリト、澤笑ツテ之ニ謝ス、後范睢ニ代リテ秦ノ相トナルとあり。懐慨は志を得ずして憤ること。

【六】埃塵。塵世なり。
【七】令月。今は善なり。
【八】原隰。高くして平なるを原といひ、低くして平なるを隰といふ。
【九】滋榮。花の盛に開くこと。
【一〇】王雎。雎鳩なり、みさご。
【一一】倉庚。黄鶯なり　鳥の名なり。

歸田の賦

哀み鳴き、頸を交へて（二三）頡頏し、（二三）關關嚶嚶たり。焉に於て逍遙して聊か以て、情を娯ましむ。爾して乃ち龍のごとく（二四）方澤に吟じ、虎のごとく山丘に嘯き、仰いで（二五）繳繒を飛ばし、俯して長流に釣る。矢に觸れて斃れ、餌を貪りて鉤を呑む。雲間の（二六）逸禽を落し、淵沈の（二七）鈔鰡を懸く。時に（二八）曜靈景を俄け、繼ぐに（二九）望舒を以てす。（三〇）盤遊の至樂を極め、日夕なりと雖も劬るを忘る。（三一）老氏の遺誡に感じ、將に駕を（三二）蓬廬に廻らさんとす。（三三）五絃の妙指を彈じ、周孔の圖書を詠じ、翰墨を揮ひて以て（三四）藻を奮ひ、（三五）三皇の軌模を陳ぶ。苟も心を域外に縱にせば、安んぞ榮辱の如く所を知らんや。【大意】余京都に來りて久しきを歷たるも、時を救ふの善謀なし。徒に榮祿を羨むは退いて其德を脩むるに如かず。明時の至るを待てども、固より未だ期あらず。乃ち蔡澤に倣ひ唐擧に就いて、身の吉凶を判斷せしむるも、天道は幽昧にして知るべからず。且く漁釣の徒と樂を川澤に同うし、塵世を棄てて復た顧みざらんとす。時正に仲春にして天氣淸和なり。原野には草木繁茂し皆美花を著け、百鳥和鳴す。因つて逍遙自適し、大澤山丘に吟嘯し、仰いで射、俯して釣る。鳥は矢に中りて斃れ、魚は餌を貪りて鉤を呑む。日西に傾いて月之に代るも、身の疲勞を忘れて遊樂を事とす。忽ち老子の訓戒を感じ、駕を回らして家に歸る。乃ち古人の道を慕ひ、五絃の琴を彈じ、周公孔子の書を讀み、筆を揮つて文を作り、三皇の道德を述ぶ。苟も心を世外に縱にし、榮辱の身に及ぶを忘る。

閑居の賦竝序

潘安仁

（二）岳嘗て（三）汲黯の傳を讀み、（三）司馬安四たび（四）九卿に至り、而して（五）良史之に題するに、（六）巧宦の目を以てせるに至り、未だ嘗て慨然として書を廢てて歎せずんばあらず。曰く嗟乎巧は誠に之れあり、拙も亦宜しく（七）然るべし。顧ふに常に以爲らく、士の生るるや、至聖（八）軌なく（九）微妙玄通の者にあらずんば、則ち必ず功を立て事を立て、（一〇）當年の用を効す。是を以て、忠を資り信を履み以て德に進み、辭を修め誠を立て以て業

【一】岳。潘岳、字は安仁。
【二】汲黯。人名。史記の汲黯傳なり。
【三】司馬安。汲黯の姉の子なり。
【四】九卿。官名。
【五】良史。史記の著者、司馬遷を指す。
【六】巧宦。仕宦して貪緣に善き者をいふ。
【七】然るべし。之れあるべきをいふ。
【八】軌。迹なり。老子に善行ハ轍迹ナシとあり。
【九】微妙。老子に古ノ善ク士タル者ハ微妙玄通シ、深クシテ識ルベカラズとあり。
【一〇】當年。當時に同じ。

【一】頡頏。飛んで上下すること。
【二】關關嚶嚶。和鳴すること。
【三】方澤。大澤なり。
【四】繳繒。いぐるみ。
【五】逸禽。飛鳥なり。
【六】鈔鰡。魚の名。
【七】曜靈。日なり。
【八】望舒。月なり。
【九】盤遊。遊樂なり。
【一〇】老氏。老子に馳騁田獵ハ人心ヲシテ發狂セシムとあり。
【一一】蓬廬。茅屋なり。張衡已の家をいふ。
【一二】五絃。琴なり。
【一三】藻。文章なり。
【一四】三皇。伏犧、神農、黃帝をいふ。
【一五】軌模。法則なり。

に居ると。僕少くして（一）鄉曲の譽を竊み、（二）司空太尉の命を忝くす。奉ふる所の主は、卽ち太宰（三）秀才に擧げられて（四）郎となる。（五）世祖武皇帝に事ふるに逮び、（六）河陽懷の令、尙書郎、廷尉平となる。今の天子（七）諒闇の際、（八）太傅の主簿を領す。（九）府主誅せられ、名を除かれて民となる。俄にして官を復し、長安の令に（一〇）除せられ、博士に遷る。未だ召し拜せられざるに親疾む。輒ち官を去りて免ず。（一一）弱冠より（一二）知命の年に涉るまで、八たび官を徙され、一たび階を進められ、再び免せられ、一たび名を除かれ、一たび職に拜せられず、遷さるること三たびのみ。（一三）通塞遇ありと雖も、抑も亦（一四）拙者の效なり。昔（一五）通人和長輿の余を論ずるや、固より（一六）多を用ふるに拙しと謂へり。多と稱するは則ち吾豈敢てせんや。拙しと言へるは信に徵あり。方今（一七）俊乂官に在り、（一八）百

【一】鄉曲。鄉黨なり。
【二】司空、太尉。共に官名なり。賈充魯公に封ぜられ、司空となり太尉に轉じ、薨じて太宰を贈り武公と諡せらる。
【三】秀才。科目の名。
【四】郎。官名。
【五】世祖。晉の武帝。
【六】河陽、懷。共に縣の名。縣の長官を令といふ。以下皆官名。
【七】諒闇。今の天子卽ち惠帝の武帝の喪に服せること。
【八】太傅。官名。楊駿太傅となり、岳を擧げて主簿となす。
【九】府主。太傅楊駿なり。
【一〇】除。任ぜられしこと。
【一一】弱冠。二十歲をいふ。
【一二】知命。五十歲をいふ。論語に五十ニシテ天命ヲ知ルとあり。
【一三】通塞。窮達といふが如し。遇は命といふが如し。
【一四】拙者。岳の意、司馬安を以て巧となし、自ら以て拙となすなり。
【一五】通人。道理に通達せる人。和嶠、字は長輿。
【一六】多。多才多藝なり。
【一七】俊乂。俊傑なり。
【一八】百工。百官なり。

工惟れ時あり。拙き者は以て意を寵榮の事に絕つべし。（一九）太夫人堂に在りて贏老の疾あり。尙ほ何ぞ能く膝下の（二〇）色養を違り、（二一）屑屑として（二二）斗筲の役に從はんや。是に於て（二三）止足の分を覽、（二四）浮雲の志を庶ひ、室を築き樹を種ゑ、逍遙自得す。池沼は以て漁釣するに足り、（二五）春稅は以て耕に代ふるに足る。園に灌ぎ蔬を剪ぎ、以て朝夕の膳に供し、羊を牧し酪を酤り、以て（二六）伏臘の費を俟つ。（二七）孝か惟れ孝、兄弟に友なり。此れ亦拙き者の政を爲すなり。乃ち閑居の賦を作り、以て事を歌ひ情を遂ぐ。其辭に曰く、

（二八）墳素の長圃に傲り、先哲の高衢に步す。吾が顏云に厚しと雖も、猶ほ內に（二九）窹邃に愧づ。道あれども吾仕へず、道なきも吾愚ならず。何ぞ巧智の足らずして、拙鄙の餘あるや。是に於て退い

【一九】太夫人。岳の母をいふ。堂に在りとは生存せるをいふ。
【二〇】色養。顏色を和げて親に事ふること。
【二一】屑屑。區區なり。
【二二】斗筲の役。小官をいふ。
【二三】止足。老子に足ルヲ知レバ辱メラレズ、止ルヲ知レバ殆カラズとあり。
【二四】浮雲。論語に不義ニシテ富ミ且ツ貴キハ、我ニ於テ浮雲ノ如シとあり。
【二五】春稅。粟を舂いて米となし、其利を稅し、以て耕に代ふるなり。
【二六】伏臘。夏冬なり。
【二七】孝云云。論語に或人孔子ニ謂ツテ曰ク、子奚ゾ政ヲ爲サザルト、子曰ク、書ニ云ク孝カ惟レ孝、兄弟ニ友ニ、有政ニ施スト、是亦政ヲ爲スナリとあり。
【二八】墳素。左傳に左史倚相ヨク三墳五典八索九丘ヲ讀ムとあり。賈逵曰く、三墳ハ三皇ノ書ナリ、八索ハ素王ノ法ナリと。
【二九】窹邃。論語に窹武子、邦道アレバ則チ知、邦道ナケレバ則チ愚とあり。又蘧伯玉ハ邦道アレバ則チ仕ヘ、邦道ナケレバ則チ卷イテ之ヲ懷ニスベシとあり。

て(四〇)洛の涘に閑居し、身(四一)逸民に齊く、名下士に綴る。京に陪し(四二)伊に泝ひ、郊に面し市を後にす。(四三)浮梁黝として以て徑に度り、(四四)靈臺傑として其れ高く峙つ。天文の秘奥を窺ひ、人事の終始を究む。(四五)其西には則ち(四六)元戎禁營玄幙綠徽あり。(四七)豨子巨黍を異にし(四八)機を同うし、(四九)礮石雷のごとく駭き、激矢雨のごとく飛び、以て先行を啓き、我が皇威を耀かす。其東には則ち(五〇)明堂辟雍清穆敞閑なるあり。(五一)環林繁映し、圓海廻淵し、追孝を聿て以て父を嚴し、(五二)文考を宗んで以て天に配し、聖敬を祗んで以て順を明にし、(五三)更老を養つて以て年を崇ぶ。若し乃ち冬に背き春に涉り、陰謝り陽施せば、天子(五四)柴燎に事あり、以て祖を(五五)郊して義を展べ、鈞天の廣樂を張り、千乘の萬騎を備へ、服(五六)振振として以て玄を齊うし、管(五七)啾啾として竝び吹き、(五八)煌煌乎たり、(五九)隱隱乎たり、茲れ禮

【四〇】洛。洛水、川の名。
【四一】逸民。隱逸の人。
【四二】伊。伊水、川の名。
【四三】浮梁は浮橋なり。黝は長き貌。
【四四】靈臺。豪の名、天子候を占ふの所。傑は特立の貌。
【四五】其西。岳が家の西。
【四六】元戎禁營。近衞の兵營。
【四七】玄幙は黒き幕、綠徽は綠旗なり。
【四八】豨子、巨黍。弩弓の名。業は箭を發する處なり。
【四九】機。弩牙なり。
【五〇】礮石。拋石なり。
【五〇】明堂は天子政を布く宮。辟雍は國老を養ふの宮。清穆は深遠なり。敞閑は廣靜なり。
【五一】環林、圓海。明堂辟雍を圍繞せる池及び林。
【五二】文考。文德ある祖先。
【五三】更老。三老五更なり、長老なり。
【五四】柴燎。柴を燒いて祭ること。
【五五】郊。祭ること。
【五六】振振。威ある貌。
【五七】啾啾。笛の聲。
【五八】煌煌。光明なり。
【五九】隱隱。盛なる貌。

容の壯觀にして、王制の巨麗なり。兩學齊く列り、雙宇一の如く、右には(六〇)國胄を延き、左には良逸を納れ、(六一)祁祁たる生徒、濟濟たる儒術、或は之堂に升り、或は之室に入る。敎に常師なく、道在れば則ち是なり。故に(六二)髦士紱を投じ、名王(六三)璽を懷にす。訓ふること風の行くが若く、應ずること草の靡くが如し。此れ(六四)里仁の美をなす所以にして、(六五)孟母の三たび徙れる所以なり。

【大意】余は三墳の書、素王の法を以て園圃となし、常に其中に嘯傲し、先哲の大道を脩むるを以て業となす。たとひ厚顏なりと雖も竊武子、蘧伯玉の事を懷ひて、內に自ら愧づるあり。天下に道あるも進仕する能はず、天下に道なきも佯りて自ら愚にする能はず。是れ巧智足らずして、拙艱餘あればなり。乃ち退いて洛水の涯に閑居す。此地京師に接し、伊水に向ひ、郊に面し市を後にし、浮橋靈臺皆其附近に在り。天子此臺に於て天文を觀測し以て人事の興亡を知る。宅西には近衞の兵營あり。玄幕を張り綠旗を揭げ、弩弓を列ね、先行して我が皇威を耀か

【六〇】國胄。國の胄子。
【六一】祁祁、濟濟。禮義の中を得たる貌。
【六二】髦士は俊秀の士。紱は綬なり。
【六三】璽。印なり。
【六四】里仁。論語に里ハ仁チ美トナス云云とあり。
【六五】孟母。孟子の母。列女傳に孟母ノ舍墓ニ近シ、孟子嬉戲スルニ墓間ノ事チナス、孟母曰ク、此レ子チ居ク所以ノ處ニアラズト、乃チ去リテ市ノ旁ニ舍ス、其子嬉戲スルニ賈街チナス、孟母又曰ク、此レ子チ居ク所以ノ處ニアラズト、乃チ學宮ノ旁ニ舍ス、其子嬉戲スルニ俎豆チ設ケ、進退揖讓ス、孟母曰ク、此レ眞ニ以テ子チ居クベシト、遂ニ之ニ居ルとあり。

す。宅東には明堂辟雍あり、深遠にして廣靜なり、林木池水之を圍繞す。天子此堂に升り、父祖を祭りて天に配饗し、以て順敬を天下に明にし、養老の禮を擧げて年齒を崇ぶ。冬去り春來り、陰氣退きて陽氣升るや、天子祖宗を祭祀して禮義を展べ、天樂を張り萬騎を列ね、軍服振振として黑く、管絃啾啾として鳴る。これ王者禮容の壯觀なり。又國學大學の二學、相對して立ち、國學には胄子を敎へ、大學には賢良を敎ふ。敎ふるに定師なく、道の存する者を以て師となす。故に俊傑の士、名譽ある王も印綬を投棄懷藏して來り學び、其敎訓に應ずること風の草を靡かすが如し。此れ所謂仁里にして孟母の遷り住むべき地なり。

爰に我が居を定め、室を築き池を穿つ。長楊沼に映じ、芳枳籬に樹ち、遊鱗(六六)瀺灂として(六七)蒨蒨敷披し、竹木(六八)蓊鬱として靈果參差たり。(六九)張公が大谷の梨、(七〇)梁侯が烏椑の柿、(七一)周文が弱枝の棗、(七二)房陵の朱仲が李、畢く殖ゑざるはなく、(七三)三桃は櫻胡の別を表し、(七四)二柰は丹白の色を曜し、石榴蒲桃の珍、(七五)磊落として其側に(七六)蔓衍し、(七七)梅杏郁棣の屬、

【六六】瀺灂。出沒する貌。
【六七】蒨蒨は蓮花なり。敷披は開くこと。
【六八】蓊鬱。茂る貌。
【六九】張公。洛陽の北芒山に張公の夏梨あり。
【七〇】梁侯。梁國侯の家に烏椑柿あり。
【七一】周文。周の文王の時、弱枝の棗あり。
【七二】房陵。地名。房陵に朱仲といふ者あり。家に縹李あり。
【七三】三桃。侯桃、櫻桃、胡桃なり。
【七四】二柰。柰はカラナシ。赤白の二色あり。
【七五】磊落。衆き貌。
【七六】蔓衍。長きこと。
【七七】梅杏。以下皆果の名。

繁榮麗藻を之れ飾り、華實照爛し、言の極むる能はざる所なり。菜は則ち葱韭蒜芋青筍紫薑、堇薺甘旨にして、蓼蒌芬芳なり。(七八)蘘荷陰に依り(七九)時藿陽に向ひ、綠葵露を含み白薤霜を負ふ。是に於て凉秋に暑退き、熙春に寒往き、微雨新に晴れ、六合清朗なり。太夫人乃ち板輿に御り輕軒に升り、遠く王畿を覽、近く家園を周る。體は行くを以て和ぎ、藥は勞を以て宣び、(八〇)嘗膳載ち加はり、舊痾痊ゆるあり。長筵を席きて(八一)孫子を列ね、柳陰を垂れ、車軌を結び、陸には(八二)紫房を摘み、水には(八三)赬鯉を挂け、或は林に宴し、或は(八四)汜に禊す。(八五)昆弟班白兒童稚齒、萬壽を稱して以て觴を獻じ、咸(八六)一は懼れて一は喜ぶ。壽觴舉り、慈顏和ぐ。(八七)浮杯樂飮し(八八)絲竹駢羅し、足を頓して起舞し、音を抗げて高歌す。(八九)己に求めて自ら省るに、信に(九〇)用薄くして才劣し。(九一)周任の格言を奉じ、敢て力を陳べて列に

【七八】蘘荷。菜の名。
【七九】時藿。豆葉なり。
【八〇】嘗膳。食膳なり。
【八一】孫子。子孫なり。
【八二】紫房。紫の果實。
【八三】赬鯉。赤き鯉。
【八四】汜。水岸なり。
【八五】昆弟は兄弟。班白は白毛まじりの老人。稚齒は幼小也。
【八六】一は懼。論語に子曰ク、父母ノ年ハ知ラザルベカラズ一ハ則チ以テ喜ビ、一ハ則チ以テ懼ルとあり。
【八七】浮杯。流杯なり。
【八八】絲竹は絃管なり。駢羅は竝列なり。
【八九】其他。他事なり。榮貴なり。
【九〇】己に求。論語に孔子曰ク君子ハコレヲ己ニ求ムとあり。
【九一】用。功用なり。
【九二】周任。人名。論語に孔子曰ク、周任言ヘルアリ曰ク、力ヲ陳ベテ列ニ就キ、不能者ハ止ムとあり。

人生安樂ならば、孰か(八九)其他を知らん。退いて

就かんや。幾んど陋身の保たざる、尚は奚ぞ明哲に擬せんや。(九二)衆妙を仰いで思を絶ち、終に(九三)優游して以て拙を養ふ。

【大意】此に我が家居を定め、室を築き池を掘る。楊柳は池水に映じ、芳枳は籬に立ち、游魚出没し蓮花盛に開き、竹木繁茂し果實纍纍たり。其種類多様にして其色亦一ならず。蔬菜亦極めて多く、或は陰地に生じ或は陽光に向ふ。春秋暑退き寒去るの時、微雨新に晴れて、天氣清朗なるや、母氏輕車に乘りて郊野に行き、家園に遊び、其體を和し以て其藥を宣べ、稍其食膳を加へて宿痾痊ゆるあり。或は席を敷きて子孫を列ね、或は車を柳陰に駐め、陸には果實を摘み水には鯉魚を釣り、林間に宴し水涯に禊す。長幼共に萬歳を祝して壽杯を獻じ、衰老を見ては懼れ、壽考を見ては喜ぶ。老顔乃ち和ぎ怡ぶ。是に於て擧家杯を飛ばして飲樂し管絃を奏し、頓足して舞ひ聲を抗げて歌ふ。已に此安樂を得たり。何ぞ榮貴を冀はんや。退いて自ら省るに、能薄くして才拙なり。周任の格言に遵ひ、敢て高位に就くをなさず。我が身殆ど保つ能はず。何ぞ古の明哲に比せんや。道を慕ひて俗念を絶ち、以て一身を養ふのみ。

【九二】衆妙。道をいふ。老子に玄ノ又玄、衆妙ノ門とあり。
【九四】優游。自得の貌。

哀傷

長門の賦並序

司馬長卿

(一)孝武皇帝の(二)陳皇后、時に(三)幸を得て頗る妬む。別に長門宮に在りて愁悶悲思す。蜀郡成都の司馬相如が天下に工に文を爲ると聞き、黄金百斤を奉じて、相如(四)文君の爲に酒を取り、因つて悲愁を解くの辭を干む。而して相如、文を爲りて以て主上を悟す。皇后復た幸を得たり。其辭に曰く、

夫れ何ぞ(五)一佳人、步して逍遙して以て自ら虞り、魂(六)踰佚して返らず、形枯槁して獨居す。言ふ(七)我れ朝に往いて暮に來らんと。飲食樂んで(八)人を忘れ、心(九)嫌移して故を省ず、交意を得て相親む。伊れ予が志の慢愚なる。(一〇)貞慤の歡心を懷く。願くは問を賜りて自ら進み、君の玉音を尚るを得んと。虚言を奉じて誠を望み、城南の(一一)離宮に期す。(一二)薄具を脩めて自ら設くるも、君曾て幸臨するを肯せず。(一三)廊として獨り潛れて精を專にすれば、天隱隱として

【一】孝武。漢の武帝。
【二】陳皇后。皇后陳氏。
【三】幸。君寵なり。
【四】文君。司馬相如の妻、卓文君なり。
【五】一佳人。陳皇后をいふ。
【六】踰佚。飛揚なり。
【七】我。武帝をいふ。
【八】人。陳皇后自ら謂ふ。
【九】嫌移。嫌は絶なり。
【一〇】貞慤。慤は謹なり。
【一一】離宮。長門宮なり。
【一二】薄具。具は肴饌なり。薄は菲薄の心に在る貌。

疾風あり。(一四)蘭臺に登りて遙に望めば、神(一五)怳怳として外に淫ぶ。浮雲鬱として四に塞り、天(一六)窈窈として晝陰く、雷(一七)隱隱として響起り、聲君の車音に象たり。飃風廻りて閨に赴り、帷幄を擧げて(一八)襜襜たり。桂樹交りて相紛れ、(一九)芳酷烈にして(二〇)誾誾たり。孔雀集りて相存ひ、玄猿嘯いて長吟し、翡翠翼を脅めて來り萃り、鸞鳳飛んで北南す。

【大意】一佳人あり。庭中に逍遙して身事を思量し、精魂飛散せるが如く、形容亦枯瘠せり。帝の嘗て我を寵するや、朝に去り暮に來らんことを誓ひぬ。今や則ち然らず。飲食歡樂して我を忘れ、心絶移して故舊を顧みず、ただ新交得意の女と相親愛す。然も我が心の愚なる、尚ほ貞信を懷いて自ら歡び、帝の我を問ひ、因つて自ら進み、重ねて玉音を聞かんことを願ひ、帝の虛言を以て誠となし、長門宮に臨幸あらんことを期し、酒肴を具へて待てども臨幸するを肯せず。愁然として潛居し、其精神を專一にすれば、疾風起りて益人をして悲ましむ。乃ち蘭臺に登り茫然として君を望めば、浮雲天を蔽ひて晝暗く、雷殷殷として鳴り、君の車聲を聞くが如し。廻風忽ち至りて帷幄を擧げ、桂香の芬芬たるを聞き、鳥獸の相集りて飛翔吟嘯するを見るのみ。

【一四】蘭臺。臺の名。
【一五】怳怳。安んぜざる貌。
【一六】窈窈。暗き貌。
【一七】隱隱。聲なり。
【一八】襜襜。搖く貌。
【一九】芳は香氣、酷烈は香氣の高きこと。
【二〇】誾誾。香氣の盛なる貌。

(二一)心憑噫して舒びず、邪氣壯にして中を攻む。蘭臺を下りて周覽し、步して深宮に從容す。正殿(二二)塊として天に造り、鬱として竝び起りて(二三)穹崇たり。間く(二四)東廂に徙倚し、夫の(二五)靡靡として窮なきを觀る。玉戶を擠して以て(二六)金鋪を撼せば、聲(二七)噌吰として鐘音に似たり。(二八)木蘭を刻んで以て榱となし、(二九)文杏を飾りて以て梁となし、(三〇)丰茸の游樹を羅ね、(三一)離樓として梧へて相撐へ、(三二)瑰木の欂櫨を施し、(三三)委すること參差として以て(三四)槺梁あり。時に髣髴として以て物類あり、(三五)積石の將將たるに象たり。五色(三六)炫として以て相曜し、煥爛として爗きて光を成し、(三七)錯石の瓴甓を緻にし、瑇瑁の文章に象たり。羅綺の幔帷を張り、(三八)楚組の連綱を垂る。柱楣を撫して以て從容し、(三九)曲臺の央央たるを覽れば、白鶴噭いて以て哀み號き、孤雌枯楊に跱てり。日黃昏にして望絶え、悵として獨り空堂に託く。

【二一】憑噫。懷歎なり。
【二二】塊。大なる貌。
【二三】穹崇。高き貌。
【二四】東廂は東の廊なり。徙倚は立つなり。
【二五】靡靡。室宇の美好なる貌。
【二六】金鋪。錠前なり。
【二七】噌吰。聲なり。
【二八】木蘭。木の名。
【二九】文杏。木の名。
【三〇】丰茸は衆飾の貌。游樹は浮柱なり。
【三一】離樓。衆木を聚むる貌。
【三二】瑰木。奇木なり。欂櫨は斗栱、ますがた。
【三三】委。積むこと。
【三四】槺梁。虛梁なり。
【三五】積石は山石なり。將將は集る貌。
【三六】炫。光る貌。
【三七】錯石は衆石なり。瓴甓はシキガハラ。
【三八】楚組。楚地に產する綬。綬はヒモなり。
【三九】曲臺は未央宮の東に在る殿の名。央央は廣き貌。

【大意】心懷歎して伸びず、憂恨の氣、中情を攻む。乃ち蘭臺を下りて長門宮に逍遙し、正殿の東廊に徙倚して、室宇の細美なるを觀、玉戶を推し金鋪を撼せば、其音鐘の如し。木蘭の榱、文杏の梁あり。衆木相集りて縱橫に相支へ、奇木の樽櫨は委積して虛梁を承け、恰も山石の相重れるが如く、五色陸離として光彩を放つ。衆石を集めて甎となし、其狀琱瑋の文に似たり。羅綺の幔帷は楚組を以て連繫す。余乃ち柱に倚りて從容し、曲臺殿の廣大なるを觀る。其狀白鶴の悲み鳴き、孤雌の枯楊に立てるに似たり。日既に黃昏にして君を望むの心絕え、悵然として空閨に歸る。

明月を懸けて以て自ら照し、淸夜に(四〇)洞房に徂き、雅琴を援いて以て調を變じ、愁思を奏して長うすべからず。(四一)流徵を案へて以て却轉すれば、聲(四二)幼妙として復た揚る。貫いて歷覽して其れ中操なり、意慷慨して自ら卬る。左右悲んで涙を垂れ、涕(四四)流離して從橫す。(四五)息怛を舒べて欷を增し、(四六)蹀履して起ちて彷徨し、長袂を揄いて以て自ら翳し、(四七)昏殃を數へ、面目の顯すべきなく、遂に思を頹いて牀に就き、(四八)芬若を搏りて以て枕となし、(四九)荃蘭を席きて菎香あり。忽ち寢寐して夢想し、魂君の

【四〇】洞房。深閨なり。
【四一】流徵。音調の名。
【四二】幼妙。細聲なり。
【四三】中操。操は曲なり。
【四四】流離。涕の垂るる貌。
【四五】息怛。歎息し憂ふること。
【四六】蹀履。足の指に履を挂くること。
【四七】昏殃。過惡なり。
【四八】芬若。香草なり。
【四九】荃蘭。香草なり。

傍に在るが若し。惕いて寐覺むれば見ること無く、魂(五〇)迋迋として亡へるあるが若し。衆雞鳴いて予を愁へしめ、起つて月の精光を視、衆星の行列を觀れば、(五一)畢昴東方に出づ。中庭の(五二)蘭蘭たるを望めば、(五三)季秋の霜を降らせるが若し。夜(五四)曼曼として其れ歲の若く、懷鬱鬱として其れ再び更べからず。(五五)澹偃蹇として曙を待てば、(五六)荒亭亭として復た明く。(五七)妾人竊に自ら悲み、年歲を究めて敢へて忘れず。

【大意】天上の明月を觀て獨り深閨の中に居り、琴を取りて常調を變じ、愁思の曲を奏すれば、愁思自ら堪へ難し。徵絃を案へて之を却轉すれば、其聲微にして復た揚る。次第に其聲を歷て中曲に至り、歎息して自ら激昂す。れば、左右共に悲んで涙を垂る。因つて長歎大息して履を蹈んで徘徊し、長袂を翳して己の罪過を數ふるに、面目の顯すべからざるを恥ぢ、遂に愁思を懷いて牀に就き、香草を以て枕席となす。忽ち君の吾が傍に在るを夢み、惕然として覺むれば君を見ず。心に失ふ所あるが如し。雞鳴いて夢破れ、起つて天上を望めば、畢昴東天に出づ。月色の諸諸たるを望めば、晩秋の降霜の如し。夜長くして歲の如く、心鬱鬱として明し難し。澹然佇立して曉を待てば、荒然として漸く明けんとす。ああ予自ら悲み年

【五〇】迋迋。恐懼の貌。
【五一】畢昴。星の名。
【五二】蘭蘭。月光微闇の貌。
【五三】季秋。晩秋なり。
【五四】曼曼。長き貌。
【五五】澹偃蹇。澹は靜なる貌。偃蹇は佇立なり。
【五六】荒亭亭。夜の明けんと欲する貌。
【五七】妾人。陳皇后自ら謂ふ。

歳を盡すと雖も、敢て君を忘れざるなり。

(一)思舊の賦竝序

(三)向子期

余(三)嵇康(四)呂安と(五)居止接近せり。其人竝に(六)不羈の才あり。然れども嵇は志遠くして疎なり。呂は心曠くして放なり。其後各事を以て(七)法せらる。嵇は博く技藝を綜べ、絲竹に於て特に妙なり。當に(八)命に就くに臨み、日影を顧視し、琴を索めて之を彈ず。余逝いて將に西に邁かんとし、其舊廬を經。時に日(九)虞淵に薄り、寒氷凄然たり。鄰人笛を吹く者あり。聲を發することと(一〇)寥亮たり。曩昔遊宴の好を追思し、音に感じて歎く。故に賦を作りて云く、

命を將けて遠京に適き、遂に旋反りて北に徂き、黄河を濟りて以て舟を汎べ、(一一)山陽の舊居を經、(一二)曠野の蕭條たるを瞻、余が駕を城隅に息はしめ、(一三)二子の遺跡を踐み、窮巷の空廬を歴、(一四)黍離の周を愍めるを歎き、(一五)麥秀を殷墟に悲み、古昔を惟ひて以て人を懷ひ、心(一六)徘徊して以て躊躇す。棟宇存して毀れず。形神逝いて其れ焉にか如ける。昔李斯の罪を受くる、(一七)黄犬を歎じて長吟す。嵇生の永く辭せるを悼む。日影を顧みて琴を彈じ、(一八)運遇を領會に託し、餘命を寸陰に寄す。鳴笛の慷慨を聽くに、妙聲絶えて復た尋ぐ。駕を停めて言其れ將に邁かんとし、遂に翰を援りて心を寫す。

【大意】余君命を受けて京に適き、遂に歸りて北行し、黄河を渡りて山陽の舊居を經、馬を城隅に休息せしめ、嵇康呂安二子の舊廬を訪ひ、黍離麥秀の歎を發し、懷舊の情に堪へずして躊躇す。其廬は今尚ほ存すれども二子の形神また接すべからず。あゝ悲しいかな。昔李斯の刑に就くや、黄犬を牽いて狩獵の樂の再すべからざるを歎じぬ。嵇生の戮に就くや、亦日影を顧みて琴を彈じ、其身の薄命を悟り餘命を琴音に託せり。今鄰人の笛を吹くを聞くに、妙音斷續し、坐に人をして嵇生を思はしむ。余因つて馬を留め筆を援りて感慨を寫す。

【一】思舊。故舊を思ふなり。
【二】向子期。向秀字は子期、晉の河内、懐の人なり。竹林七賢の一。
【三】嵇康。竹林七賢の一。
【四】呂安。字は仲悌、晉の東平の人。
【五】居止。居家なり。
【六】不羈。拘束を受けざること。
【七】法。刑戮なり。
【八】命に就く。戮に就くこと。
【九】虞淵。日の入る處。
【一〇】寥亮。聲なり。
【一一】山陽。縣の名、河内郡に在り。
【一二】曠野は廣原なり。蕭條は物淋しきこと。
【一三】二子。嵇康、呂安なり。
【一四】黍離。詩經の篇の名。周の古都を悲める詩なり。
【一五】麥秀。微子周に朝せんとし、殷の舊墟を過ぎ、悲んで麥秀の歌を作る。
【一六】徘徊。心安からざる所なり。
【一七】黄犬。史記に李斯獄ヲ出デ顧ミテ其子ニ謂ツテ曰ク、吾汝ト黄犬ヲ牽キ、倶ニ上蔡ノ東門ヲ出デ、狡兎ヲ逐ハント欲スルモ、復タ得ベケンヤとあり。
【一八】運遇は運命境遇なり。領會は理解といふが如し。

(一)歎逝の賦竝序

(二)陸士衡

昔毎に長老(三)平生同時の(四)親故を追計するを聞くに、或は(五)凋落して已に盡き、或は僅に存する者あり。余年方に四十にして、(六)懿親戚屬、亡する者多くして存する者寡し。(七)暱交密友、亦半だも在らず。或は曾て共に(八)一塗に遊び、同じく一室に宴せし所のもの、十年の內、(九)索然として已に盡きぬ。是を以て哀を思へば、哀知るべし。乃ち賦して曰く、

伊れ天地の運流する、紛として升降して相襲り、日は空を望んで以て駛く驅せ、(一〇)節は虛に循つて警き立つ。嗟人生の短期なる、孰か長年を能く執らん。時は(一一)飄忽として其れ再せず、老は(一二)晼晚として其れ將に及ばんとす。(一三)瓊藥の徵なきを懲み、朝霞の掇み難きを恨み、(一四)暘谷を望んで(一五)企予し、(一六)此景の屢 戢るを惜む。悲い夫川は水を閱て以て川を成し、水は滔滔として日に度り、

【一】歎逝。日月流邁し人世の往き易きを歎ずるなり。
【二】陸士衡。名は機、字は士衡、吳の吳郡の人なり。
【三】平生。少き時なり。
【四】親故。親戚故舊。
【五】凋落。死亡すること。
【六】懿親。親戚なり。
【七】暱交。親友なり。
【八】一塗。一途なり。
【九】索然。盡くる貌。
【一〇】節は氣節なり。虛は空なり。
【一一】飄忽。疾き貌。
【一二】晼晚。日の暮るること。
【一三】瓊藥、朝霞。仙人之を服用して長年を保つ。
【一四】暘谷。日の出づる處。
【一五】企予。詩經に企テテ予之チ望ムとありて足をつまだてて望むこと。
【一六】此景。日景なり。

世は人を閱べて世を爲し、人は(一七)冉冉として行き暮す。人何の世として新ならざらん。世何の人として能く故ならん。野は春毎に其れ必ず華けども、草は朝として露を遺すなし。(一八)終古を經て常に然り、品物を率へて其れ素の如し。(一九)日及の條に在るに譬ふ。恆に盡すと雖も悟らず。

【大意】天氣は下降し地氣は上升し、運行流轉して四時茲に代謝し、日は虛空を行くこと駿馬の驅するが如く、氣節は自ら警策して暫も息むことなし。人の此間に處るや、誠に短期にして忽ちにして老年に至る。瓊藥朝霞を服用するも、孰か長壽を保つを得んや。徒に日景を望んで此日の屢 藏るるを惜むのみ。川は衆水を集めて成る。其水滔滔として流れ去り、後水來りて相繼ぐ。世は衆人を摠べて成る。其人老い去りて後人相繼ぐ。人は常に新にして世に舊人あることなし。野草は毎春花を開けども、草上の露は未だ嘗て晞き去らずんばあらず。終古に及ぶと雖も、常に此の如し、他の物品も亦然り。ああ人命は木槿の如く、朝に榮え夕に凋み、漸く盡くるに至りて、悟るなし。寤らずと雖も其れ悲むべし。心(二〇)惆焉として自ら傷む。亮に造化の茲の若くなる、吾安んぞ夫の久長を取らん。(二一)靈根の夙く殞つるを痛み、(二二)具爾の多く喪ぶるを怨み、(二三)堂構の隤瘁を悼み、城闕

【一七】冉冉。進む貌。
【一八】終古。永久といふが如し。
【一九】日及。木槿。
【二〇】惆焉。痛む貌。
【二一】靈根。父祖なり。
【二二】具爾。兄弟なり。
【二三】堂構は父祖の構へし所の堂。隤瘁は毀廢すること。

の(二四)丘荒を慾む。親彌懿けれども其れ已に逝く。交何の戚きとして亡びざらん。咨余が命の方に殆き、何ぞ天の(二五)茫茫たるを視る。傷懷悽んで其れ念多く、(二六)感貌瘁へて歡尠く、幽情發して緒を成し、滯思叩いて端を興す。此世の樂なきを慘み、在昔を詠じて言を爲す。居れば堂に充ちて宇に衍ち、行けば駕を連ねて軒を比べしも、年時を彌ること其れ詎幾ぞ、夫れ何に往くとして殘はれざらん。或は冥邈にして既に盡き、或は寥廓として僅に半なり。信に松茂りて栢悅び、嗟(二七)芝焚けて蕙歎く。苟に(二八)性命の殊ならざる、豈波を同うして瀾を異にせんや。(二九)前軌の既に覆るを瞻て、(三〇)此路の良に難きを知る。(三一)四體を啓いて深く悼み、(三二)茲形の將に然らんとするを懼れ、情を娛ましむるの方寡きを毒み、目を感ぜしむるの顏多きを怨む。

【大意】悟らずと雖も、此れ實に悲むべきなり。造化の理既に此の如し。吾人焉んぞ長久なるを得んや。父祖兄弟の死亡するを見、父祖の構へし堂の毀廢に歸し、城闕の丘墟となりて荒蕪するを見ては、豈悲まざるを得んや。親戚の交如何に美なりと雖も、死亡せざるはなし。余が命も亦方に殆し。何ぞ天の茫茫たる。之を思へば幽情發して

【二四】丘荒。丘墟となりて荒蕪すること。
【二五】茫茫。不明なり。詩經に民今方ニ殆シ、天ノ夢夢タルヲ視ルとあり。
【二六】感貌。憂ふる容貌。
【二七】芝、蕙。香草なり。
【二八】性命。生命に同じ。
【二九】前軌。前車なり。
【三〇】此路。死路なり。
【三一】四體。四肢なり。論語に曾子疾アリ、門弟子ヲ召シテ曰ク、予ガ足ヲ啓ケ、予ガ手ヲ啓ケ云云とあり。
【三二】茲形。自己の身體。

心緒亂れ、人世の樂なきを慘み、昔時を顧念して浩歎せざるを得ず。昔時賓族衆盛なりと雖も、年を歷ること幾何もなくして皆死滅し、何に往くとも殘滅せざるはなし。甚しきは賓族皆死し、然らざれば減じて半數となる。同類榮ゆれば則ち悅び、同類滅すれば則ち悲むは、是れ物の情なり。我と賓族と性命既に同じ。我の死に歸すること、亦當に賓族と同じかるべし。前車の覆れるを見ては、其路を涉ること固に難し。我が身の將に死せんとするを悲む。ああ人世何ぞ樂事の少くして悲哀の狀の人目を感動せしむること獨り多き。

諒に顏多くして目を感ぜしむる、神何に適くとして怡を獲ん。平生を響像に尋ね、前物を覽て之を懷ひ、寒林を步して以て悽惻し、(三三)春翹を翫びて思ふあり。萬類に觸れて以て悲を生じ、節を同じくして時を異にするを歎く。年彌往いて念廣く、塗薄暮にして意迮る。親(三四)落落として日に稀に、友(三五)靡靡として愈索く。(三六)舊要を遺存に顧み、十一を千百に得。樂心を隕して其れ亡へるが如く、哀情に緣りて來り宅る。(三七)末契を後生に託し、余將に老いんとして客となる。然る後(三八)節を弭かし懷を安くし、妙に(三九)天造を思ふ。精浮び神淪み、忽ち(四〇)世表

【三三】春翹。翹は茂盛の貌。
【三四】落落。稀少の貌。
【三五】靡靡。盡くる貌。
【三六】舊要は舊妙といふが如し。遺存は殘存なり。
【三七】末契は下交なり。後生は後輩なり。
【三八】節を弭。弭は安んずること。志節を安んずるなり。
【三九】天造。造物者なり。
【四〇】世表。世外なり。

に在り。(四)大暮の同じく寐ぬるを寤る。何ぞ晩きを矜りて以て早きを怨みん。彼の日の方に除ぬるを指すも、豈茲情を攪るに足らんや。秋華を衰木に感じ、零露を豐草に瘁み、殷憂に在りて違らざるは、夫れ何ぞ道を識ると云はんや。將に(四)天地の大德を頤ひ、(四)聖人の洪寶を遺れ、心累を末迹に解き、聊か(四)優游して以て老を娛まんとす。

【大意】愁容の目を痛ましむるもの多く、吾が心何に適くも悅を得る能はず。音聲形像を尋ねては親故を思ひ、昔時の器物を見ては生時を懷ひ、寒林を步しては故人を偲び、春花を翫びては舊時を憶ひ、物として悲の種ならざるはなく、節物風光嘗て故人と共に賞せしに異らざるも、故人の音容復た接すべからざるを歎く。人の世路に在るは道途尙ほ遠くして日已に暮るるが如し。親友日に死し去り、舊知を殘存者中に求むれば百中僅に其一を得るのみ。我今生存して後輩と交るも、後輩我が老いたるを見、客禮を以て我を待ち、歡交するを肯んせず。余乃ち心を安んじて造物の理を思ひ、幾多精神の動搖浮沈を經て、始めて大悟の域に達せり。曰く人の死するや、長夜に同じく寐ねたるが如し。晩死する者固より矜るに足らず。早夭する者亦何ぞ傷むに足らんや。彼の日の去るや、固より常事のみ。何ぞ我が情を攪亂して憂ふるを須ひん。夫れ達人は死生を一にす。かの衰木の秋華を感じ、豐草の墜露を痛み、以て深憂に陷る者の如きは、道を識るの士と謂ふべからざるなり。我將に我が生を養ひ、世榮を遣れ、心累を解き、逍遙として老を樂まんとす。

【一】大暮。長夜なり。
【二】天地云云。易經に天地ノ大德ヲ生トイフとあり。
【三】聖人云云。易經に聖人ノ大寶ヲ位トイフとあり。
【四】優游。逍遙自適すること。

懷舊の賦並序

潘安仁

余十二にして、父の友東武の(一)戴侯楊君に見ゆるを獲、始めて名を知られ、遂に之に申ぬるに(二)婚姻を以てす。而して(三)道元、公嗣、亦(四)世親の愛を隆にす。不幸短命にして父子(五)凋殞す。余既に(六)私艱あり、且つ役を外に尋ね、(七)嵩丘の山を歷ざること茲に九年なり。今にして焉を經、慨然として舊を懷ひ、而して之を賦して曰く、

(八)開陽を啓いて朝に遹き、(九)清洛を濟りて以て徑に渡る。晨風(一〇)凄として以て冷を激し、夕雪(一一)曇

【一】戴侯。楊肇、字は季初、晉の滎陽の人なり、東武伯に封ぜられ、薨じて諡して戴といふ。
【二】婚姻。潘岳の妻は楊肇の女なり。
【三】道元。楊肇の長子潭、字は道元、次子韶、字は公嗣。
【四】世親。父子代代親愛すること。
【五】凋殞。死亡すること。
【六】私艱。父の喪に遭ひしこと。
【七】嵩丘。嵩高山なり。洛陽の東南五十里にあり。楊肇此山に葬らる。
【八】開陽。洛陽の門の名。
【九】清洛。洛水なり。
【一〇】凄。寒き貌。
【一一】曇。白き貌。

として以て路を掩ひ、轍は氷を含んで以て軌を滅し、水は(一二)軔を漸して以て(一三)凝沍し、塗(一四)艱屯にして其れ進み難く、日(一五)晼晩にして將に暮れんとす。仰いで歸雲を睎み、俯して泉流を鏡み、前に(一六)太室を瞻、傍に嵩丘を眺む。(一七)東武焉に託きて、塋を建て疇を啓き、(一八)巖巖たる雙表、(一九)列列たる行楸あり。彼の楸を望み、予が思を感せしむ。既に慕を戴侯に興し、亦元を悼んで嗣を哀む。墳(二〇)纍纍として以て隴に接し、栢(二一)森森として以て檟植う。何ぞ逝沒の相尋げる。曾て(二二)舊草の未だ異らず、余(二三)總角にして見ゆるを獲、戴侯の(二四)清塵を承く。余を名づくるに國士を以てし、余を眷するに嘉姻を以てし、(二五)祖考より好を隆にし、二子に逮んで世親む。手を携へて以て老を偕にするを歡び、德に報ゆるの(二六)鄰あらんことを庶ふ。今(二七)九載にして來り歸れば、空館(二八)閒として其れ人なく、(二九)陳荄堂除に被り、舊圃化して薪となる。庭廡を步して以て徘徊すれば、涕(三〇)泫流して巾を霑す。宵(三一)展轉して寐ねられず、驟長歎して以て晨に達す。獨り鬱結して其れ誰にか語らん。聊か思を斯文に綴る。

【大意】開陽門を開いて朝に洛陽を發し、進んで洛水を渡れば、風雪寒くして路を掩ひ、車轍氷合して軌跡を滅し、水車輪を漸して堅氷凝り、道路險難にして日將に暮れんとす。仰いで歸雲を觀、俯して泉流を觀、前に太室山を瞻、傍に嵩高山を眺む。あゝ楊君死して此山に葬る。華表高く立ち、行楸列び立てり。彼の行楸を見、懷舊の情頓に興る。余既に楊君を思慕し、墳墓の纍纍として、栢樹の叢生するを見、亦其二子の死を哀む。何ぞ舊草未だ變異せざるに其子相次いで死亡すること此の如くなる。余幼童の時、楊君の淸風を仰ぎ、國士を以て目せられ、尋で妻すに其女を以てせらる。其二子に至り、また親交を垂れらる。余深く其知遇に感じ、二子と俱に老い、其恩德に報いんことを期せり。今既に九載を經、來りて其宅を訪へば、寂として人なく、穢草堂階を埋め、園圃樵薪に化せり。庭廡の間を徘徊すれば涕流れて衣を沾し、寢に就けども展轉して眠る能はず。長嘆して曉に達せり。心鬱結して伸びざるも、語るに人なし。因つて感慨を文章に託す。

寡婦の賦竝序

潘安仁

(一)樂安の(二)任子咸といふ者、(三)韜世の量あり。余と少くして歡し、兄弟

【一】軔。車輪なり。
【二】凝沍。凍ること。
【三】艱屯。險難なること。
【四】晼晩。日の暮るること。
【五】太室。山の名。
【六】東武。楊肇なり。
【七】巖巖。高き貌。雙表は華表なり。墓標なり。
【八】列列。ならぶ貌。行楸は竝び植ゑたる楸。楸は木の名。
【九】纍纍。かさなる貌。
【一〇】森森。茂盛の貌。
【一一】舊草。前に死したる人を葬りし時の草。
【一二】總角。童子なり。
【一三】清塵。清風といふが如し。
【一四】祖考。父祖なり。
【一五】鄰。論語に德孤ナラズ必ズ鄰アリとあり。
【一六】九載。九年なり。
【一七】閒。寂靜なり。
【一八】陳荄。古き草の根。堂除は堂階なり。
【一九】泫流。涙の流るること。
【二〇】展轉。ねがへりすること。

(一)樂安　郡の名。
(二)任子咸。任護。字は子咸。
(三)韜世。一世を包藏すること。

の愛と雖も、以て加ふるなきなり。不幸にして弱冠にして終る。良友既に沒す。何の痛か之に如かん。其妻は又吾が㊄嫉なり。少くして父母を喪ひ、人に適いて所天又殞り、孤女㊅㊆㊇孩す。斯れ亦生民の至艱にして、㊈荼毒の極哀なり。昔阮瑀既に沒して㊉魏文之を悼み、竝に知舊に命じて寡婦の賦を作らしむ。余遂に之に擬し、以て其孤寡の心を叙す。其辭に曰く、

嗟㊀㊁余が生の不造なる、天難の忱ならざるを哀む。少くして㊂㊃偏孤なり。痛㊄㊅忸怩として以て心を摧き、㊆㊇寒泉の遺戮を覽、㊈蓼莪の餘音を詠じ、情長に感へて以て永く慕ひ、思彌遠くして逾深し。伊れ女子の㊉㊋行ある、爰に嬪を㊌高族に奉じ、㊍㊎慶雲の光復を承け、㊏君子の惠渥を荷ひ、葛藟の蔓延を顧み、微莖を㊐㊑樛木に託し、身の輕くして㊒施の重

詩經

【四】弱冠。二十歳をいふ。
【五】嫉。妻の姉妹をいふ。
【六】藐焉。孤獨の貌。
【七】孩。嬰兒の始めて笑ふこと。
【八】荼毒。苦痛なり。
【九】魏文。魏の文帝。
【一〇】余。任子咸の妻の自稱。
【一一】不造。不幸といふが如し。
【一二】伶俜。單子の貌。
【一三】偏孤。父を喪へるをいふ。
【一四】忸怩。悲傷すること。
【一五】寒泉。詩經に爰ニ寒泉アリ、浚ノ下ニ在リ、子七人アリ、母氏勞苦スとあり。
【一六】蓼莪。詩經に蓼蓼タル莪莪ニアラズ伊レ蒿、哀哀タル父母、我ヲ生ミテ劬勞スとあり。父母俱に死せるを悲めるなり。
【一七】行。人に嫁するの道。
【一八】高族。名家なり。子咸の家を指す。
【一九】慶雲。めでたき雲。子咸の父母に喩ふ。光覆は光りおほふこと。
【二〇】君子。子咸を指す。
【二一】樛木。木の下曲れるをいふ。
【二二】施。恩なり。

からんことを懼れ、氷を履んで谷に臨めるが若し。義方の明訓に遵ひ、㊂㊃女史の典戒に憲り、㊄㊅蒸嘗に奉じて以て順を效し、灑掃に供して以て載を彌る。彼の㊆㊇詩人の歎ずる佼、徒に願ひて言に心痗む。何ぞ命に遭ふの奇薄なる、天禍の未だ悔いざるに遘ひ、㊈榮華爍として其れ始めて茂り、良人忽として以て㊉㊋捐背す。

【大意】余不幸にして早く父を喪ひ、天禍難を降す。常に之を思ひて心を痛ましめ、寒泉蓼莪の詩を詠じ、年を經るに隨つて父を慕ふの情益切なり。夫れ女子は人に嫁するの道あり。余因つて子咸の家に嫁して婦道を奉行し、父母の愛護を受け夫の恩惠に浴し、葛藟の樛木に緣るが如く、身を夫家に託し、身の輕くして恩の重きを懼れ、戰戰兢兢として深淵に臨み薄氷を履むの思をなし、德義の道、女史の訓戒に遵ひ、家祭を助けて婉順の道を盡し、灑掃に任じて年を閱しに、何ぞ運命の奇薄なる。天禍未だ悔いず、容色未だ衰へざるに、我が夫また忽焉として沒しぬ。之を思へば我が心をして痛ましむ。誠に詩人の言ふ所の如し。靜に門を闔ぢて以て窮居し、㊇㊈塊として煢獨にして依るなし。錦茵に易ふるに㊉㊋苦席を以てし、羅

【三】女史。女の師匠なり。
【四】蒸嘗。宗廟の祭。
【五】詩人。詩經に願ヒテ言ニ伯ヲ思ヘバ、我ガ心ヲシテ痗マシムとあり。
【六】榮華は己の容色に喩ふ。
【七】爍は光輝ある貌。
【八】捐背。死亡すること。
【九】塊は獨居の貌。煢獨は孤獨なり。
【一〇】苦席。喪に居る者は苦に寢ぬ。

幬に代ふるに素帷を以てす。(二〇)阿保に命せられて(二一)列に就き、(二二)巾箑を覽て以て悲を舒べ、口(二三)嗚噎して以て聲を失ひ、涙横迸して衣を霑す。愁煩寃して其れ誰にか告げん。(二四)孤孩を坐側に提ぐ。時(二五)曖曖として昏に向ひ、日(二六)杳杳として西に匿れ、雀羣れ飛んで楹に赴き、雞棲に登りて翼を斂む。空館に歸りて自ら憐み、衾幬を撫して以て歎息す。思纏綿して以て亂し、心摧傷して以て愴惻す。(二七)曜靈曄いて遄く邁き、(二八)四節運りて推し移り、天露を凝らして霜を降らし、木葉落ちて枝を殞す。(二九)神宇の寥寥たるを仰ぎ、靈衣の(三〇)披披たるを瞻、退いては堂隅に幽悲し、進んでは(三一)牀垂に獨拜し、耳(三二)疇昔を傾想し、目平素を髣髴す。冥冥にして覿ることなしと雖も、猶ほ(三三)依依として以て憑附す。存亡の制を殊にするを痛み、將に神を遷して安に措かんとす。(三四)龍輴儼として以て(三五)星駕し、(三六)飛旐翩として以て路を啓き、輪軌を按じて以て徐に進み、馬悲鳴して(三七)踟顧す。潛靈邈として其れ反らず、

【三〇】阿保。傅母なり。
【三一】列。哭位の行列。
【三二】巾箑。箑は扇なり。夫の生前に用ひし物。
【三三】嗚噎。泣きむせぶこと。
【三四】孤孩は孤兒となりし嬰兒。坐側は靈座の側なり。
【三五】曖曖。暗き貌。
【三六】杳杳。遠き貌。
【三七】曜靈。日なり。
【三八】四節。四季なり。
【三九】神宇。靈室なり。
【四〇】披披。動く貌。
【四一】牀垂。靈座のほとり。
【四二】疇昔。往日なり、夫の生前をいふ。
【四三】依依。思慕の貌。
【四四】龍輴。喪車なり。
【四五】星駕。朝早く駕することと。
【四六】飛旐。喪柩の旌。
【四七】踟顧。つまづき顧る。

(四八)殷憂結ばれて訴ふるなし。形影を儿筵に睠るも、(四九)精爽を丘墓に馳す。

【大意】乃ち門を閉ぢて獨居し、苫席を以て錦褥に易へ、素帷を以て羅幬に代へ、傅母に命せられて哭列に就き、平生の遺物を見て悲哀を發し、嗚咽して聲嗄れ、涙流れて衣を沾し、愁悶訴ふるに人なく、遺孤を抱いて靈座の側に就く。時正に薄暮にして雞雀羣飛して埘に登る。因つて空室に歸りて自ら悲み、衣帳を撫でて歎息すれば、情緒纏綿して心魂悲傷す。歳月忽ちに過ぎ、霜露降り木葉落つるの時に至るや、靈室寂寥にして靈衣の風に搖ぐを見、退いて堂隅に悲み、進んで靈座に拜し、耳を傾けては生前の聲を聞き、目を開けば生前の形を見るの思あり。冥冥にして見るべからずと雖も、依依として憑依くべきが如し。然も生者と禮制を異にするを思ひ、將に神靈を遷して安葬せんとす。喪車に載せ喪旗を樹て、徐徐として進めば、馬悲鳴して前まず。葬禮既に終れば神靈永に歸らず。吾が愁鬱結して訴ふるに所なし。身は儿筵の前に在りと雖も、心は馳せて墓穴の中に在り。仲秋よりして(五〇)疢きに在り、(五一)霜を履んで以て冰を踐むに踰ゆ。雪霏霏として驟落ち、(五二)風瀏瀏として夙に興り、霤(五三)泠泠として夜下り、冰(五四)凄凄として徹凝り、意(五五)惚怳として以て遷越し、

【四八】殷憂。深憂なり。
【四九】精爽。魂魄精神なり。
【五〇】疢。喪に居ること。
【五一】霜云云。霜を履むは秋なり、氷を踐むは冬なり。
【五二】瀏瀏。風の疾き貌。
【五三】泠泠。霤の聲。
【五四】凄凄。薄氷の貌。
【五五】惚怳。迷亂なり。

神一夕にして九升す。庶はくは浸く遠くして哀隆らんことを。情惻惻として彌甚し。願くは夢を假りて以て〔五六〕靈に通せんことを。目炯炯として寢ねられず。夜〔五七〕漫漫として以て悠悠たり。寒〔五八〕凄として以て凜凜たり。氣〔五九〕憤薄して胷に乘り、涕交橫して枕に流る。亡魂逝いて永遠なり。時歲忽として其れ遒盡く。容貌〔六〇〕儡として以て頓に悴へ、左右悽んで其れ相慜む。〔六一〕三良の秦に殉せるに感じ、生を捐てて以て自ら引くを甘んずるも、稚子を懷抱に鞠ひ、嗟低徊して忍びず。獨り〔六二〕景を指して心に誓ふ。形存すと雖も志〔六三〕殞す。

【大意】仲秋より喪に服し、既に秋冬を經。風雪屢至り寒威堪へ難し。心迷亂して神一夕に九轉す。久しきを經ば哀情漸く歇むべしと思へるも、日を經るに隨つて益甚し。夢を借りて神靈に交通せんと欲すれば、目冴えて眠る能はず。心鬱結して涕橫流す。夫死して既に久しく歲月忽ち遷り去り、吾が容貌の衰廢せるを見て、左右の人皆相悲む。我れ三良の穆公に殉死せるに感じ、生を捐てて自殺し、以て夫に殉せんと欲すれども、孤兒の懷に在るを見ては、此を棄てて死するに忍びず。獨り天日を指して心に誓ふ。我が身は生存せるも、心は地下に夫に從へるなり。

【五六】靈。夫の神靈。
【五七】漫漫。悠悠。長き貌。
【五八】凄凄。瀏瀏。冷かなる貌。
【五九】憤薄。鬱結なり。
【六〇】儡。衰ふる貌。
【六一】三良。三人の賢人、秦の穆公卒し、子車氏の三子、奄息、仲行、鍼虎を以て殉となす。皆秦の賢良なり。
【六二】景。日なり。
【六三】殞。死すること。

〔六四〕重に曰く、皇穹を仰いで歎息し、私に自ら憐んで何ぞ極まらん。微身の孤弱なるを省み、稚子の未だ識らざるを顧るに、川を涉るに梁なきが如く、虛を凌ぐに翼を失へるが若し。上遺像を瞻、下泉壤に臨めば、窈冥に潛み翳れ、心に存して目に想ふ。靈坐の肅淸なるに奉じ、空宇の曠朗なるを愬へ、〔六五〕廓として孤立して影を顧み、塊として獨言して響を聽く。影を顧みては傷み摧け、響を聽いては哀を增す。遙に逝いて遼遠く、〔六六〕緬邈として長く乖き、〔六七〕四節流れて忽ちに代序し、歲云に暮れて日西に頹れ、霜庭に被りて風室に入り、夜既に分にして〔六八〕星漢廻り、〔六九〕閶闔の洞開せるが若し。怛として驚き悟むれば聞くことなく、超として惝怳して慟み懷ふ。慟み懷ふこと柰何。言に〔七一〕山阿に陟る。墓門〔七二〕肅肅として、脩隴峨峨たり。孤鳥〔七三〕嚶嚶として悲鳴し、長松蓼蓼として柯を振ふ。哀鬱結して交集り、涙橫流して滂沱たり。〔七四〕恭姜の明誓を蹈み、〔七五〕栢舟の淸歌を詠じ、終りては骨を山足に歸し、存きては〔七六〕餘華に憑託し、吾が君を要して穴を同うし、死に之るまで矢つて他なからん。

【六四】重。亂に同じ。楚辭の遠遊篇に本づく。班婕妤の自悼賦、亦之を用ふ。皇穹。大空なり。
【六五】空宇。空堂なり。
【六六】廓。空なり。
【六七】緬邈。長遠の貌。
【六八】四節。四季なり。
【六九】星漢。あまのがは。
【七〇】閶闔。天門なり。ここには室門と見て可なり。
【七一】山阿。山曲なり。
【七二】肅肅。靜なる貌。
【七三】嚶嚶。鳥の聲。
【七四】恭姜。衞の太子恭伯の妻。
【七五】栢舟。詩經の篇の名。序に栢舟ハ恭姜自ラ誓フナリ、父母彖ツテ之ヲ嫁セント欲スルモ、誓ツテ許サズとあり。
【七六】餘華。餘年なり。

【大意】　又曰く、天を仰いで長歎し、自ら悲んで歌ます。吾が身の孤弱にして稚子の無心を思へば、川を渉るに橋なく、空を飛ぶに翼なきが如し。夫の遺像を見、墳墓に臨めば、幽魂潜隠せるも形影心目に明滅し、空室に獨坐すれば其影を顧み、獨言すれば其答を聽くが如し。夫死して既に久しく、春秋序を代へて歳云に暮れんとし、霜風室に入り夜方に半ならんとするとき、庭戸を開いて夫の來遊せるを夢み、驚き寤むれば見聞する所なし。悦然として悲傷し、乃ち山阿に登りて墳墓を望めば、墓門靜かにして塚高く、孤鳥悲鳴し長松柯を振ふ。乃ち心鬱結して淚流る。ああ余恭姜の誓に倣ひ栢舟の詩を詠じ、死しては夫の墓側に歸し、夫と墓穴を共にせん。生きては餘年を送り、死に至るまで再嫁の心を起すことなからん。

恨の賦

試に平原を望むに、蔓草骨に縈ひ（一）拱木魂を斂む。人生此に到る、天道寧ろ論せんや。是に於て僕本より恨人なり、心驚いて已まず、直に古者の恨に伏して死せるを念ふ。（二）秦帝劍を按じ、諸侯西に馳するが如きに至りては、天下を削平

【一】江文通。江淹、字は文通、梁の濟陽考城の人。官金紫光祿大夫に至る。
【二】拱。合抱の太さの木。
【三】秦帝。秦の始皇帝。

し文を同うし（四）規を共にし、（五）華山を城となし、（六）紫淵を池となす。雄圖既に溢れ、武力未だ畢らず、方に（七）竜蠶を架して以て梁となし、（八）海右を巡りて以て日を送る。一旦魂斷えて、（九）宮車晩出す。若し乃ち趙王既に虜にせられて（一〇）房陵に遷され、薄暮に心動き（一一）昧旦に神興り、豔姫と美女とに別れ、金輿と（一二）玉乘とを喪ひ、酒を置いて飲まんと欲するも、悲來りて膺に塡つ。千秋萬歳、怨を爲して勝へ難し。（一三）李君北に降り、名辱められ身寃せらるる如きに至りては、劍を拔いて柱を擊ち、影を弔ひて魂に慙ぢ、情（一四）上郡に往き、心鴈門に留まる。帛を裂きて書を繫け、漢恩を還さんことを誓ふも、朝露流に至る、手を握りて何をか言はん。若夫れ（一五）明妃去る時、天を仰いで太息す。（一六）紫臺稍く遠く、關山極なく、（一七）搖風忽ち起り、白日西に匿れ、（一八）隴鴈飛ぶと少く、陰雲色寡し。君王を望むも何ぞ期あらん、終に

【四】規。法なり。
【五】華山。山の名。
【六】紫淵。川の名。
【七】竜蠶。大龜なり。紀年に周ノ武王紂ヲ伐チ、東九江ニ至リ、竜蠶ヲ叱シテ梁トナスとあり。
【八】海右。西海なり。列子に周ノ穆王八駿ノ乘ニ駕シ、乃チ西ノカタ日ノ入ル所ヲ觀ルとあり。
【九】宮車晩出。天子の崩御をいふ。
【一〇】房陵。地名。
【一一】昧旦。早朝なり。
【一二】玉乘。玉車なり。
【一三】李君。漢の李陵、匈奴と戰ひて敗れ遂に降る。
【一四】上郡、鴈門。皆漢の城塞の名。
【一五】明妃。王昭君なり。齊の王襄の女、名は嬙、字は昭君、漢の元帝の宮人たり。匈奴使を遣し漢の皇女を請ふ。帝昭君を遣して匈奴の王に賜ふ。
【一六】紫臺。天子の宮なり。
【一七】搖風。飄風なり。
【一八】隴鴈、皆雲。隴岱は皆山の名。

異域に蕪絕す。

【大意】余平原の陵墓を望むに、蔓延せる草、合抱の木、人の骸骨に縈ひ魂魄を其中に包藏するが如し。人生ここに至りては、誰か復た彼の天道を論ずるに遑あらんや。余もと多恨の人なり。今之を見て、心驚いて已まず。忽ち古人の恨を抱いて死せる者を念ふ。秦の始皇の劍を按じて怒るや、六國諸侯爭つて西に向つて強秦に朝す。秦遂に天下を一統し、同文同軌の大業を成し、華山に據りて城となし、大河を繞らして池となし、宏業已に建てども、雄心尚ほ未だ已まず、將に龍罷を架して橋梁となし、西海を渡りて日の入るを追はんとす。然も一旦溘焉として崩ず。其恨如何ぞや。秦趙を滅し趙王虜にせられて房陵に遷さるるや、憂恚相積み朝暮に心動き神興る。美人と金輿とに別れしを悲み、酒を置いて飲まんと欲するも、悲胸に滿ちて飲む能はず。此を以て世を終ふ。其恨固に勝ふべからず。漢將李陵匈奴に降り、悲憤して柱を擊ち、影を弔ひ心に慙ぢ、心を上郡鴈門に馳せ、帛を裂きて鴈足に繫け、誓つて漢室の恩に報いんとす。然も人命朝露の如く、忽焉として歿す。其恨言ふに勝ふべからず。王昭君の匈奴に嫁するや、天を仰ぎて太息し、皇城を顧みて關山萬里に往く。飄風起りて白日暮れ、飛鴈盡きて山色黑し。漢皇を望めども會合の期なく、恨を呑んで異域の鬼となりぬ。

乃ち〔一九〕敬通抵せられて、田里に罷歸るに至りては、關を閉ぢて却き掃ひ、門を塞いで仕へず。左に〔二〇〕孺人に對し、右には稚子を顧み、公卿を〔二一〕脫略し、文史を〔二二〕跌宕す。志を賫して地に沒し、長く懷ひて已むとなし。夫の〔二三〕中散獄に下り神氣激揚するに及んでは、〔二四〕濁醪夕に引き、素琴晨に張り、秋日蕭索として、浮雲光なく、〔二五〕青霞の奇意を鬱し、〔二六〕脩夜の暘けざるに入る。或は孤臣涕を危し、〔二七〕孽子心を墜し、海上に遷客たり、隴陰に流戍たるあり。此人但悲風の〔二八〕汨起するを聞き、血下りて衿を霑し、亦復た酸を含み歎を茹ひ、〔二九〕銷落湮沈す。若廼ち騎跡を疊ね車軌を屯ね、黃塵地を匝り歌吹四に起るも、煙斷え火絕え、骨を泉裏に閉ぢざるはなし。已ぬる哉、春草暮れて秋風驚き、秋風罷んで春草生じ、綺羅畢りて池館盡き、琴瑟滅えて丘隴平なり。古より皆死あり、恨を飲み聲を呑まざるはなし。

【大意】敬通、明帝に拒まれて田里に歸るや、門を閉ぢて出でず、左に妻を顧み右に嬰兒を顧み、

【一九】敬通。馮衍、字は敬通、後漢の明帝、敬通が才、其實に過ぐるを以て、抑へて用ひず、故に田里に歸る。抵は拒むこと。

【二〇】孺人。大夫の妻の稱。

【二一】脫略。輕易なり。

【二二】跌宕。放逸なり。

【二三】中散。官名中散大夫なり。嵇康、中散大夫たり、呂安の事の爲に獄に下され、遂に誅戮せらる。康神氣自若たり。

【二四】濁醪。濁酒なり。

【二五】青霞。青霞奇意とは志高きをいふ。

【二六】脩夜。長夜なり。

【二七】孽子。庶子なり。

【二八】汨起。風の疾き貌。

【二九】銷落湮沈。死亡することと。